

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第98集

# 駒板遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

第3分冊 縄文時代遺構外出土遺物編

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

# 駒板遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

第3分冊 縄文時代遺構外出土遺物編

# 目 次

## 図版凡例

## 本 文

I. 遠構外出土遺物……………	1	II. まとめ……………	165
(1) 土器……………	1	(1) 土器……………	165
(2) 土製品……………	83	(2) 土製品……………	172
(3) 石器・石製品……………	103	(3) 石器・石製品……………	177
		(4) 遺跡全体について……………	177

## 図 版

1. 土器 (第1図～第64図) ……	19	鈴状・環状・異形・小玉・球形・	
実測図……………	19	板状土製品……………	95
拓本……………	54	円盤状土製品……………	98
2. 土製品 (第65図～76図) ……	86	3. 石器 (第77図～第118図) ……	107
土偶……………	86	4. 石製品 (第119～第122図) ……	148
鐔形土製品……………	87	5. 縄文時代中期末葉～後期前葉期	
きのこ形・有孔・三角状・スプーン状		土器集成図……………	170
土製品・耳飾り……………	93		

## 写真図版

1. 土器 (写真図版1～64) ……	103	3. 石器 (写真図版73～114) ……	255
2. 土製品 (写真図版65～72) ……	247	4. 石製品 (写真図版115～118) ……	297

## 表

1. 土偶出土区・部位一覧表……………	84
2. 鐔形土製品の身部横断面形・孔の穿つ方向と文様・紐のかたちとの対応表……………	90
3. 円盤状土製品の重さの度数分布表……………	97
4. 石器計測表 (1～12) ……	153
5. 鐔形土製品の主な出土遺跡名と文様別一覧表 (表16) ……	173
6. きのこ形土製品の出土遺跡名と形態別一覧表 (表17) ……	175

## 図版凡例

### 1. 出土地点

出土した地域性を重視し、グリット名は用いず各地区の略名を記した。略名は下記の通りである。

西尾根地区——西尾、西谷地区——西谷、北尾根地区——北尾、中央尾根稜線部地区——中尾、中央尾根南斜面地区——南斜、東尾根地区——東尾、東谷地区——東谷

### 2. 掲載遺物の縮尺

- (1) 土器実測図、基本的にはミニチュア土器は1/2、他は1/3としたが、大形の深鉢類は不定縮尺(約2/9)としスケールを付けて掲載した。
- (2) 土器拓本図、ミニチュア土器は1/2、他は1/3で掲載した。
- (3) 土製品実測図、鐔形土製品・円盤状土製品は1/2、他は2/3で掲載した。
- (4) 石器・石製品実測図、石鏃は2/3、剥片石器・磨製石斧・石製品は1/2、砥石・磨石・敷石・凹石は1/4で掲載した。しかし大形の礫石器(粗製石皿等)は不定縮尺としスケールを付けて掲載した。

### 3. 写真図版の縮尺

写真図版は、図版と同様の縮尺を心がけたが、レイアウトの関係上一部に不定縮尺としたものがある。

### 4. 図版と写真図版の対照

基本的には図版に掲げた遺物は全て掲載したが、若干の欠落がある。遺物個々に付した番号は図版・写真図版とも共通である。写真図版右下の( )は図版番号を示す。また同一の写真図版中に複数の図版の遺物が掲載された場合は、遺物番号と図版番号を合せて付した。(例、27-1…第27図1番の意)

### 5. 法量

法量は、口径・器高・底径の順に実測図の左上に記した。( )は推定値である。



## I. 遺構外出土遺物

今回の調査で遺構外から得られた遺物は、コンテナ（43×32×30cm）30箱に及ぶ。遺物には土器・土製品・石器・石製品があるが、大半は土器で土製品・石製品は少ない。

### (1) 土器

時期別には縄文時代前期、中期、後期、晩期、弥生時代中期に位置づけられる土器が出土している。これらのうち、縄文時代後期の土器が卓越し、晩期のものがこれに次ぐ。その他のものはごく少量である。分布は調査区全域にわたるが、中央尾根地区南斜面部から出土したものが約80%を占める。出土層位は基本層序第IV層に集中する。表土及び第III層からも出土しているが量は少ない。第IV層は、中振浮石を起源とする土壌を主体としているもののこの他の土も多く含み、特に斜面部では上位から流失した土壌がかなりの割合で混入し、土壌の自然的移動がうかがわれる。このため、出土した土器は層中にランダムに包含され、時期毎に層位的な把握はできなかった。分類及び記述に当たり縄文時代前期の土器を第I群とし、以下中期—第II群、後期—第III群、晩期—第IV群、弥生時代中期—第V群と時期別の区分を設定した。また、粗製土器は、時期を問わず第VI群として扱った。これらの区分の中で小群を必要とする場合にはa群・b群…のように記載した。

#### 第I群土器（第1図1）

西谷地区（中央尾根東斜面下位）と中央尾根南斜面から出土している。南斜面からのものは小破片であり、西谷地区出土の土器を掲載した。口縁部を欠く深鉢である。丸底を呈し、体部は内彎して立ち上がった後緩くすぼむ。体部上半には結束された複節の羽状縄文、下半には、LRの複節斜縄文が施されている。胎土には多量の植物繊維を含むが、焼成はよい。

#### 第II群土器（第1図2～5）

4点を掲載した。全て西尾根地区からの出土である。第1図2は、体部のみが残存する深鉢である。外傾して立ち上がった体部は、上端でいくぶんすぼむ。体部上半部には磨消縄文によって文様を施しているが、欠損のため詳細は不明である。下部はLRの単節斜縄文が施されるが、これを波頭状の沈線によって上部の磨消帯と区画している。この波頭状沈線の懸垂部には「鐘状突起」をもつ。3は口縁部片、4は体部破片である。5は底部で約1/5が残存する。体部は外傾して立ち上がり、地文にLR複節の斜縄文をもち底面には網状痕をもつ。

#### 第III群土器（第2図～第18図、第36図～第54図）

縄文時代後期の土器を本群としたが、その量は出土した土器中最も多く、また時期的にも初

頭から末葉までのものを含み、形態や文様も多岐にわたる。このため、細分にあたっては従来の型式観を考慮しながら、初頭のをa類とし、前葉をb類、中葉をc類、後葉～末葉をd類とした。また各群の中でのバリエーションについては1類・2類…として表わした。

### Ⅲ群 a (第2図～第6図1～3、第36図～第44図1～4)

中期末葉期に位置づけられる大木10式の影響を大きく受けているものを1類とした。第2図1は体部上半のみが残存する。文様は雑な沈線により「の」字状の文様を区画し、これにLRの単節斜縄文を充填している。2は同様な文様が施されるが、区画帯の先端に「鱗状突起」をもつ。3は4単位の山形口縁をもち、体部はほぼ直立する。沈線によって山形から垂直に下がる区画帯と頭部を巡る横方向の区画帯を設け、これに縄文を充填している。山形直下の文様帯先端及び縦・横の文様帯の交差箇所に「鱗状突起」をもつ。5は体部下端から底部を欠く。体部は直立し、口縁部は外傾して8個の山形を構成する。文様は、断面が三角形の隆帯と充填技法による区画文で表わされる。隆帯は、2本一対で口縁部・体部に付けられている。口縁部に施されるもののうち1本は山形に沿って巡り、1本は4個の山形の下位で入組状の渦巻文を構成する。また、渦巻文をもたない山形からは垂直に下り、口縁部及び体部を4つに区画する。この他に頸部と体部端に巡り、これによって口縁部と体部、体部と底部を区分している。各山形の直下と縦・横の隆帯が交わる頸部には、ボタン状の突起が貼付されている。隆帯による4面の区画帯には、沈線によって「の」字状の文様が描かれ、これにRL単節斜縄文が充填されている。4も同様の形態をもつ土器と考えられるが、体部の一部が残存するだけである。体部文様帯の先端には「鱗状突起」をもつ。6は底部で、体部に頂部に縄文をもつ隆帯が2本貼付されている。第36図～第39図は同様の形態をもつと考えられる土器群の破片である。第36図1～16は、文様帯の先端に「鱗状突起」をもつ。16・17は口縁部を区画する隆帯が「Y」字状となっている。第37図1～3は山形口縁の下位に隆帯による渦巻文をもち、4～6はこの部分が環状を呈する。7～10は山形口縁直下に「鱗状突起」をもつ。12～26の隆帯は頂部に縄文が施されている。27・28は山形口縁から頂部に刺突をもつ隆帯が下がる。29・30は山形口縁に「S」字状の隆帯をもつ。30の隆帯は頸部にも巡り、頂部には指頭圧痕のような刻みを有する。30・32は頸部に環状の貼り付けをもつ。第38図1～10は、口唇部に沿って頂部に縄文をもつ隆帯が巡り、口縁部に縄文原体の圧痕によって文様を描いている。13は文様帯が隆帯による区画を越えて施されている。15～19は、体部文様帯の区画に沈線ではなく隆帯を用いている。第39図8～20は器面を区画する隆帯の頂部に刻みをもつ。

1類に後続し、所謂十腰内I式土器の直前に位置づけられると思われる土器群を2類した。

第2図7・第3図1は、頂部に縄文をもつ隆帯によって文様が構成されている。7は体部が外傾して立ち上がり、口縁部はこれより角度を増して開く。口縁は平口縁である。隆帯は、口

縁部・頸部・体部下位にそれぞれ2本巡り各部分を区画している。また体部は同様の隆帯によって器面が4分割されている。口縁部には3本一組の隆帯が斜行し、区画内に文様を構成する。体部の区画内には、さらに1本の隆帯が上下に2分し、これに斜行する1本の隆帯が付されている。これら隆帯による区画帯は無文であるが、体部下位には単節斜縄文が施されている。第3図1は、体部のみが残存する。前述の7と同様に2本の隆帯によって口縁部と体部を区画しているようである。体部の文様は7とは異なり曲線的で、残存部内に2ヵ所の渦巻文がみられる。体部下位を区画する隆帯は1本で、これより2本の隆帯が垂下する。この区画以下の部分には単節斜縄文が施されている。

第3図2・第40図1～5は、縄文地に沈線によって文様が構成される土器である。第3図2は、口縁部を欠く深鉢で、体部は外傾して立ち上がる。体部にはLR単節斜縄文が雑に施され、上半部に蛇行する沈線文が描がかれている。また体部中央には、ボタン状の貼り付けをもつ。

第3図3・4、第4図、第40図、第41図1～13は沈線区画による縄文帯と無文帯によって主文様を構成する土器である。縄文帯と無文帯の形成には磨消技法と充填技法があるが、多くは後者によってなされている。第3図3は体部上位と口縁部を欠く。体部は内彎ぎみに立ち上がる。体部文様は、横長や鉤状の沈線区画に単節斜縄文を充填している。文様帯は体部下端にまで及ぶ。4は体部上位と口縁部を欠き、体部は内彎して立ち上がる。体部文様は、沈線による細い区画帯に無節の縄文を施している。第4図1は、全体のほぼ8割が残存する深鉢である。体部は内彎ぎみに立ち上がり、上半部でいくぶん膨らんだ後、緩やかにくびれて外反する口縁部に続く。口縁部には上面に縄文をもつ隆帯が2本巡り、これに刺突をもつ突起が貼り付けられている。これによって口縁部を6分割しているが、おのおの区画は均一ではない。体部文様帯は、頸部と体部下端に巡る隆帯によって区画されている。この隆帯には、口縁部に施されているものも同様に縄文が施され、口縁部の区画に対応して頂部に刺突をもつ突起やボタン状突起が配されている。区画内には沈線によって渦巻風の曲線文を描き、これにRL単節の縄文を充填している。2は鉢で体部下端から底部を欠損する。口縁部は肥厚し、2本の沈線が巡る。単位は不明であるが、残存部では貫通孔を有する突起が1個みられる。体部の文様は沈線による区画内に単節斜縄文を充填している。またこの土器の内外面には朱が塗られている。3も鉢形土器で残存状態は良い。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部には長方形の沈線区画文を8個配し、文様間に4～5個の刺突を施している。頸部には上面に縄文をもつ隆帯が巡り、2ヵ所に貫通孔を有する突起が付けられている。体部文様帯は頸部に巡る隆帯と下端に回る沈線によって区画される。区画内には沈線によって連続する「矢印状」の文様を展開し、部分的にLR単節斜縄文を施している。第40図6～15は横長や鉤状の文様が描かれている。16～21は、円形を基調とした渦巻文が描かれ、22～32、第40図1～15は方形を基調と

した文様が施されている。6～11はこれまでの土器の文様とは異なり、東北地方南部によくみられる文様をもつものである。6は磨消帯が入組状の渦巻文を形成する。7～11は同一個体と考えられる。山形口縁をもち、山形から垂下する曲線により磨消帯を区画している。山形の頂部には窪みをもち、直下にはボタン状の貼り付けが施されている。

第5図1～8、第6図1・3、第41図14～23、第42・43図は、隆帯による文様を主体にしていう土器群である。この隆帯は、前述した1類の土器に用いられるものとは異なり、厚味はなく、半肉刻的なものである。また、多くの場合これらの隆帯の側縁には沈線が伴走する。第5図1は、体部上半部がわずかに残存する。口縁部は外反し、緩い山形を形成する。体部上半に2本の隆帯が巡り器面を区画している。区画内には上面に縄文が施された隆帯と沈線によって波頭状文（渦巻文）が横位に展開される。2は体部上半を残存する。体部は内彎ぎみに立ち上がり、中央部にやや膨らみをもった後外反する口縁部に続く。口縁部は上下に縄文をもつ隆帯が施され、山形の直下には突起をもつ。同様の隆帯は口縁部に隅丸方形や三角形の区画文を構成している。体部文様帯は、口縁部に施された隆帯と下位に巡る沈線に区画されているようである。区画内には、波状の磨消文が横位に展開する。第41図14～23、第42図1～18は上面に縄文が施された隆帯によって文様が構成される土器である。ほとんどのものは山形口縁を呈するが、第42図12は平口縁である。第42図1・9～11は、山形頂部に楕円形や円形の窪みを有する。体部文様の構成が解かるものは少ないが、第42図13・14では磨消縄文が施されている。12は口縁部に頂部に刺突を有する縦長の突起をもつ。

第5図3は体部下半を欠く。体部は外傾して立ち上がった後、上半部で膨らみをもち長く外反して口縁部に続く。口縁部は10個の山形口縁となる。文様帯は口縁部・頸部・体部の3つに分けられるが、これらの文様の区画も文様構成も全て隆帯を用いている。口縁部では、口唇部に沿う細長い区画文を配し、下位には台形状の文様を構成する。頸部では連続した「S」字状の曲線文が展開する。体部には「魚鱗状」の区画文が連続して配される。4も3と同様な文様が配されるが、いくぶん大柄である。5は上半部のみが残存する。口縁部は緩く外反し、口唇部は肥厚する。4単位の山形口縁は頂部に2本の刻みをもち、山形から「X」字状の隆帯が頸部を4区分している。区画内には「ヒョウタン状」の沈線文が1個づつ配されている。6は体部上半部を残存する。体部は外傾して立ち上がり、上位でやや内彎して口縁部に続く。頸部から口縁部にかけては長く外反する。口縁部は小さな山形を呈するが単位は不明である。口縁部は隆帯によって長方形の区画がなされ、区画間には4個の刺突をもつ。頸部の文様帯には、山形口縁の下位に区画文を配し、これを隆帯が繋いでいる。体部には、3本一組の沈線によって横位に展開する曲線文が施されている。7・8は底部である。いずれも下端に2本の隆帯が巡り、体部文様帯を区画しているが、文様については不明である。第6図1は、やや膨らみをも

つ体部から緩く「く」字状に外傾する口縁部となる。口縁部は小さな山形となるが、単位は不明である。口縁部にはこれに沿った陸帯が2本廻り、山形部分で渦巻を形成し、頸部を巡る陸帯に繋がる。頸部の陸帯は、山形を基点として $\frac{1}{4}$ の箇所に渦巻文を形成している。体部には網目状の捺糸文が地文として施されている。3は壺形土器の頸部～口縁部である。器面には陸帯によって区画文が展開されている。第42図19～21、第43図も同様の形態をもつ。第42図19は、口縁部の区画中に縦方向の曲線文をもつ。20は頂部に楕円形の沈線文をもつ山形口縁で、山形下位の区画文には垂下する渦巻文が配されている。21は口縁部に円形と方形の区画文をもち、頸部に巡る陸帯には刺突が施されている。体部文様は沈線によって描かれている。第43図1～8は山形口縁をもつ。このうち、2・3・6の頂部には刺突文が施されている。7は口唇部に山形頂部で入り組む沈線をもち、8は山形を「鉢巻き状」に取り巻く陸帯が貼付されている。10の口縁部は、指頭圧痕による小山形が連続している。15は体部下端の破片である。20～35は壺形土器の破片である。口縁部を残存するものは、ほとんど平口縁である。24・25は頸部に環状把手をもつが、24のそれは縦方向の孔も有する。26～35は体部破片である。26・30・31は体部中央のやや上位に文様帯を区画する陸帯をもち、33・35はやや下位に陸帯をもつ。

第6図2は体部上半の一部が残存する。体部は緩く外傾して口縁部に続く。口縁は平口縁である。文様は沈線だけで方形を基調とした渦巻文を施している。第44図1～4も文様が沈線によって構成される土器である。2～3は壺形土器の破片である。1は方形、2は円形を基調とした渦巻文が施されるものと考えられる。3は波頭状の沈線文が描かれている。4は鉢形土器の破片で、体部から口縁部にかけて内彎する。口縁部には1本の沈線が廻り、体部に連続する「矢印状」の文様が展開する。前記した第4図3の体部に施こされる文様に類似することから同類として扱った。

### Ⅲ群b（第6図～第15図、第44図～55図）

後期前葉に位置づけられる所謂「腰内I式」に相当するものをb類とし、このうち前半期のものを1類、後半期のものを2類とした。

第6図4～11・第7図1～4・第44図5～27・第45図1～28は磨消縄文や充填縄文によって文様を構成する土器である。第6図4は小形の深鉢である。体部は上半部にいくぶん膨らみをもち、外反して口縁部に続く。口縁部は平口縁で、縦長の突起が付けられこの間を沈線が長方形に区画している。体部には横位に展開する曲線文が描かれ、これに縄文が充填されている。5・6は山形口縁を呈する。5は8単位、6は4単位と考えられる。5は折り返し口縁をもち、山形を基点として無節斜縄文が施された細い区画文が連続する。6もこれと類似した文様が施されるが、縄文は充填されたもので粗雑である。7～10は平口縁を呈する。7は、頂部に5個の刺突をもつ縦長の突起によって口縁部を4区分している。8も口縁部に突起をもつ。体部

の文様は、縄文が充填された細い縄文帯が台形や方形状の無文帯を区画する。9は口縁部に上面に縄文をもつ隆帯が巡る。10は充填された細い縄文帯によって三角形の無文帯を区画している。11は体部のみが残存する。文様は弧状の縄文帯が連続し「魚鱗状」の文様を構成している。第7図1・2は同一個体である。体部は上半部で緩く内彎した後、大きく外反する口縁部に続く。口縁部は折り返し口縁で8個の山形を形成する。文様は体部にのみ施され、口縁部から頸部は無文帯となっている。体部には、横位に展開する曲線文が描かれ、この中に無節の斜縄文が充填されている。3は底部である。4は壺形土器の体部上半部で、口縁部は短かく外反する。頸部に沈線が巡り、口縁部は無文となっている。体部には、細長い区画文が配されこれに単節の縄文が充填されている。第44図5～10は折り返えされた山形口縁をもつ。5～8は山形部分に縦長の突起をもつ。9は山形の脇に2個の小突起を有する。文様はいずれも山形を基点として縦横に展開されている。第45図1～8は体部に渦巻状の文様をもつ。1は緩い山形口縁をもつ鉢で、山形の頂部に2個の刺突をもつ。9～18は細い縄文帯によって文様が構成されている。19～27は長楕円形の磨消区画文が縦横に配されている。19・20は山形口縁を呈する。

第45図29・30、第41図1～8は、縄文地に沈線によって文様が描かれる土器である。第45図29・30は同一個体の壺形土器である。体部中央の最膨部に上面に縄文をもつ隆帯が巡り、文様帯を区画している。文様はこの上半部に縄文を施し、これに横位に展開する曲線文が沈線で描かれている。第46図2～6は同一個体である。口縁部は平縁で、口唇部に縄文をもつ。また頂部に2個の渦巻文が配される突起をもつ。文様は2本一組の沈線が、入り組みながら横位に展開し渦巻状の文様を構成している。7・8は同一個体である。山形口縁をもち「ヒョウタン状」の文様が施されている。

第7図5～8、第8図～第13図、第46図22～29、第47図～第49図は沈線によって主文様が施される土器である。第7図5は体部上半の破片で、不整な方形文が重複して施されている。6は、縦長の貼り付けをもつ4個の山形口縁をもつ。山形の間には長方形文が2個配され、体部上半に重複する方形文が描かれている。しかし沈線は雑で文様は不明瞭なものとなっている。7は、8個の緩い山形口縁をもつ。器面は山形を基点とする隆帯によって8区画され、それぞれの区画内には沈線によって「X」字状の文様が施される。8は4単位の緩い山形口縁をもつ。山形下位には細長い貼り付けをもち、この間を3本一組の沈線が長方形文を構成するとともに、山形を基点として器面を4区分する。区画内には、同様な沈線によって「X」字状の文様が構成されている。第8図1も器面が4区分され、区画内には3本一組の沈線が斜行する。2・4は区画内に三角形文（山形）が配される。3は小形の深鉢である。体部は外傾して立ち上がった後、体部中央から僅かに外反して口縁部に続く、口縁部は平口縁である。口縁部と体部下端には2本の沈線が巡り、文様帯を区画する。区画内には、沈線によって重複する「V」字状の

文様が施されるが、明瞭なものではない。5は、頂部に2重に「鉢巻状」の隆帯が取り巻く4単位の山形口縁をもつ。また、山形から垂下する、上面に縄文が施された隆帯によって器面が4区分されている。区画内にはLR単節斜縄文が施文され、この上に沈線によって「X」字状の文様が構成されている。縄文地に施文される点では異なるが、沈線文が前記した第7図7・8に類似することから同類として扱った。第46図9～21と同様な形態をもつ土器片である。9～17は「X」字状の文様が施されている。12～14は、平口縁を呈するものと考えられるが、他は山形口縁を呈する。このうち10・11を除いて折り返し口縁となっている。18は重複する方形文が施されている。21は4本の沈線による区画に、3本一組の沈線が斜行する。

第8図7～11、第46図22～29、第47図1～21は沈線による区画文が主文様となる土器である。第8図7は小形の深鉢である。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く外反する。口縁部直下と体部の下端に沈線が巡り、文様帯を区画している。体部には沈線による不整形な区画文が配されている。8は同様な文様が施される浅鉢で、体部は緩く内彎する。口縁部は平縁を呈するが、残存部では外面に縦孔を有する小山形がみられる。9は体部上半を欠く深鉢である。体部は外傾して立ち上がる。体部には円を4分割した区画文が連続して配されている。10は体部下端を欠く壺形土器である。体部下半部に膨らみをもった後、内彎して頸部に続く。頸部は「く」字状に曲り、口縁部は外反して開く。口縁部には頂部に2つの刺突をもつ小山形を1個有する。口縁部直下と頸部に沈線が巡り、文様帯を区画している。口縁部文様帯には方形区画文が配され、体部には不整形な区画文が連続する。また体部上位と中央部には、区画文の間隙を縫って曲線が巡らされている。11は鉢で口縁部に縦孔をもつ小山形を有する。体部文様を構成する沈線は、とぎれととぎれで不明瞭なものである。第46図22は壺形土器の破片で、細長い区画文をもつ。23は最上位の区画文の末端部が鉤状の文様となる。24は体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、口縁部は山形を呈する。26は外面に縦孔が穿たれた山形口縁をもつ。27は区画文内に不整な渦巻文が施されている。第47図1～4は壺形土器の破片である。6は浅鉢の口縁部片と考えられ、外面に縦孔が穿たれた小山形をもつ。10は体部が外傾して立ち上がった後、口縁部は内彎する。文様は3本一組の沈線で構成され、縦長の区画文と入組状の曲線文が施されている。11・12は区画文内に円文が垂下し、15～17では区画内に渦巻文が配されている。18～20は区画文の間に沈線が巡らされている。

第48図1～5は、楕円形や「8」字状の文様を縦位に配し、これを沈線が横に繋ぐ文様形態をもつ。1は体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。文様は楕円文が鎖状に連なり、これを2本一組の沈線が横に繋がないである。文様は体部の上半に施され、下半部は無文となっている。2・3は楕円文を繋ぐ沈線が斜位に施される。3・5は同一個体である。緩く外反する口縁部片で、連続する「8」字文から斜め下に2本の沈線が施こされている。また、櫛齒状

条痕文が両側に縦走る。

第9図1・3～13、第48図6～13・23～27、第49図1～3・10・11は文様に渦巻文を多用する土器である。第9図1は体部下端を欠く深鉢である。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反して開く。文様は大小の渦巻文を縦に配し、これを3本一組の沈線が横～斜位に繋がないでいる。3は短かい折り返し口縁をもつ鉢で、口縁部は小さな山形を呈する。山形の下位に2本の沈線によって相互に連続する渦巻文が構成され、この両側には横長の細い蛇行懸垂文が配されている。4は底部で、文様は体部下端から底部まで及ぶ。5は大柄な渦巻文が配され、これに一部無節の斜縄文が施文される。6は口縁部に隆帯区画文をもつ。7は口縁部を欠く壺で、体部中央のやや下位に最大径をもつ。この部分には2本の隆帯が巡り、文様帯を区画している。文様はこの区画帯の上半部に、入組状の渦巻文と曲線文が横位に展開されている。8は注口土器である。体部は内彎して立ち上がり、中央部に膨らみをもつ。口縁部はやや外傾し、2ヵ所に小さな山形をもつ。注口部は体部上位に付くが欠損している。口縁部直下及び頸部・体部中央に2本の沈線が巡り、それぞれを区画している。文様は注口部の両側に大柄な入組状の渦巻文が配されている。9は壺の体部で、内彎して中央上位に最大径をもち、この後内傾する。最膨部には縄文の施された隆帯が巡り、文様帯を区画している。区画内には入組状の渦巻文が横位に展開される。10も9と同様に縄文をもつ隆帯が器面を2分しており、上位には大柄な渦巻文が展開される。下位の区画帯にも文様が施されるが欠損のため詳細は不明である。11は深鉢の体部で、やはり大柄な渦巻文が展開される。12・13は高台をもつ底部である。いずれも体部下端まで文様が施されている。12は高台部に2個一対の小孔が穿たれている。第48図6～8は同一個体である。山形口縁を呈する深鉢で、山形から垂下する渦巻文を2本一組の沈線が横に繋がないでいる。9～13は鉢形土器の口縁部で、入組状の渦巻文と横位の細い沈線文が施されている。23～27は、縄文をもつ隆帯が文様帯を区画し、その中に大柄な渦巻文が配されている。第49図1～2は壺形土器の破片で、大柄な渦巻文が横位に展開されている。10・11は同一個体と考えられる。縦長の貼り付けをもつ山形口縁で、体部には渦巻を基調とした文様が横位に展開される。

第9図2、第48図14～22は細長い楕円形文で文様を構成している。第9図2は浅鉢で、口縁部直下に円形文と細長い楕円形文を交互に配している。第49図14・15は短い折り返し口縁をもつ。22は、「C」字状の文様を縦に配し、この両側に楕円形文を施している。

第49図4～9は縦横に施される沈線が方形状の区画文を構成する土器である。4・5は同一個体で、外反する口縁部には縦長の突起をもつ。区画文の縦線は弧状になっており、区画文は長楕円形を呈する。9では雑な沈線が施されるため文様は不整なものとなっている。第49図12・13は同一個体である。文様は2本一組の弧状の沈線が縦位に連続し、「魚鱗状の」文様を構成している。これらの内外面には朱が塗られている。



第49図14～16は細い櫛歯状の沈線文（多条沈線文）によって文様が構成される。14・15は縦位の沈線文の両側に弧状の文様を記している。1単位は3～4本の条となる。

第10図2～9は曲線文が横位に展開する土器である。2は山形口縁を呈する鉢で、体部には2本一組の沈線によって曲線文が横位に展開する。この曲線文のモチーフは、渦巻文の変形と考えられる。3も鉢形土器で3よりは単純な文様が展開される。6は壺形土器で残存状態は良好である。体部は内彎して立ち上がり下端に最大径をもつ。口縁部はいくぶん内彎して立ち上がる。口縁部には2本の沈線が巡る。体部下端と頸部に沈線が巡らされ文様帯を区画している。区画内には「の」字状の入組文が4面に配されこれを基点として文様が展開されている。この「の」字状の入組文も渦巻文の変形と考えられる。9は山形口縁をもつ深鉢で、体部には雑な沈線によって曲線文が施されている。10は体部下半に沈線文をもつ。

第10図10・11、第11図も沈線文が施される土器であるが、破損などで文様の形態がよくわからないものを一括して掲載した。第10図8は4単位の山形口縁をもつ深鉢で、外傾する口縁部に区画文が施される。11は口縁部直下に網目状の燃糸文が横回転に施され、その下位に三角形が向き合う文様が連続して施されている。第11図1～6は壺形土器の頸部から口縁部である。1は小さな山形口縁を呈する。7・8は体部片で7は粗雑な曲線文、8は横位に細い沈線文が施されている。9～20は体部下位～底部である。9は体部下位に長方形の区画文を連続して配している。14～19は体部下端まで沈線文が施されている。18・19は高台をもつ底部で、底面にも渦巻状の文様が施されている。18は高台部の対応する2ヵ所に小孔を有し、19は高台部の一部に挟りがみられる。20は底面に刻線文が施されている。

第12図・第13図には特殊な形態をもつ土器とミニチュア土器を掲載した。時期的には全てⅢ群 b<sub>1</sub> 類に相当するものと考えられる。

第12図1・2・14～10、第13図15・16は、焼成前に体部を切り離し、蓋付状にした壺である。1・2・4は蓋部だけが残存する。1・2は口縁部（ツマミ部分）を欠く。いずれも切断面は再調整されている。2は蓋の口縁部に当たる部分に2個の有孔小突起をもつが、1は1個を欠く、文様はいずれも沈線によって施されている。1は細長い区画文、2は楕円形文が配されている。4も口縁部（ツマミ部分）を欠く。切断面には多数の刺突の痕を残し、連続刺突を施して切り離した事が窺える。5は口縁部が欠損する。蓋部・身部とも切断面は、切り離し後再調整され、新たに小さな刺突が連続して施されている。身部には上端と下端に孔を有する小突起が2ヵ所に配されている。文様は沈線によって施され、不整な区画文が連続して描かれている。6は身部の破片で、切断面には多数の刺突痕を残す。7は完形品である。体部は内彎して立ち上がり、中央部やや下位に最大径をもつ。頸部は細く外反して口縁部に続く。体部上位から切断され身部と蓋部に分かれる。体部下端と肩部に有孔の小突起が2ヵ所に配されている。切断

面には切り離す際に施された刺突痕をもつ。肩部に渦巻を基調した文様が横位に展開する。8・9は体部下端が切断されたものである。8は切断面に刺突痕を残すが、9は再調整されている。9は沈線文が施されている。10は口縁部を欠損する大形の蓋部である。蓋の口縁部に当たる部分には孔をもつ把手状の突起が2個つけられている。この把手の内側を2本の沈線が巡る以外は文様は施されていない。第13図15・16は蓋部の破片である。

3は蓋形土器である。ツمام部分に横方向の孔が穿たれている。文様は雑な沈線によって曲線文が展開されている。

第11図11、第12図1～9・11、第13図1～12・15～33はミニチュア土器である。いずれも文様は沈線によって構成されている。第11図11は3本一組の細い沈線によって渦巻文と連続する弧状文が施される。第13図1は小鉢で曲線が横位に展開する。2は不整な区画文が配される。9は多条沈線文が施される。10は縦横に沈線が配されている。11は沈線による斜行する格子文が旋される。12は地文に網目状然糸文をもつ。17・18は壺形土器片である。19～33は鉢形土器の口縁部を一括した。

第13図13・14は足付土器の足部である。同一個体の2個が出土しているが、残存状態から推定して4個が配されるものと考えられる。文様は、足部の下端まで沈線文が配されているが、モチーフや構成は不明である。

十腰内I式の後半期に位置づけられ、所謂大湯式といわれる土器群を2類とした。1類に比べ、胎土には砂を多く含む。また焼成自体は良いものの、器面には焼成時に生じたと思われるハジケが多くみられ、全体はザラザラした感じを受ける。文様は、磨消縄文や沈線によって施されるが、ほとんどのものが体部上半部に文様帯をもつ。

第14図、第15図1～3、第50図・第51図1～14は磨消縄文によって文様が構成される土器である。これらの文様は、モチーフ的には1類の土器と共通するものが多いが、1類に比べて文様が大柄に展開され、区画する沈線も力強いものとなっている。

第14図1は4単位の山形口縁をもつ鉢である。体部は外傾して立ち上がり、頸部で内側にくびれた後、外傾する口縁部に続く。体部には入組状の磨消縄文が横位に展開されている。2は山形口縁をもつ浅鉢で、縄文帯による区画文が施されている。3は深鉢で4単位の山形口縁をもつ。口縁部及び体部上位に巡る縄文帯を「S」字状、「III」字状の縄文帯が繋いでいる。4は平口縁をもつ深鉢である。文様は磨消縄文によって長方形の区画文が構成されている。5は大形の深鉢である。体部は外傾して立ち上がり、体部上端に最大径をもった後、外反する口縁部に続く。口縁部は緩い山形口縁を呈する。文様は体部上半部の区画内に施される。区画帯は2本一組の縄文帯によって構成され、この間に蛇行する曲線帯が横位に展開されている。地文は無節の斜縄文で、沈線区画内に粗雑に充填されている。6は壺形土器で、体部上端及び口縁部

を欠く。体部は外傾して立ち上がり、上半部に最大径をもつ。地文に無節の斜縄文を施した後沈線によって文様を描いているが、モチーフは不明である。7は体部上端を欠く深鉢である。文様は体部上半部に渦巻状の文様が施されるものと考えられる。第15図1は壺形土器で体部上半部を欠く。2は深鉢で、5本の沈線をもつ縄文帯が斜位に交差する文様が施されている。3は壺形土器の頸部で、斜行する縄文帯が施されている。第50図1・2は同一個体である。口縁部と体部上位に2本の縄文帯が巡り、この区画内に曲線的縄文帯が横位に展開する。8・12は口縁部と体部の縄文帯を「S」字状の縄文帯が繋いでいる。19・22では渦巻状の文様が展開される。第51図1は、上下の縄文帯を（ ）状の縄文帯が繋いでいる。11は斜傾する渦巻文が配されている。13・14は縄文帯に円形の小さな刺突が施されている。14は裏面にも刺突文をもつ。

第15図5・6、第51図15～23は沈線によって文様が構成される土器である。第15図5は大形の深鉢で、体部は外傾して立ち上がり上半部に最大径をもち、外反する口縁部に続く。口縁部に5本、体部上端部に3本、中央部に2～3本の沈線を巡らし、これを2～3本一組の沈線が斜位に繋いでいる。沈線は雑で所々で重複する。6は小形の深鉢で、体部は外傾して立ち上がった後、中央部からやや角度を緩めて口縁に続く。口縁部には、小さな刻みが連続して施されている。口縁部と体部中央にそれぞれ3本の沈線が巡り、これを2～3本の緩い曲線が上下を繋いでいる。第51図15～18は、沈線によって渦巻を基調した文様が横位に展開されている。19～23は上下に巡る沈線を曲線や斜線によって繋ぐ文様が施されている。

第15図4・5は複数の乱雑な沈線によって曲線文が施されている。この沈線は2～7本で構成されるが、1本毎に施文されたものである。4は6単位の山形口縁を呈する。文様は5～7本の沈線によって構成されている。7は体部上位に最大径をもち、緩い山形を呈する口縁は短く外反する。口縁部に沿って2本の沈線がこれを区画し、下位には2～5本の沈線が入組状の曲線文を構成している。

第52図1～4は、口縁部に多数の刺突文が施された土器である。1・2は同一個体と考えられ、平口縁を呈する。地文にRL単節斜縄文を施し、口縁部には2段に連続した刺突が施され、この下位には4本の沈線が巡らされる。頸部は磨消帯となり、この下位に沈線が巡る縄文帯が配されている。3は山形口縁となる。5・6は口唇部にも縄文が施されている。

第52図7～18は、沈線区画された櫛歯状条痕文によって文様が施されている。1は5本一単位の条痕文が施され、入組状の曲線文が横位に展開されている。9は短い折り返し口縁をもつ。10は長楕円形の区画文が構成されている。

第52図19～26は、前記した土器群と同様に櫛歯状の条痕文によって文様が描かれるが、これを区画する沈線を伴わない。いずれも同一個体と考えられる。緩く外傾する山形口縁は頂部に浅い凹みをもつ。体部には、5～6本が1単位となる細い条痕文が蛇行し「流水文」風の

文様が施されている。19・20では山形を基点として2本の沈線が、口縁部片側に巡らされている。

### 第Ⅲ群c（第16図1～6・第53図）

後期中葉に位置づけられる十腰内Ⅱ式・加曾利B式に併行する土器群をc類とした。

第16図1～5は磨消縄文によって文様が施されている。1は体部中央部のみが残存する。細い沈線によって入組状の文様が施され、これに単節斜縄文が充填されている。2は壺形土器の頸部と考えられる。口縁部には、LR単節斜縄文と無節の斜縄文によって羽状縄文が施される文様帯をもつ。3は体部にLR単節縄文と無節による付加条縄文が施される。4・5は壺形土器である。4は体部上端と中央部に沈線区画された縄文帯をもつ。5は体部上半に幅広い縄文帯が巡らされている。

6は大形の深鉢で、無節の斜縄文を施文した後、幅の狭い平行沈線を巡らしている。この沈線の端は弧を描いて下段に続く。また蛇行懸垂線が、これらの平行沈線を区切るように施されている。

第53図1・2は同一個体である。波状口縁頂部の突起部分で、平面形は楕円形を呈し、中央が凹む。平行沈線を伴う縄文帯が施され、突起の下位に沈線による楕円形文が配されている。3も突起部分と考えられる。4～8は口縁部片である。4～6は平行沈線を伴う縄文帯が施されている。4・6は文様帯内に円形文が配されている。5は弧状の区画をもつ。7は山形口縁を呈し、口縁に沿った沈線文が施されている。沈線は端が弧状に区画される。9～12は同一個体と考えられる。大きな波状口縁をもち、平行沈線内には「豚鼻状」の文様が施されている。13～17・19は口縁部を巡る平行沈線が施される。18は口縁部直下が無文帯となりこの下位に幅広い縄文帯が巡らされている。20は3本の沈線を伴う縄文帯が巡り、これを2本の蛇行懸垂線が繋いでいる。

### 第Ⅲ群d（第16図7～12、第17図・第18図・第54図）

縄文時代後期末葉期に位置づけられる土器群を本類としたが、一部晩期の初頭に入る可能性をもつ土器も含んでいる。

第16図7～8は入組文が主文様となっている土器である。7は残存状態は良好で、体部は内彎して立ち上がった後、上端部から外反して口縁部に続く。口縁部には2個の山形をもつ台状の突起を4個配し、この間に小山形をもつ。頸部から体部上端部に磨消縄文による入組文が配されている。口縁部及び体部にはLRの単節斜縄文が施文されている。8は連続する小山形口縁部をもつ。口縁部直下と体部上半部に無文帯が巡り、文様帯を区画している。区画内には結束されない羽状縄文が施文され、沈線によって入組状の文様が施されている。体部にも同じ羽状縄文をもつ。9は、頂部に2～3個の刻みを有する山形突起をもつ。細い磨消帯によって

文様帯は区画され、この中に入組文が構成されている。この入組文は、入組部分が明確に繋がれてはおらず、長楕円状になっている。また入組部には不明瞭な三叉文が所々に配されている。第54図3～18も入組文が配される土器である。3～5は入組文様内に縦の刻みが施されている。6～8は同一個体と考えられる。口縁部には台状の突起が連続する。地文は結束しない羽状縄文である。10・11は同一個体で、頂部に2個の刻みを有する小さな山形口縁をもつ。

第16図10は小形の壺である。底部には極小さな高台をもつ、体部は強く内彎して中央部に最大径をもつ。頸部は「く」字に屈曲して外傾する口縁部に続く。体部上半部に沈線区画された縄文帯が巡り、この上位に入組文の変形と考えられる「二葉状」の区画文が構成されている。また沈線による不明瞭な三叉文が文様間に配されている。11は高台をもつ鉢である。口縁部には2個一対の小さな山形をもつ。体部上半部に沈線区画された磨消帯が2本巡り、縄文帯を区画している。12は完形の鉢形土器である。体部は外傾して立ち上がり、中央部からやや内彎する。口縁部には1個の山形をもつ。山形には「V」字状の沈線区画が施される。口縁部と体部上半部には2本の沈線が巡り、この区画内に先端部が「Y」字状の曲線によって入組文を基調とした文様が構成されている。文様帯の部分には無節斜縄文、体部には結束されない単節の羽状縄文が施文されている。

第17図には無文の土器を掲載した。1は高台をもつ鉢である。体部は内彎して立ち上がる。内外面とも丹念に研磨されている。2はボール状の鉢である。4は外反する短かい口縁部をもつ。6は壺の頸部～口縁部で、口縁部は強く外反して開く。7は緩い波状口縁をもつ深鉢である。8は平口縁を呈する。9～11は注口土器である。9・10は体部の最影部に注口をもつ。9には注口の低位に「フグリ状」の突起をもつ。11は底部に極小さい高台をもつ。体部は「ソロバン玉状」を呈し、内傾する頸部との間に段をもつ。注口部は欠損するが、体部中央のやや上位につけられ、低位には「フグリ状」の突起をもつものと考えられる。外面は丹念に研磨され、色調は黒色を呈す。

第18図はミニチュア土器である。4を除いて無文である。1～3は浅鉢で、1・2は高台をもつ。2は外面が研磨されている。4～5は壺形土器である。4～5は頸部に沈線が巡らされている。4は底部に高台をもち、体部にわずかに縄文が施される。7は口縁部が長く外傾する。外形を整形した後、棒状の工具によって中を抉ったもので、器壁は非常に厚い。8～13は深鉢形土器である。8は6単位の緩い波状口縁をもつ。12・13は折り返し口縁をもつ。

#### 第IV群土器（第19図・第20図・第55図・第56図）

縄文時代晩期に位置づけられる土器群である。時期的には初頭から後葉期に及ぶが、量が少ないため小群は設けなかった。

第19図1は、平面形が楕円形を呈する浅鉢である。底部は丸底を呈し、体部は緩く内彎して

立ち上がる。体部には沈線によって文様帯が区画され、この中に二重の円形文を抱く三叉文が斜線に区画されて配されている。区画内には地文としてLR単節斜縄文が施されている。2は不整な山形が連続する口縁をもつ。文様は沈線によって構成され、口縁部には不明瞭な三叉文が配され、体部には入組状の文様が展開される。3は小突起が連続する口縁をもつ。口縁部には三叉状入組文が施され、この下位に2本の沈線が巡らされている。沈線以下の部分はLR単節斜縄文が施されている。4・5は鉢形土器である。4は小山形が連続する口縁をもつ。5は口縁部に弧状沈線が連続し、入組状文を構成している。6・7は注口土器である。6は丸底で、体部は内彎して「ソロバン球」状を呈す。頸部は長く、ほぼ直立し口縁部でわずかに外反する。全体に黒色を呈し、器面は丹念に研磨されている。7は頸部及び体部に「X」字状文、注口部には三叉文が施される。11は壺形土器の体部である。体部上半部に刻目文と沈線により渦巻文が配されている。12は完形の台付鉢である。口縁部には羊歯状文が施されている。台部は「ハ」字状に開き、2段の刻目文が配されている。第20図1は細長い壺形土器である。器面は丹念に研磨され、頸部上端に沈線区画された連続刺突文をもつ。2～4は鉢形土器である。2は口縁部に4本の沈線が巡り、沈線の間には連続する刺突が施されている。3は口縁部に1本、体部に4本の沈線が巡り、体部の沈線には2個一対となる小突起が配されている。5は口縁部に小山形をもつ。6は口縁部に、両側に2個の小山を配す突起装飾が施されている。7は台部を欠損する台付鉢である。体部は外傾して開き、口縁部は内傾して立ち上がる。口縁部には3本の沈線が巡らされ、中間に配される沈線には2個一対の小突起が施されている。8は小形の鉢で、口唇部に縦長の刻み目が連続して施されている。また、口縁部内側には沈線が1本巡らされている。体部には単節斜縄文が施文されている。9・10は深鉢である。いずれも口縁部から体部上端に沈線が巡り、沈線間には2個一対の小突起が配されている。9は体部の地文として単節斜縄文、10は無節斜縄文が施文されている。11は壺形土器で頸部～口縁部が残存する。頸部は内傾し立ち上がった後「く」字状に屈曲して内彎ぎみに立ち上がる口縁部に続く。肩部には小突起をもつ隆帯が巡らされている。頸部は無文で、口縁部には単節斜縄文が施されている。12は口縁部に3本の沈線が巡らされている。13は口唇部に指頭丘痕状の凹凸が連続し、沈線によって区画される頸部は無文帯となっている。14は大形の深鉢である。体部上端部に最大径をもち、口縁部は直立する。口唇部に指頭丘痕状の凹凸が施され、口縁部には3本の沈線が巡る。体部にはRL単節斜縄文が地文として施文されている。

第55図・第56図は同群の破片である。第55図1は縄文地に、渦巻状の玉を抱く三叉文が配されている。2～3は口縁部に玉抱三叉文が施される。9～10の口縁部には羊歯状文が施される。18～35は刻目文をもつ。第56図1は口唇部に小山形をもつ。2は口唇部に2個一対の小山形をもち、口縁部には縄文地に沈線が巡らされている。5は口縁部に連続した刺突文をもち、体部

に巡る沈線内には小突起をもつ。14は壺形土器の頸部と考えられる。口縁部には2個一對の小突起を有する沈線が巡り、下位は丹念に研磨されている。18は台付鉢の台部である。19～28は大形の深鉢の口縁部である。19～22は平口縁を呈し、口縁部には3～4本の沈線が巡る。22は口唇部に指頭圧痕状の凹凸が連続する。24～28は、口唇部に連続する凹凸をもち、口縁部には3～4本の沈線が巡らされている。

#### 第V群土器（第57図）

弥生時代中期に位置づけられる土器をV群とした。出土量は極少量で、いずれも中央尾根南斜面部からの出土である。

第57図1～9は同一個体と考えられる。器形についての詳細は不明であるが、体部にくびれをもつ壺形土器と考えられる。体部には連弧状の沈線で区画された磨消縄文が施される。また、ボタン状貼付文とこれを繋ぐ横長の磨消縄文帯が配されている。10～12は同一個体の壺形土器である。沈線区画された細い縄文帯が「工」字状の文様を構成している。12には縦孔をもつ小突起が貼付されている。13は壺形土器の破片と考えられ、体部には磨消縄文によって文様が構成されている。14は体部に平行沈線と山形沈線が巡るものと考えられる。

#### 第VI群土器（第21図～第35図・第58図～第64図）

粗製土器を一括して本類とした。詳細については不明であるが、時期的には縄文時代後期初頭から晩期中葉期に位置づけられる土器である。

第21図1・2は浅鉢である。2は底部が上げ底となる。1は結束されない羽状縄文、2は単節斜縄文を地文にもつ。

第21図3～7は壺形土器である。3は底部に高台をもつ。体部は緩く内彎して立ち上がり、中央部に最大径をもつ。口縁部はいくぶん外傾して立ち上がり、小さな山形を形成する。地文にはLR単節斜縄文が施文されている。4は広口の口縁部をもつ。頸部に不明瞭な沈線が巡り、この上位は狭い無文帯となっている。5は底部に高台をもち、体部は内彎して立ち上がった後直立する口縁部に続く。頸部には2本の沈線が巡り、区画内は無文帯となっている。他の部分には細かいLR単節斜縄文が施されている。6は底部に高台をもち、地文に結束されない羽状縄文をもつ。7は体部片である。

第22図1は、折り返し口縁となる4単位の山形口縁をもつ、折り返し部分には口縁に沿って細長い沈線文が配される。また体部上半部にも同様の沈線文が巡らされている。地文は無節斜縄文である。

第22図2～4・第58図は、多条痕文によって文様が描かれる土器である。第22図2は5本一組の櫛歯状条痕文が縦位に施される。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は緩く外反する。口唇部には、2個一對となる小さな山形が4ヵ所に配されている。3・4は同一個体である。体

部には3～5本一組の細い沈線が斜位に交差している。第58図1～26も条痕文によって文様が描かれる。1～4は器面全体に細い条痕文が施されている。5は口縁部に2本の細い沈線が巡る。9～14は体部片である。6～8は条痕が斜位に交差する。7は小さな山形口縁をもち、山形直下には縦長の小さな突起をもつ。8は口唇部に連続した凹みを有する。口縁部には多条痕が巡らされ、上位は無文帯となっている。16～22は体部片である。

第59図1～8は沈線が斜位に交差し、網目状文を構成する土器群である。1～5は口縁部片である。口縁部には1・4が2本、2・3は3本の沈線が巡らされている。5は口縁部に縦長の突起が配され、この間に細長い長方形文が配されている。6～8は体部片である。

第22図5・第59図9～28は、口縁部に縄文原体の圧痕文を回わす土器である。第22図5は口縁部直下に圧痕文をもつ。体部は内彎して口縁部に続く。地文はLR単節斜縄文が施文される。第59図9～18は口縁部の下端に圧痕文をもつ。これらはいずれも口縁部が外傾または外反し、無文帯となっている。17は2本の圧痕文をもつ。18は、頂部に3個の刻み目をもつ。19～23・27・28は口縁部下端と体部上端に圧痕文が巡り、区画内が無文帯となっている。19～23は口縁部が外反し、27・28は内彎する。21・23は緩い山形口縁を呈する。24～26は第22図5と同様口縁部直下に圧痕文が巡る。

第22図6は口唇部に縄文が施された土器である。体部は直立し、口縁部は緩く外反する。体部にはRL単節斜縄文が横走する。

第23図～第27図・第60図～第62図は地文に各種の捺糸文が施される土器群である。器種は全て深鉢である。

第23図1～3・第60図は折り返し口縁をもち、地文に網目状捺糸文が施文される。体部は緩く内彎し、口縁部がわずかに外反するものが多い。第23図1～3、第60図1～12は口縁部に横回転の地文が施される。第60図13～19は口縁部が無文となっており、18・19はこの部分は縦長の突起をもつ。第23図4～7、第27図6、第61図1～11、第64図8～14は口縁部に装飾が施されるものである。第23図4は口縁部に縦長の突起が配され、この間を3本の沈線が巡っている。5・6も同様な突起をもち、この間に長楕円形が施されている。5は地文に「スグレ状」捺糸文が施されている。6は網目状の捺糸文を施文した後、この上に沈線が斜位に交差する網目状文が施されている。第23図、第24図1は口縁部に縦長の突起をもつ。2は頂部に「鉢巻状」の隆帯が取り巻く山形口縁をもつ。口縁部は強く外反し、体部には「スグレ状」捺糸文が施文されている。第27図6は底部を欠く深鉢である。体部は外傾して立ち上がった後、緩く内彎し中央部に最大径をもつ。口縁部は外反しながら開く。口縁部下位には原体圧痕文が巡り、口縁部と体部を区画している。口縁部にはLR単節斜縄文、体部には「スグレ状」捺糸文が施文されている。第61図1～3は同一個体である。緩く外反する口縁部は山形を呈する。口縁部に沿っ



て3本の沈線が巡り、これを3つに区画し、上位の区画には無節の斜縄文が施文されている。また、上位の縄文帯には、山形の頂部と谷部に縦長の突起が配されている。体部には網目状燃糸文が施文されている。4は頂部に「鉢巻状」の隆帯をもつ山形口縁を呈する。口縁部直下には断面が三角形の隆帯が巡らされている。5は口縁部に長方形の区画文が配されている。6～10は口縁部に沿って沈線が巡らされている。11・12は口縁部直下に縦長の突起をもつ。第62図8は折り返し口縁をもつ。口縁部には横回転、体部には縦回転の細かい燃糸文をもつ。9は頂部に凹みをもつ山形口縁を呈する。体部には「スグレ状」の燃糸文をもつ。10～14は口縁部に沿って長楕円形文が配されている。13・14は口縁部直下に縦長の突起をもつ。

第24図3～7、第25図・第26図・第27図1～5、第61図13～19、第62図1～7は地文は網目状燃糸文が施されるものである。第24図3・4、第61図13・14は口縁部に横位の網目状燃糸文をもつ。第61図15・16は口縁部が磨消され、無文帯となっている。第24図3～6は、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するが、他は緩く外反するものが多い。

第62図15は「亀甲状」燃糸文をもつ。16～20は「スグレ状」燃糸文が施文されている。

第28図～第35図・第63図・第64図は体部に縄文が施文される土器群である。

第28図・第29図1～5は体部に膨らみをもたない深鉢である。第28図1は体部上端がいくぶん内彎する。体部にはLR単節縄文が横走し、内面は丹念に研磨されている。2・3は体部がわずかに外傾して立ち上がり、直線的に口縁部に続いている。2はRL、3はLRの単節斜縄文が施されている。第28図4～6、第29図1～3・5は口縁部がわずかに外反する。第29図1・5は無節斜縄文が施され、他は単節縄文が施文されている。4・6は体部が直線的に口縁部に続いている。4は口唇部が工具で削られ、平坦なものになっている。体部には無節斜縄文が施されている。

第29図7・8、第30図1～4、第63図は折り返し口縁をもつ深鉢である。第29図7は体部が外傾して立ち上がり、直線的に口縁部に続いている。地文は無節斜縄文で、口縁部にも施文されている。8は体部上半部にいくぶん膨らみをもつ。地文には無節斜縄文が施されているが、体部上半部のみ施文されている。第30図1は体部が外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。地文はRL単節斜縄文で、口縁部には縦回転、体部には横回転で施文されている。2は体部上半部にわずかに膨らみをもつ。地文は無節斜縄文で、口縁部には縦回転・体部には横回転で施されている。4は口縁部が無文となっている。第63図4・11・12は口縁部と体部に施される縄文の回転方向が同じものである。6・13では体部の縄文は縦走し、14・15では横走する。また、14・15は緩い山形口縁をもつ。

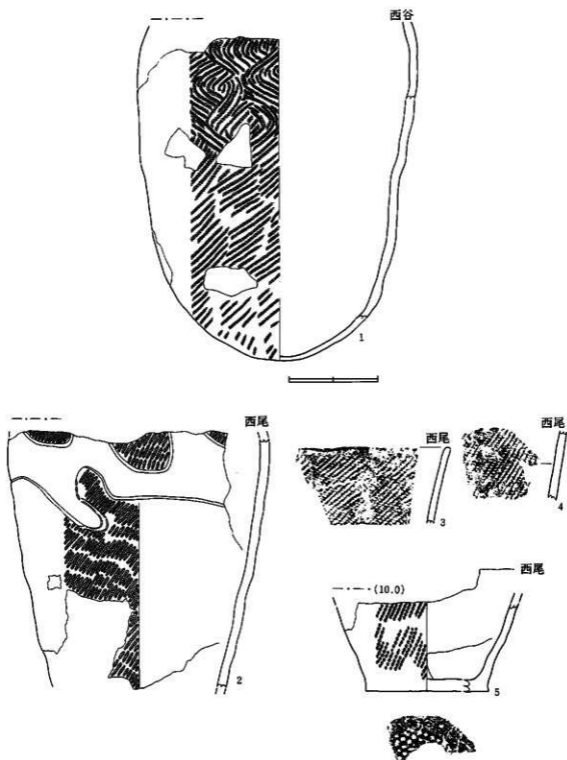
第30図5・6、第31図・第65図1・2は体部に羽状縄文が施される土器である。第30図5は底部に高台をもつ。体部は、緩く内彎して立ち上がり口縁部に続いている。体部には同一原体

によって羽状縄文が施される。6も底部に高台をもつ。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに内彎する。口唇部には4ヵ所に小突起が配され、体部には結束されない羽状縄文が施文されている。第31図1も底部に高台をもつ。1・5は同一原体による羽状縄文が施され、他は撚りの異なる2本の原体によって羽状縄文が構成されている。4は口縁部内側が肥厚する。第32図1～9のうち、4は同一原体による施文であるが、他はいずれも2本の原体によって羽状縄文が施文されている。底部形態がわかるものでは、9を除く2～5・6～8は底部に高台をもつ。4の高台は高く、この部分にも地文が施されている。第64図1・2は撚りの異なる2本の原体で羽状縄文が施されている。

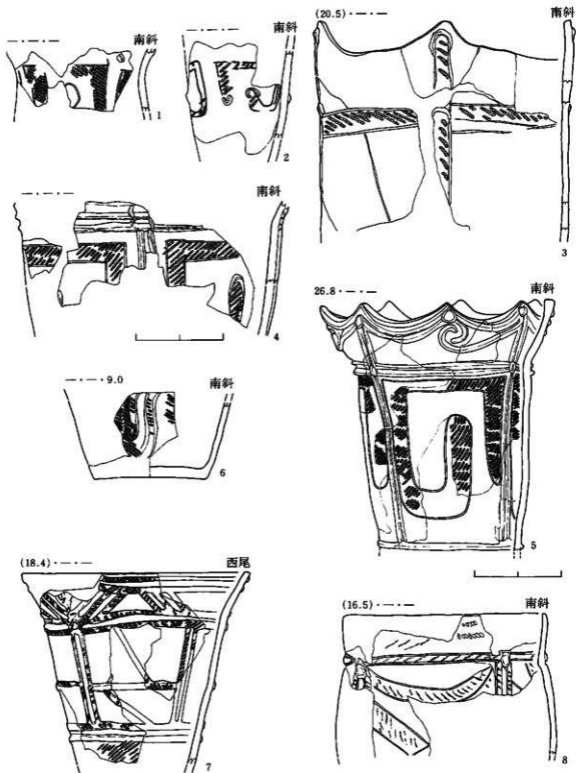
第33図・第34図3～8は地文に単節斜縄文が施文される土器である。いずれも体部はいくぶん内彎する。第33図1・5・6は底部に高台をもつ。

第34図は地文に無節斜縄文をもつ土器である。1は口縁部がわずかに外反する。2～4・9・10は体部が内彎し、5・8は体部が外傾して立ち上がる。9は底部に高台をもち、10は折り返し口縁をもつ。

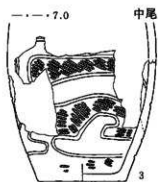
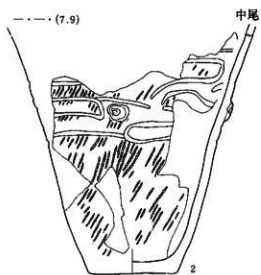
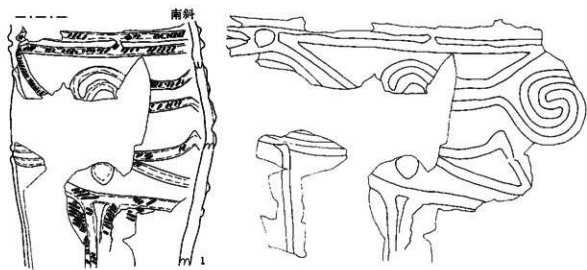
第35図・第64図9・10は、口縁部に山形をもつ土器である。第35図1は体部が内彎し、口縁部に小山形をもつ。2は体部が内彎して立ち上がり、口縁部は外傾して開く。口唇部には2個一対の山形が6個配されている。体部には羽状縄文が施文されている。3～6は小山形が連続する口縁部をもつ。3・4は地文に羽状縄文をもち、4・6は単節斜縄文が施文されている。5は底部に高台をもつ。7は底部に高台をもち、体部は緩く内彎して立ち上がる。口縁部には台状の山形が連続している。地文には羽状縄文が施され、内面は研磨されている。8は小形の深鉢で、底部に高台をもつ。体部は外傾して立ち上がり口縁部に続く。口唇部には不整台形の山形が連続している。9は大形の深鉢である。体部は外傾して立ち上がり、上端部に最大径をもち、口縁部はわずかに外傾して立ち上がる。口唇部には指頭圧痕状の凹凸が連続して施されている。体部にはLR単節斜縄文が施文されている。第64図9・10は頂部に刻み目を有する緩い山形口縁を呈する。いずれも口縁部内側が肥厚する。



第1圖 遺構外出土遺物



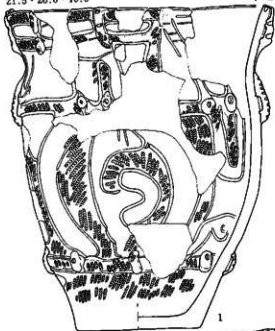
第2圖 遺構外出土遺物



第3圖 遺構外出土遺物

21.5・26.0・10.0

中尾



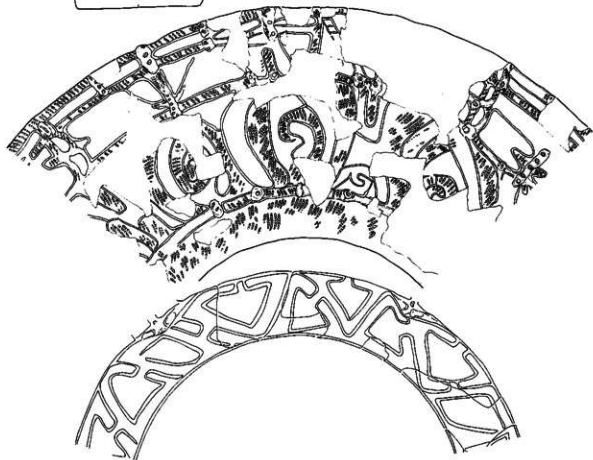
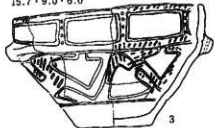
(19.4) · · · · ·

南斜

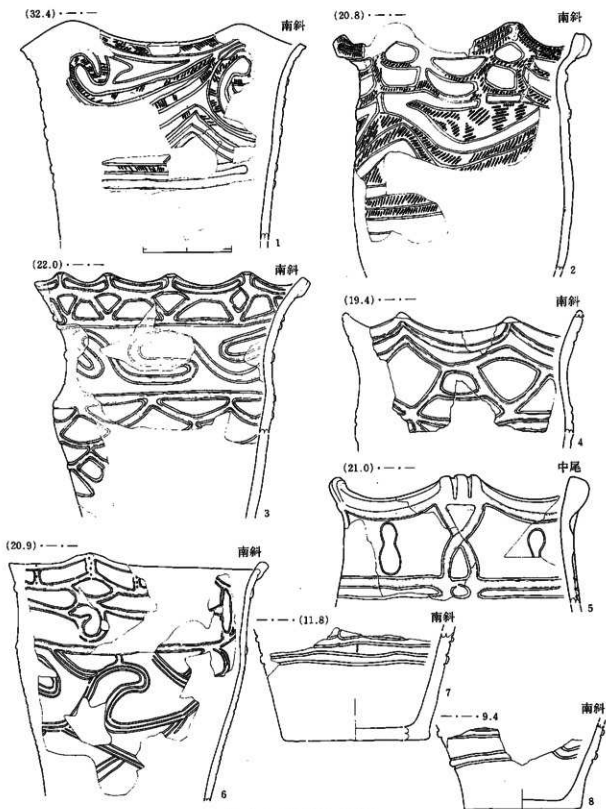


15.7・9.0・6.0

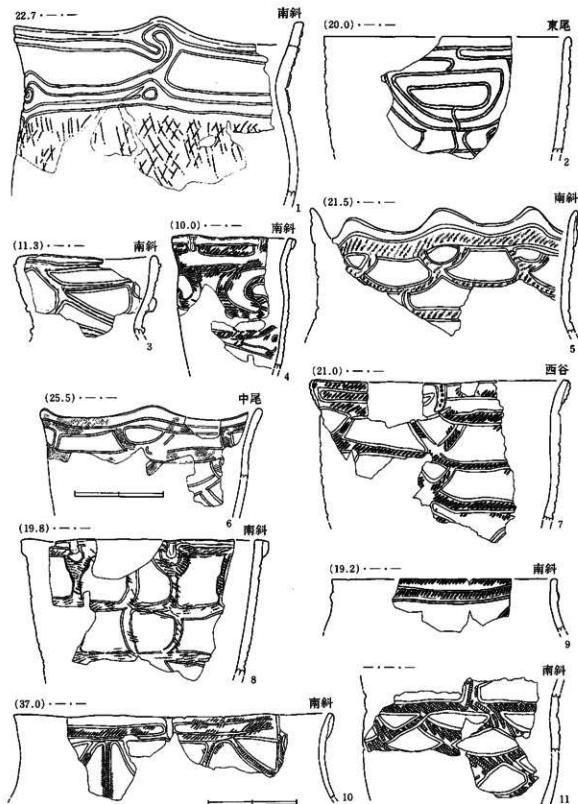
南斜



第4圖 遺構外出土遺物

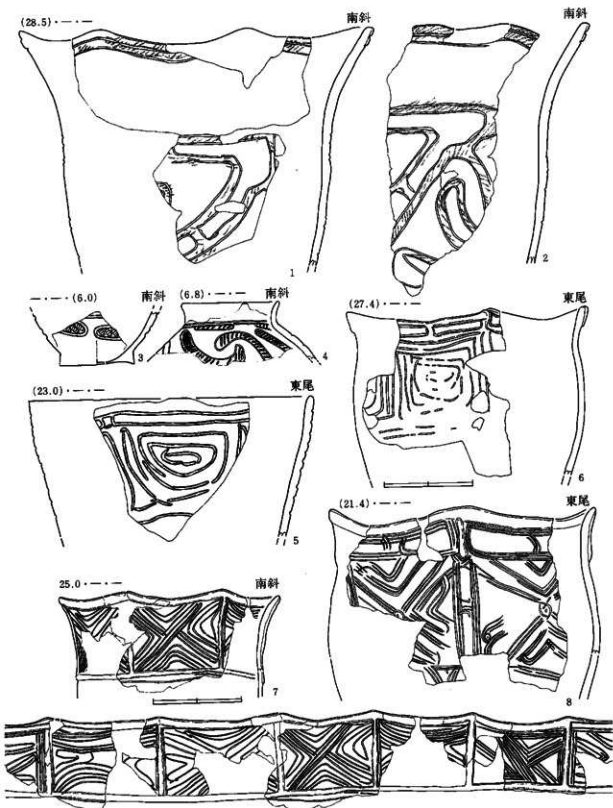


第5圖 遺構外出土遺物

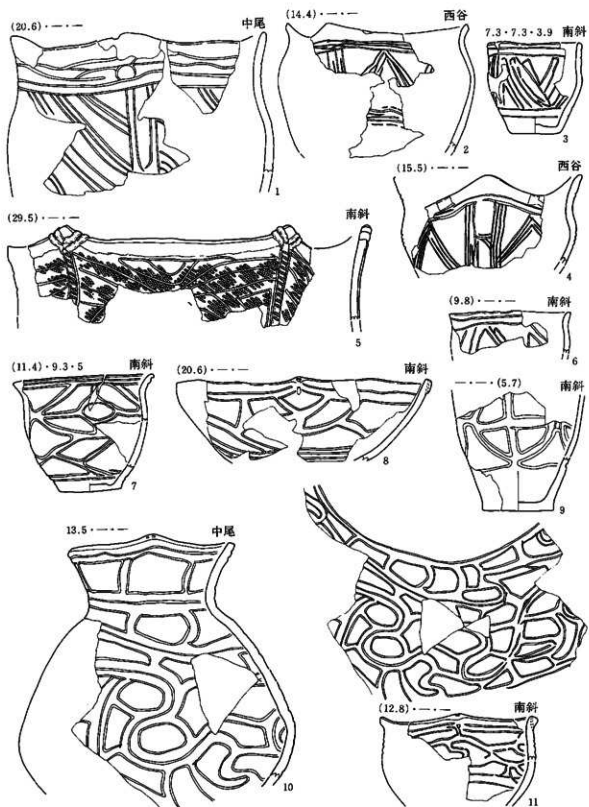


第6圖 遺構外出土遺物





第7圖 遺構外出土遺物

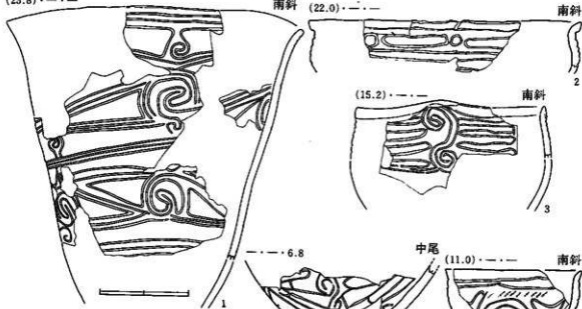


第8圖 遺構外出土遺物

(23.8) ····

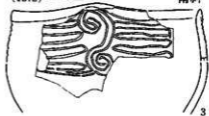
南斜 (22.0) ····

南斜



(15.2) ····

南斜



·····6.8

中尾

(11.0) ····

南斜



(13.8) ····

中尾

·····6.5

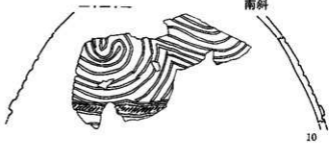
南斜

5.0 · 10.3 · 5.5 南斜



南斜

南斜

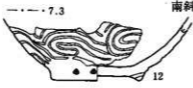


南斜

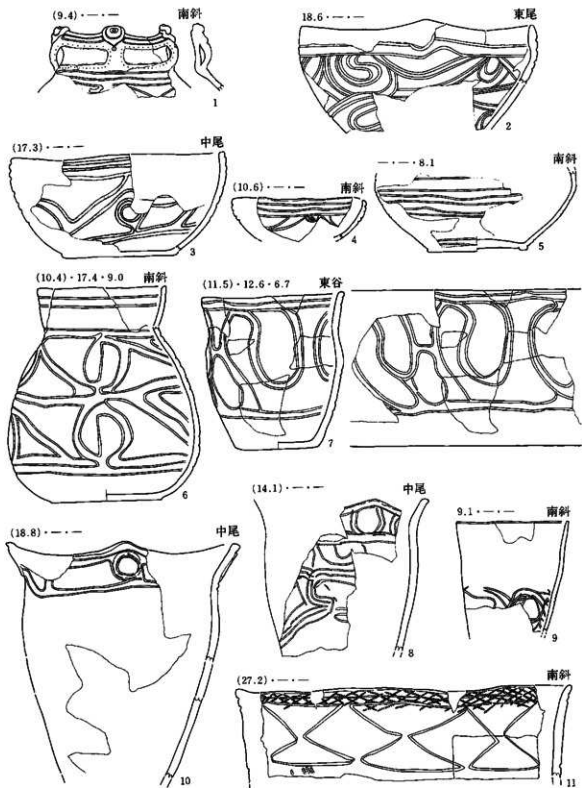
南斜

·····8.6

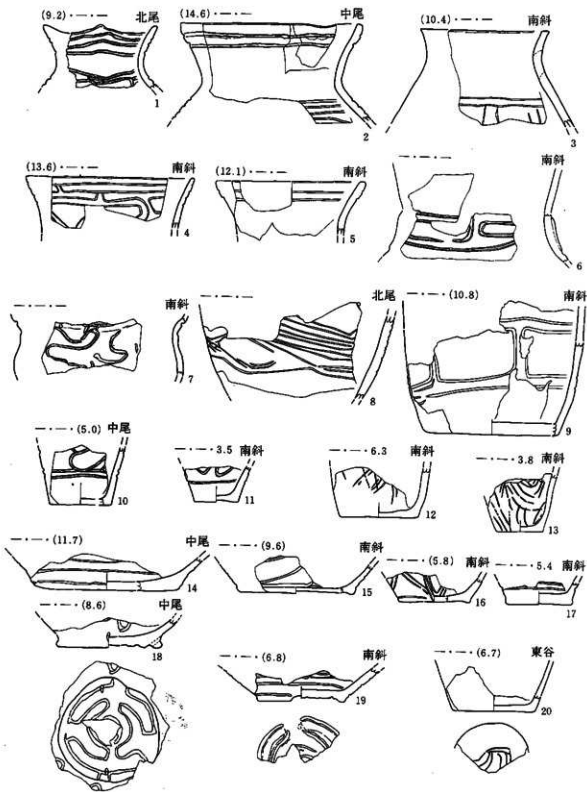
南斜



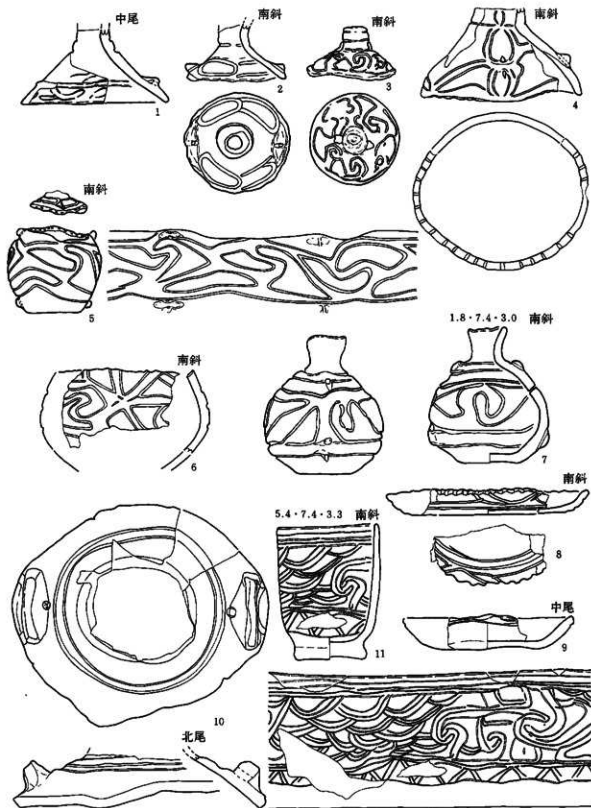
第9圖 遺構外出土遺物



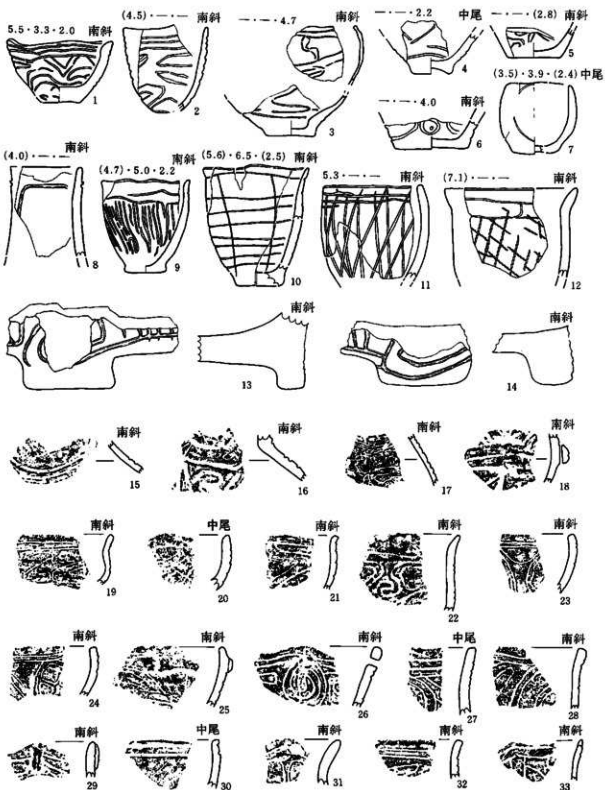
第10圖 遺構外出土遺物



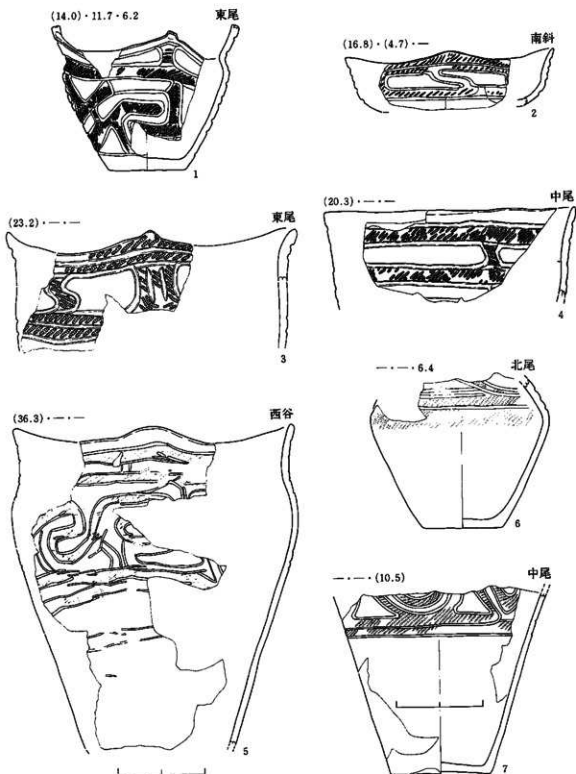
第11圖 遺構外出土遺物



第12圖 遺構外出土遺物

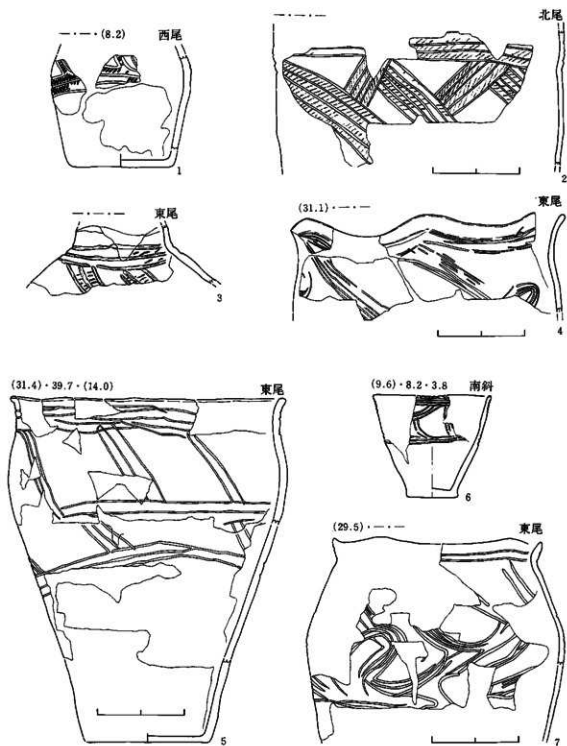


第13图 遺構外出土遺物

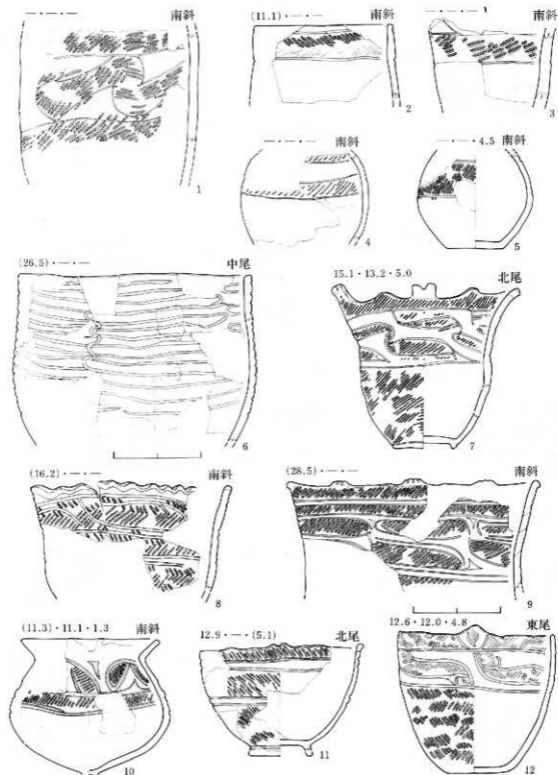


第14圖 遺構外出土遺物

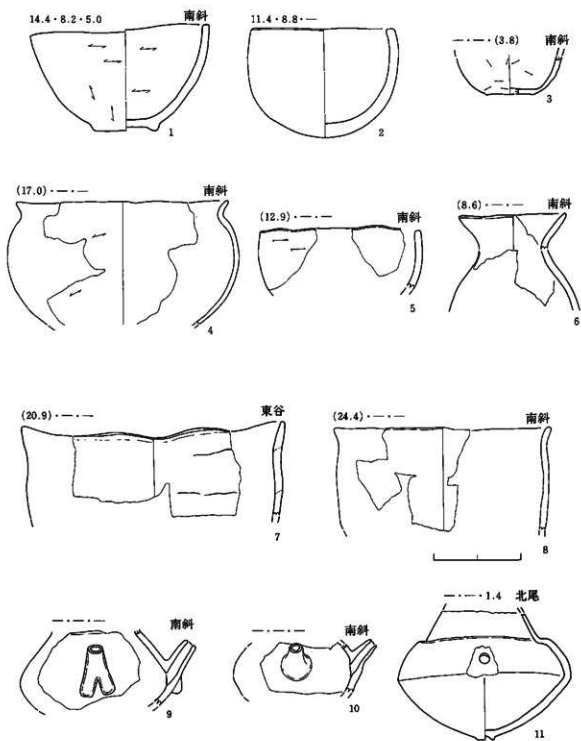




第15圖 遺構外出土遺物



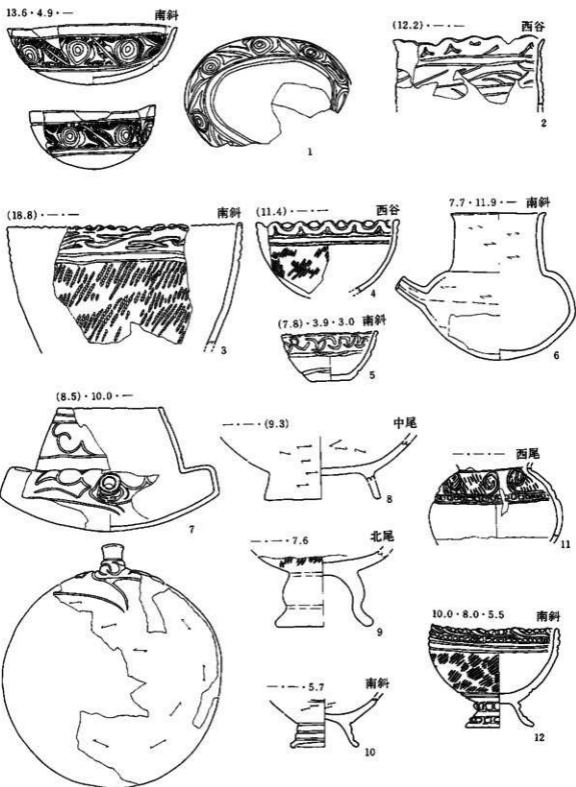
第16圖 遺構外出土遺物



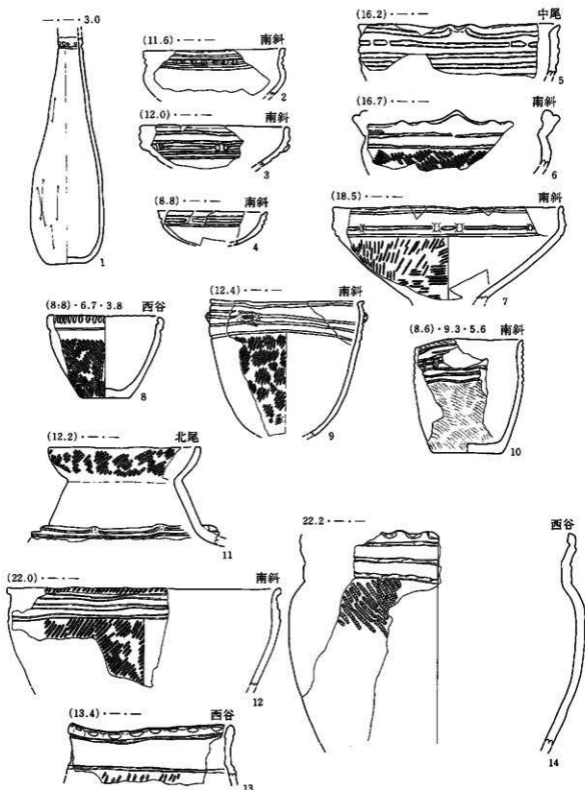
第17圖 遺構外出土遺物



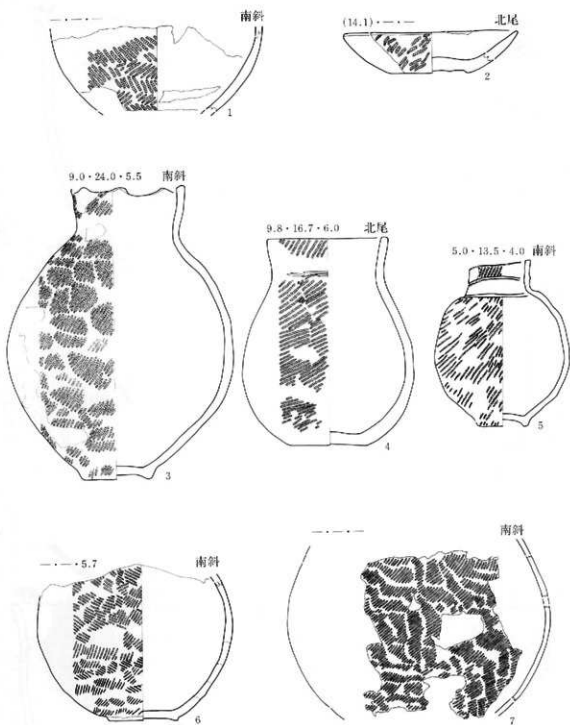
第18圖 遺構外出土遺物



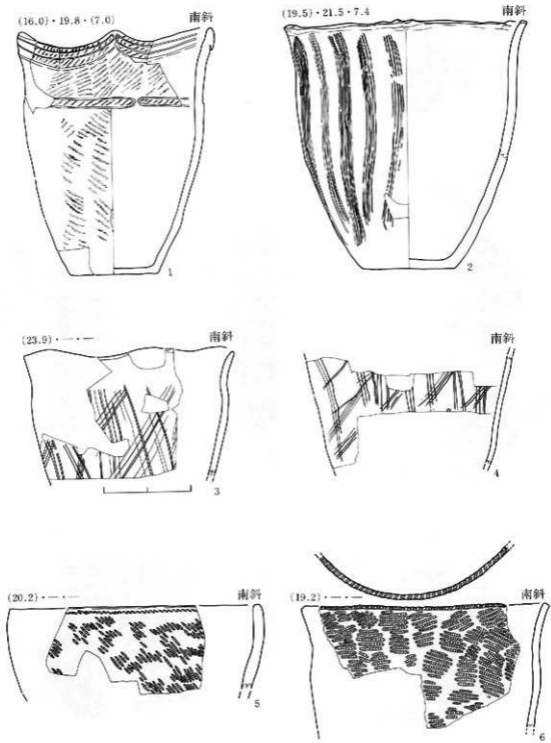
第19圖 遺構外出土遺物



第20图 遺構外出土遺物

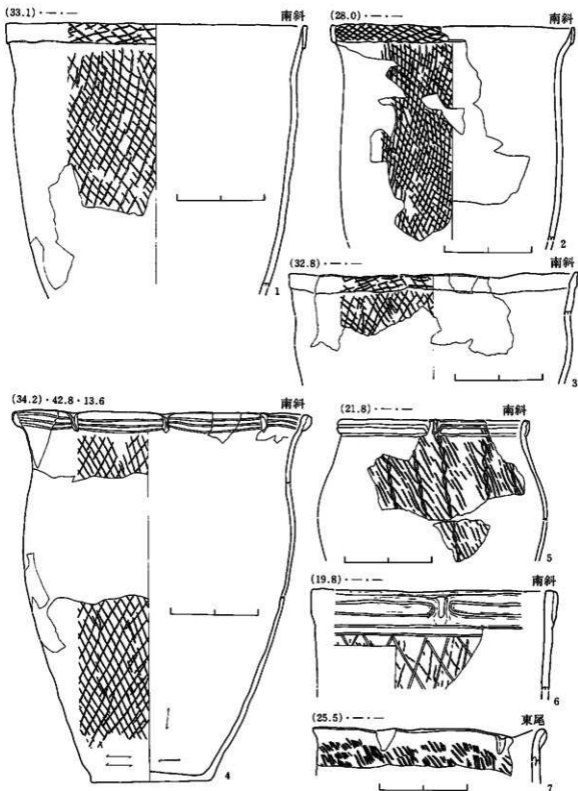


第21图 遺構外出土遺物

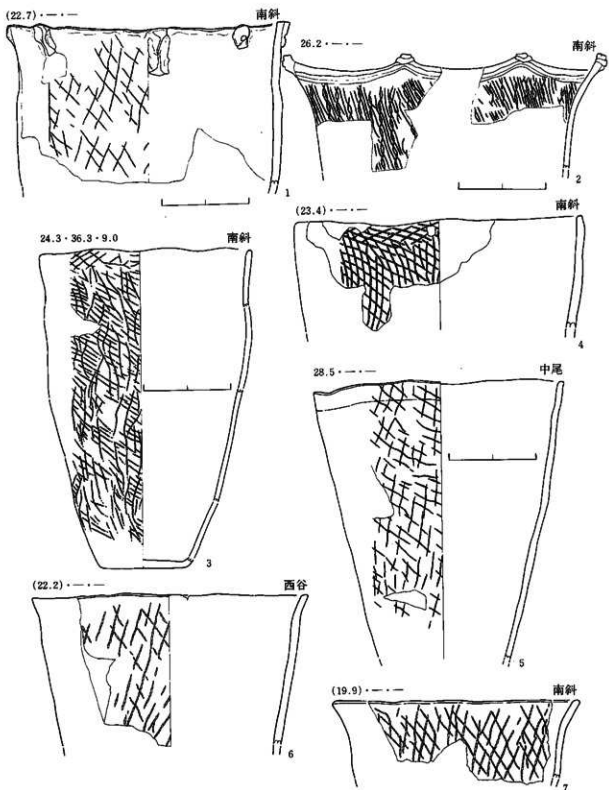


第22図 遺構外出土遺物

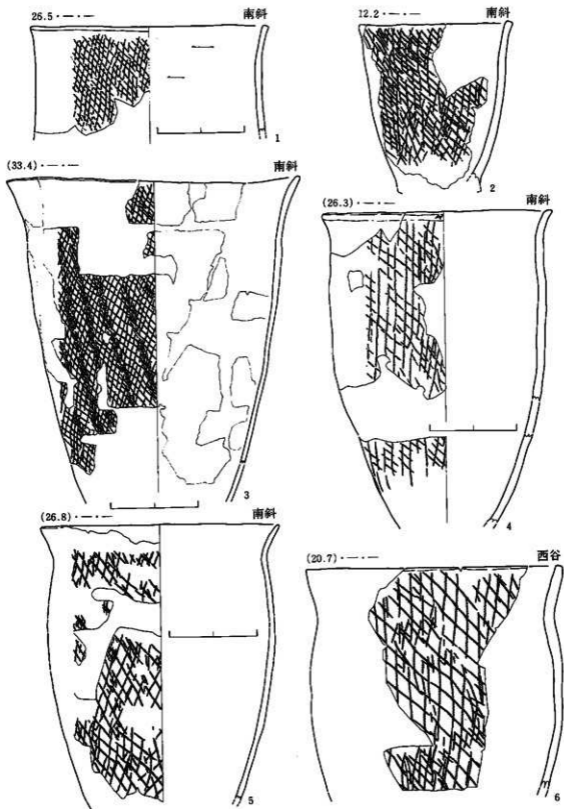




第23圖 遺構外出土遺物



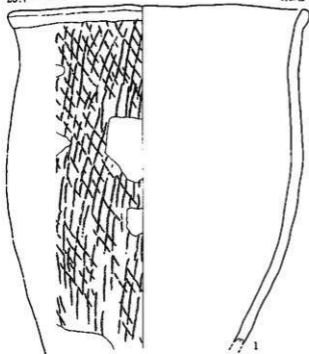
第24圖 遺構外出土遺物



第25圖 遺構外出土遺物

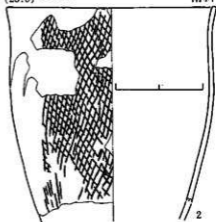
23.7 ·····

東尾



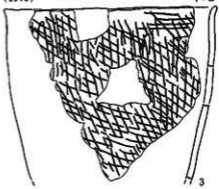
(25.0) ·····

南斜

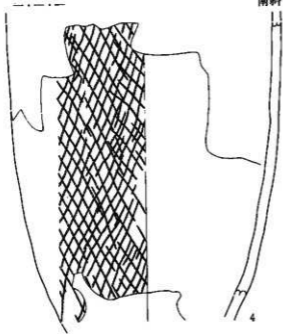


(19.0) ·····

中尾

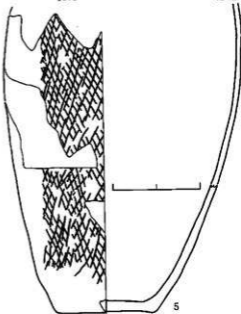


南斜

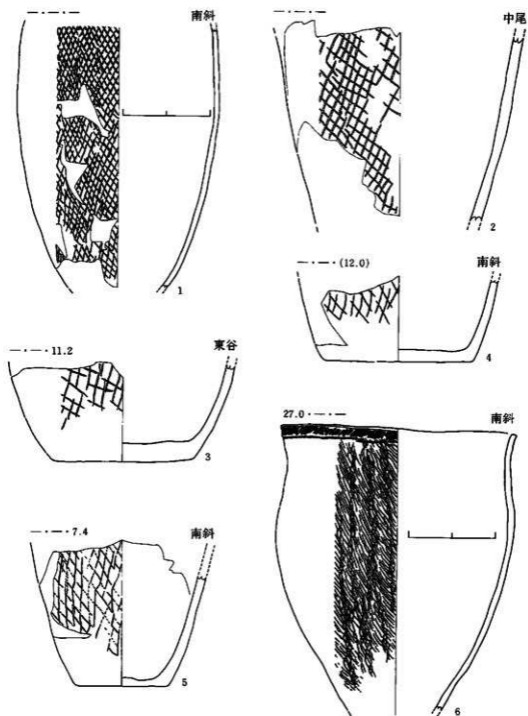


····· 10.3

北尾



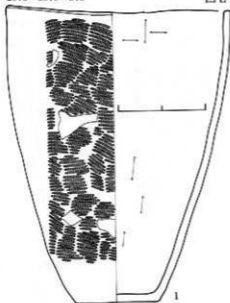
第26圖 遺構外出土遺物



第27図 遺構外出土遺物

25.5 · 33.0 · 9.3

西谷



1

22.7 · 34.0 · (10.6)

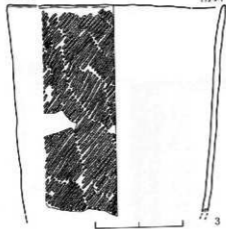
中尾



2

(24.8) · - - -

南斜



3

17.4 · - - -

南斜



4

(18.3) · - - -

南斜



5

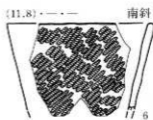
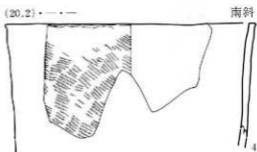
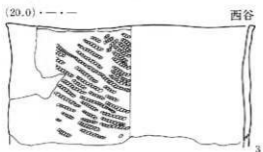
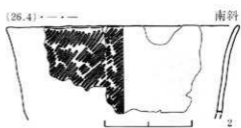
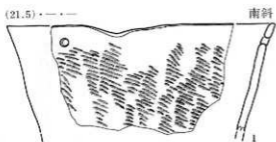
(16.2) · - - -

西尾

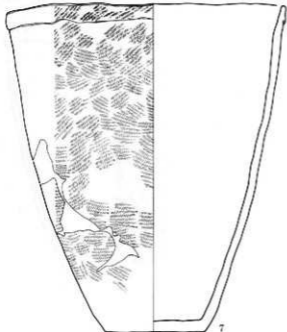


6

第28図 遺構外出土遺物



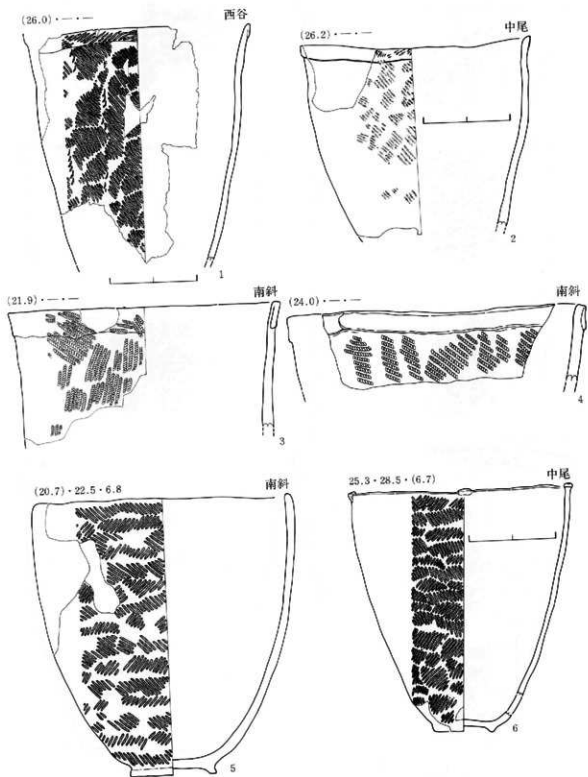
21.0 · 26.7 · 8.0 西谷



20.6 · 22.5 · 9.2 東尾



第29圖 遺構外出土遺物

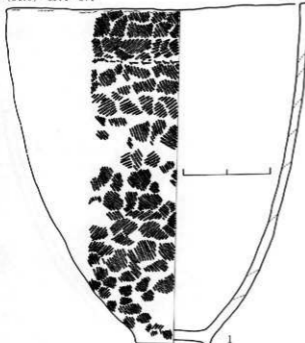


第30圖 遺構外出土遺物



(34.0) · 39.4 · 8.4

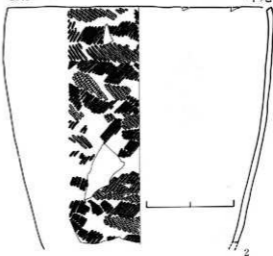
西谷



1

29.9 · ---

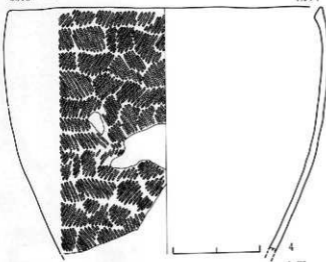
中尾



2

35.3 · ---

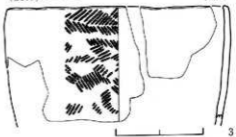
南斜



4

(24.8) · ---

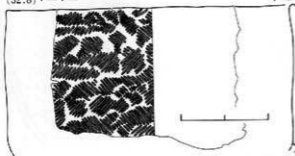
西谷



3

(32.8) · ---

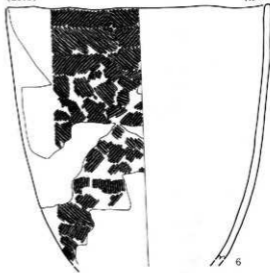
中尾



5

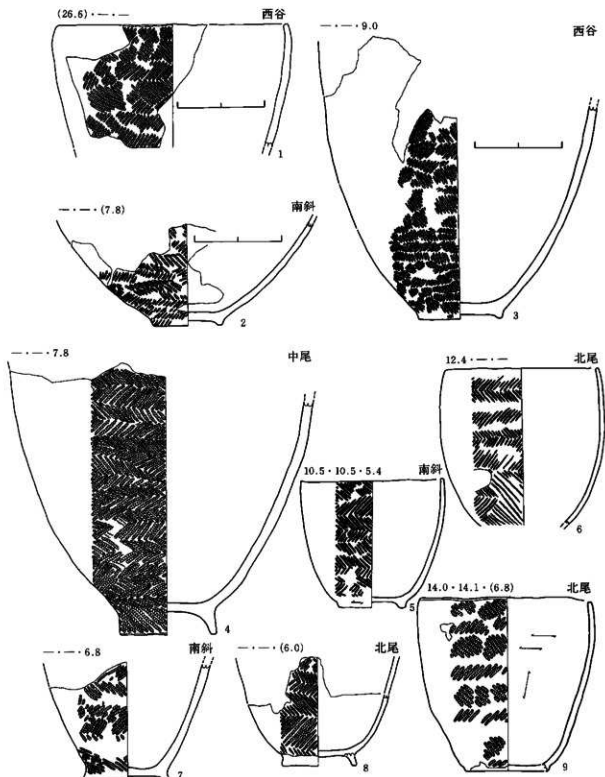
(21.3) · ---

南斜



6

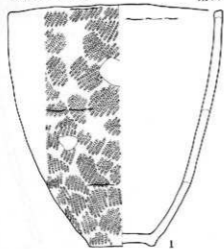
第31圖 遺構外出土遺物



第32圖 遺構外出土遺物

17.3 · 19.7 · 5.2

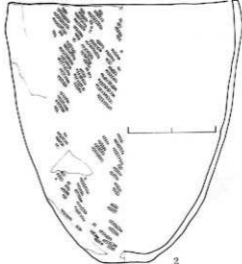
南斜



1

(26.2) · 29.6 · 5.5

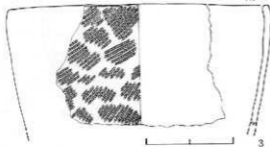
中尾



2

(29.6) · ---

南斜



3

16.4 · ---

南斜



4

--- · 6.4

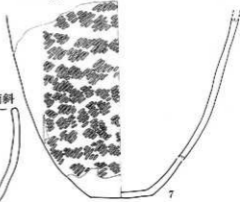
南斜



5

--- · 5.0

中尾



7

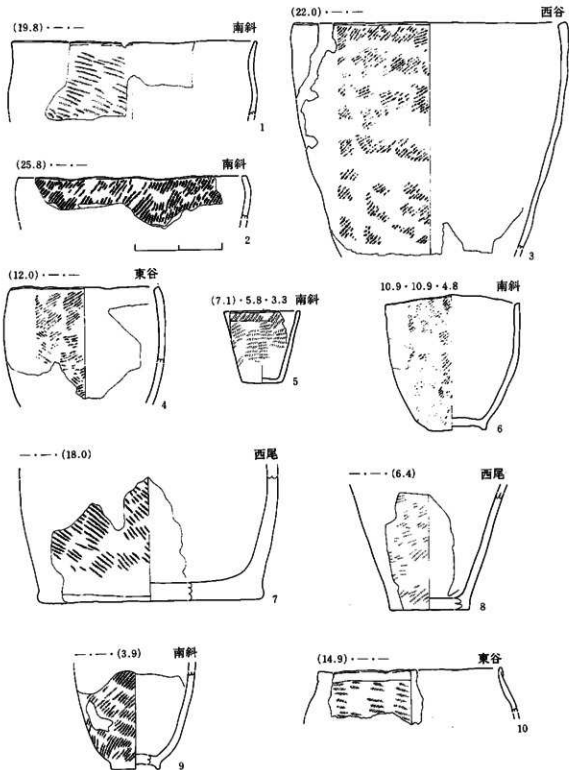
9.8 · 9.5 · 3.2

南斜

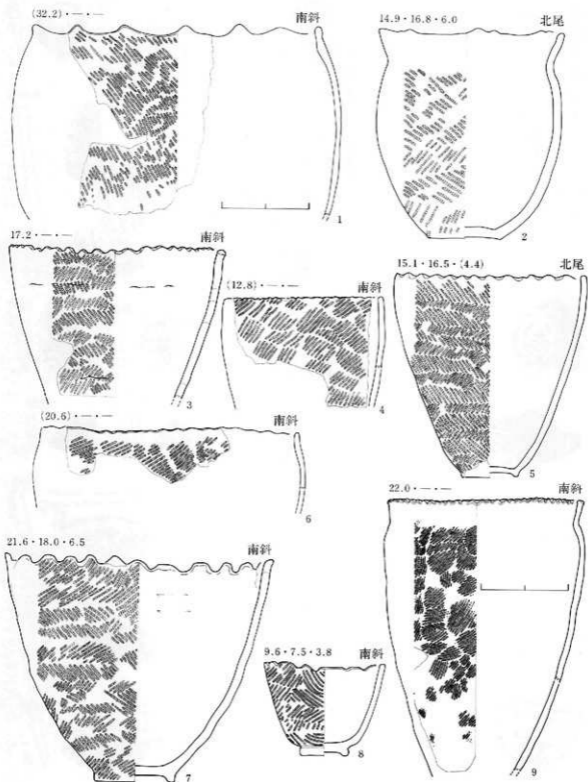


6

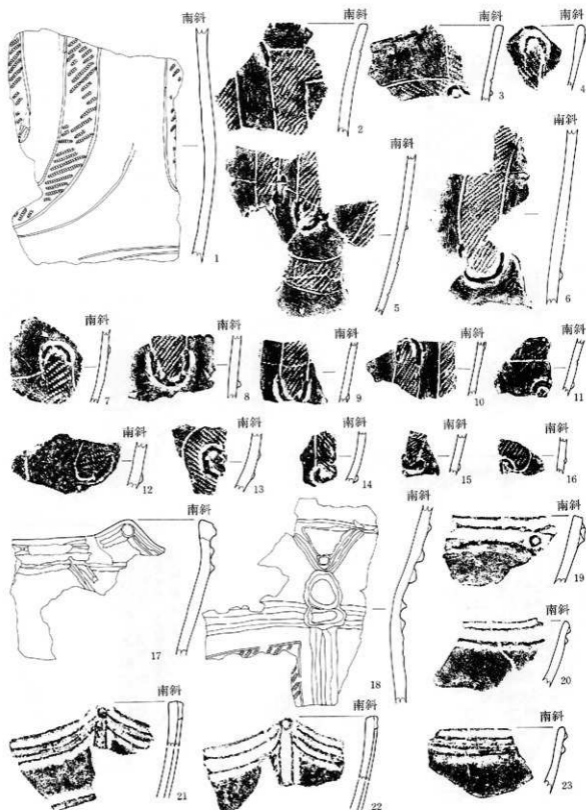
第33圖 遺構外出土遺物



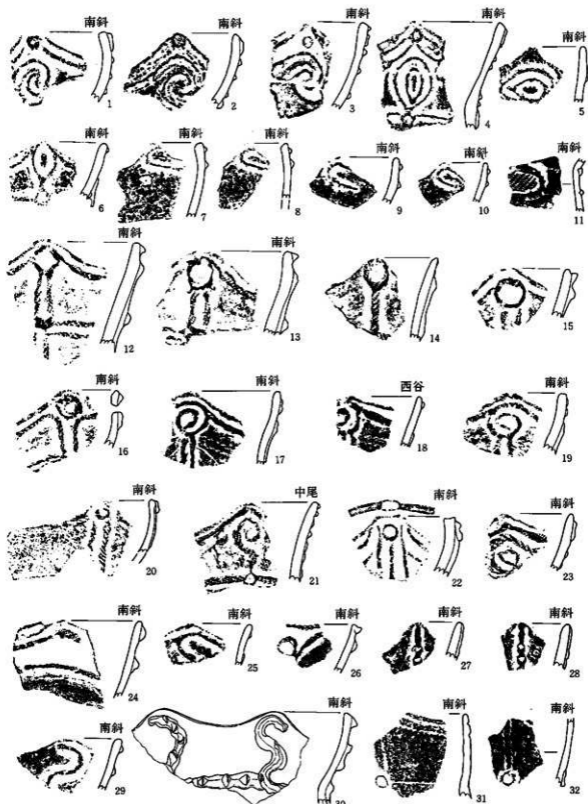
第34圖 遺構外出土遺物



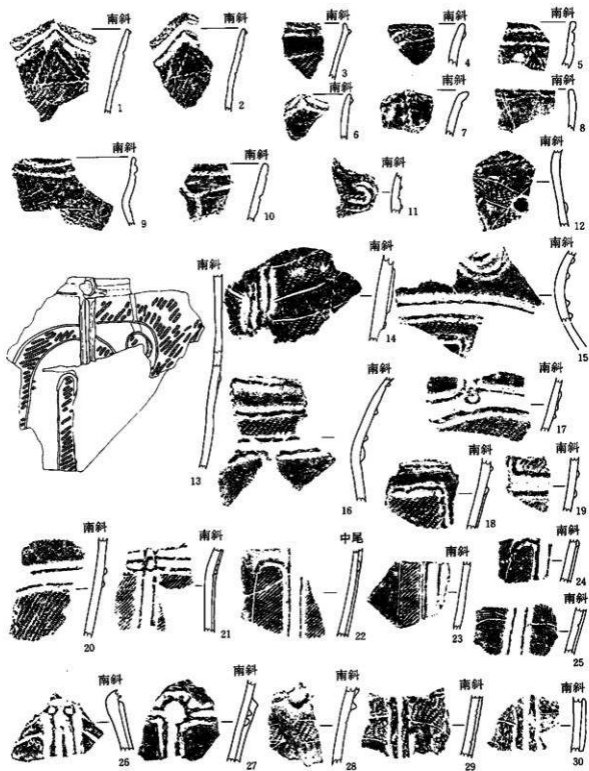
第35圖 遺構外出土遺物



第36图 遺構外出土遺物

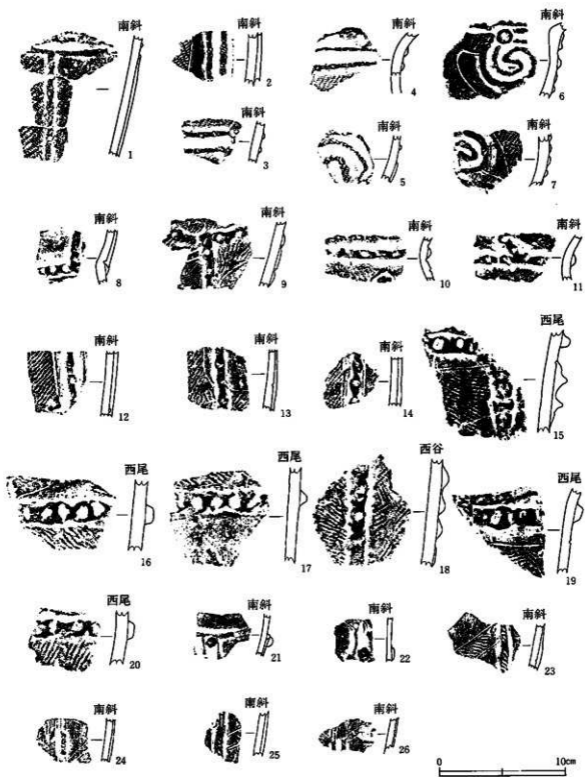


第37圖 遺構外出土遺物

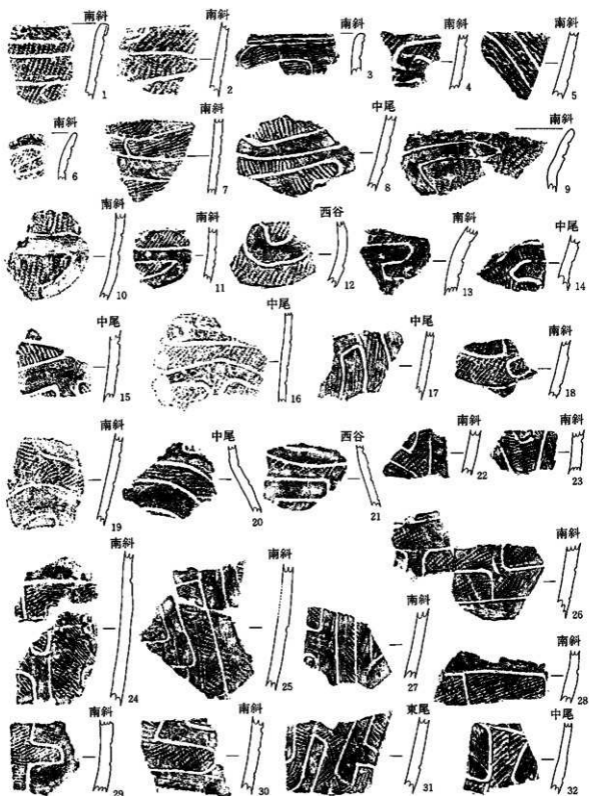


第38图 造桥外出土遗物

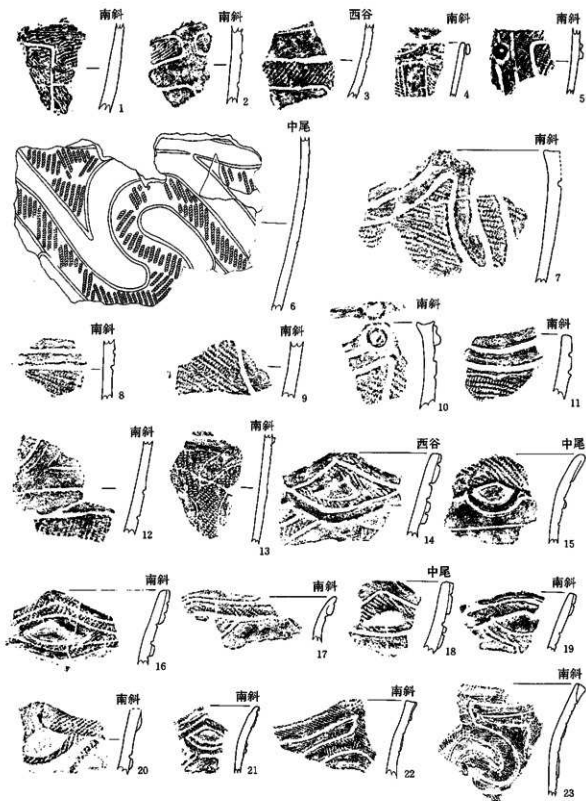




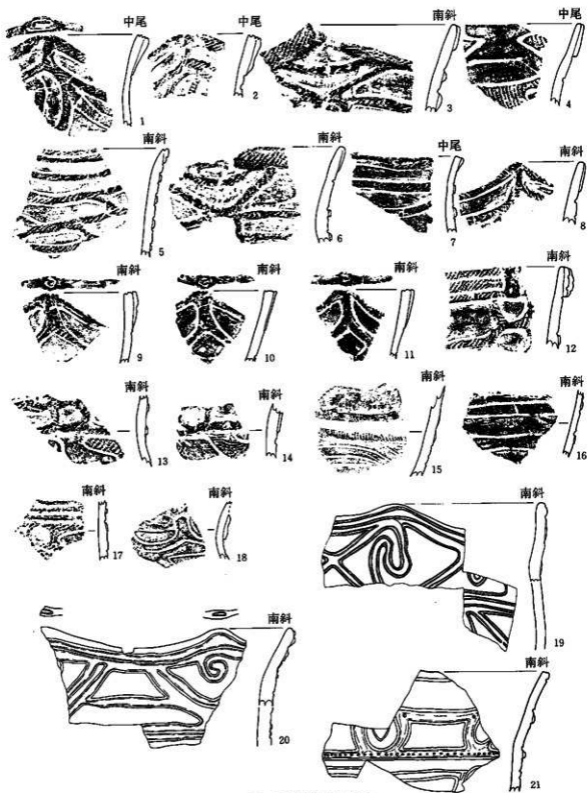
第39圖 遺構外出土遺物



第40圖 遺構外出土遺物



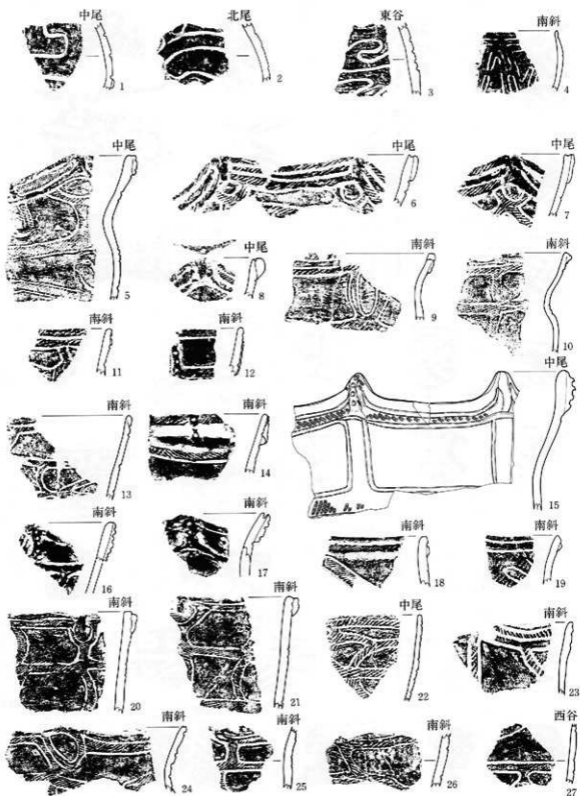
第41圖 遺構外出土遺物



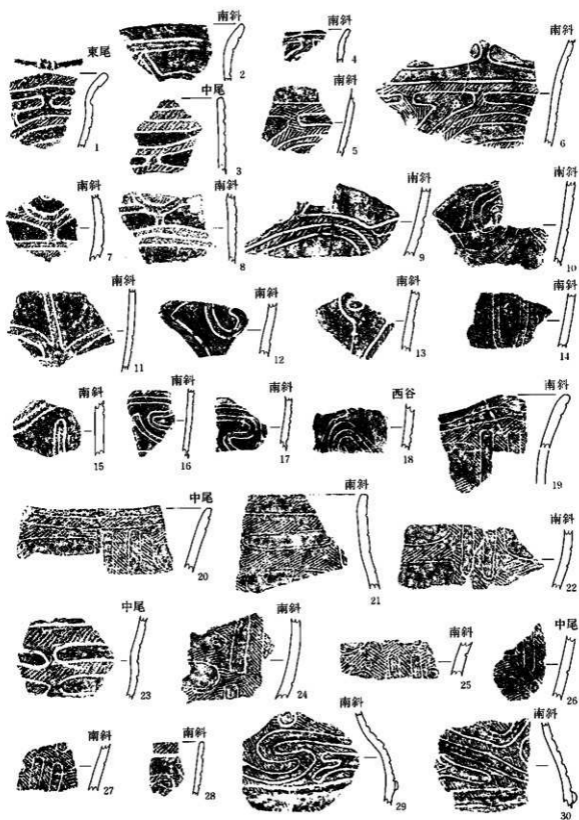
第42图 遺構外出土遺物



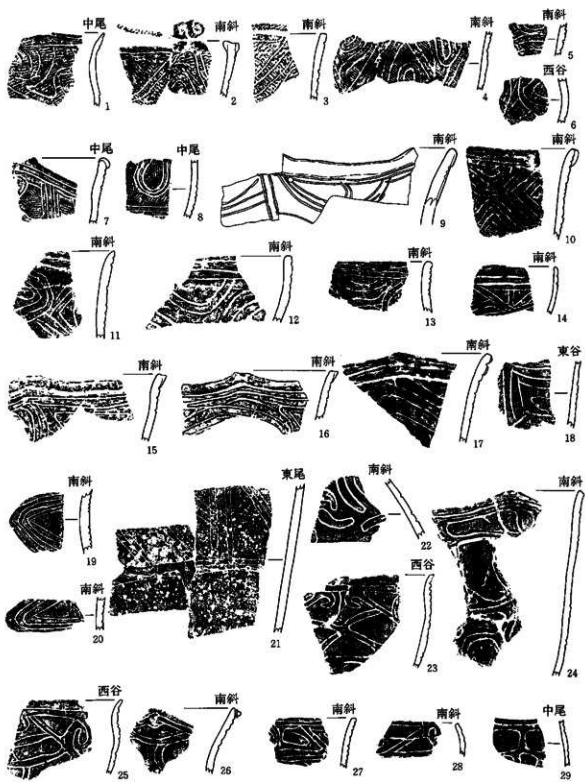
第43圖 遺構外出土遺物



第44圖 遺構外出土遺物

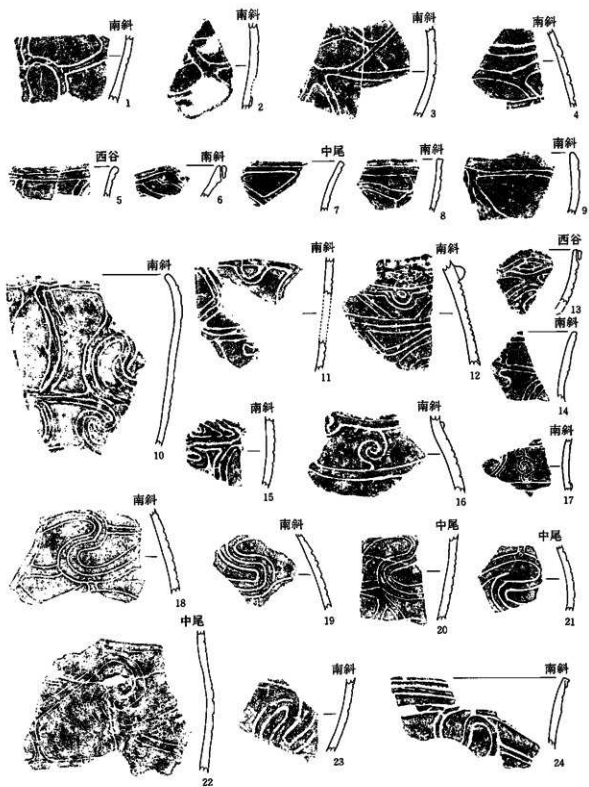


第45圖 遺構外出土遺物

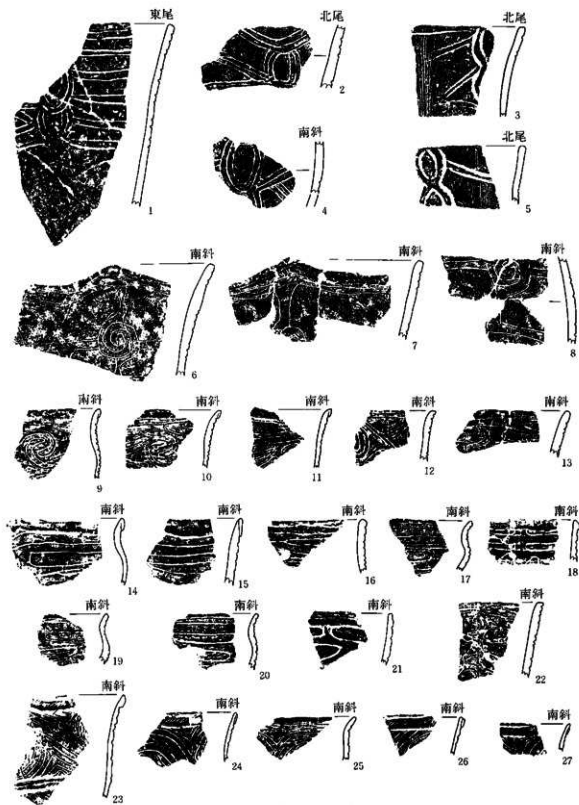


第46圖 遺構外出土遺物

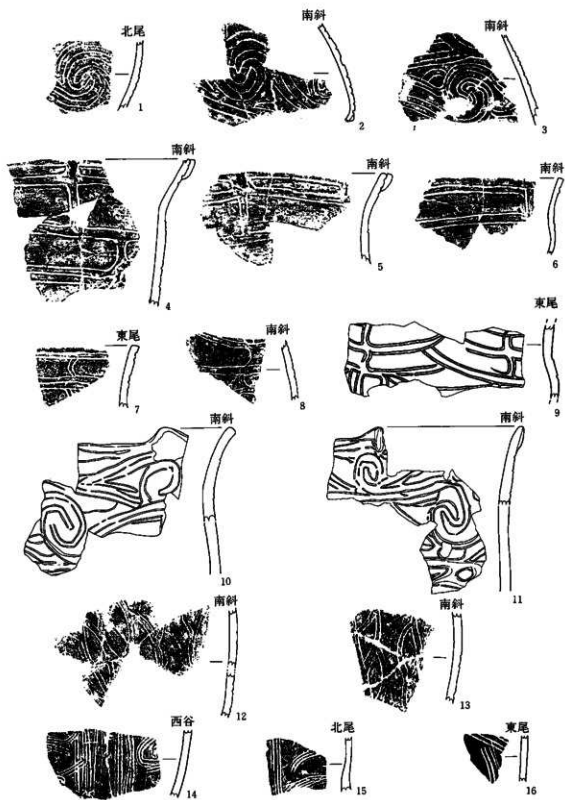




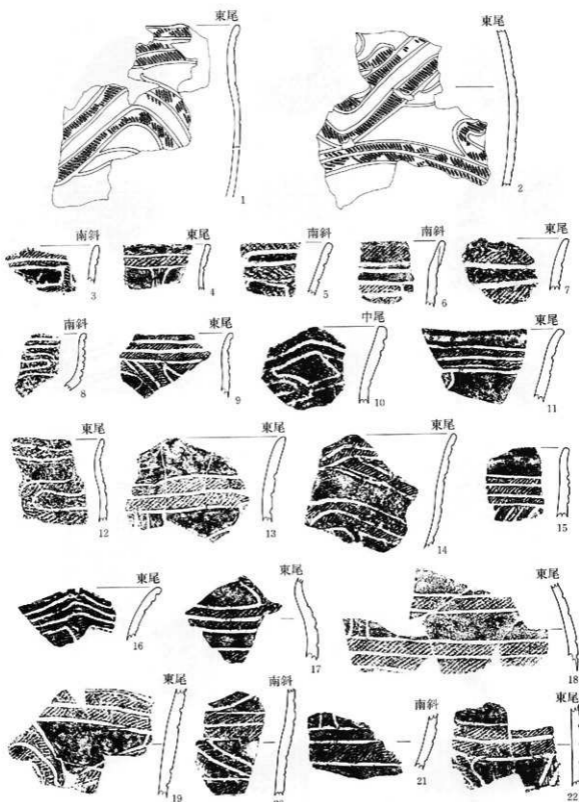
第47圖 遺構外出土遺物



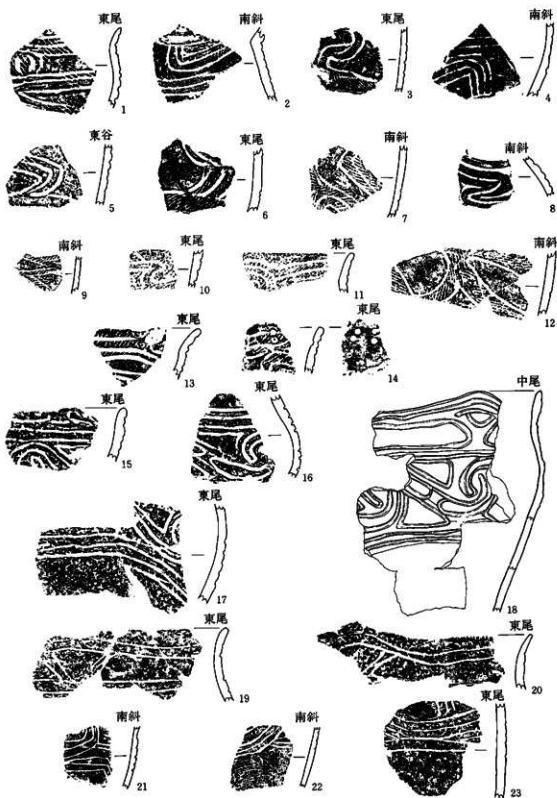
第48圖 遺構外出土遺物



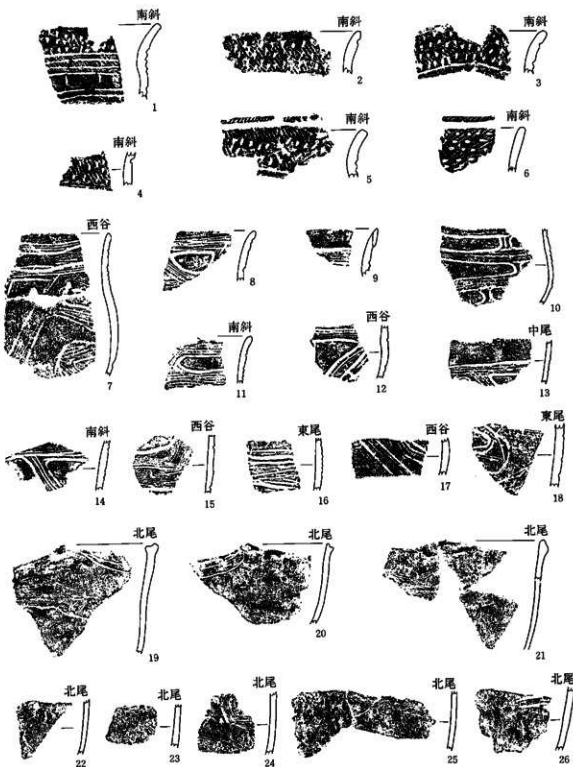
第49圖 遺構外出土遺物



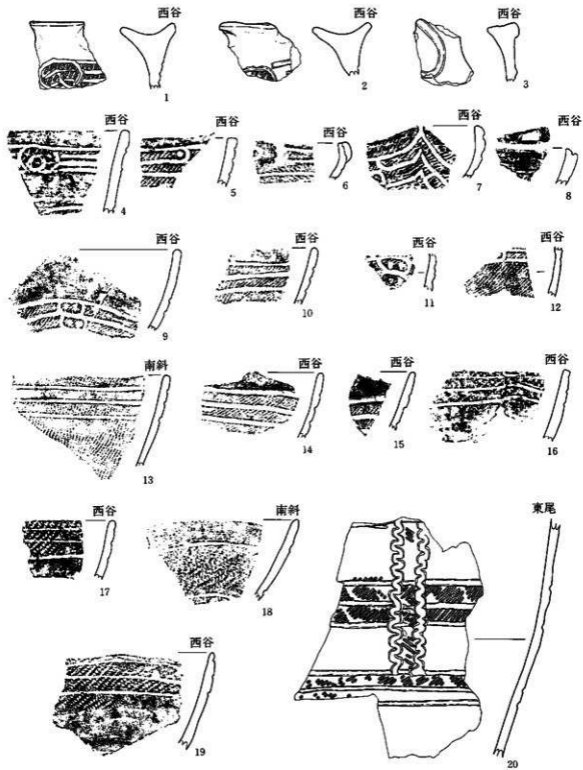
第50圖 遺構外出土遺物



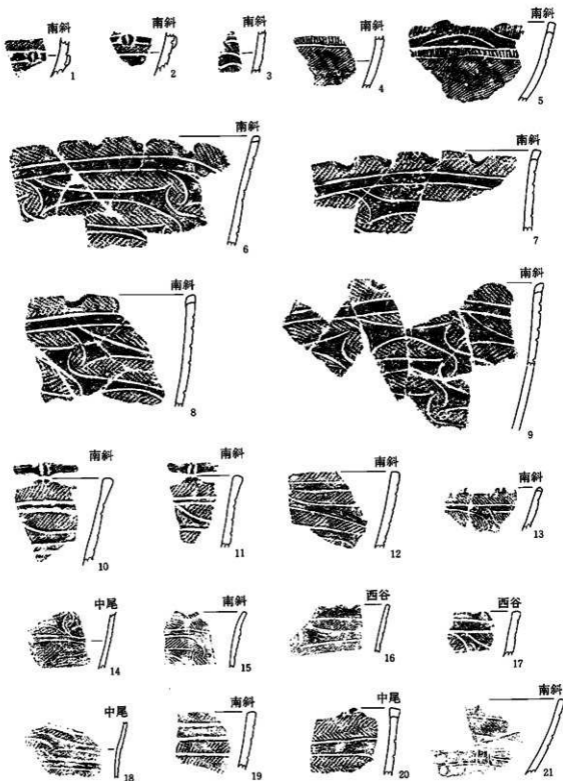
第51圖 遺構外出土遺物



第52圖 遺構外出土遺物

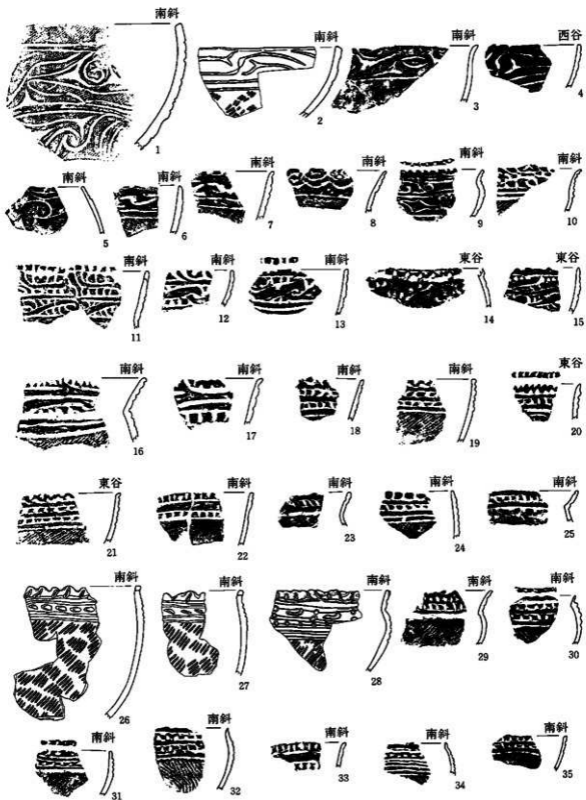


第53圖 遺構外出土遺物

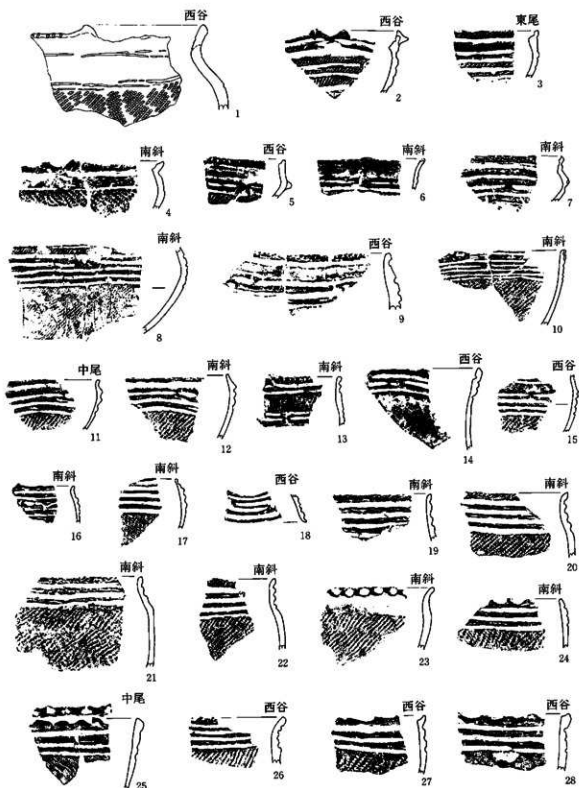


第54图 遺構外出土遺物

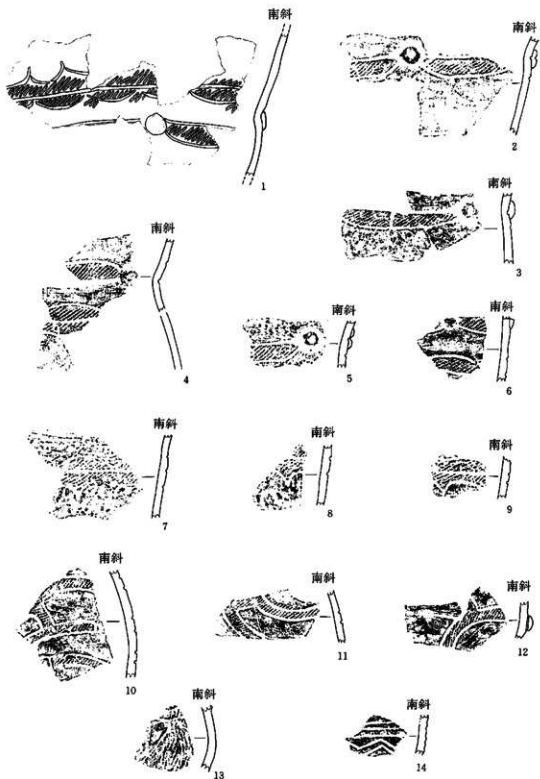




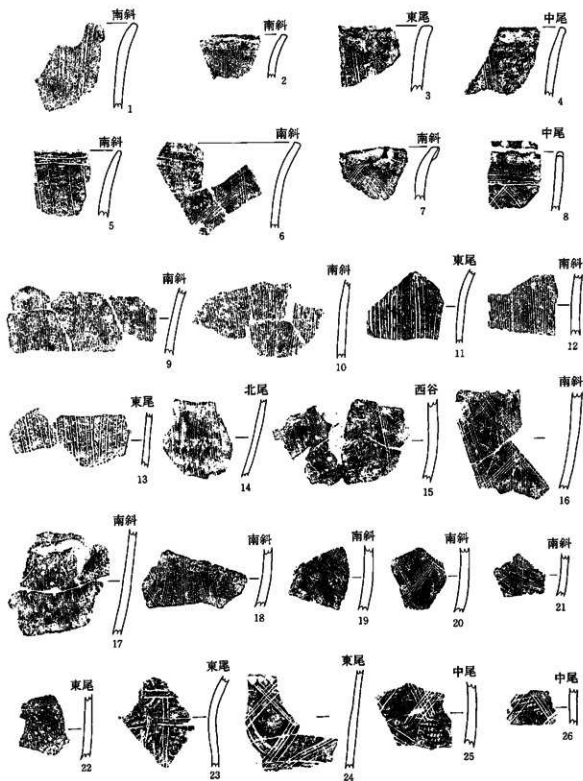
第55圖 遺構外出土遺物



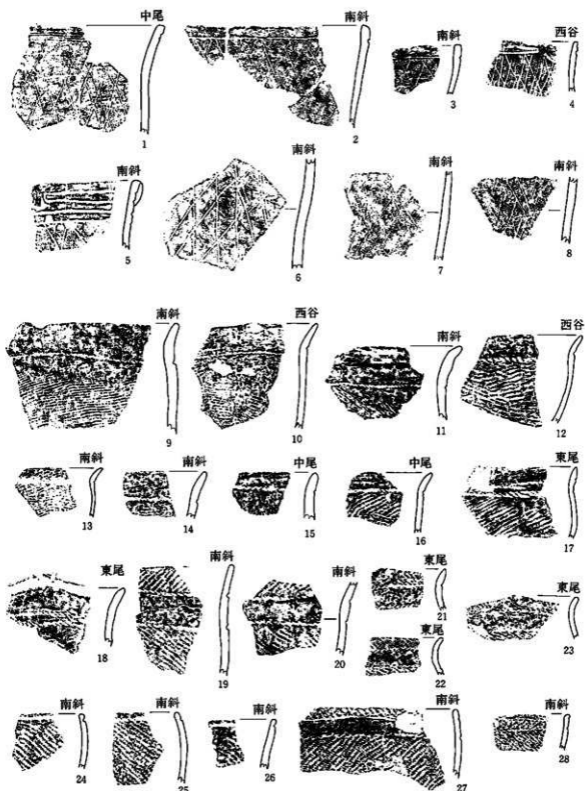
第56圖 遺構外出土遺物



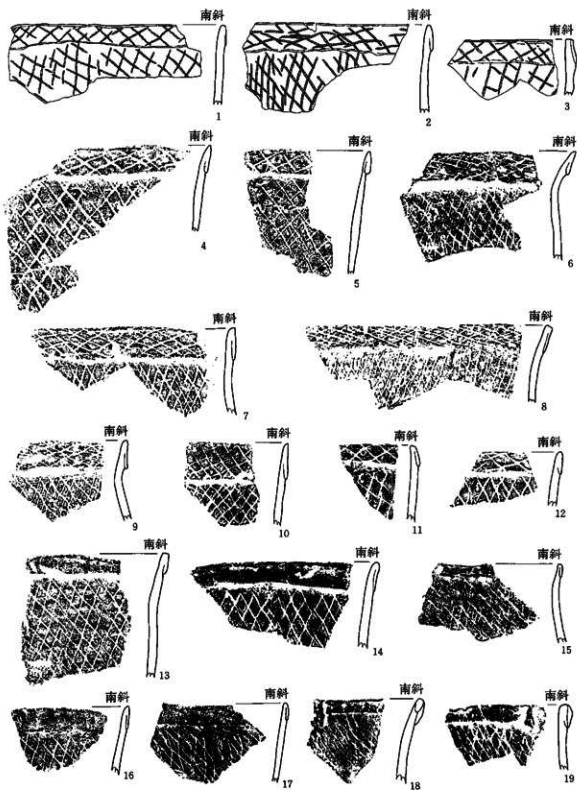
第57圖 遺構外出土遺物



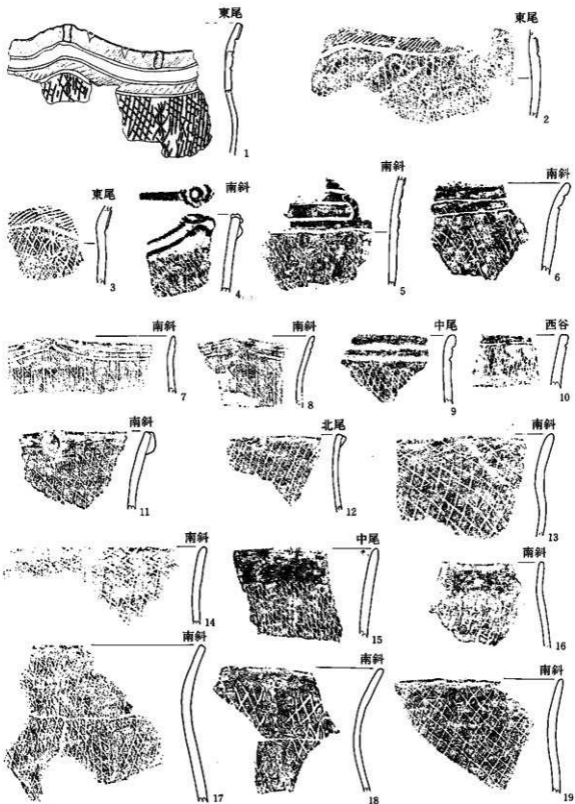
第58圖 遺構外出土遺物



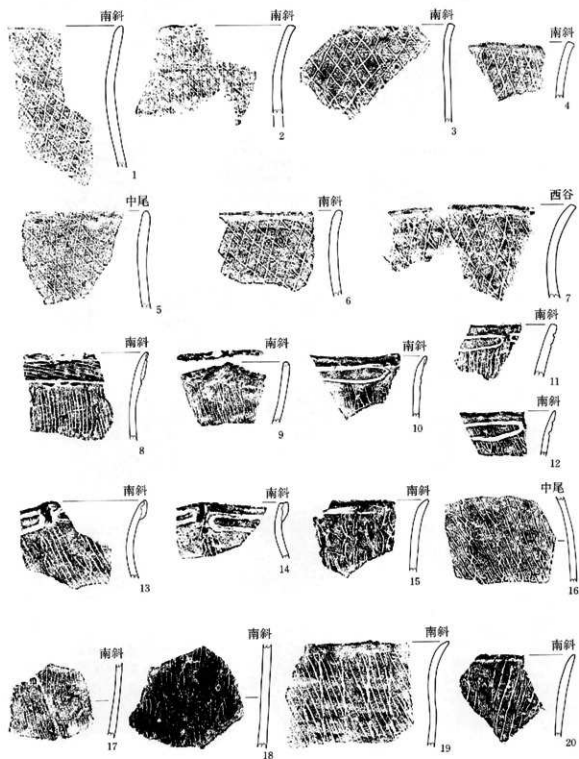
第59圖 遺構外出土遺物



第60图 遺構外出土遺物

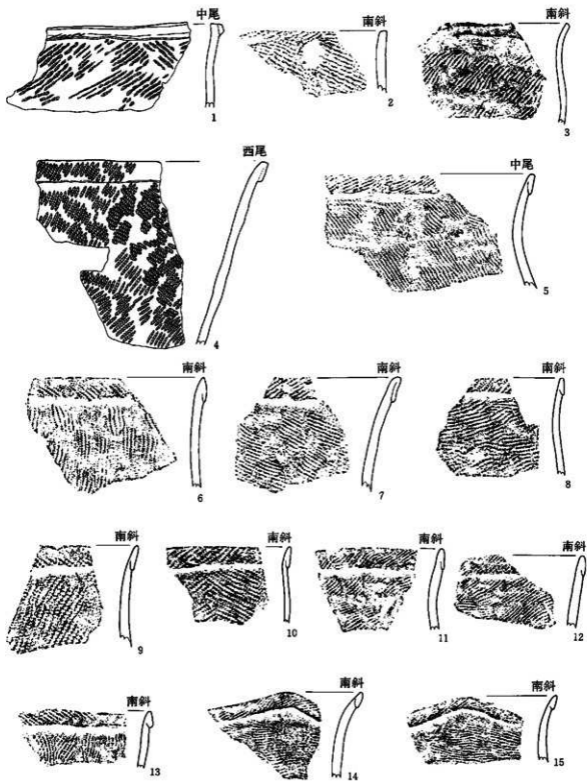


第6圖 遺構外出土遺物

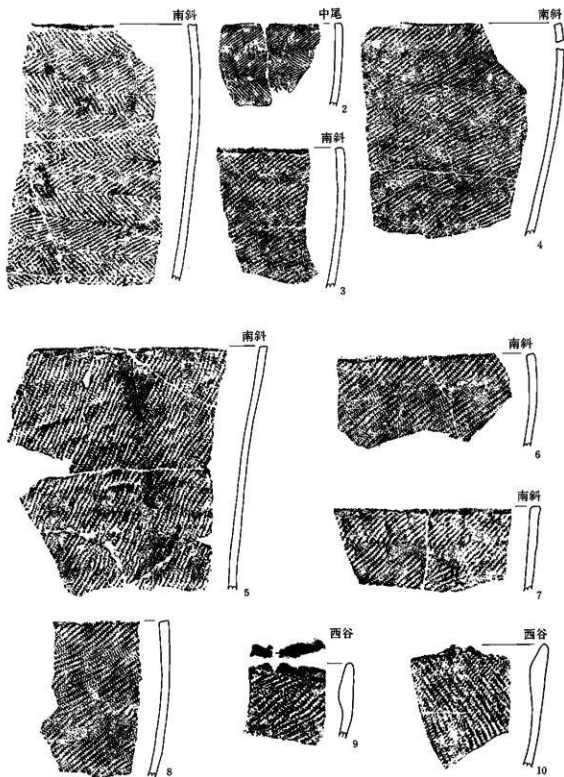


第62図 遺構外出土遺物





第63圖 遺構外出土遺物



第64圖 遺構外出土遺物

## (2) 土製品

本遺跡から土偶13点、鐙形土製品24点、きのこ形土製品2点、有孔土製品5点、三角形状土製品2点、スプーン状土製品1点、耳飾2点、鈴状土製品1点、環状土製品1点、球形土製品1点、板状土製品1点、異形土製品1点、小玉1点、有孔把手付土製品1点、土版2点、円盤状土製品93点が出土している。これらのうち、半数以上は中央尾根南斜面の縄文後期の包含層から出土している。

### 土 偶 (第65図 写真図版65)

当遺跡から出土している土偶破片数は13点である。出土地点は中央尾根南斜面が12点、西谷が1点である。遺構内の埋土から4点出土している。中央尾根南斜面の住居址、ピット、西谷のピットからである。ここでは最初に遺構外から出土した9点について説明する。遺構内からのものは遺構の出土遺物で記載している。

第65図の1はⅢH92グリッドのⅣ層から出土した3点のうち2点が接合した板状土偶である。頭部と胴部左半分が現存している。顔面はやや上向きで逆三角形を呈し、眉から鼻にかけては隆帯で表現されている。肩は水平に張り、残存部から推定して腕は短いものと思われる。乳房は突出させて表現している。前頭部から後頭部にぬける2つの貫通孔があり、紐などを通して吊ることができるようにしている。

2、3はⅢF90グリッドのⅣ層から出土した。2は逆三角形の顔面で、鼻を突出させ、目や口は刺突孔で表現している。3は胴下半部と右脚部が現存している板状土偶である。へそは角錐状に突出させて表現している。胴部背面に弧状の細沈線が描かれている。腹面にも細沈線が2本みられる。足は短くややO脚で、先端部が前に反っている。

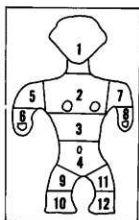
4はⅢH92グリッドのⅣ層から出土した。板状土偶の胴の部分のものである。へそは円錐状に突出させて表現している。胴部腹面にへそを中心に沈線により縦横に直線が描かれている。胴部背面には、3と同様に弧状の細沈線がかかっている。5はⅢG80グリッドのⅤ層上面から出土した左脚部片である。破損部に天然のアスファルトが付着している。

6はⅢE90グリッドのⅣ層から出土した。左の脚部で、足の先端に刻線を入れて指を表現している。7はⅢD92グリッドのⅣ層から出土した左脚部である。7点出土している脚の中で最も大きい。足はO脚である。8はⅢE90グリッドのⅣ層から出土した右脚部片である。6と同じように左の先端部に刻線を入れて指を表現している。

遺構内外から出土した土偶片を部位別にみると、頭部のもの1点、頭部+胴部のもの1点、胴部のもの4点、胴部+脚部のもの1点、脚部のもの6点である。頭部+胴部のは頭部と胴部が同じグリッド内から出土し接合したものである。

頭は2点で、いずれも顔面はやや上向きで逆三角形を呈し、目や口や鼻の穴は刺突孔で表現している。胴は4点で中空のものと板状のものがある。板状のものは3点で、へそを突出させて表現し、腹背面に直線や弧状の細沈線が描かれている。うち1点は腰裏をつけた姿を示したように縦横に細沈線を多数刻みつけている〈ⅢE90(住)〉。脚部は7点で、○脚のものが多く、足の先端に刻線を入れて指を表現しているものもある。

破損部に天然のアスファルトが付着しているものが2点出土している。いずれも脚部片である。天然アスファルトが膠着剤として土偶の修理に使われていたと思われる。



土偶部位番号

表1 土偶出土区・部位一覧表

○アスファルト付着 D半分欠損

番号	図版番号	出土地点	層位	頭				胴				脚				備考	写真団 版番号
				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
1	II	ⅢE90住居址	埋土			D	○										
2	II	ⅢE90住居址	埋土											○	アスファルト付着		
3	II	ⅢC87-5ビット	埋土										○	○			
4	II	ⅢD50-2ビット	埋土		D	○	○										
5	Ⅲ65-7	ⅢD92-グリッド	Ⅳ層										○				65-7
6	Ⅲ65-8	ⅢE90-グリッド	Ⅳ層										○				65-8
7	Ⅲ65-6	ⅢE90-グリッド	Ⅳ層										○				65-6
8	Ⅲ65-2	ⅢF90-グリッド	Ⅳ層	○													65-2
9	Ⅲ65-3	ⅢF90-グリッド	Ⅳ層				○						○	○			65-3
10	Ⅲ65-5	ⅢG80-グリッド	Ⅴ層										○	○	アスファルト付着		65-5
11a	Ⅲ65-5	ⅢH92-グリッド	Ⅳ層	○											} 接合		65-1
11b	#	ⅢH92-グリッド	Ⅳ層		D			○									65-1
12	Ⅲ65-4	ⅢH92-グリッド	Ⅳ層				○						D				65-4

## 鐔形土製品 (第66～68図 写真図版66～68)

本遺跡から25点出土している。出土地点は中央尾根南斜面18点、中央尾根稜線部5点、東尾根西斜面1点、西谷1点である。25点のうち遺構内からのものは5点である。中央部南斜面の住居址床面から3点、埋土から1点、西谷の住居址埋土から1点出土している。完形のは7点である。鈕部が一部欠損しているものや身部の一部が欠損しているものを含めると、ほぼ完形のは13点である。ほぼ半数は完形に近い形で検出されている。

鐔形土製品として取り扱ったものには、身部の横断面形が円形、扁円形(目形)、隅丸方形、鈕部のかたちが三角形、台形、半円形、上底が凹状の台形(尾鏃)状を呈しているものなどがある。大きさも器高が3.5～7.3cmと大小ある。文様は沈線文、刺突文やその組み合わせで施文されている。無文のものもある。孔の穿つ方向は鈕部の長軸方向のもの、短軸方向のもの、その両方向のものがある。

これらの諸特徴をもつ鐔形土製品を施文されている文様と身部の横断面形によって大きく次のように分類した。

I類 沈線文と刺突文で施文されているものは9点(うち横断面形不明のものは第66図3、7の2点)である。刺突文と組み合わせの沈線文には、渦巻文、弧状文、平行文などがある。刺突は沈線間に連続的になされるものが多い。

IA類 身部の横断面形が円形のもの(5点)

IA<sub>1</sub> 曲線的な沈線文が施文されているもの——第66図2・4・6の3点である。

いずれも身部最大径が中位より下にある。2・4は鈕部が欠損している。6は鈕部が低い円錐状を呈している。孔の穿ちは4が鈕部の長軸方向、6が直径(長短軸径同じ)に穿っている。3個とも大きさは器高が4～5cmのものであると思われる。

IA<sub>2</sub> 直線的な沈線文が施文されているもの——第66図1・5の2点である。

2個とも身部最大径が中位より下にある。鈕部のかたちは1が凹状の上底をもつ台形(尾鏃)、5が台形(角錐台)をなしている。孔はいずれも鈕部の長軸方向に穿っている。器高は1が4.4cm、5が7.3cmである。5はIA類の中で1個だけ大きい。

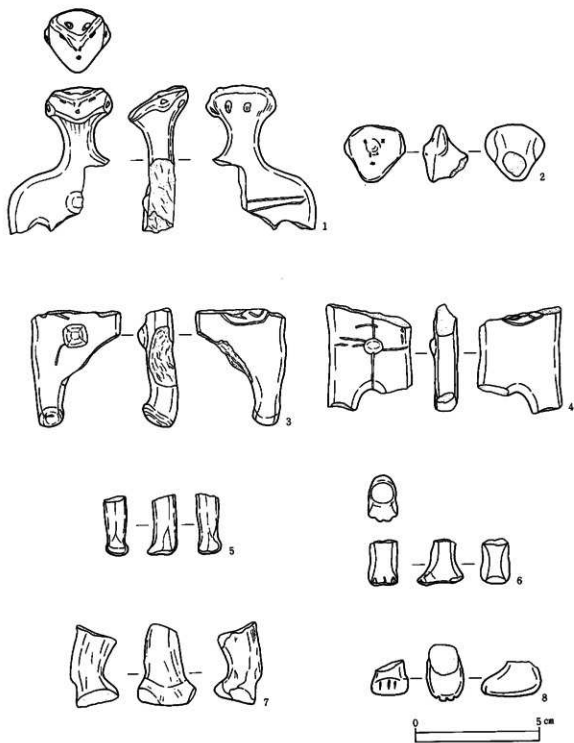
IA類の7点のうち、6点が中央尾根南斜面、1点が中央尾根稜線部南斜面寄りから出土している。長短軸のある鈕をもつものは3点で、いずれも長軸方向に穿っている。5は本遺跡の完形のものの中で最大である。

IB類 身部の横断面形が扁円形(目形)のもの(2点)

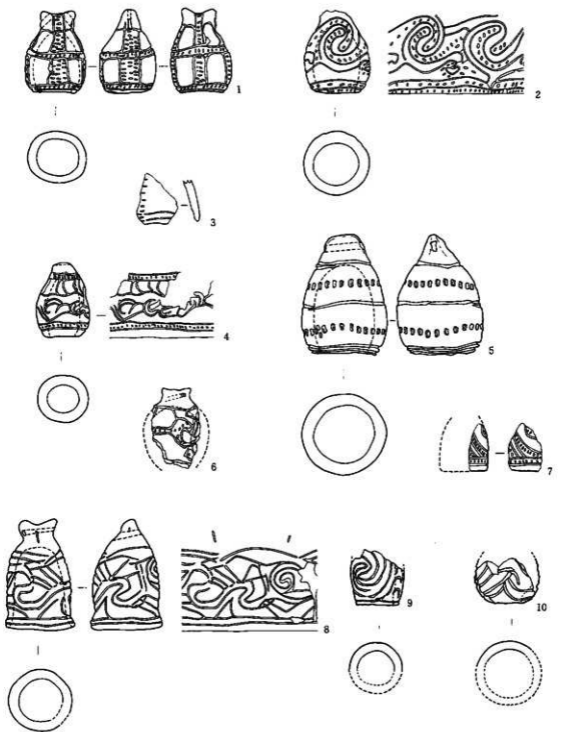
IB<sub>1</sub> 曲線的な沈線文が施文されているもの——第68図5の1点である。

身部最大径が下端近くにある。鈕はなく頂部の短軸方向に孔を穿っている。器高は5.1cmである。

IB<sub>2</sub> 直線的な沈線文が施文されているもの——第68図4の1点である。



第65图 土偶实测图



第66图 钵形土製品実測图 1

側縁に鱗をもつものである。身部最大径が下端近くにある。鈕のかたちは4と同じように台形(角錐台)を呈している。孔は鈕部の長軸方向に穿っている。器高は6.5cmである。22・23は中央尾根南斜面より出土している。

II類 沈線文のみで施文されているもの11点である。沈線文には渦巻文、入組文、弧状文、長方形文、平行文などがある。

II A類 身部の横断面形が円形のもの(9点)

II A<sub>1</sub> 渦巻文、弧状文、入組文などの曲線的な沈線文が施文されているもの——第66図8・(9)・(10)、第67図(2)・3・(6)の6点である。( )は反転実測のものである。

8は身部最大径を最下端にもつ。そのほかのものは中位よりやや下に最大径をもつ。8は鈕のかたちが1と同じように尾鱗状を呈している。そのほかは鈕が欠損しているため不明である。第66図8は孔を鈕部の長軸方向に穿った後、短軸方向にも穿っている。器高は6cmである。第66図9・10、第67図2・3・6は現存する身部の大きさから、器高が4・5cm大のものと思われる。

II A<sub>2</sub> 長方形文、平行文など直線的な沈線文が施されているもの——第67図1・4・5の3点である。

1・4は身部最大径が中位よりやや下にある。5は身部最大径が下端にある。1は鈕のかたちが半円形状を呈し、孔を短軸方向に穿っている。5は鈕をもたず円錐状の頂部に孔を穿っている。4は鈕部が欠損している。1は器高が6.4cm、5は器高が3.5cmである。4は現存長の器高が5.6cmである。推定器高は7cm大である。

出土地点は第66図8が西谷、第67図4が東尾根西斜面、第66図9・10、第67図1・2・5・6は中央尾根南斜面である。孔は鈕部の長短軸の両方に穿つもの1個、短軸に穿つもの1個、直径に穿つもの1個である。

II B類 身部の横断面形が扁円形のもの(2点)

II B<sub>1</sub> 曲線的な沈線文が施されているもの——第67図8の1点である。

鈕部が欠損している。身部最大径は最下端にある。側縁に鱗はついていない。孔を長軸方向に穿っている。現存の器高は4.6cmである。中央尾根南斜面から出土している。

II B<sub>2</sub> 直線的な沈線文が施されているもの——第67図の1点である。

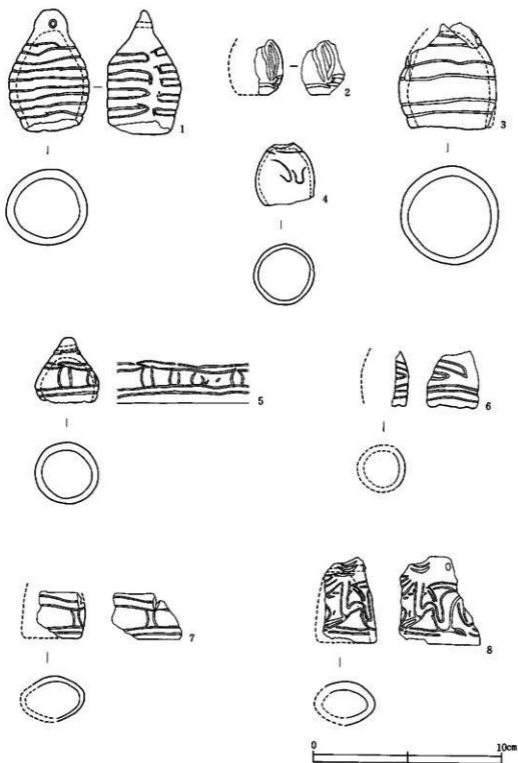
身の上半部が欠損している。身部最大径は最下端にあるものと思われる。東尾根西斜面から出土している。

III類 刺突文のみで施文されているものは2点である。連続刺突文により曲線的な文様や直線的な文様が施文されている。身部の横断面形が円形のもの(III A)は出土していない。

III B類 身部の横断面形が扁円形なもの(1点)

第68図6は刺突により曲線的な文様(III B<sub>1</sub>)が施されているものである。鈕部最大径は下端にあ





第67图 鐔形土製品実測图 2

る。鈕部は三角形を呈している。孔を短軸方向に穿っている。器高は4.4cmである。完形である。

ⅢC類 身部の横断面形が隅丸方形のもの(1点)

第68図7は刺突により直線的な文様が施されているもの(ⅢC<sub>2</sub>)である。身部最大径は下端にある。鈕部は三角形を呈し、孔は短軸方向に穿っている。側縁に鐮をもつ。器高は4.9cmである。完形である。第68図6・7は中央尾根南斜面から出土している。

Ⅳ類 無文のものは3点である。(横断面形不明のものは第68図2・3の2点)

ⅣA類 身部の横断面形が円形のもの(1点)

第68図1は身部最大径が中位よりやや下にある。鈕は三角形を呈している。孔を短軸方向に穿っている。器高は4.7cmである。完形である。

第68図2・3は身部下半が欠損している。2は孔を長軸方向に、3は孔を短軸方向に穿っている。1・3は東尾根西斜面、2は中央尾根南斜面から出土している。

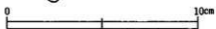
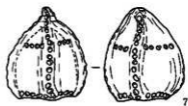
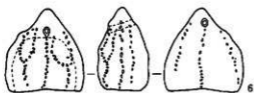
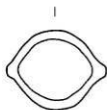
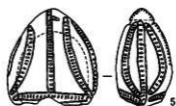
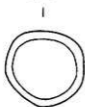
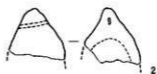
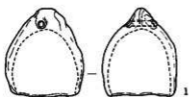
以上分類したものを孔の穿つ方向をみる。孔を鈕部の長軸方向に穿っているものは6点(無文のもの1点は横断面形不明)である。Ⅰ類(沈線文と刺突文)が4点(ⅠA-3点、ⅠB-1点)、Ⅱ類(沈線文)が1点(ⅡB)、Ⅳ類(無文)が1点である。横断面形は円形のもの3点(Ⅰ類)、扁円形のもの2点(Ⅰ類-1点、Ⅱ類-1点)、不明のものが1点である。鈕部のかたちは台形状のもの2点(Ⅰ類)、尾鐮状のもの1点(Ⅰ類)、三角形のもの1点(Ⅳ類)、不明のものが2点(Ⅰ類-1点、Ⅱ類-1点)である。

孔を鈕の短軸方向に穿っているものは6点である。Ⅰ類(沈線文と刺突文)が1点(ⅠB)、Ⅱ類(沈線文)が1点(ⅡA)、Ⅲ類(刺突文)が2点(ⅢB-1点、ⅢC-1点)、Ⅳ類(無文)が2点(ⅣA-1点、不明1点)である。横断面形は円形のもの2点(Ⅱ類-1点、Ⅳ類-1点)、扁円形のもの2点(Ⅰ類-1点、Ⅲ類-1点)、隅丸方形のもの1点(Ⅲ類)、不明のものが1点(Ⅳ類)である。鈕部のかたちは三角形のもの4点(Ⅰ類-1点、Ⅲ類-2点、Ⅳ類1点)、半円状のもの1点(Ⅱ類)、不明のものが1点(Ⅳ類)である。

表2 鐮形土製品の身部横断面形・孔の穿つ方向と文様・鈕のかたちとの対応表

孔の穿つ方向	A. 円形	B. 扁円形(目形)	C. 隅丸方形	D. 不明	
長軸	Ⅰ類(3点)	Ⅰ類(1点) Ⅱ類(1点)		Ⅳ類(1点)	文
長・短軸の両方	Ⅱ類(1点)				鐮
短軸	Ⅱ類(1点) Ⅳ類(1点)	Ⅰ類(1点) Ⅲ類(1点)	Ⅲ類(1点)	Ⅳ類(1点)	
長軸	台形(1点)尾鐮(1点) 不明(1点)	台形(1点) 不明(1点)		三角形(1点)	鈕のかたち
長・短軸の両方	台形(1点)				
短軸	三角形(1点) 半円(1点)	壺なし(1点) 三角形(1点)、不明(1点)	三角形(1点)	不明(1点)	

Ⅰ類(沈線文と刺突文)、Ⅱ類(沈線文)、Ⅲ類(刺突文)、Ⅳ類(無文)



第68図 鐺形土製品実測図3

出土地区別にみると、中央尾根南斜面18点、中央尾根稜線部5点、東尾根西斜面1点、西谷1点である。南斜面のものはI類（沈線文と刺突文）が7点（IA-3点、IB-2点、断面形不明2点）、II類（沈線文）が8点（IIA-7点、IIB-1点）、III類（刺突文）が2点（IIB-1点、IIIC-1点）、IV類（無文）が1点（断面形不明）である。孔を長軸方向に穿っているもの6点、短軸方向に穿っているもの4点である。隣接するグリッドで見ると、IIIB87・IIIC87グリッドから4点、IIIG91・IIIH91・IIIH92・III I90グリッドから6点、IIIB93・IIIC93グリッドから2点、IIIB90・IIIB91グリッドから2点まとめて出土している。隣接するグリッド内から出土したものの中の共通な特徴や傾向はつかめなかった。

稜線部のものはI類が2点（IA）、II類が2点（IIA-1点、断面形不明1点）、IV類が1点（断面形不明）である。I類の2点は南斜面寄り、II類の2点は中央部、IV類の1点は北部から出土している。

東尾根西斜面から出土のもの1点はIVA類のもので、孔を短軸方向に穿っている。西谷から出土の1点はIA類のもので、孔を長軸方向に穿っている。

25点の中で内面や外面に炭化物や煤などが付着しているものは6点である。

#### きのこ形土製品（第69図 写真図版65）

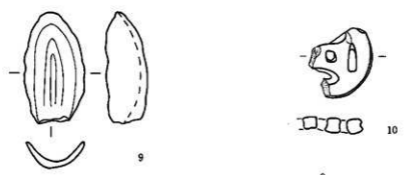
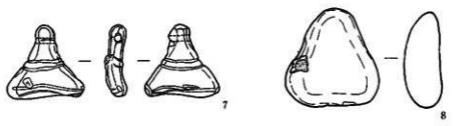
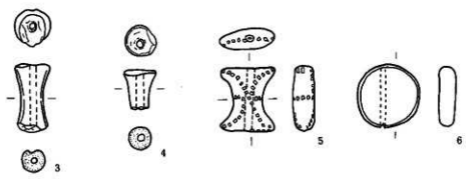
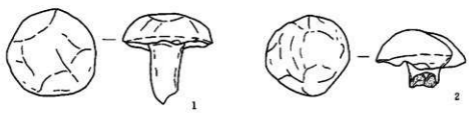
2点出土している。北尾根のIV J 17グリッドとIV J 22グリッドの中層浮石を包含する再堆積層（基本層序IV層に相当）からである。1はかさが半球状を呈し、最大径3.8cm、残存高8.9cmのものである。柄は下半が破損し、2.1cm残存している。2はかさが1と同じように半球状を呈し、最大径3.9cm、残存高2.4cmのものである。柄は大半が破損し1cm程度しか残存していない。

#### 有孔土製品（第69図 写真図版65・68）

3・4は竹管状のもので中央部が括れ長軸方向の孔をもつ。3はほぼ完形で長軸径2.8cm、短軸の最大径1.4cm・最小径1.0cm、孔の口径0.2cmである。4は半分破損している。3と同じくらいの大かさだと思われる。残存する長軸径1.4cm、短軸の最大径1.4cm、残存する短軸の最小径0.8cm、孔の口径0.2cmである。どちらも中央尾根南斜面からのもので、3はIVA92グリッドのIV層、4はIVA90グリッドのIV層から出土している。

5は板状のもので中央部が括れている。中心に長軸方向の径0.3cm大の孔をもつ、正面と背面に0.1cm大の方形の刺穴がX字形に施され、そのほかに括れている中央部を横位に1本刺突が連続的になされている。また、上下の側面に同じように刺突が施されている。長軸径2.5cm、短軸の最大径2.2cm・最小径1.2cm・厚さ0.9cmである。中央尾根南斜面のIIIF91グリッドのV層上面で検出されたものである。

6は円盤状の有孔土製品である。直径2.6cm、厚さ0.7cmで、径0.2cm大の孔をもつ。孔は中心よりややずれている。中央尾根南斜面のIIIE88グリッドのIV層から出土している。



第69図 きのこ形・有孔・三角状・スプーン状・耳飾土製品実測図

### 三角形土製品 (第69図 写真図版65・68)

有孔のもの(7)と無孔のもの(8)が1点づつ出土している。いずれも平板的ではなく体部全体に反りがみられる。7は頂部に横位の径0.2cm大の孔をもち、辺がゆるいU字状をなしている。上位に1本(正面のみ)、中位に2本、下位に2本、横に細沈線が走る。最大幅2.2cm、最小幅0.6cm、厚さ0.7cmである。中央尾根南斜面から出土している。8は無文のものである。最大幅3.8cm、厚さ1.5cmである。中央尾根南斜面の表土を取り除く際に検出された。

### スプーン状土製品 (第69図 写真図版68)

1点のみ中央尾根南斜面のⅢE90グリッドのⅣ層から出土している。9は片側の端部が欠損している。内面は丁寧なナデが施されている。外面には丁寧なナデが施されず凹凸が激しい。現存長4.5cm、幅1.4cm、高さ1.1cmである。

### 耳飾 (第69図 写真図版68)

10は中央尾根南斜面のⅢE91グリッドのⅤ層上面から出土したものである。半分欠損しているが、現存する部分から直径3.3cm前後、厚さ0.6cmの大きさのものと推定される。中心に径0.4cmの丸い透しをもち、残存部からまわりに長さ1cm、幅0.3cm前後の細長い透しを4個もつものと思われる。南斜面のピットの埋土かも1点(第240図32)出土している。

### 鈴状土製品 (第70図 写真図版68)

11は中央尾根南斜面のⅢE94グリッドのⅣ層から出土したものである。中空の扁球形で上端に紐を通せる環がついている。長径3.5cm、短径2.6cm、現存高3.5cmである。

### 環状土製品 (第70図 写真図版68)

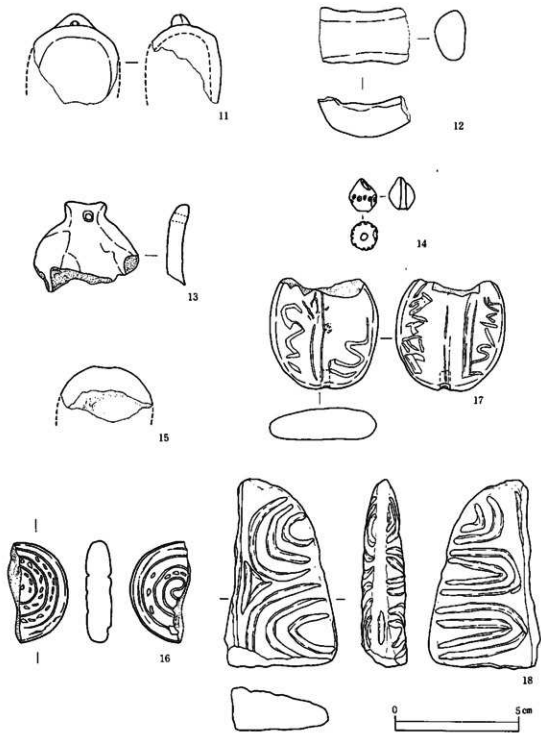
12は大半が破損しているがドーナツ状をなしていたものと思われる。外縁が凸状に張るものである。断面は縦に長い扁楕円形(長径2cm、短径1.2cm)を呈する。表面採集の際検出されたものである。

### 異形土製品 (第70図 写真図版68)

13は中央尾根南斜面のⅢH93グリッドのⅣ層から出土している。中央部が反っているものである。下半が欠損しているため、形態について詳細は不明である。頂部には縦0.9cm、横1.6cmのつまみ状のものが付いている。それには紐を通せるための0.3cm大の孔が穿たれている。現存部の正面右側は隆帯状に盛り上がっているが、何を表現したのか不明である。左側にも同じものが僅か残存している。

### 小玉 (第70図 写真図版)

14は中央尾根南斜面のⅢC87グリッドのⅣ層から出土している。上端が一部欠損している。そろばんの玉状を呈し、径0.2cm大の孔をもつ。表面中央の最大径部には刺突文が施されている。最大径1cm、高さ1.3cmである。



第70図 鈴状・環状・異形・小玉・球形・板状土製品・土版実測図

#### 球形土製品 (第70図 写真図版68)

15は中央尾根南斜面のⅢC85グリッドのⅣ層から出土したものである。3分の1以上破損しているが、現存部から直径4cm前後の大きさの球形をなしていたと思われる。表面に文様や孔をもたないものである。

#### 板状土製品 (第70図 写真図版68)

16は中央尾根南斜面から出土した。半分欠損しているが、円形で扁平状のものであったと思われる。表裏の両面に渦巻状の沈線と刺突が施されている。現存部から、直径4.1cm、厚さ1cmと推定される。耳飾りの一種なのかもしれない。

#### 土版 (第70図 写真図版65)

2点出土している。17は片側の端部が欠損している。楕円形で中央部がやや脹らむ板状のものである。両面とも中央を縦に2本の平行沈線を描き、その両側を縦に走る曲線文を施している。端部に径0.3cm、深さ0.7cmの小孔を穿っている。現存の大きさは長軸径4cm(完形は5cm前後のものとして推定される)、短軸径が4.4cm、厚さが1.3cmである。中央尾根南斜面のⅢH92グリッドのⅣ層から出土している。18は土版の右半分のもので、長円形の扁平板状をなしていたと思われる。中央部が端部より1cm程厚い。現存部の正面は三叉文を左側に挟んで3本の平行弧状沈線文が施され、背面は2本の平行弧状沈線文を上下に3組描かれている。完形のものには中央部を縦に1本、側縁にも1本沈線が施文されていたと思われる。現存する部分は縦の最大径が7.6cm、横の最大径が4.5cm、最大の厚さが1.7cmである。西谷のⅡJ56グリッドのⅣ層から出土したものである。

#### 円盤状土製品 (第72～76図 写真図版69～72)

当遺跡から93点出土している。地区別にみると、中央尾根南斜面が76点、中央尾根稜線部が14点、西谷、北尾根が各1点、不明が1点である。中央尾根南斜面では特に西側(ⅢH区より西)から集中して多く出土している。

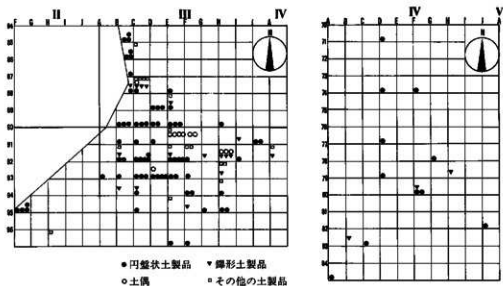
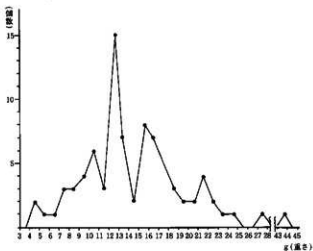
欠損せずにあるもの84点の重さを見ると、12g台のものが15点と最も多く、次いで15g台が8個、13g台と16g台が7個、10g台が6個とつづいている。最も軽いものは4.4g、最も重いものが44.9gである。本遺跡では10gから16gまでのものが最も多い。

平面形は円形、楕円形、多角形などがあるが、円形が多い。長径は3～5cmで4cm前後のものが多い。全周または周縁の一部を磨っているものもみられるが、全体としては打ち欠いただけのものが多い。大半は体部片を利用してつくられているが、底部片を利用しているものも8点出土している。

地文、文様をみると、網目状捺糸文のものが25点、単節の斜縄文のものが20点、縦位の捺糸文のものが11点、無文の器面に沈線文を施したものが7点、櫛歯条線文のものが6点、単節の

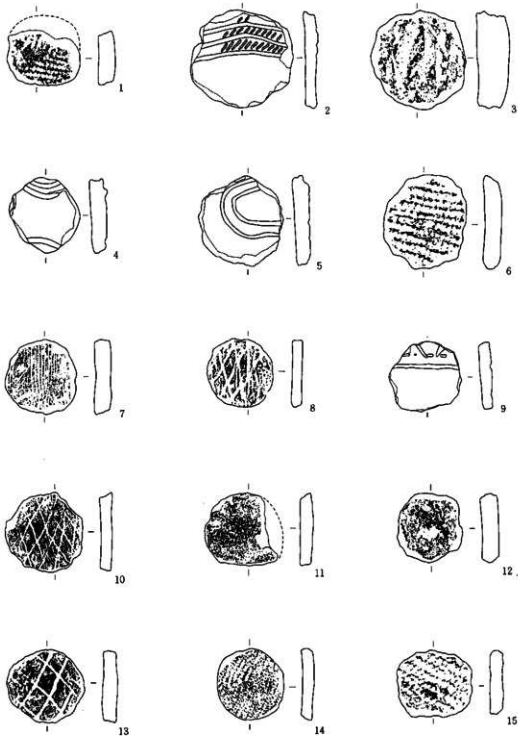


表3 円盤状土製品の重さの度数分布表

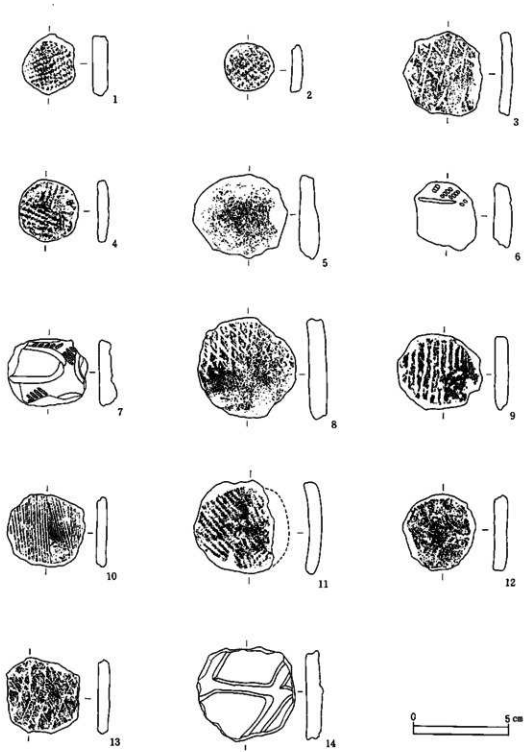


第71図 土製品出土分布図 (左-中央尾根南斜面、右-中央尾根稜線部)

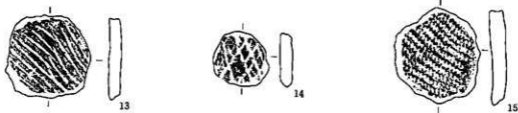
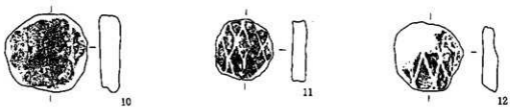
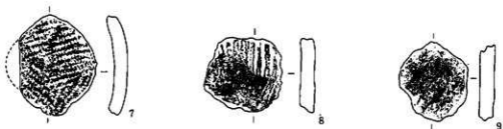
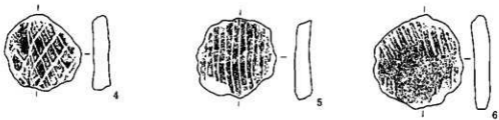
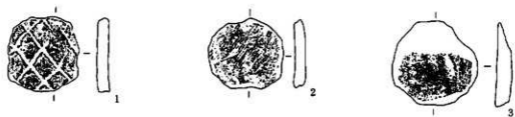
斜縄文の地文に沈線文を施したものが6点、無文のものが6点、無節の斜縄文のものが2点、格子目状沈線文のものが1点、不明が1点である。



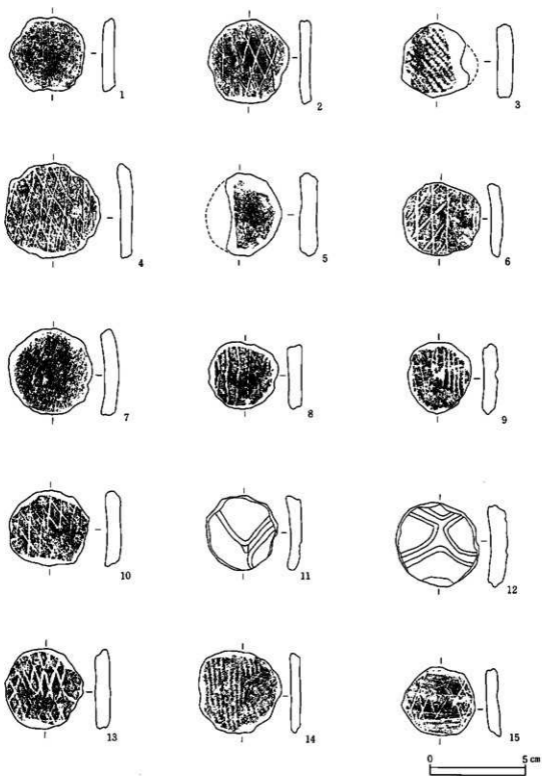
第72図 円盤状土製品 I



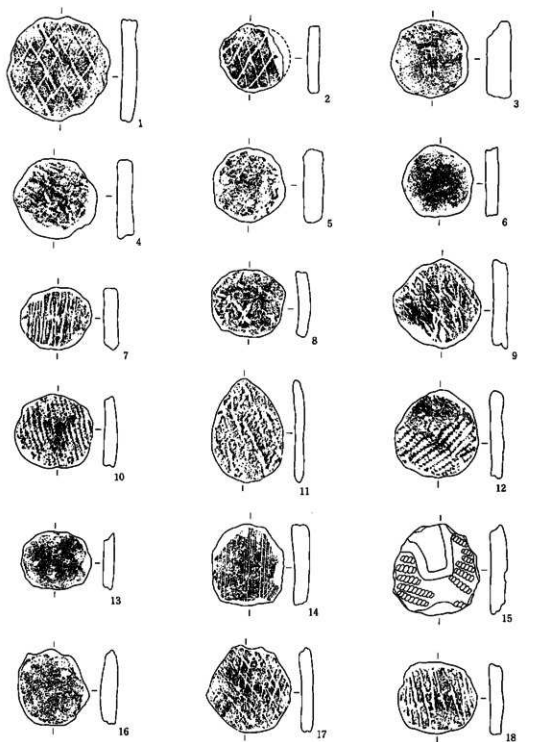
第73図 円盤状土製品 2



第74圖 円盤状土製品 3



第75図 円盤状土製品 4



第76図 円盤状土製品 5

### (3) 石器・石製品

遺構外から出土した石器・石製品のうち、破損の著しいものを除く613点を掲載した。区域別では南斜面が卓越する。

#### 石鏃 (第77図)

17点出土した。1は平基無茎鏃で、やや大形である。2・3・6は凸基の有茎鏃である。4・5・7は基部が平坦な有茎鏃である。7は先端部を欠損する。8は茎部の両側に抉りをもつ。9～11は基部形態が凹基を呈する。12～14は三角形を呈する素材の側縁部に両側から調整を施して形成した石鏃である。14は先端部を欠損する。15は太い基部をもつ。16は基部が平坦な無茎鏃で、一部に自然面を残す。17は両面から細部調整されて形成されているが先端部は鈍く、石鏃のグループから外れるものかもしれない。

#### 石鏃 (第78図1～9)

9点出土した。1は剥片の一部に細部加工を加えて短い刃部を作り出している。2～6は丹念に細部加工された細長い刃部をもつ。7は縦長の剥片に両側から細部調整を施しているが、刃部先端を欠く。8は剥片の尖がった角に片面から細かい調整を施し、小さな刃部を作り出している。9は細長い刃部をもつものと考えられるが欠損する。基部に細部加工によって2個の抉入部が作られ、ノッチ(抉入石器)との複合石器と考えられる。

#### 石匙 (第78図10～14、第79図1～7)

13点出土している。第78図10・11・13、第79図5～7は横形石匙である。第78図10・11は凸状の刃部をもつ。10は片面からの細部調整によって刃部を形成するが、11の刃部は両面から調整される。13はツマミの部分が不明確であるが同類とした。片面調整された直状の刃部をもつ。第27図5は片面調整された凸状の刃部をもつ。6・7は直状の刃部をもつ。7の刃部の一部は両面からの調整による。第78図12・14、第79図1～4は縦形石匙である。第78図12は凸状・凹状の刃部を合せもつ。3は片側に凸状の刃部をもち、4は直状の刃部をもつ。

#### 竈状石器 (第79図8～13)

6点があげられる。8は両面からの連続した細かい調整によって成形されている。9～12も両面からの調整が施される。12は細かい調整が施される先端部に光沢をもち、この部分が刃部と考えられる。13は片面からの調整で成形されている。

#### 播器 (第80図、第81図1～10)

先端部に鈍角で、厚い刃部加工をもつものを一括した。第80図1～6は先端部の他に、両辺部にも細部調整が及ぶ。7は剥片の側辺部に刃部が形成されるが、刃部の形態で同類とした。9は周囲の側辺全体に細部調整が施されている。10・13は破損品と考えられる。第81図6は剥片の小さな突端部に刃部加工が施されている。7は基部を欠損する。8は扁平な剥片の両側に

刃部をもつ。

#### 削器（第81図11～15、第82図、第83図、第84図1～3）

削器として分類した石器は28点である。刃部の形態によって直刃型・凸刃型に分類できる。また、これらと同様な調整によって尖頭部を形成するものを尖頭型として扱った。

第81図11～15、第82図1～9は直刃をもつ削器である。第81図11～13は縦長剥片の1側縁に刃部加工が施されている。14は両側縁に刃部加工が施され、直刃と凹刃を合せもつ複合削器である。第82図1～4は1側縁に刃部をもつ。5～7は横長剥片を素材とし、その縁辺に刃部が形成されている。第83図1～4は凸刃をもつ類である。いずれも一方の側縁に刃部加工が施されている。第82図1は両面からの細部調整によって刃部を形成しているが、他のものは片面調整である。第83図3・4は横長の剥片を素材としている。第83図5は凹刃の削器である。剥片の弯曲する1側縁に片面からの調整によって刃部を形成している。第83図6～9、第84図1～3は尖頭部をもつ削器である。いずれも片面調整によって刃部を形成する。第83図8・9は直刃を合せもつ。第84図1は他の側縁に直刃が施され、2は凸刃との複合石器である。

#### 抉入石器（第84図4～9）

6点があげられる。剥片の形状に共通性はない。第84図1は、縦長剥片の1側縁に連続した調整を施して刃部を形成している。5は数回の大きな加撃によって深い刃部を作り出している。また、両面には刃部に連続する細かい調整が施されている。6～8は連続した細かい剥離によって刃部が形成されている。8には刃部の周辺にも同様の剥離調整が施されている。9は数回の加撃によって刃部が形成される。

#### 尖頭石器（第84図10・11）

尖頭形の刃部をもつが明確に器種分類できないものを当類とした。第84図10は両面加工によって整形されている。尖頭部は欠損する。11は三角形の素材に主に片面から細部調整を施して作られている。裏面にも一部調整が施されるが、第一次剥離面を大きく残す。

#### 楔形石器（第84図12・13、第85図1～8）

相対する2辺に刃部をもつ石器である。しかし、明確に同定できるものはなく、器面に両極剥離痕をもち、相対する2辺に使用によって生じたと考えられる「ツブレ痕」が観察されるものを掲げた。第85図4～7は細長く、使用に際して両側が欠損したものと考えられる。8は中央部が肥厚する。

#### 不定形石器（第85図9～18）

細部加工調整によって形成されるが、明確に器種分類されないものを一括した。第85図9は小さな剥片の全面に、両面から調整が施される。10も同様な調整をもつが一部に自然面を残す。また一部を欠損する。11は小さな縦長剥片の側縁に両面からの細部調整が施されている。12は



一側縁に両面からの加工が施されている。13・14は刃部と考えられる部分の両側に折断面をもつ。しかしこれが調整の一部として施されたものか、破損によるものかは不明である。13は側縁部に片面から連続した細部に片面から連続した細部加工が施される。14は両面からの加工によって刃部を形成している。16は三角形の素材に片面から加工が施されている。

#### 細部加工剥片（第86図・第87図）

不定形な剥片の一部に細部調整が施されたものを一括した。第85図1～7は剥片の側縁の一部に加工痕をもつ。8～15・第87図1は、剥片の先端部及びこの周辺に細部加工が施されている。2～15は類形化できない。

#### 使用痕のある剥片（第88～第90図）

使用に伴って生じたと考えられる微細な剥離痕がみられるものである。多くは、剥片の鋭利な側縁部に使用痕をもつ。第88図13などは、剥片の先端部に使用痕がみられる。

#### 剥片類（第91図～95）

剥片類を一括した。第92～第95図は両極打法によって剥離されたものである。

#### 磨製石斧（第96図～101図1～5）

小型のものも含めて40点が出土した。第96図1は基端は細く、刃部に向かって開く。基部断面は不整な楕円形を呈する。2は基端及び刃部を欠損する。3は扁平な基部をもつ。4は基端がやや広く、基部断面は楕円形を呈する。5は基端から緩く開き刃部に続く。刃部には小さな刃こぼれがみられる。6は基端が幅広く、基部は扁平である。第97図1は扁平な基部をもち、基端から大きく開いて幅広い刃部に続く。2は刃部と基部を欠損する。基部には凹みをもち、欠損後凹石として利用されたものかもしれない。3は小型の石斧の基部である。4は基部が丸く、全体に細長い。6は器面に敲打痕を残す。第98図1・2・4は扁平な基部をもつ。5は幅広い基端をもち直線的に刃部に続く。第99図5は器面に多数の磨面を残す。6は短冊型の石斧である。第100図5は細長い小型の石斧で、基部を欠損する。6～8の器面には敲打痕が残る。第101図1は素材をそのまま利用したもので、刃部周辺部のみ調整が施される。

#### 砥石（第101図6・7）

2点出土しているが、いずれも破損品である。6は表裏両面に使用痕をもつ。片面には3本の細い溝をもつ。7は器面に4面の使用痕がみられる。

#### 半円状扁平打製石器（第102図1）

1点だけである。扁平な素材の周辺を粗く剥離して成形されている。この剥離の他に擦痕などは認められない。

#### 磨石・凹石・敲石（第102図～112図）

使用痕によって区別されるが、重複するものも多く一括して掲載した。「磨る、敲き潰す」と

いった機能を有する石器群である。

第102図～108図は磨石である。多くは表裏両面が使用面となっているが、第103図1・12、第104図5のように側面を含めた4～5面が使用面となっているものもある。第107図13～25は小形の磨石である。第108図5～11は断面形が三角形の素材の頂部に使用面をもつものである。

第109図1は先端部に敲打痕をもつ。明確に敲石として分類されるものはこの1点である。

第109図7～14、第110図、第112図は器面に円錐形に近い凹みが形成されている。所謂凹石である。第109図7～10は器面に擦痕をもち、磨石を転用したものである。

#### 粗製石皿（第113図・第118図）

扁平な自然石をそのまま利用したものである。破損しているものが多い。小形のものは、砥石としての機能も考えられる。

#### 石刀・石剣（第119図1～7）

第119図1は石刀の頭部である。頭部には3本の沈線が巡らされている。残存部には刃部は形成されておらず「にぎり」部分と考えられる。2は石剣の端部と考えられる。器面はよく研磨され、先端部は両側から削られ尖る。3～7は石刀の破損品・未成品と考えられる。3は表裏に1本の溝をもつ。6は側縁に抉りをもつ。いずれも器面には擦痕がみられる。

#### 石錘（第119図8、第120図1・2）

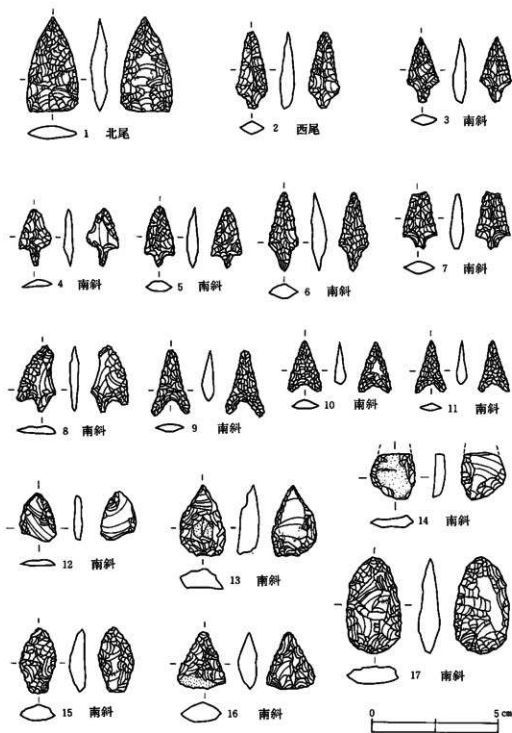
3点が出土した。いずれも自然石を用いている。第119図8、第120図1は縦長の素材の両側辺を加撃して凹みを作り出している。2は上下の側縁に凹みをもつ。

#### 石製円盤（第120図3～10、第121図1～7）

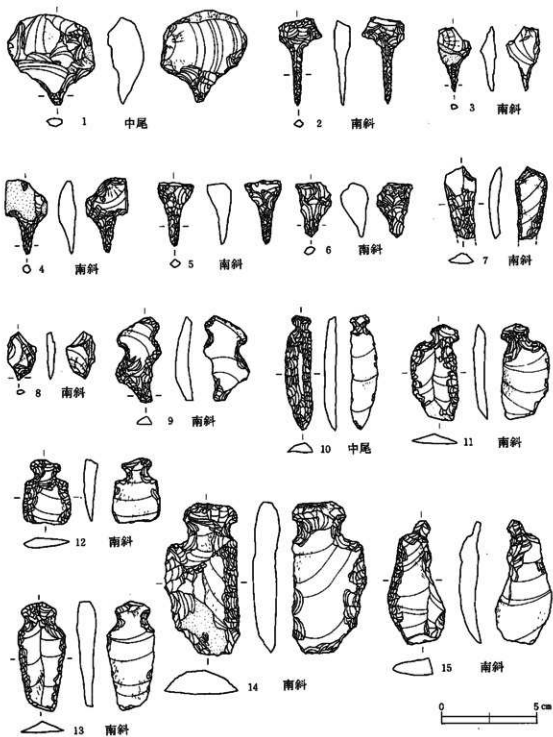
17個出土した。扁平な素材の周辺を粗く打ち欠いて作られている。第120図4は両端を打ち欠いて作られているが、形状から当類とした。

#### その他の石製品（第121図10～12、第122図）

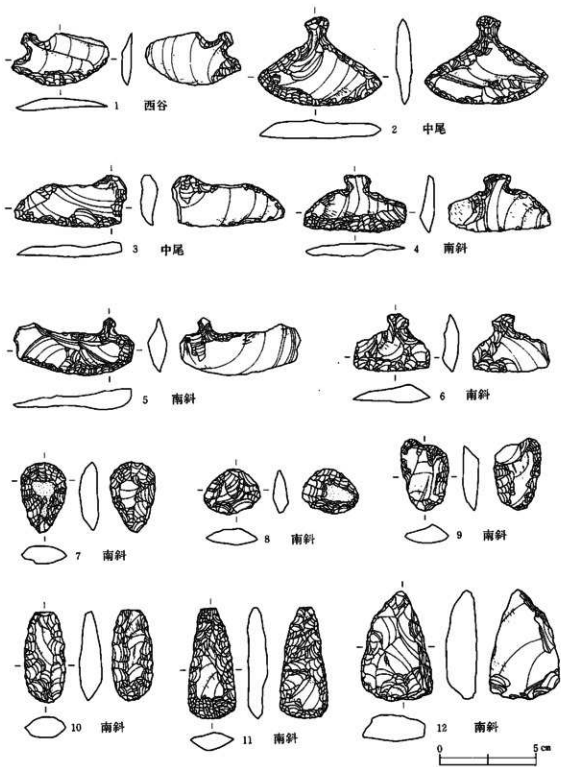
第121図10～12は石弾と考えられる。器面にはわずかに擦痕を残す。第122図1は小さな縦長の自然石の側縁に片面から粗い剝離が施されている。2は先端部に敲打痕をもち、器面には擦痕をもつ。いずれも用途は不明である。3～6はメノウの小礫である。特に加工痕はないが、搬入品の可能性があり掲載した。7は軽石製の浮子である。上部部に貫通孔を1個有する。8は端部に2個の抉りをもち全体に彎曲する。内側は溝状となり、有溝砥石の類かもしれない。9は線刻岩球である。器面に「十文字」に線刻が施されている。10は垂れ飾りと考えられる。扁平な長方形の素材に貫通孔を1個もつ。周囲は粗く削られている。



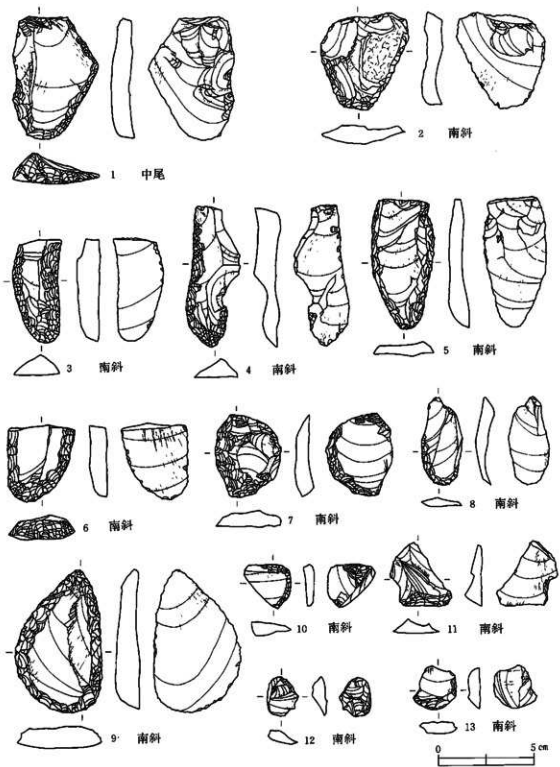
第77圖 遺構外出土遺物 (剝片石器)



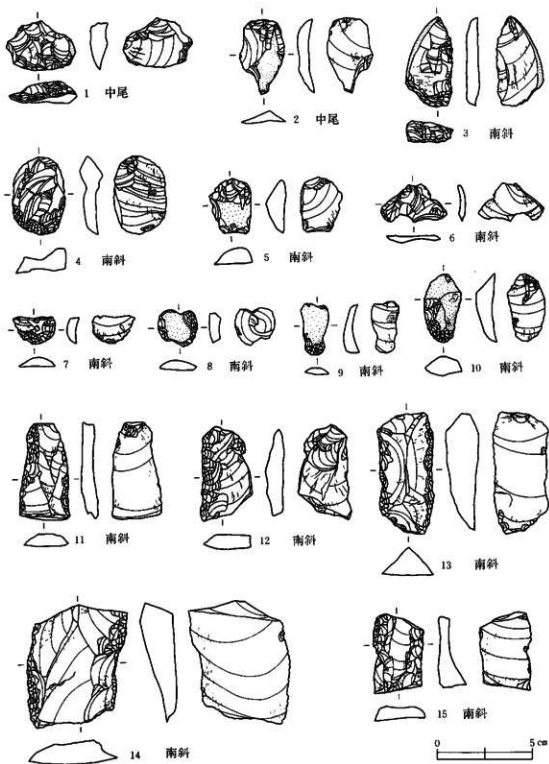
第78圖 遺構外出土遺物(剝片石器)



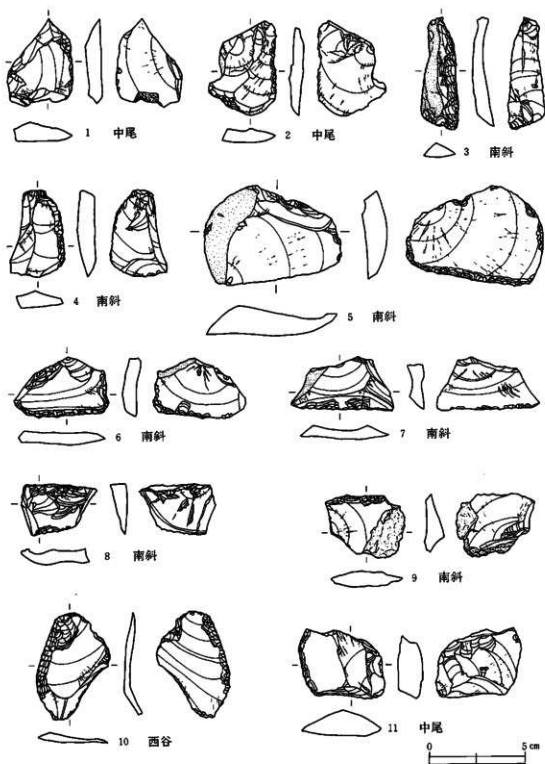
第79圖 遺構外出土遺物（剥片石器）



第80圖 遺構外出土遺物（剝片石器）

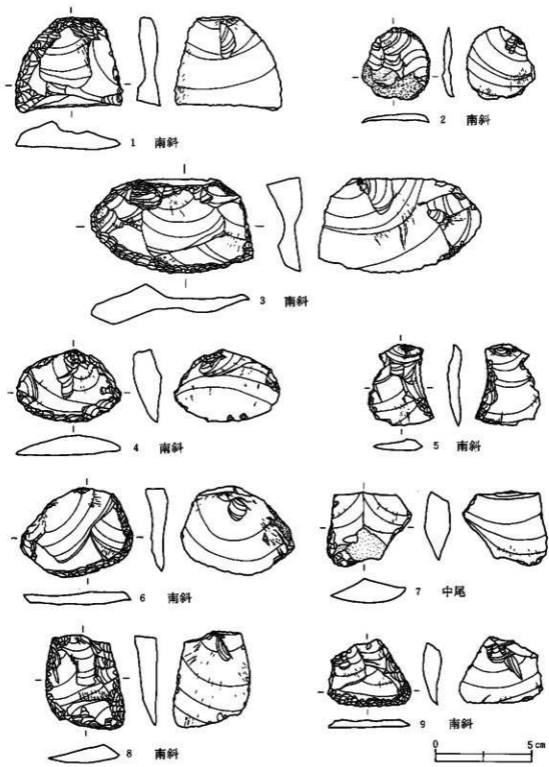


第81圖 遺構外出土遺物（剝片石器）

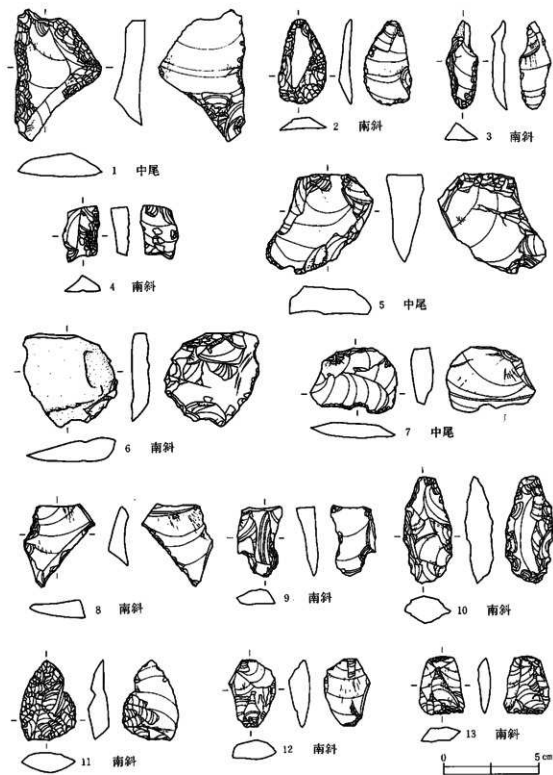


第82図 遺構外出土遺物（剝片石器）

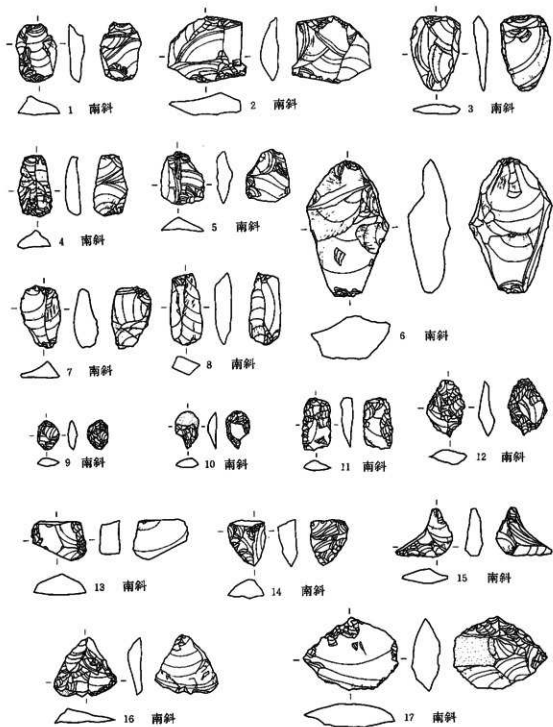




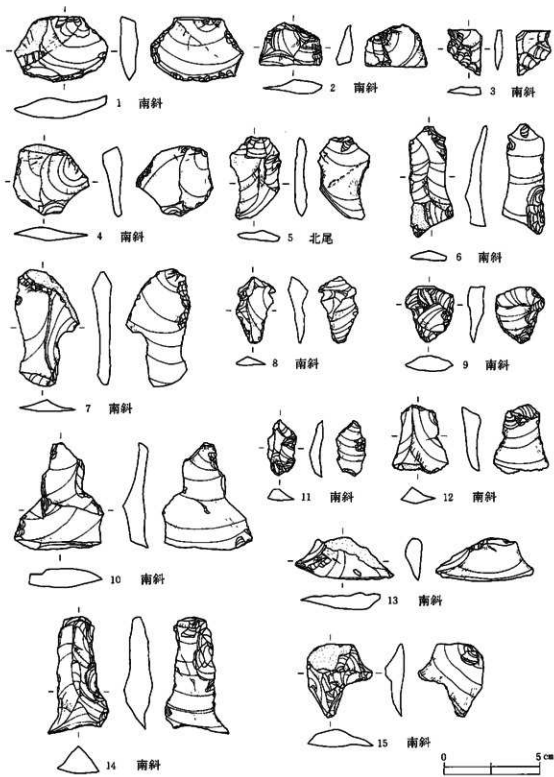
第83圖 遺構外出土遺物（剝片石器）



第84图 遺構外出土遺物（剝片石器）



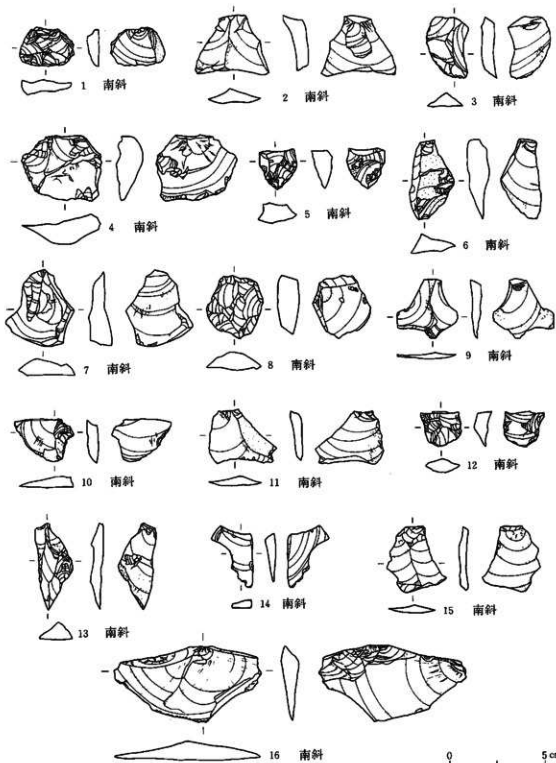
第85圖 遺構外出土遺物（剝片石器）



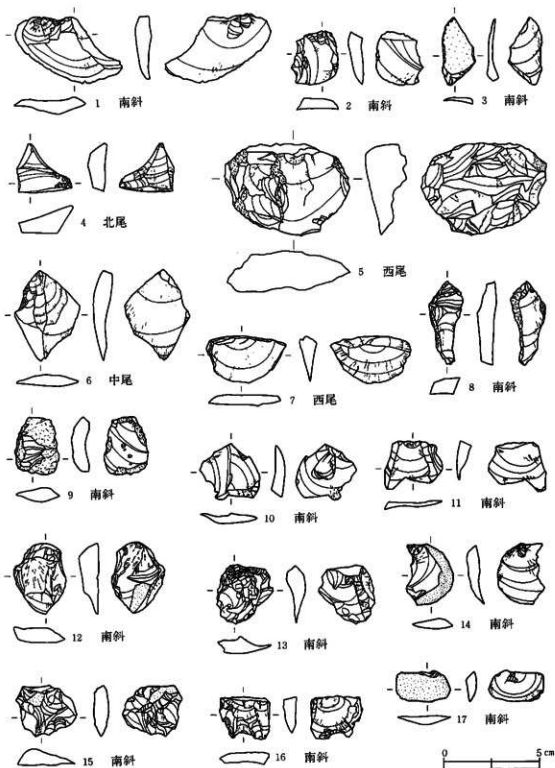
第86图 遺構外出土遺物(剥片石器)



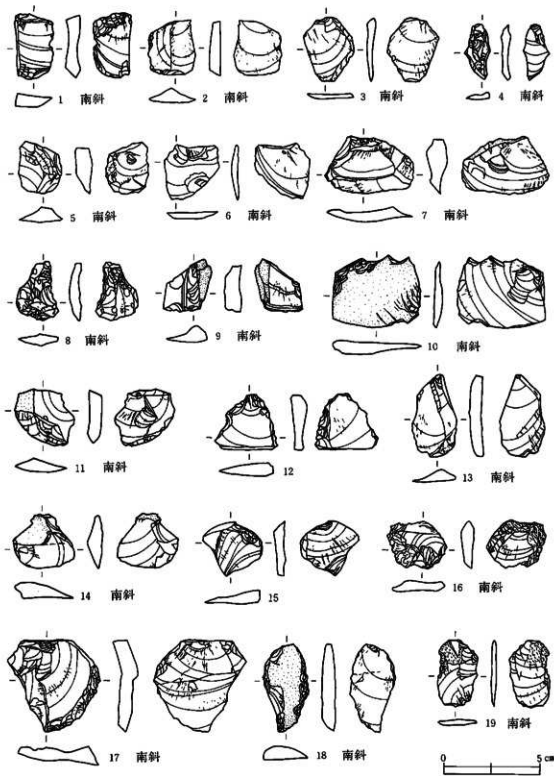
第87圖 遺構外出土遺物(制片石器)



第88圖 遺構外出土遺物（剝片石器）

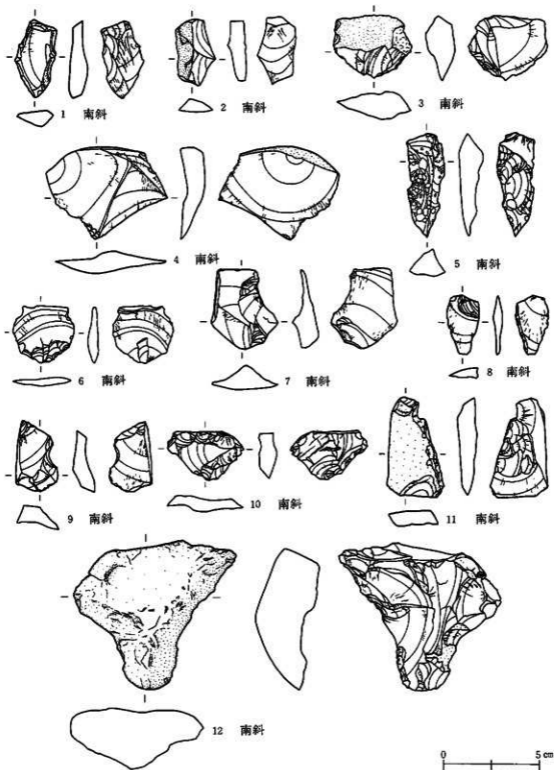


第89圖 遺構外出土遺物（剝片石器）

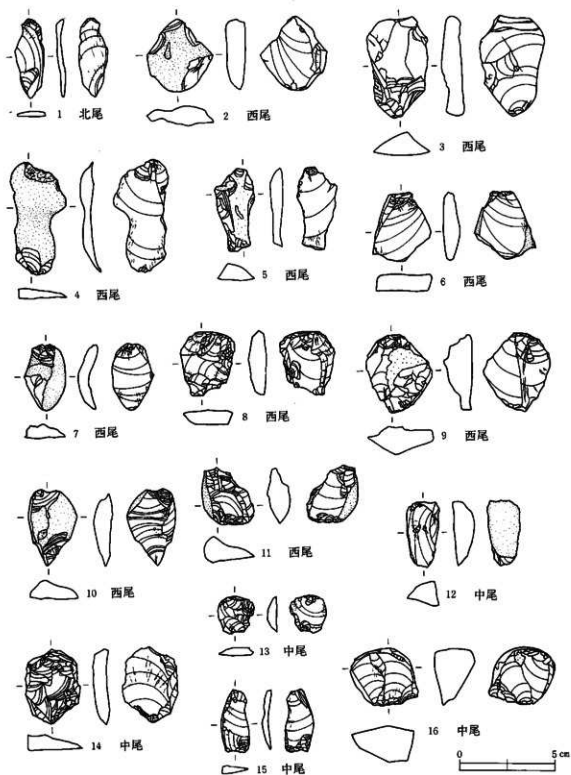


第90圖 遺構外出土遺物（剝片石器）

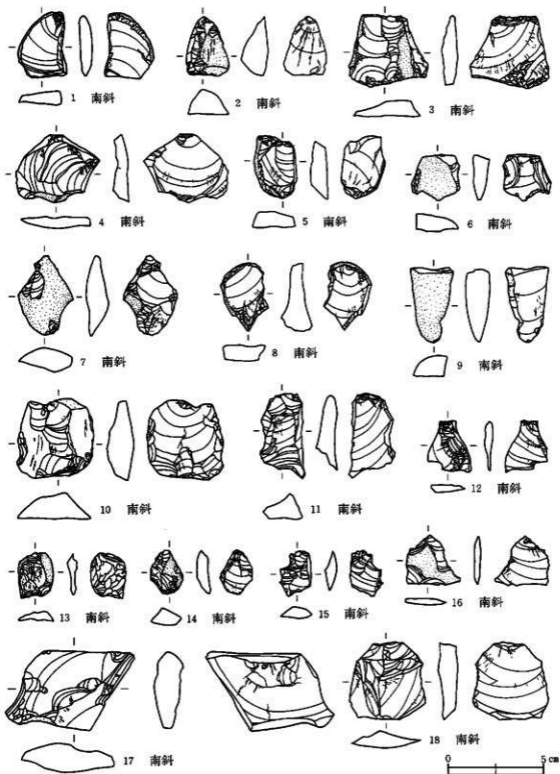




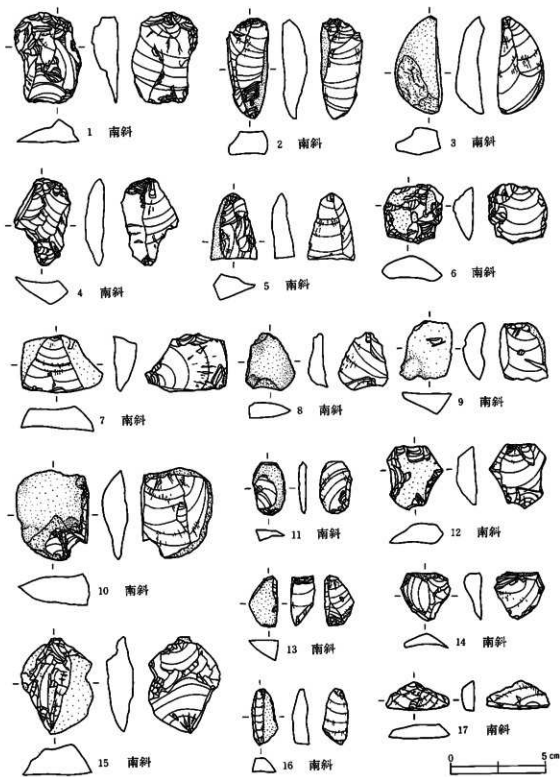
第91圖 遺構外出土遺物 (剥片石器)



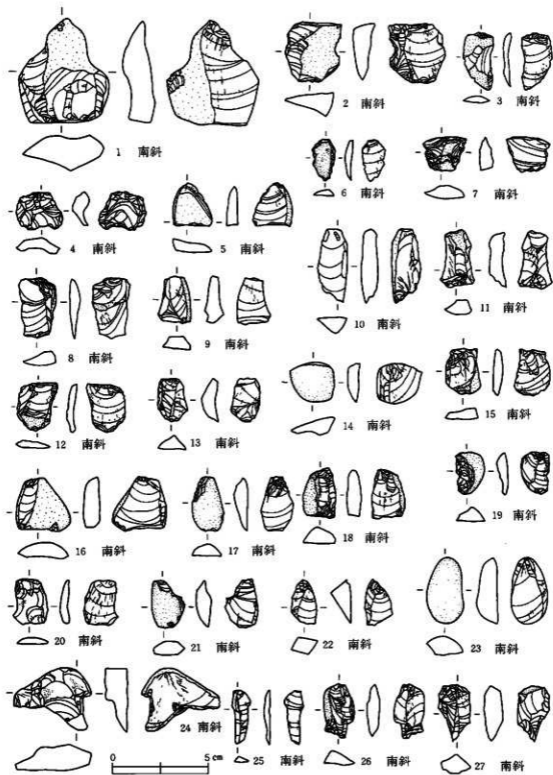
第92圖 遺構外出土遺物（剝片石器）



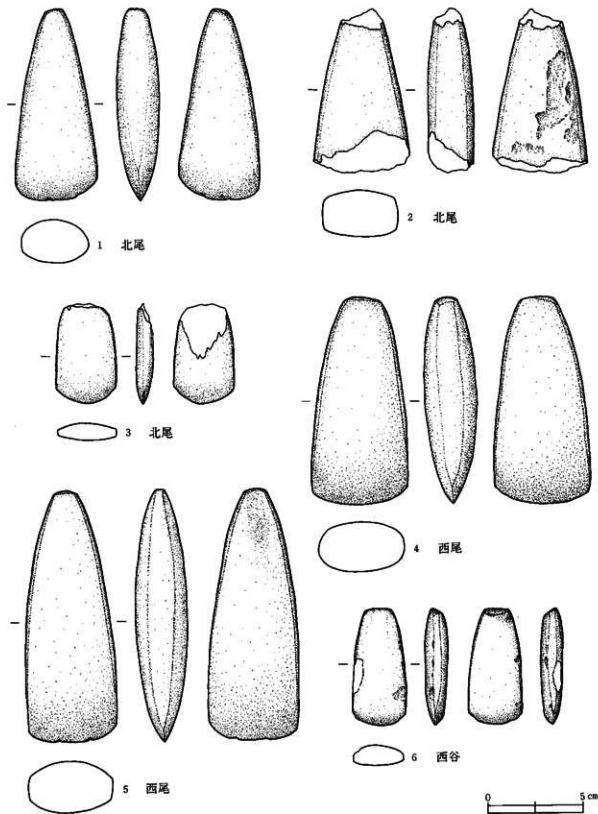
第93圖 遺構外出土遺物（剝片石器）



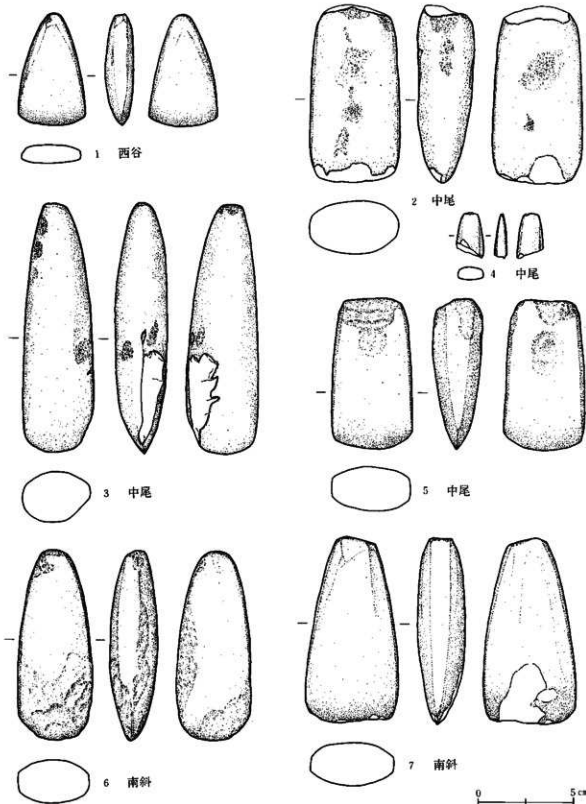
第94圖 遺構外出土遺物（剝片土器）



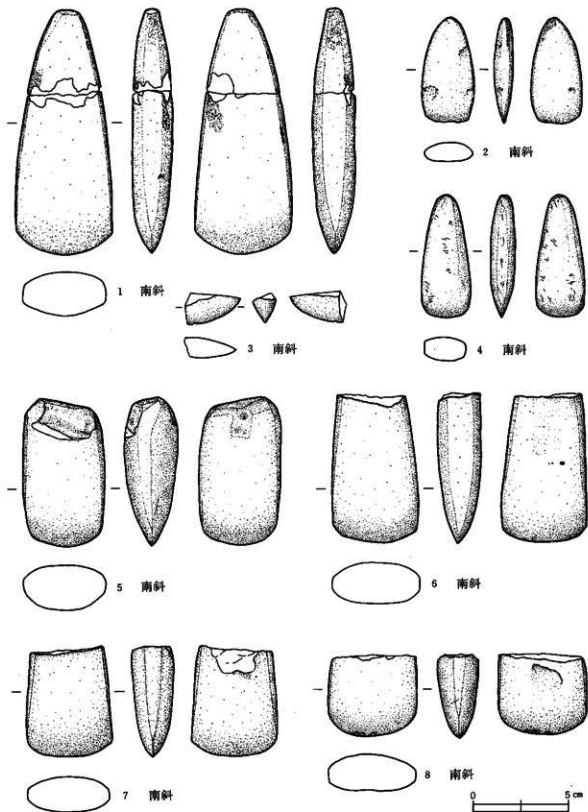
第95圖 遺構外出土遺物(制片石器)



第96圖 遺構外出土遺物（磨製石斧）

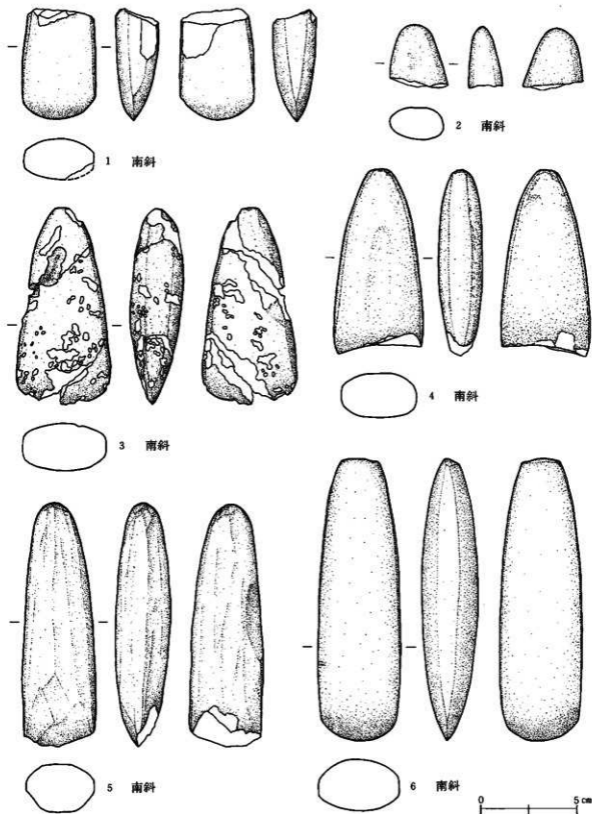


第97圖 遺構外出土遺物（磨製石斧）

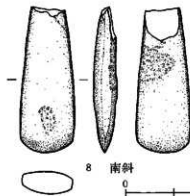
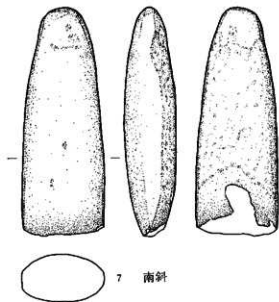
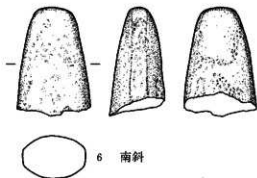
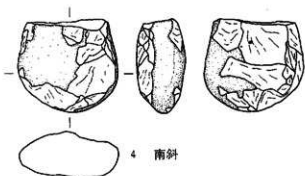
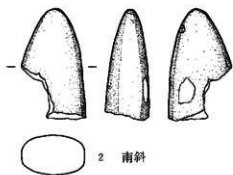
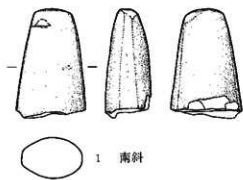


第98图 遺構外出土遺物 (磨製石斧)

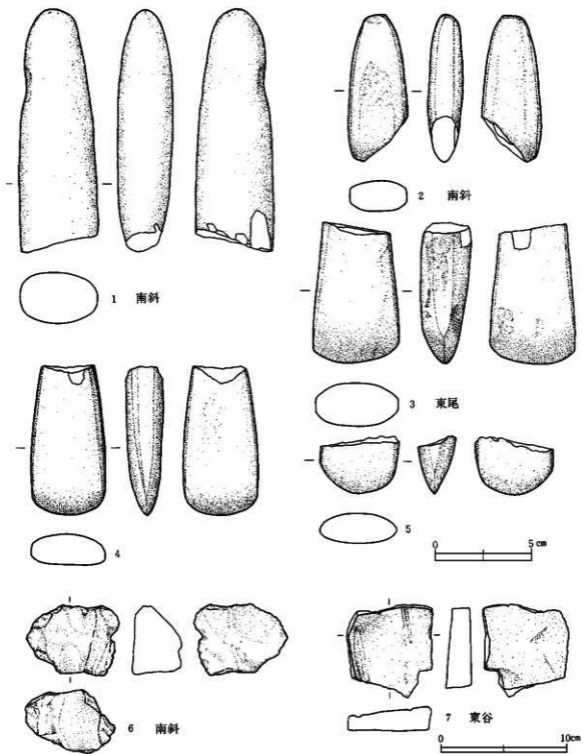




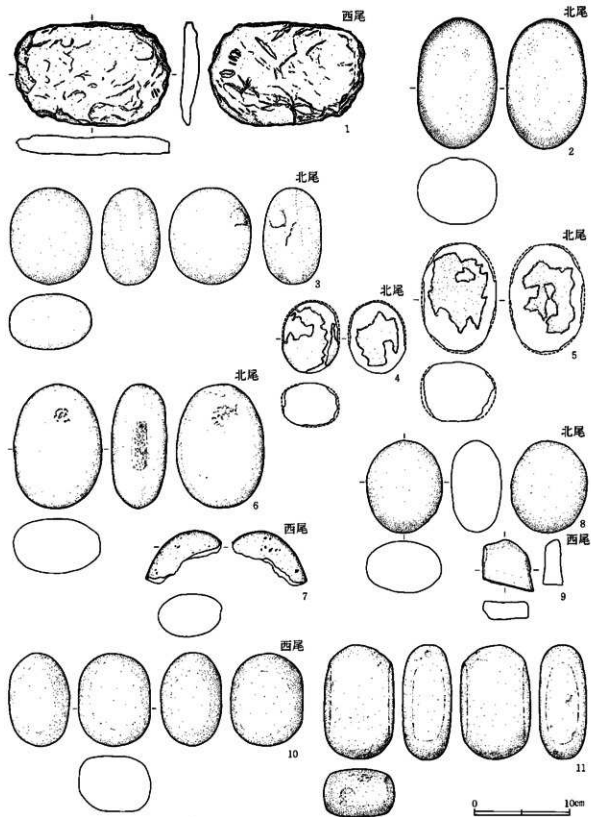
第99圖 遺構外出土遺物（磨製石斧）



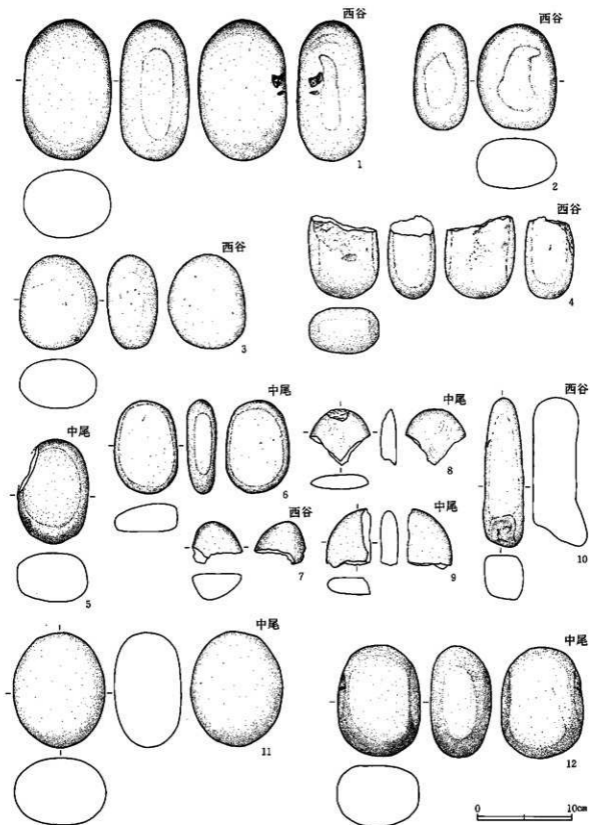
第100图 遺構外出土遺物（磨製石斧）



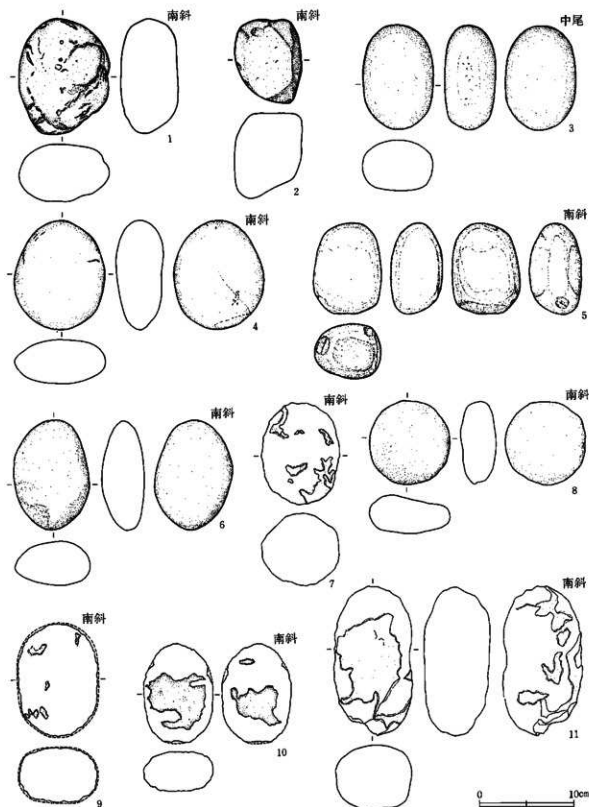
第101圖 遺構外出土遺物（磨製石斧・砥石）



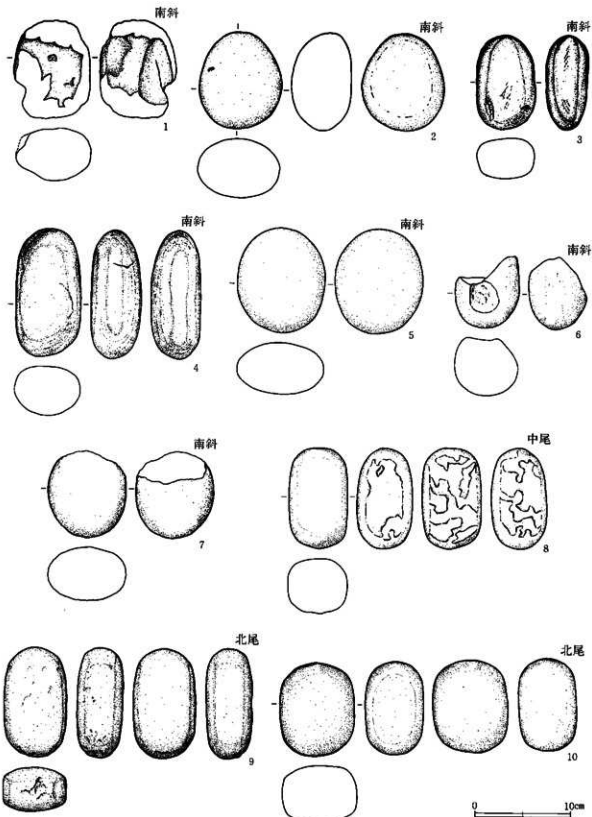
第102图 遺構外出土遺物(礫石器)



第103圖 遺構外出土遺物（礫石器）

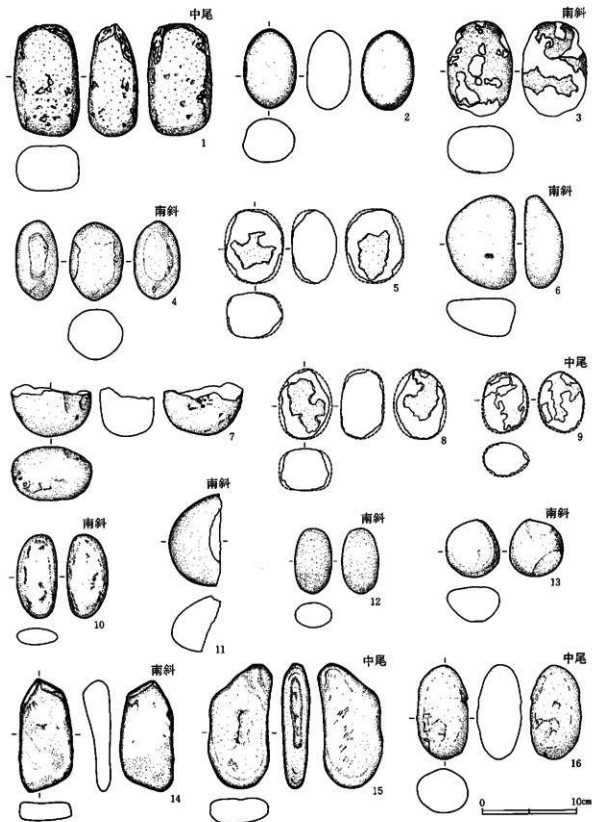


第104圖 遺構外出土遺物(礫石器)



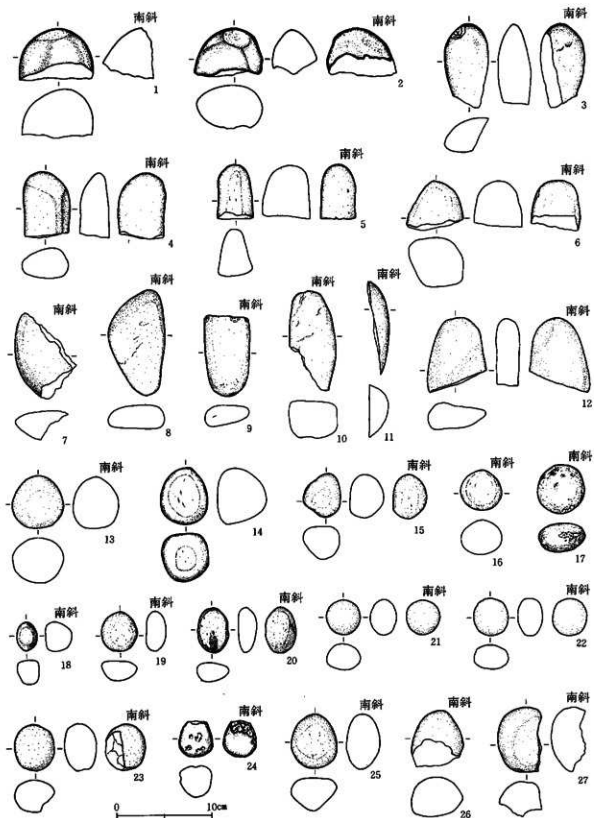
0 10cm

第105図 遺構外出土遺物（礫石器）

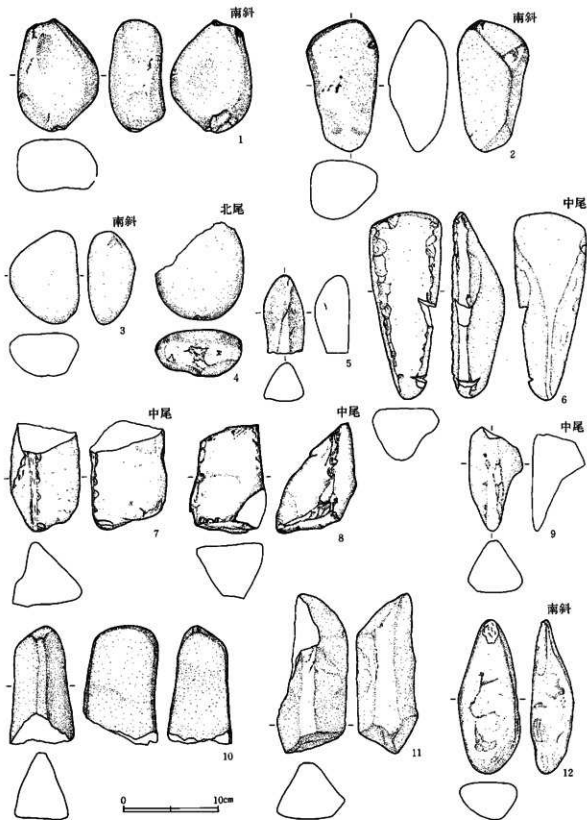


第106圖 遺構外出土遺物 (礫石器)

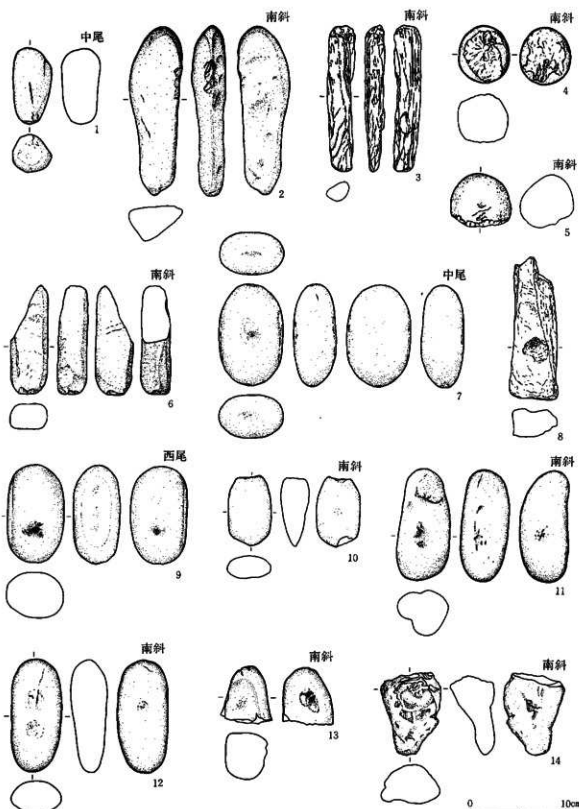




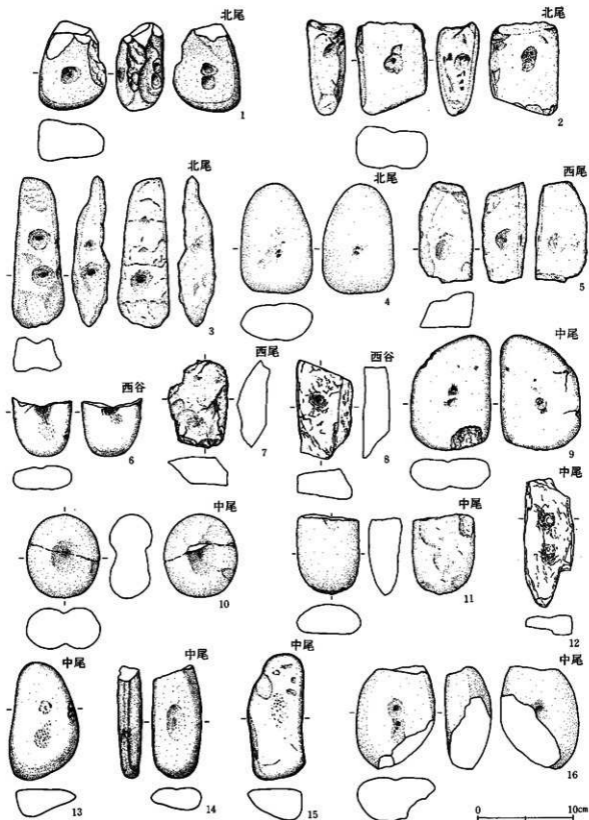
第107圖 遺構外出土遺物(礫石器)



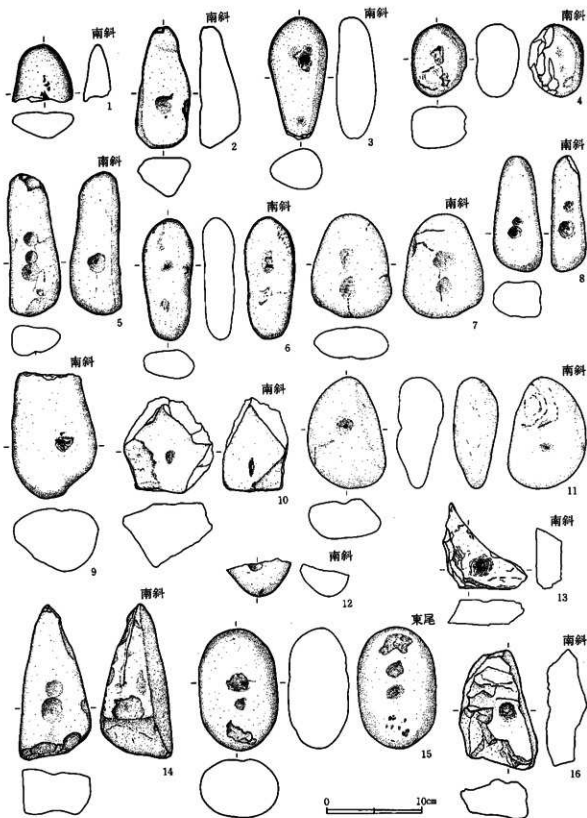
第108圖 遺構外出土遺物（礫石器）



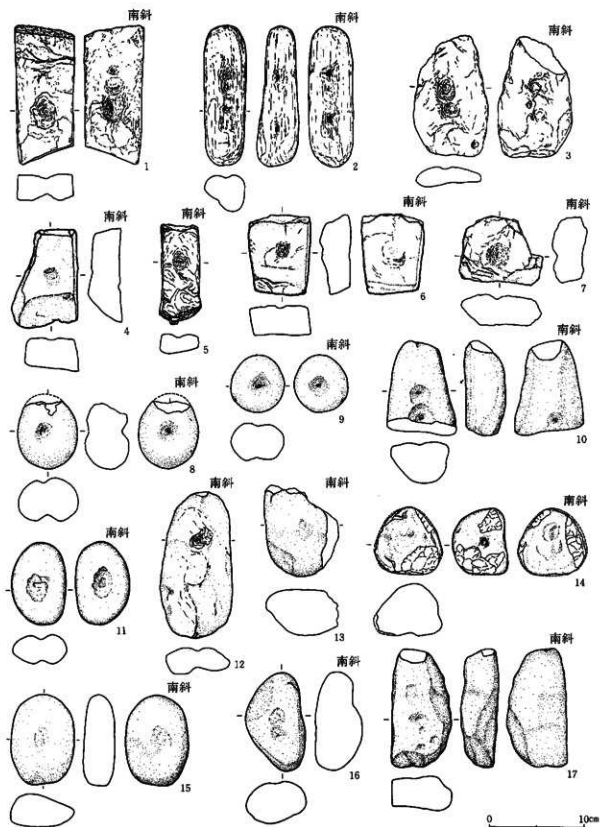
第109圖 遺構外出土遺物（礫石器）



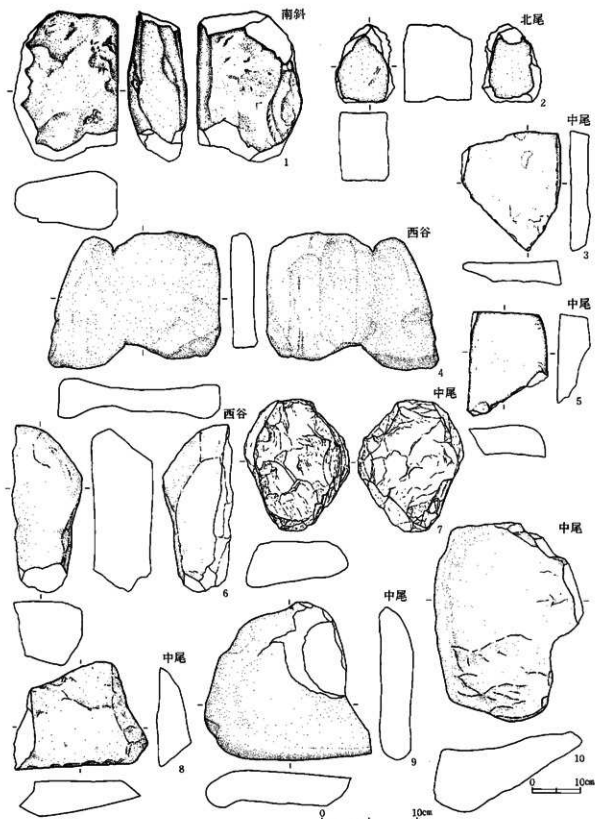
第110圖 遺構外出土遺物 (礫石器)



第111圖 遺構外出土遺物(礫石器)



第112圖 遺構外出土遺物（礫石器）

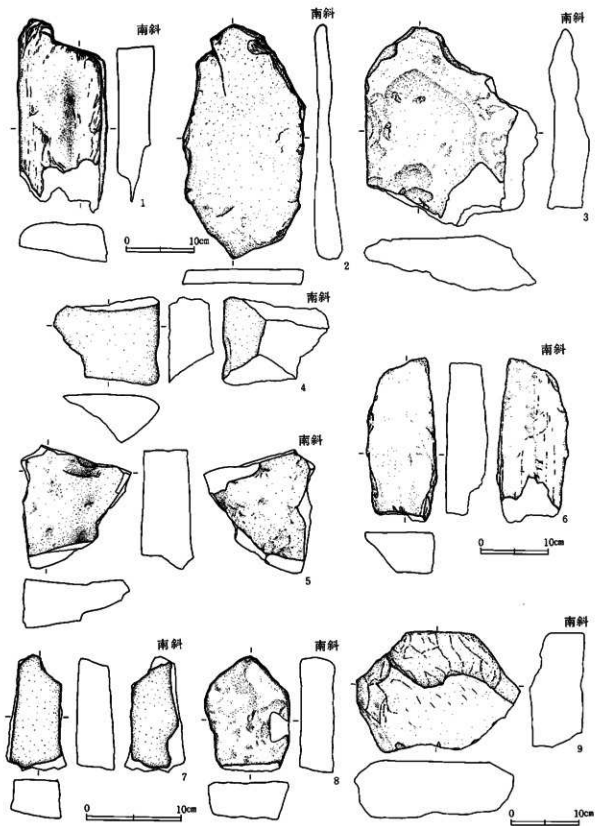


第113圖 遺構外出土遺物(礫石器)

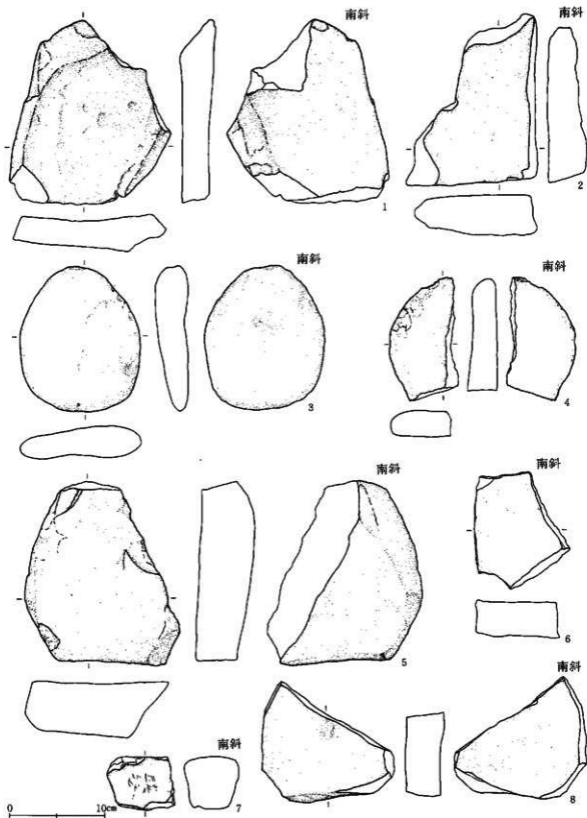


第114図 遺構外出土遺物(礫石器)

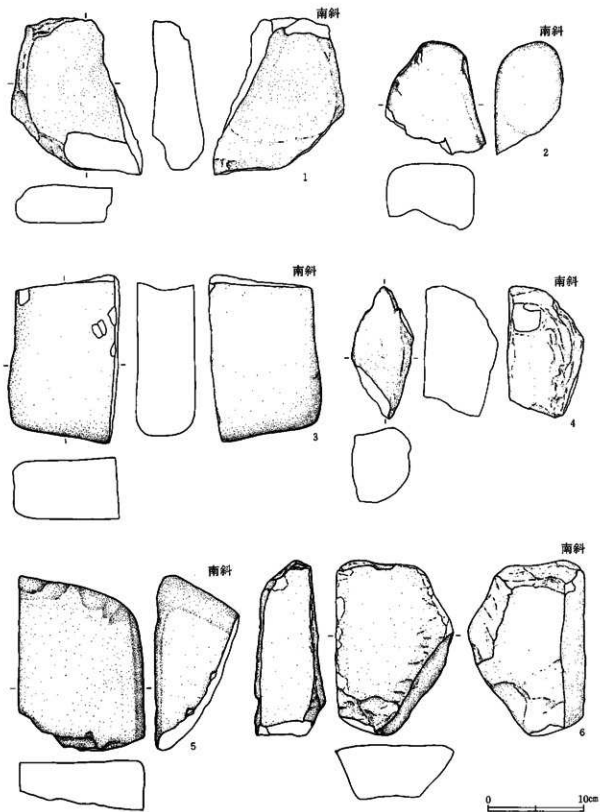




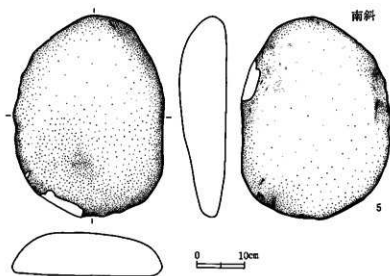
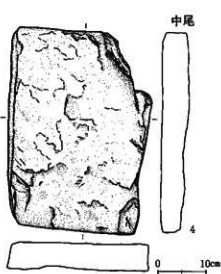
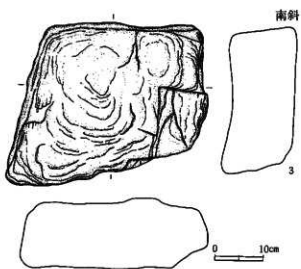
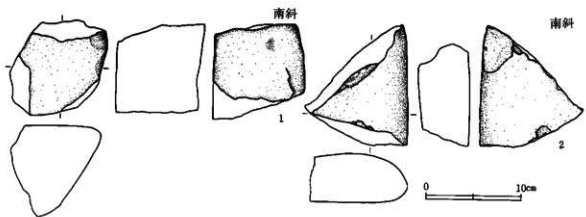
第115圖 遺構外出土遺物(礫石器)



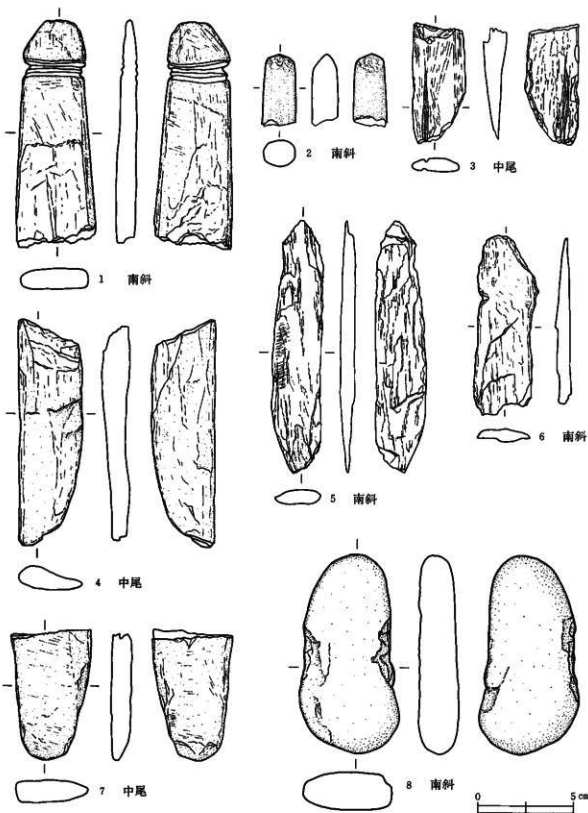
第116圖 遺構外出土遺物(礫石器)



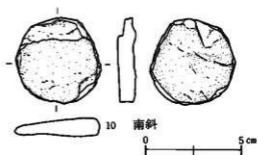
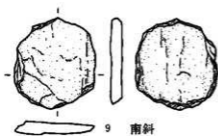
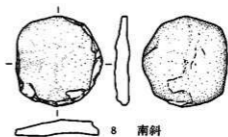
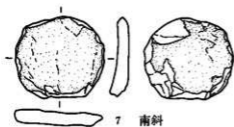
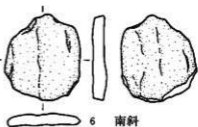
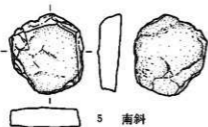
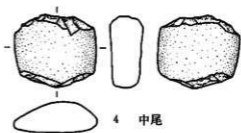
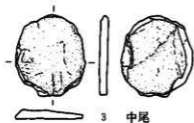
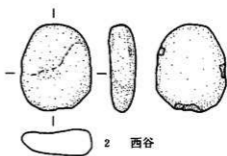
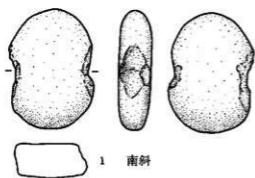
第117图 遺構外出土遺物(礫石器)



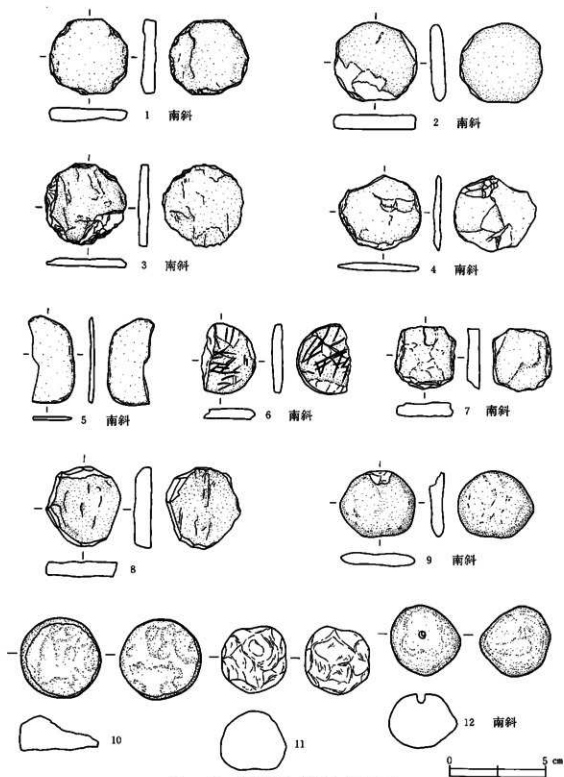
第118図 遺構外出土遺物(礫石器)



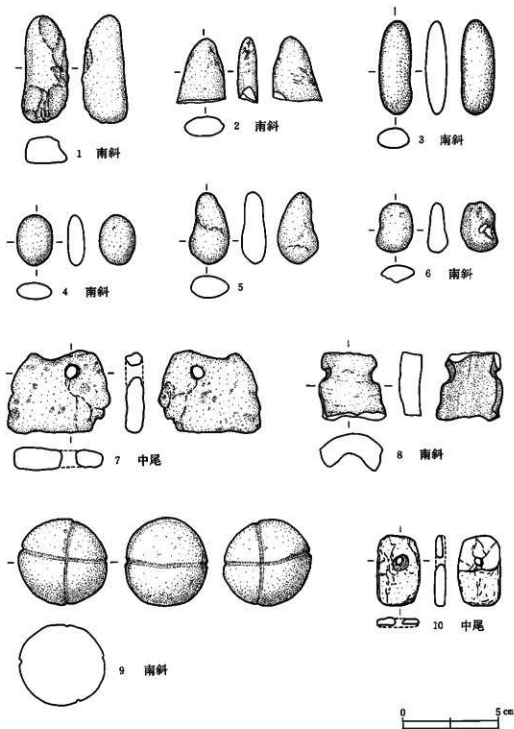
第119圖 遺構外出土遺物(石製品)



第120図 遺構外出土遺物(石製品)



第121圖 遺構外出土遺物（石製品）



第122圖 遺構外出土遺物（石製品）



表4 石器計測表1

番号	器種	出土地点	図版番号	最大長[cm]	最大幅[cm]	最大厚[cm]	重量[g]	石質	産地
1	尖頭石器	Ⅲ B 53住 床	Ⅱ162-5	5.1	3.15	1.3	20	硬質泥岩	奥羽山地
2	Rフレ	Ⅲ D 51 P	Ⅱ223-12	3.25	2.9	0.9	8.5	チャート質粘板岩	北上山地
3	Uフレ	"	-13	3.85	3.2	0.9	10.3	"	"
4	Rフレ	Ⅳ J 23住	Ⅱ164-2	5	4.4	1.5	25.95	珪質泥岩	奥羽山地
5	ノッチ	Ⅴ C 23住	Ⅱ165-1	3.78	2.04	1.04	6.91	"	"
6	フレイク	"	-2	2.62	2.32	0.91	5.3	珉質流紋岩	北上山地
7	Rフレ	"	-3	3.04	2.82	0.94	6.45	硬質泥岩	"
8	"	"	-4	3.13	2.92	0.82	4.08	硬質凝灰質泥岩	"
9	磨石	"	-5	9.32	8.24	5.91	680	硬砂岩	"
10	"	"	-6	11.54	7.84	5.42	730	花崗閃緑岩	"
11	"	"	-7	8.92	7.42	4.82	470	"	"
12	凹石	"	-8	11.9	7.5	4.4	448	アルコース砂岩	"
13	"	"	-9	3.9	1.9	0.9	10.41	玉髓	産地不詳
14	磨製石片	Ⅴ D 24住	Ⅱ166-3	10.2	4.2	2.4	150	輝石珪岩	北上山地
15	"	"	-4	7.1	4.7	2.1	116	"	"
16	磨石	"	-5	10.2	6.1	3.4	297	硬砂岩	"
17	石匙	Ⅵ C 26住	Ⅱ168-10	6.17	3.32	0.82	15.23	珪質粘板岩	"
18	磨石	"	-11	11.1	8.9	5.9	910	花崗閃緑岩	"
19	"	Ⅳ F 16 P	Ⅱ226-4	9	7.4	5.7	493	角閃黒雲母花崗岩	"
20	凹石	Ⅶ I 28 P	Ⅱ228-6	5.7	7.3	3.2	155	硬砂岩	"
21	石鏃	Ⅴ B 25 P	-11	2.1	1.25	0.35	0.44	石英	産地不詳
22	"	"	-12	2.75	1.3	0.5	1.05	珪質泥岩	奥羽山地
23	Uフレ	Ⅴ E 24 P	Ⅱ229-9	3.2	1.94	1.26	6.63	"	"
24	"	Ⅵ B 25 P	-17	6.32	1.82	0.71	7.55	粘板岩	北上山地
25	Rフレ	"	-18	2.38	2.44	1.14	7.26	珪質泥岩	奥羽山地
26	削器	Ⅳ B 80住	Ⅱ169-10	12.9	4.5	3.9	310	硬砂岩	北上山地
27	磨石	"	-11	4.2	3.5	0.8	9.67	珪質泥岩	奥羽山地
28	磨石	"	-12	7.5	7	7.2	487	硬砂岩	北上山地
29	石匙	Ⅳ B 82住	Ⅱ170-23	2	2.1	0.55	1.01	珪質泥岩	奥羽山地
30	石鏃	"	-24	2.3	1	0.7	1.08	チャート	北上山地
31	搔器	"	Ⅱ171-1	8.3	4.9	1.3	54.92	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
32	磨製石片	"	-2	11.3	4.5	2.4	160	淡緑色凝灰岩	北上山地
33	"	"	-3	7.8	3.6	1.4	56.9	"	"
34	磨石	"	-4	8.6	6.9	5.2	406	硬砂岩	"
35	粗製石皿	Ⅳ C 82住	-9	14.1	11.7	4.2	1170	"	"
36	石棒	Ⅴ H 61住	Ⅱ173-3	17.2	2.42	2.31	170	粘板岩	"
37	"	"	-4	8.8	3.7	2.25	70.45	"	"
38	石匙	"	Ⅱ174-1	7.82	5.07	0.66	25.95	珪質泥岩	奥羽山地
39	削器	"	-2	6.19	3.5	1.2	22.95	"	"
40	フレイク	"	-3	4.36	3.45	0.96	15.35	珪質粘板岩	北上山地
41	"	"	-4	6.22	4.32	1.12	25.33	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地
42	石弁	"	-5	7.56	4.38	2.72	150	輝石珪岩	北上山地
43	磨石	"	-6	9.54	6.93	5.63	570	花崗閃緑岩	"
44	"	"	-7	6.2	4.4	3.5	136	硬砂岩	"
45	"	"	Ⅱ175-1	12.13	8.24	6.13	990	花崗閃緑岩	"
46	粗製石皿	"	-2	59	21.7	7	10660	硬砂岩	"
47	"	"	-3	30.7	23.6	6.8	6420	"	"
48	"	"	-4	42.5	26.4	6	7960	"	"
49	フレイク	Ⅲ J 83 P	Ⅱ230-11	3.8	2.9	0.4	4.35	珪質泥岩	奥羽山地
50	Uフレ	Ⅳ A 83-2 P	-18	9.2	3.2	1.8	49.6	粘板岩	北上山地
51	フレイク	Ⅳ B 82-2 P	Ⅱ231-30	3.2	2.6	0.8	7.2	珪質泥岩	奥羽山地
52	石製円盤	Ⅳ C 64 P	Ⅱ232-1	4.1	5	0.9	25.95	凝灰質粘板岩	北上山地
53	搔器	Ⅱ F 94-1住	Ⅱ180-5	2.3	1.4	0.8	2.07	玉髓	産地不詳
54	石鏃	"	-6	3.3	2.5	0.8	6.43	チャート	北上山地
55	搔器	"	-7	9.2	3.5	1.4	57.51	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
56	石匙	"	-8	3.1	3.8	0.8	8.5	珪質泥岩	"
57	Rフレ	"	-9	3.1	2.9	0.6	6.25	珉質泥岩	"
58	Uフレ	"	-10	5.2	5.6	1.4	41.02	珉質流紋岩	"
59	磨石	"	Ⅱ181-1	6.2	6.5	5	220	花崗岩	北上山地
60	"	"	-2	9.5	8.8	6.3	630	"	"
61	"	"	-3	10.6	8.2	5.1	600	"	"
62	粗製石皿	"	Ⅱ182-1	25.1	18.2	3.2	"	硬砂岩	"

表5 石器計測表2

番号	器種	出土地点	図版番号	最大長[cm]	最大幅[cm]	最大厚[cm]	重量(g)	石質	産地
63	石 剣	Ⅱ F94-1 住	Ⅱ182-2	28	3.1	1.8	240	砂質粘板岩	北上山地
64	粗製石皿	"	-3	24.1	31.1	6.5	7130	硬砂岩	"
65	凹 石	Ⅱ G94住	Ⅱ183-13	8.5	6.6	3.5	230	輝石安山岩	"
66	Uフレ	"	-14	2.2	2.8	0.7	6.27	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
67	粗製石皿	Ⅱ I96住 炉石	Ⅱ184-8	18.7	14.5	3.8	1480	チャート質粘板岩	北上山地
68	"	Ⅲ A94住	Ⅱ185-10	62.6	51.3	10.1	58200	チャート	"
69	"	Ⅲ B89-2住 炉石	Ⅱ186-4	21.2	21.2	5.5	3700	チャート質粘板岩	"
70	"	"	-5	25.1	18.3	9	4350	硬砂岩	"
71	磨 石	Ⅲ B89-2 住	Ⅱ187-1	25.2	15.8	4.6	1520	"	"
72	粗製石皿	" 炉石	-2	25.5	10	5.7	1480	チャート	"
73	"	"	-3	21.4	14	5.3	2420	チャート質粘板岩	"
74	"	"	-4	19.2	13.6	6.3	2440	"	"
75	Uフレ	Ⅲ D87住居地群	Ⅱ195-14	2.1	2.5	0.6	4.16	"	"
76	Rフレ	"	-15	1.5	2.2	0.5	1.92	チャート	"
77	"	"	-16	3.1	1.6	0.6	3.6	珪質泥岩	奥羽山地
78	削 器	"	-17	5	3.7	1.2	25.52	"	"
79	フレイク	"	-18	3.2	3.2	0.9	7.51	玻璃質流紋岩	"
80	Uフレ	"	-19	3.2	2	1.1	5.05	珪質泥岩	"
81	"	"	Ⅱ196-1	2.4	3.7	1	62.1	チャート	北上山地
82	"	"	-2	3.6	5.8	1.5	22.5	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
83	敲 石	"	-3	7.6	6.5	4.8	380	硬砂岩	北上山地
84	粗製石皿	" 炉石	-4	51.2	17.4	8	7930	"	"
85	"	"	-5	20.1	13.9	6.7	2200	"	"
86	"	"	-6	25.1	14.9	5	2340	チャート質粘板岩	"
87	石 錘	Ⅲ D91住	Ⅱ198-4	2.2	1.1	0.5	0.73	チャート	"
88	磨製石斧	"	-5	3.7	3	0.7	10.2	淡緑色凝結凝灰岩	"
89	磨 石	"	-6	10.5	4.5	3.9	350	硬砂岩	"
90	"	"	-7	12.6	7.8	5.8	900	角閃黒雲母花崗岩	"
91	"	"	-8	12	6.7	5.2	720	"	"
92	粗製石皿	"	-9	39.5	25	8.7	9400	硬砂岩	"
93	Rフレ	Ⅲ E88-1 住	Ⅱ200-8	3.4	2	0.7	4.35	珪質泥岩	奥羽山地
94	粗製石皿	"	-9	19.5	17.7	4.1	2520	粘板岩	北上山地
95	フレイク	Ⅲ E88-2 住	Ⅱ201-10	2.2	1.8	0.4	2.15	珪質泥岩	奥羽山地
96	削 器	"	-11	6.7	6.6	1.5	54.75	凝灰質珪質泥岩	"
97	Rフレ	"	-12	1.9	2	0.8	2.86	チャート	北上山地
98	削 器	"	-13	6.9	7.9	1.5	47.48	珪質泥岩	"
99	粗製石皿	" 炉石	Ⅱ202-1	20	10.2	5	980	硬砂岩	"
100	"	"	-2	5.8	9	4.8	360	"	"
101	"	"	-3	21.8	15.3	8.5	3020	"	"
102	"	"	Ⅱ203-1	15	10	3.1	380	粘板岩	"
103	"	"	-2	29.5	14.9	10.6	1340	硬砂岩	"
104	"	"	-3	25.6	21.7	7	4820	"	"
105	石 鏃	Ⅲ E92住	Ⅱ199-16	2.4	1	0.6	1.31	輝緑凝灰岩	"
106	Uフレ	"	-17	2.4	3.3	0.5	3.96	珪質泥岩	奥羽山地
107	削 器	Ⅲ E90住	Ⅱ205-19	6.22	4.02	1.23	41.52	粘板岩	北上山地
108	磨製石斧	"	-20	7.44	3.84	1.23	130	凝灰質硬砂岩	"
109	粗製石皿	Ⅲ F87住 炉石	Ⅱ207-8	27	23.4	4.5	980	硬砂岩	"
110	石 皿	Ⅲ F91-2 住	Ⅱ208-7	41.6	18.1	3.8	2340	凝灰質硬砂岩	"
111	磨製石斧	Ⅲ H91-1 住	Ⅱ210-4	12.13	6.24	4.63	570	角礫凝灰質硬砂岩	"
112	磨 石	Ⅲ H92-3 住	-5	5.58	4.89	2.44	100	硬砂岩	"
113	削 器	Ⅲ H92住	Ⅱ211-19	4.72	3.52	0.82	15.46	硬質泥岩	奥羽山地
114	石 錘	Ⅲ J90住	Ⅱ213-7	3.47	1.32	0.4	1.12	チャート	北上山地
115	Uフレ	"	-9	3.5	2.68	0.43	5.56	"	"
116	"	Ⅲ J90-2 住	-10	4.1	2.34	0.86	7.3	"	"
117	フレイク	Ⅲ J92住	Ⅱ214-4	3.54	1.86	0.9	5.12	"	"
118	Rフレ	"	-5	1.94	1.82	1.52	12.53	"	"
119	石 錘	Ⅳ A92住	Ⅱ217-14	2.52	1.22	0.42	1.23	玻璃質流紋岩	奥羽山地
120	Rフレ	"	-15	3.62	2.07	1.46	9.68	チャート	北上山地
121	播 磨	Ⅳ A92-2 住	Ⅱ217-16	1.89	1.5	0.3	1.14	"	"
122	擦 磨	"	-17	3.5	1.86	0.72	3.65	"	"
123	削 器	"	-18	5.12	4.22	1.12	21.34	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地
124	播 磨	Ⅳ B90住	Ⅱ218-8	3.92	3.42	0.84	13.51	粘板岩	北上山地

表6 石器計測表3

番号	器種	出土地点	図版番号	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	産地
125	磨石	Ⅱ B 90 柱	Ⅱ 219-1	14.24	8.94	4.02	800	硬砂岩	北上山地
126	"	"	-2	23.3	19.1	5.8	4580	"	"
127	肌製石皿	Ⅲ B 88 屋外炉址	Ⅱ 221-1	6.8	16.4	5.9	900	"	"
128	"	"	-2	23.1	15.2	5.8	2900	"	"
129	"	Ⅲ B 91 屋外炉址	-3	71.5	17.1	10.5	23100	"	"
130	"	"	-4	77.5	31.2	12	50800	"	"
131	磨石	Ⅱ G 94 P	Ⅱ 234-1	12	11.5	7	1010	輝石安山岩	"
132	石匙	Ⅲ C 87-5 P	Ⅱ 241-1	5	3	0.5	8.43	珪質泥岩	奥羽山地
133	削器	"	-2	3	2.9	0.9	7.07	"	"
134	尖頭石器	"	-3	3.3	2.3	0.8	5.56	"	"
135	"	"	-4	3.4	1.7	0.8	5.18	"	"
136	搔器?	"	-5	2.2	1.9	0.5	2.86	凝灰質珪質泥岩	"
137	Uフレ	"	-6	2.7	1.5	0.8	3.16	珪質泥岩	"
138	"	"	-7	2.2	1.4	0.5	1.8	"	"
139	"	"	-8	2.8	1.7	0.4	1.79	白色細粒凝灰岩	"
140	"	"	-9	3.1	2.1	0.9	5.76	チャート	北上山地
141	"	"	-10	2.8	2.5	1	7.43	珪質泥岩	奥羽山地
142	フレイク	"	-11	2.4	1.1	0.7	2.59	"	"
143	"	"	-12	3.5	2	1.5	10.55	"	"
144	"	"	-13	3.4	3	1.1	9.67	硬質泥岩	"
145	"	"	-14	4	2.3	0.4	3.75	チャート	北上山地
146	"	"	-15	1.9	4	0.5	2.29	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
147	"	"	-16	2.1	2.8	0.6	3.04	白色細粒凝灰岩	"
148	"	"	-17	2.9	1.9	0.5	2.49	粘板岩	北上山地
149	"	"	-18	2.1	2.3	0.7	2.92	チャート質粘板岩	"
150	"	"	-19	2.3	1.3	0.5	1.56	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
151	絞石	"	Ⅱ 242-1	9	6.7	4.1	340	輝石安山岩	北上山地
152	磨石	Ⅲ C 89-2 P	Ⅱ 243-10	14.7	6.5	3.7	430	硬砂岩	"
153	凹石	"	-11	10.3	8.3	4.4	420	輝石安山岩	"
154	石製円盤	Ⅲ D 89-2 P	Ⅱ 244-2	3.9	4.4	0.8	18.5	チャート	"
155	石鏃	北尾根	Ⅲ 77-1	3.8	2.1	0.5	3.72	珪質泥岩	奥羽山地
156	"	西尾根	-2	3.1	1.3	0.5	1.49	凝灰質珪質泥岩	"
157	"	南斜面	-3	2.5	1.2	0.4	0.84	輝石安山岩	北上山地
158	"	"	-4	2.2	1.2	0.3	0.63	チャート質粘板岩	"
159	"	"	-5	2.4	1.2	0.3	0.8	チャート	"
160	"	"	-6	3.01	1.1	0.55	1.55	珪質泥岩	奥羽山地
161	"	"	-7	2.2	1.3	0.5	1.26	"	"
162	"	"	-8	2.4	1.5	0.25	1	珪質粘板岩	北上山地
163	"	"	-9	2.85	1.35	0.37	0.90	チャート	"
164	"	"	-10	2.3	1.2	0.3	0.6	硬砂岩	"
165	"	"	-11	2.1	1	0.36	0.5	チャート	"
166	"	"	-12	1.9	1.3	0.3	0.93	"	"
167	"	"	-13	2.76	1.74	0.84	4.22	"	"
168	"	"	-14	1.6	1.8	0.3	1.73	"	"
169	"	"	-15	2.75	1.48	0.65	2.2	"	"
170	"	"	-16	2.27	1.9	0.78	2.8	"	"
171	"	"	-17	3.74	2.1	0.8	7.19	"	"
172	石鏃	中央尾根	Ⅲ 78-1	4.95	4.76	1.83	30.15	泥質凝灰岩	奥羽山地
173	"	南斜面	-2	4.6	2.2	0.8	4.66	凝灰質珪質泥岩	"
174	"	"	-3	3.42	1.82	0.72	2.27	珪質泥岩	"
175	"	"	-4	3.74	2.3	0.97	5.97	チャート	北上山地
176	"	"	-5	3.3	1.8	1.2	3.6	"	"
177	"	"	-6	2.8	1.56	1.46	5.85	"	"
178	"	"	-7	3.7	1.67	0.64	3.96	"	"
179	"	"	-8	2.6	1.5	0.4	1.56	"	"
180	"	"	-9	4.45	1.8	0.7	7.05	"	"
181	石匙	中央尾根	-10	5.9	1.32	0.5	5.65	珪質粘板岩	北上山地
182	"	南斜面	-11	4.9	2.4	0.7	7.55	凝灰質珪質泥岩	"
183	"	"	-12	3.4	2.5	0.5	4.56	"	奥羽山地
184	"	"	-13	5.75	2.64	0.82	11.06	硬質泥岩	"
185	"	"	-14	7.98	3.89	1.32	48.05	珪質泥岩	"
186	"	"	-15	6.43	2.34	1.08	17.35	"	"

表7 石器計測表4

番号	器種	出土地点	図版番号	最大長H	最大幅H	最大厚H	重量(g)	石質	産地
187	石 點	西 谷	Ⅱ79-1	2.8	50.15	0.5	7.68	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
188	"	中央尾根	-2	6.42	6.53	0.93	19.4	硬質泥岩	"
189	"	"	-3	6	2.86	0.92	11.06	"	"
190	"	南斜面	-4	5.42	3.02	0.63	9.37	硬質凝灰質泥岩	"
191	"	"	-5	2.9	5.1	0.9	13.79	凝灰質珪質泥岩	北上山地
192	"	"	-6	3	4	0.9	8.95	"	奥羽山地
193	"	"	-7	3.7	2.4	0.9	9.35	チャート	北上山地
194	不規則石器	"	-8	2.83	2.2	0.87	5.92	珪質粘板岩	"
195	"	"	-9	3.9	3	0.95	9.1	チャート	"
196	"	"	-10	4.9	2.1	1.2	15.26	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
197	"	"	-11	5.92	2.44	1.02	15.95	硬質凝灰質泥岩	北上山地
198	"	"	-12	5.64	3.72	1.23	29.4	"	奥羽山地
199	獲 器	中央尾根	Ⅱ80-1	6.5	4.5	1.3	38.25	珪質泥岩	"
200	"	南斜面	-2	5.01	4.74	1.12	25.57	粘板岩	北上山地
201	"	"	-3	5.52	2.34	1.12	17.7	硬質泥岩	奥羽山地
202	"	"	-4	7.35	2.5	1.2	19.93	珪質泥岩	"
203	"	"	-5	6.82	3.3	1.03	25.2	チャート	北上山地
204	"	"	-6	4.02	3.42	1.03	19.28	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地
205	"	"	-7	4.22	3.52	1.1	16.36	珪質粘板岩	北上山地
206	"	"	-8	4.5	2	0.5	6.2	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
207	"	"	-9	7.52	4.52	1.33	50	硬質泥岩	"
208	"	"	-10	2.64	2.24	0.72	4.25	硬質凝灰質泥岩	"
209	"	"	-11	3.26	2.82	1	7.32	珪質粘板岩	北上山地
210	"	"	-12	2.1	1.5	1.8	2.26	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
211	"	"	-13	2.3	2.2	0.6	3.46	珪質泥岩	"
212	"	中央尾根	Ⅱ81-1	2.5	3.5	1	10.28	チャート	北上山地
213	"	"	-2	3.8	2.3	0.8	6.56	"	"
214	"	南斜面	-3	4.7	2.4	1	13.95	"	"
215	"	"	-4	4.12	2.82	1.23	14.79	輝綠凝灰質チャート	"
216	"	"	-5	2.8	2.2	0.9	7.4	チャート	"
217	"	"	-6	1.9	3.5	0.25	1.71	チャート	"
218	"	"	-7	1.4	2.1	1	6.24	"	"
219	"	"	-8	1.8	2.1	0.5	2.51	"	"
220	"	"	-9	2.7	1.46	0.67	2.13	"	"
221	"	"	-10	3.55	1.96	0.95	6.36	"	"
222	削 器	"	-11	5	2.6	0.8	11.97	珪質泥岩	奥羽山地
223	"	"	-12	4.9	2.7	0.9	14.21	チャート	北上山地
224	"	"	-13	6.42	2.84	1.54	28.7	硬質泥岩	奥羽山地
225	"	"	-14	6.9	4.8	1.5	54.5	"	"
226	"	"	-15	4.1	2.7	1.3	3.95	凝灰質珪質泥岩	"
227	"	中央尾根	Ⅱ82-1	4.72	3.24	1.09	18.13	チャート	北上山地
228	"	"	-2	4.7	3.6	0.9	13.89	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
229	"	南斜面	-3	5.8	1.9	0.7	8.45	チャート	北上山地
230	"	"	-4	4.5	2.7	1	13.45	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
231	"	"	-5	5.2	7.25	1.4	54.47	玻璃質流紋岩	産地不詳
232	"	"	-6	4.84	2.93	0.82	12.37	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地
233	"	"	-7	2.7	5.5	1.7	10.7	チャート質粘板岩	北上山地
234	"	"	-8	3.92	2.64	0.82	9.5	チャート	"
235	"	"	-9	4.1	3	1	13	"	"
236	"	西 谷	-10	5.73	3.64	0.44	10.05	硬質泥岩	"
237	"	中央尾根	-11	4.84	3.82	1.32	23.35	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地
238	"	南斜面	Ⅱ83-1	4.65	5.63	1.24	35.7	硬質泥岩	"
239	"	"	-2	3.83	3.42	0.43	4.95	粘板岩	北上山地
240	"	"	-3	8.24	4.92	2.23	70	硬質泥岩	奥羽山地
241	"	"	-4	3.8	5.5	1.3	26.8	珪質泥岩	奥羽山地
242	"	"	-5	4.3	3.3	0.6	7.95	凝灰質珪質泥岩	"
243	"	"	-6	4.32	5.72	1.13	26.93	粘板岩	北上山地
244	"	中央尾根	-7	4.12	4.04	1.23	18.53	輝綠凝灰質チャート	"
245	"	南斜面	-8	5.92	4.24	1.02	22.23	玻璃質流紋岩	奥羽山地
246	"	"	-9	4.32	3.44	0.98	12.93	珪質粘板岩	北上山地
247	"	中央尾根	Ⅱ84-1	6.9	4.4	1.3	36.16	凝灰質泥岩	奥羽山地
248	"	南斜面	-2	4.4	2.4	0.7	6.95	"	"

表8 石器計測表5

番号	器種	出土地点	図版番号	最大径[cm]	最大幅[cm]	最大厚[cm]	重量[g]	石質	産地
249	柄杓	南斜面	III84-3	4.63	1.66	0.93	5.48	チャート	北上山地
250	"	"	-4	2.9	1.9	7.3	4.19	珪質泥岩	奥羽山地
251	ノッチ	中央尾根	-5	6.32	4.32	1.82	50.3	粘板岩	北上山地
252	"	南斜面	-6	4.9	4.7	1.1	33.54	硬質泥岩	奥羽山地
253	"	中央尾根	-7	4.61	3.13	1.12	16.3	チャート	北上山地
254	"	南斜面	-8	4.3	2.8	1	14.93	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
255	"	"	-9	3.7	2.1	1	7.31	凝灰質硬質泥岩	"
256	尖頭石器	"	-10	5.6	2.4	1.3	17.25	"	"
257	"	"	-11	4	2.9	1.1	11.55	チャート	北上山地
258	圓形石器	"	-12	3.6	2.5	1.1	9.04	"	"
259	"	"	-13	3.1	2.4	0.6	4.88	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
260	"	"	III85-1	3	2.1	1	6.24	チャート	北上山地
261	"	"	-2	3.9	3.4	0.9	11.82	珪質泥岩	奥羽山地
262	"	"	-3	3.9	2.6	0.6	7.15	硬質泥岩	"
263	"	"	-4	3.2	1.74	0.86	4.32	チャート	北上山地
264	"	"	-5	2.7	2.3	0.8	4.51	"	"
265	"	"	-6	7.02	3.83	2.23	70	"	"
266	"	"	-7	3.2	2.1	1	6.46	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
267	"	"	-8	3.7	1.6	0.8	6.55	チャート	北上山地
268	不定形石器	"	-9	1.6	1.2	0.4	0.72	"	"
269	"	"	-10	2.1	1.3	0.5	0.87	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
270	"	"	-11	2.7	1.54	0.63	2.8	チャート	北上山地
271	"	"	-12	2.85	1.95	0.65	3.52	"	"
272	"	"	-13	2.1	2.8	1	7.13	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
273	"	"	-14	2.3	1.9	0.8	3.79	"	"
274	"	"	-15	3.07	2.2	0.9	4.05	泥質凝灰岩	"
275	"	"	-16	3.1	3.2	0.5	5.61	チャート質粘板岩	北上山地
276	"	"	-17	4.9	3.9	1.32	22.3	チャート	"
277	Rフレ	"	III86-1	4.92	3.42	1.04	17.4	硬質泥岩	奥羽山地
278	"	"	-2	3.32	2.3	0.8	4.95	チャート	北上山地
279	"	"	-3	2.3	1.8	0.4	1.98	細砂質凝灰岩	奥羽山地
280	"	"	-4	3.7	4.1	1.1	11.3	凝灰質珪質泥岩	"
281	"	北尾根	-5	4.4	2.55	0.6	5.95	チャート質粘板岩	北上山地
282	"	南斜面	-6	5.23	2.2	1.24	10.85	珪質泥岩	奥羽山地
283	"	"	-7	6.22	3.12	0.83	13.4	粘板岩	北上山地
284	"	"	-8	3.5	1.86	0.72	3.4	チャート	"
285	"	"	-9	2.9	2.5	0.9	5.75	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
286	"	"	-10	5.53	4.54	1.04	19.85	硬質凝灰質泥岩	"
287	"	"	-11	3	1.6	0.5	2.27	チャート	北上山地
288	"	"	-12	3.48	2.8	0.92	6.45	珪質泥岩	奥羽山地
289	"	"	-13	2.2	5.2	0.6	7.21	凝灰質珪質泥岩	"
290	"	"	-14	5.9	3.6	1.9	14.3	硬質泥岩	"
291	"	"	-15	3.9	3.5	1	7.98	凝灰質珪質泥岩	"
292	Uフレ	"	III87-1	3	3.1	1	10.03	珪質泥岩	"
293	"	"	-2	3.8	2.2	0.7	7.05	チャート	北上山地
294	"	"	-3	3	2.6	1.1	9.98	"	"
295	"	"	-4	3.5	2.8	1.5	15.66	チャート質粘板岩	"
296	"	"	-5	4	1.8	1	6.1	チャート	"
297	"	"	-6	5.5	3	0.6	11.79	"	"
298	"	"	-7	3.8	1.8	0.8	4.85	"	"
299	"	"	-8	1.85	2.9	0.4	1.64	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
300	"	北尾根	-9	3.15	3.4	0.6	6.28	"	"
301	"	中央尾根	-10	4.1	2.45	1.3	10.75	チャート	北上山地
302	"	"	-11	4	3.4	1	12.3	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
303	"	"	-12	3	3.9	0.7	7.27	チャート	北上山地
304	"	"	-13	8.64	4.52	0.72	25.75	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地
305	"	南斜面	-14	4.5	2	1.5	11.23	チャート	北上山地
306	"	西尾根	-15	3.4	2.8	0.9	9.53	"	"
307	"	南斜面	III88-1	2.9	2.12	0.54	4.05	"	"
308	"	"	-2	3	3.9	0.9	7.65	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
309	"	"	-3	3.46	1.86	0.8	4.8	チャート	北上山地
310	"	"	-4	3.3	4	1	17.29	凝結凝灰岩	"

表9 石器計測表6

番号	器種	出土地点	図版番号	最大長(㎝)	最大幅(㎝)	最大厚(㎝)	重量(g)	石質	産地
311	ウフレ	南斜面	Ⅱ88-5	2.1	2	0.9	3.85	チャート	北上山地
312	"	"	-6	4.2	2.2	1	8.15	"	"
313	"	"	-7	4.1	3	0.9	12.53	"	"
314	"	"	-8	3	2.7	1.1	10.65	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
315	"	"	-9	3.1	3.2	0.4	3.02	硬質泥岩	"
316	"	"	-10	2.3	2.9	0.6	3.92	凝灰質珪質泥岩	"
317	"	"	-11	2.8	3.7	0.5	4.48	硬質泥岩	"
318	"	"	-12	1.8	2.1	0.7	2.34	チャート	北上山地
319	"	"	-13	4.65	1.85	0.8	4.55	チャート質粘板岩	"
320	"	"	-14	2.8	2.2	0.45	2.01	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
321	"	"	-15	3.3	2.5	0.4	3.65	"	"
322	"	"	-16	2.3	1.8	0.25	24.17	粘板岩	北上山地
323	"	南斜面	Ⅱ89-1	5.88	3.12	0.8	12.13	泥質凝灰岩	奥羽山地
324	"	不明	-2	2.8	2.45	0.8	5.26	チャート	北上山地
325	"	"	-3	3.6	1.7	0.6	2.37	"	"
326	"	北尾根	-4	1.2	2.6	2.9	9.37	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
327	"	西尾根	-5	4.9	6.6	2.1	69	"	"
328	"	中央尾根	-6	4.9	3.4	0.7	9.93	チャート質粘板岩	北上山地
329	"	西尾根	-7	2.5	4.2	0.8	7.57	硬質泥岩	奥羽山地
330	"	南斜面	-8	4.4	1.8	0.8	6.04	粘板岩	北上山地
331	"	"	-9	2.92	2.23	0.83	4.7	玻璃質流紋岩	奥羽山地
332	"	"	-10	2.8	3.1	0.5	4.3	硬質泥岩	"
333	"	"	-11	2.5	3	0.5	3.98	凝灰質珪質泥岩	"
334	"	"	-12	3.8	2.7	0.8	9.54	硬質泥岩	"
335	"	"	-13	3.1	3	1	3.44	チャート質粘板岩	北上山地
336	"	"	-14	3.2	2.4	0.6	4.38	チャート	"
337	"	"	-15	2.7	3	0.7	5.82	輝綠凝灰岩	"
338	"	"	-16	2.2	2.7	0.6	4.77	粘板岩	"
339	"	"	-17	1.6	2.9	0.5	2.02	チャート	"
340	"	南斜面	Ⅲ90-1	3.4	2	0.7	6.28	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
341	"	"	-2	2.8	2.5	0.7	5.86	硬質泥岩	"
342	"	"	-3	3.4	2.5	0.3	2.86	凝灰質珪質泥岩	"
343	"	"	-4	2.9	1.3	0.3	0.93	チャート	北上山地
344	"	"	-5	2.8	2.3	6.5	4.26	硬質泥岩	奥羽山地
345	"	"	-6	2.9	2.9	0.4	3.71	粘板岩	北上山地
346	"	"	-7	2.9	4.7	1	14	チャート質粘板岩	"
347	"	"	-8	3.2	2.1	0.5	2.52	"	"
348	"	"	-9	2.6	2.1	1.3	4.23	"	"
349	"	"	-10	3.7	4.6	0.7	12.36	珪質泥岩	奥羽山地
350	"	"	-11	2.9	3.1	0.7	6.7	硬質泥岩	"
351	"	不明	-12	2.9	3.3	0.8	7.25	"	"
352	"	南斜面	-13	4.4	2.3	0.5	5.8	凝灰質珪質泥岩	"
353	"	"	-14	2.9	3.2	0.9	6.56	硬質泥岩	"
354	"	不明	-15	2.5	1	0.4	3.85	チャート質粘板岩	北上山地
355	"	南斜面	-16	2.5	2.9	0.5	5.95	チャート	"
356	"	"	-17	4.9	4.6	1	23.98	硬質泥岩	奥羽山地
357	"	"	-18	4.6	2.3	0.7	9.29	輝綠凝灰岩	北上山地
358	"	"	-19	3.6	2.1	0.4	3.34	チャート	"
359	"	"	Ⅲ91-1	4.15	2.1	0.8	6.36	"	"
360	"	"	-2	3.5	1.9	1.9	5.89	チャート質粘板岩	"
361	"	"	-3	3.5	4	1.5	15.36	玻璃質流紋岩	奥羽山地
362	"	"	-4	4.9	6	1.4	32.18	凝灰質珪質泥岩	"
363	"	"	-5	5.5	1.6	1.5	12.73	チャート質粘板岩	北上山地
364	"	"	-6	3	3.2	0.3	4.01	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
365	"	"	-7	4	3.4	1.4	12.74	玻璃質流紋岩	"
366	"	"	-8	3.15	1.75	0.5	2.33	凝灰質珪質泥岩	"
367	"	"	-9	2.9	2.1	1.2	7.23	玻璃質流紋岩	"
368	"	"	-10	2.5	4	0.6	7.86	硬質泥岩	"
369	"	"	-11	5.2	3.1	0.9	15.28	細砂質凝灰岩	"
370	"	"	-12	7.6	7.1	2.9	14.2	粘板岩	北上山地
371	フレイク	北尾根	Ⅲ92-1	4.2	1.5	0.4	2.09	チャート	"
372	"	西尾根	-2	3.9	3.5	0.9	10.22	"	"

表10 石器計測表7

番号	器種	出土地点	図版番号	最大長(㎝)	最大幅(㎝)	最大厚(㎝)	重量(g)	石質	産地
373	アレイク	西尾根	III92-3	5.2	3.3	1.1	18.94	チャート	北上山地
374	"	"	-4	5.9	1.7	0.7	11.59	"	"
375	"	"	-5	4.1	2	0.9	6.74	"	"
376	"	"	-6	3.6	2.9	0.9	13.15	"	"
377	"	"	-7	3.5	2.2	0.6	5.23	"	"
378	"	"	-8	3.4	2.9	0.8	9.67	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
379	"	"	-9	4.1	3.5	1.4	18.37	チャート	北上山地
380	"	"	-10	3.9	2.6	1.2	10.86	"	"
381	"	"	-11	3	2.6	1.2	9.42	"	"
382	"	中央尾根	-12	3.5	1.8	1.2	7.64	"	"
383	"	"	-13	2	1.9	0.4	1.7	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地
384	"	"	-14	4	2.9	0.7	10.21	チャート	北上山地
385	"	"	-15	3.3	1.5	0.4	2.51	チャート質輝綠凝灰岩	"
386	"	"	-16	3.1	3.1	1.8	18.9	チャート	"
387	"	南斜面	III93-1	3.4	2.4	0.8	7.52	チャート質粘板岩	"
388	"	"	-2	3	2.2	1.3	7.77	チャート	"
389	"	"	-3	3.8	4.1	0.9	15.84	"	"
390	"	"	-4	3.6	4	0.9	11.87	"	"
391	"	"	-5	3.1	2.1	0.8	9.76	"	"
392	"	"	-6	2.3	2.4	1.1	6.87	"	"
393	"	"	-7	4.2	2.9	1.2	13.25	"	"
394	"	"	-8	3.5	2.3	1.8	11.02	"	"
395	"	"	-9	3.9	2.3	1.4	12.26	"	"
396	"	"	-10	4.1	4	1.3	20.79	"	"
397	"	"	-11	4.4	2.3	1.3	11.81	"	"
398	"	"	-12	2.6	2.3	0.4	2.13	"	"
399	"	"	-13	2.4	1.9	0.6	2.25	"	"
400	"	"	-14	2.2	1.6	0.7	2.65	"	"
401	"	"	-15	2.3	1.7	0.5	1.93	"	"
402	"	"	-16	2.6	2.9	0.3	2.27	"	"
403	"	"	-17	4.1	5.4	1.6	43.38	"	"
404	"	"	-18	4.1	4	0.9	14.84	珪石	"
405	"	"	III94-1	4.7	3.1	1.2	17.94	チャート	"
406	"	"	-2	5.4	2.2	1.3	18.04	"	"
407	"	"	-3	5.2	2.4	1.5	21.62	"	"
408	"	"	-4	4.6	2.7	1.1	12.74	"	"
409	"	"	-5	3.4	2.2	1.3	11.05	"	"
410	"	"	-6	3.1	3	1	9.74	"	"
411	"	"	-7	3	4.4	1.3	19.51	"	"
412	"	"	-8	2.9	2.6	0.9	7.33	"	"
413	"	"	-9	3.1	2.5	1.1	11.7	"	"
414	"	"	-10	4.8	3.9	1.4	28.23	"	"
415	"	"	-11	2.8	1.6	0.5	2.35	"	"
416	"	"	-12	3.4	2.8	0.9	10.24	"	"
417	"	"	-13	2.7	1.5	1.2	4.25	珪質泥岩	奥羽山地
418	"	"	-14	2.5	2.6	0.7	3.6	チャート	北上山地
419	"	"	-15	5.1	3.5	1.4	18.37	"	"
420	"	"	-16	3	1.3	0.9	3.75	"	"
421	"	"	-17	1.5	3.3	0.6	3.42	"	"
422	"	"	III95-1	5.6	4.8	1.5	42.92	珪質泥岩	奥羽山地
423	"	"	-2	3.1	2.8	1.1	9.4	チャート	北上山地
424	"	"	-3	2.9	1.6	0.3	1.65	"	"
425	"	"	-4	2.5	1.82	0.86	3.55	"	"
426	"	"	-5	2.3	2	0.5	3.14	"	"
427	"	"	-6	2.2	1.3	0.3	0.86	"	"
428	"	"	-7	1.8	2.3	0.7	2.72	"	"
429	"	"	-8	3.2	2	0.6	4.1	"	"
430	"	"	-9	2.5	1.8	1	4.08	"	"
431	"	"	-10	3	1.6	1	6.24	"	"
432	"	"	-11	3	1.8	0.7	3.95	"	"
433	"	"	-12	2.6	1.9	0.4	2.65	"	"
434	"	"	-13	2.2	1.4	0.9	3.3	"	"

表11 石器計測表B

番号	器種	出土地点	区画番号	最大長[cm]	最大幅[cm]	最大厚[cm]	重量[g]	石質	産地
435	フレイク	南斜面	Ⅲ 95-14	2.1	2.35	0.8	4.27	チャート	北上山地
436	"	"	-15	2.4	1.8	0.5	2.83	"	"
437	"	"	-16	2.8	2.6	0.7	9.25	"	"
438	"	"	-17	2.9	1.7	0.8	3.63	"	"
439	"	"	-18	2.7	1.8	1	4.61	"	"
440	"	"	-19	2.2	1.5	0.6	2.06	"	"
441	"	"	-20	2.4	1.8	0.4	1.74	"	"
442	"	"	-21	2.5	1.8	0.7	3.46	"	"
443	"	"	-22	2.3	1.2	1.1	2.65	"	"
444	"	"	-23	3.5	1.9	1	7.73	"	"
445	"	"	-24	3.2	4.1	1.6	16.9	"	"
446	"	"	-25	2.9	1	0.3	0.65	"	"
447	"	"	-26	2.9	1.6	0.65	3.22	"	"
448	"	"	-27	3	1.7	0.9	3.99	"	"
449	磨製石斧	北尾根	Ⅲ 96-1	10.3	4.3	2.1	273	凝灰質硬砂岩	"
450	"	"	-2	8.46	4.86	2.57	180	輝石安山岩	"
451	"	"	-3	5.2	3.1	0.9	21.12	淡緑色凝灰質千枚岩	"
452	"	西尾根	-4	11.1	5.2	2.6	243	輝石安山岩	"
453	"	"	-5	13.4	4.6	2.7	273	"	"
454	"	西谷	-6	6.14	2.82	1.13	34.5	輝石珪岩	"
455	"	"	Ⅲ 97-1	5.85	3.43	1.24	40	凝灰質粘板岩	"
456	"	中央尾根	-2	9.4	4.7	3.1	250	輝石珪岩	"
457	"	"	-3	13.3	3.7	2.7	200	"	"
458	"	"	-4	2.2	1.4	0.6	3	淡緑色板状凝灰岩	"
459	"	南斜面	-5	8.2	4.39	2.46	150	輝石珪岩	"
460	"	"	-6	10.15	4	2.43	160	角礫凝灰質硬砂岩	"
461	"	"	-7	9.82	4.93	2.44	180	硬砂岩	"
462	"	"	Ⅲ 98-1	12.94	5.1	2.84	210	"	"
463	"	"	-2	5.6	2.8	1	20.83	輝石珪岩	"
464	"	"	-3	1.6	3	1.2	5.87	輝石安山岩	"
465	"	"	-4	6.5	2.7	1.3	35.35	凝灰質粘板岩	"
466	"	"	-5	7.65	4.35	2.74	150	輝石珪岩	"
467	"	"	-6	7.85	4.6	2.3	150	輝石安山岩	"
468	"	"	-7	5.62	4.3	2.13	90	輝石珪岩	"
469	"	"	-8	4.32	4.52	2.22	70	"	"
470	"	"	Ⅲ 99-1	5.72	3.72	2.32	90	粘板岩	"
471	"	"	-2	3.3	3	1.7	24.7	閃緑岩	"
472	"	"	-3	10.25	4.92	2.63	180	輝石珪岩	"
473	"	"	-4	9.4	4.7	2.4	178	輝石安山岩	"
474	"	"	-5	12.84	3.54	2.63	210	硬砂岩	"
475	"	"	-6	8.9	4.18	3	170	輝石珪岩	"
476	"	"	Ⅲ100-1	5.62	3.52	2.62	80	凝灰質硬砂岩	"
477	"	"	-2	5.85	3.4	2.1	52.8	輝石珪岩	"
478	"	"	-3	5.74	3.44	1.9	60	"	"
479	"	"	-4	4.7	5.2	2.5	90	硬砂岩	"
480	"	"	-5	4.6	1.2	0.9	8.56	粘板岩	"
481	"	"	-6	5.94	3.7	2.83	180	凝灰質硬砂岩	"
482	"	"	-7	12.12	4.36	2.78	230	輝石珪岩	"
483	"	"	-8	7.6	2.9	1.2	42.64	硬砂岩	"
484	"	"	Ⅲ101-1	4.1	4	1.3	20.79	チャート	"
485	"	"	-2	7.82	3.1	1.67	70	輝石安山岩	"
486	"	東尾根	-3	2.9	4.1	1.8	27.49	"	"
487	"	不明	-4	7.72	3.93	1.94	110	凝灰質硬砂岩	"
488	"	"	-5	6.94	4.54	2.52	140	輝石珪岩	"
489	砥石	南斜面	-6	6.9	5.6	5	100	滑岩	岩手火山
490	"	東谷	-7	5.64	5.12	2.02	80	硬砂岩	北上山地
491	石剣	南斜面	Ⅲ119-1	6.52	4.64	1.04	33.43	凝灰質粘板岩	"
492	"	"	-2	3.8	1.8	1.4	5.26	粘板岩	"
493	"	"	-3	6.2	2.8	1.1	25.55	"	"
494	"	"	-4	12	3.5	1.5	80	"	"
495	"	"	-5	12.2	2.6	0.9	41.83	"	"
496	"	"	-6	9.4	3.1	0.7	27.45	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地



表12 石器計測表9

番品	器種	出土地点	図面番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地	
497	石 剣	中央尾根	III119-7	6.8	4.2	1.1	50.9	粘板岩	北上山地	
498	石 錘	南斜面		-8	10.5	5.2	2.3	180	硬砂岩	"
499	"	"	III120-1	6.3	4.6	1.65	80	凝灰質埋泥岩	奥羽山地	
500	片磐状石製品	西 谷		-2	4.6	3.8	1.3	330	"	"
501	"	中央尾根		-3	4.22	3.72	0.51	10.81	凝灰質粘板岩	北上山地
502	"	"		-4	3.92	4.34	1.74	44.8	硬砂岩	"
503	"	南斜面		-5	3.8	4.1	1	24.2	輝石安山岩	奥羽山地
504	"	"		-6	4.57	4.03	0.64	16.11	泥質凝灰岩	"
505	"	"		-7	4.2	4.65	0.1	21.95	"	"
506	"	"		-8	4.7	4.5	0.7	22.45	粘板岩	北上山地
507	"	"		-9	4.52	4.22	0.82	21.25	凝灰質粘板岩	"
508	"	"		-10	4.5	4.42	0.1	26.05	粘板岩	"
509	"	"	III121-1	4.13	4.01	0.73	18.86	凝灰質粘板岩	"	"
510	"	"		-2	4.1	4.5	0.8	25.5	"	"
511	"	"		-3	4.2	4.2	0.5	13.5	粘板岩	北上山地
512	"	"		-4	3.8	4.2	0.5	10.1	"	"
513	"	"		-5	4.63	2.04	0.23	3.89	凝灰質粘板岩	"
514	"	"		-6	3.72	2.72	0.63	9.27	"	"
515	"	"		-7	3.4	3.3	0.6	11.6	粘板岩	"
516	"	不 明		-8	4.2	3.5	1	23.25	"	"
517	"	南斜面		-9	3.5	3.9	0.7	13.95	硬砂岩	北上山地
518	"	不 明		-10	4.25	4.25	1.9	40.71	砂 岩	奥羽山地
519	"	"		-11	3.7	3.4	3.4	16.7	白色細粒凝灰岩	"
520	"	南斜面		-12	3.55	3.4	3.3	34.75	砂 岩	"
521	"	"	III122-1	5.5	2.3	1.28	24.05	輝石安山岩	北上山地	
522	"	"		-2	3.45	2.8	1	11.5	硬質泥岩	奥羽山地
523	"	"		-3	5	1.7	1.1	14.25	硬砂岩	北上山地
524	"	"		-4	2.6	1.9	0.9	6.61	角礫質硬砂岩	"
525	"	"		-5	3.8	2.1	1.2	12.51	凝灰質埋泥岩	奥羽山地
526	"	"		-6	2.6	1.8	0.9	6.2	チャート	北上山地
527	鏡石製浮子	中央尾根		-7	4.3	5.3	1.3	5.74	白色細粒凝灰岩	奥羽山地
528	"	南斜面		-8	3.3	3.4	1.6	21.4	"	"
529	刮線岩球	"		-9	4.5	4.6	4.3	100.1	角礫質硬砂岩	北上山地
530	磨脚刀	中央尾根		-10	3.65	2	0.55	5.2	白色細粒凝灰岩	奥羽山地
531	骨製器	西尾根	III102-1	15	11	2	640	泥灰質粘板岩	北上山地	
532	磨 石	北尾根		-2	13.76	8.4	7.8	1200	花崗閃綠岩	北上山地
533	"	"		-3	10.13	8.64	6.12	810	石英安山岩	"
534	"	"		-4	7.6	5.8	4.5	300	角閃黑雲母花崗岩	"
535	"	"		-5	11.3	7.4	6.3	840	"	"
536	"	"		-6	13.14	9.32	5.92	1110	石英安山岩	"
537	"	西尾根		-7	8.5	4.2	5	150	角閃黑雲母花崗岩	"
538	"	北尾根		-8	9.7	8	5.3	550	輝石安山岩	"
539	"	西尾根		-9	4.8	5.1	2.2	80	硬砂岩	"
540	"	"		-10	9.9	7.8	6.3	640	輝石安山岩	奥羽山地
541	"	不 明		-11	12.03	7.32	5.04	810	花崗閃綠岩	北上山地
542	"	西 谷	III103-1	14.86	9.24	7.28	1590	角礫凝灰質硬砂岩	"	
543	"	"		-2	11.24	8.48	5.64	830	硬砂岩	"
544	"	"		-3	10.04	8.12	5.32	680	角礫凝灰質硬砂岩	"
545	"	"		-4	8.14	7.14	5.13	510	輝石安山岩	"
546	"	中央尾根		-5	11.02	7.34	5.21	650	花崗閃綠岩	"
547	"	"		-6	9.9	6.77	3	340	輝石安山岩	"
548	"	西 谷		-7	3.2	5.5	3	60	硬砂岩	"
549	"	中央尾根		-8	5.1	4.9	1.7	60	"	"
550	"	"		-9	5.8	4.8	1.9	80	"	"
551	"	西 谷		-10	15.2	5.9	4.3	540	"	"
552	"	中央尾根		-11	12.3	9.6	7	1270	角閃黑雲母花崗岩	"
553	"	"		-12	11.85	8.63	6.43	1030	硬砂岩	"
554	"	南斜面	III104-1	12.4	9.4	6.3	1110	チャート	"	
555	"	"		-2	9.1	8.5	7.5	1000	石英英岩	"
556	"	中央尾根		-3	11.2	7.6	6.5	720	硬砂岩	"
557	"	南斜面		-4	11.6	9.8	4.9	800	粘板岩	"
558	"	"		-5	9.84	7.28	5.50	580	輝石安山岩	"

表13 石器計測表10

番号	器 種	出 土 地 点	図版番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	産 地
559	磨石	南斜面	Ⅲ104-6	11.7	7.9	4.6	550	硬砂岩	北上山地
560	"	"	-7	10.9	8.1	7.8	770	角閃黒雲母花崗岩	"
561	"	"	-8	9	8.8	4.1	340	輝石安山岩	"
562	"	"	-9	12.12	8.54	5.94	910	花崗閃綠岩	"
563	"	"	-10	10.32	7.24	4.44	510	"	"
564	"	"	-11	15.9	8.2	7	1320	角閃黒雲母花崗岩	"
565	"	"	Ⅲ105-1	10.53	8.04	5.92	660	硬砂岩	"
566	"	"	-2	10.3	8.8	7	700	輝石安山岩	"
567	"	"	-3	10	6.12	4.32	400	花崗閃綠岩	"
568	"	"	-4	13.5	6.9	5.4	800	硬砂岩	"
569	"	"	-5	11.12	9.23	5.52	830	角礫凝灰質硬砂岩	"
570	"	"	-6	8.02	6.74	6.12	330	硬砂岩	"
571	"	"	-7	9.14	8.24	5.82	600	花崗閃綠岩	"
572	"	中央尾根	-8	10.62	6.24	5.82	680	"	"
573	"	北尾根	-9	11.54	6.62	4.73	650	"	"
574	"	"	-10	9.84	7.9	6.1	820	輝石安山岩	"
575	"	中央尾根	Ⅲ106-1	11.62	6.64	5.1	630	角礫凝灰質硬砂岩	"
576	"	不明	-2	8.3	5.5	5.7	340	輝石安山岩	"
577	"	南斜面	-3	9.3	6.82	5.01	540	花崗閃綠岩	"
578	"	"	-4	8.1	0.6	5.2	300	輝石安山岩	"
579	"	不明	-5	7.83	6.04	4.74	290	花崗閃綠岩	"
580	"	南斜面	-6	10	7.2	4.3	400	硬砂岩	"
581	"	不明	-7	8.5	5.3	5.8	350	輝石安山岩	"
582	"	"	-8	7.23	4.14	4.54	230	花崗閃綠岩	"
583	"	中央尾根	-9	6.35	5.7	3.5	145	角閃黒雲母花崗岩	"
584	"	"	-10	8.73	4.13	1.72	100	硬砂岩	"
585	"	"	-11	9.53	6.32	6.13	380	石英安山岩	"
586	"	"	-12	6.76	3.8	2.77	110	硬砂岩	"
587	"	"	-13	5.9	5.52	3.82	170	"	"
588	"	"	-14	11.8	5.8	2.8	240	"	"
589	"	"	-15	13.3	6.15	2.8	350	"	"
590	"	"	-16	10	5.3	4.9	380	角閃黒雲母花崗岩	"
591	"	南斜面	Ⅲ107-1	5.83	7.74	5.43	290	輝石安山岩	"
592	"	"	-2	7.3	4.8	3.4	200	"	"
593	"	"	-3	9	5.5	3.2	200	凝灰質硬砂岩	"
594	"	"	-4	0.7	5.1	3.2	180	硬砂岩	"
595	"	"	-5	5.7	5.4	3.7	150	"	"
596	"	"	-6	5	5.5	5.3	210	輝石安山岩	"
597	"	"	-7	7.93	5.18	3.1	150	硬砂岩	"
598	"	"	-8	11.2	6.2	2.9	280	"	"
599	"	"	-9	8.6	4.88	2.23	170	"	"
600	"	"	-10	11	5.3	4.4	340	"	"
601	"	"	-11	10	5.9	2.1	140	"	"
602	"	"	-12	7	6.5	2.7	180	"	"
603	"	"	-13	5.6	5.2	5	180	輝石安山岩	"
604	"	不明	-14	6	5.2	5	240	角閃黒雲母花崗岩	"
605	"	南斜面	-15	4.6	4.1	3.7	80	粘板岩	"
606	"	"	-16	4.24	4.22	3.63	70	輝石安山岩	"
607	"	"	-17	5.22	4.8	3.38	100	"	"
608	"	"	-18	3.1	2.9	2.9	29.4	硬砂岩	"
609	"	"	-19	4.2	3.7	2.2	43	粘板岩	"
610	"	"	-20	4.7	3.5	2	46.7	輝石安山岩	"
611	"	"	-21	3.7	3.5	2.9	40.9	"	"
612	"	"	-22	3.9	3.6	2.6	32.6	"	"
613	"	"	-23	5	4.2	3.5	80	"	"
614	"	"	-24	3.74	3.72	3.34	50.5	硬砂岩	"
615	"	"	-25	5.6	4.8	3.7	130	"	"
616	"	"	-26	8.4	5.9	4.8	170	輝石安山岩	"
617	"	"	-27	7	4.8	3.6	140	硬砂岩	"
618	"	"	Ⅲ108-1	11.64	8.62	5.5	810	輝石安山岩	"
619	"	"	-2	13.8	7.8	6.2	900	"	"
620	"	"	-3	9.77	7.1	4.86	430	硬砂岩	"

表14 石巻計測表11

番号	部 種	出土地点	図版番号	最大長(m)	最大幅(m)	最大厚(m)	重量(g)	石 質	産 地
621	磨石	北尾根	III108-4	10.25	9.15	5.22	560	硬砂岩	北上山地
622	"	不明	-5	8.2	4.5	3.9	180	"	"
623	"	中央尾根	-6	20	7.9	6	920	"	"
624	"	"	-7	13	8	6.9	680	"	"
625	"	"	-8	13.7	8	7	700	"	"
626	"	"	-9	11	6.2	5.7	280	"	"
627	"	不明	-10	12.22	7.57	6.64	810	"	"
628	"	"	-11	14.72	6.42	5.74	790	"	"
629	"	南斜面	-12	14.2	6.02	4.24	520	"	"
630	敲石	中央尾根	III109-1	8	4.2	3.6	230	粘板岩	"
631	"	南斜面	-2	18	5.9	3.6	430	硬砂岩	"
632	"	"	-3	15.5	2.8	2.3	150	チャート	"
633	"	"	-4	6.12	5.23	5.34	230	"	"
634	"	"	-5	6.84	5.44	5.74	230	輝石安山岩	"
635	"	"	-6	11.7	4.05	2.94	210	硬砂岩	"
636	凹石	中央尾根	-7	10.73	6.72	4.73	510	"	"
637	"	不明	-8	15.12	5.13	3.14	340	チャート質粘板岩	"
638	"	西尾根	-9	10.2	6.3	4.9	530	角閃黒雲母花崗岩	"
639	"	南斜面	-10	7.4	4.58	2.86	150	凝灰質粘板岩	"
640	"	"	-11	11.82	5.49	4.98	450	硬砂岩	"
641	"	"	-12	11.8	5.2	3.7	350	"	"
642	"	"	-13	6.35	5.2	5.15	220	"	"
643	"	"	-14	9.2	6.5	4.2	110	溶 岩	岩手火山
644	"	北尾根	III110-1	9.4	7.1	4.9	390	硬砂岩	北上山地
645	"	"	-2	10.2	7.3	4.5	500	"	"
646	"	"	-3	13.84	5.42	3.54	410	"	"
647	"	"	-4	11.62	7.42	4.34	530	輝石安山岩	"
648	"	西尾根	-5	10.8	5.1	3.9	320	硬砂岩	"
649	"	西 谷	-6	5.44	6.24	2.52	130	"	"
650	"	西尾根	-7	9.3	6.2	3	200	チャート質粘板岩	"
651	"	西 谷	-8	10.5	6	3	270	チャート	"
652	"	中央尾根	-9	11.92	5.34	3.44	550	半花崗岩	"
653	"	"	-10	8.8	7.63	4.52	380	輝石安山岩	"
654	"	"	-11	8.32	6.6	3.3	300	石英安山岩	"
655	"	"	-12	13.5	5.44	2.22	200	チャート質粘板岩	"
656	"	"	-13	12.53	7.22	3.12	390	硬砂岩	"
657	"	"	-14	12.04	5.12	2.54	240	"	"
658	"	"	-15	13.6	5.84	3.1	350	"	"
659	"	"	-16	10.55	8.14	4.88	490	輝石安山岩	"
660	"	南斜面	III111-1	6	6.1	3	120	"	"
661	"	"	-2	12.9	5.7	4.5	360	硬砂岩	"
662	"	"	-3	13	6.5	4.3	390	チャート	"
663	"	"	-4	7.8	6	4.7	300	硬砂岩	"
664	"	"	-5	15.24	5.44	3.24	390	"	"
665	"	"	-6	12.9	5.9	3.6	350	"	"
666	"	"	-7	10.93	8.44	3.32	440	角礫凝灰質硬砂岩	"
667	"	"	-8	12.34	5.1	4.09	300	硬砂岩	"
668	"	"	-9	13.22	8.72	6.43	1020	"	"
669	"	"	-10	9.94	8.24	6.14	710	"	"
670	"	"	-11	11.8	7.5	4.5	520	"	"
671	"	"	-12	3.42	6.14	4.73	110	輝石安山岩	"
672	"	"	-13	9.2	9.2	2.8	200	粘板岩	"
673	"	"	-14	14.52	7.43	4.91	660	硬砂岩	"
674	"	西尾根	-15	12.8	8.3	6.3	1000	輝石安山岩	"
675	"	南斜面	-16	13	8	3.5	500	チャート質粘板岩	"
676	"	"	III112-1	14.8	6.32	2.98	430	"	"
677	"	"	-2	14.92	4.5	4.2	420	"	"
678	"	"	-3	13.09	7.93	2.33	300	"	"
679	"	"	-4	10.6	7.1	3.6	350	硬砂岩	"
680	"	"	-5	10.56	4.32	2.19	170	チャート質粘板岩	"
681	"	"	-6	8.3	6.9	3.3	300	チャート	"
682	"	"	-7	8.4	7.1	3.8	300	"	"

表15 石器計測表12

番号	器種	出土地点	図版番号	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量(g)	石質	産地
683	凹石	南斜面	Ⅲ112-8	7.1	6.28	4.78	290	輝石安山岩	北上山地
684	"	"	-9	6.02	6.54	4.22	170	"	"
685	"	"	-10	9.7	6.7	4.2	380	硬砂岩	"
686	"	"	-11	8.82	5.64	3.54	210	輝石安山岩	"
687	"	"	-12	13.72	7.02	3.34	500	チャート	"
688	"	"	-13	4.63	4.22	3.62	90	チャート質輝綠凝灰岩	"
689	"	"	-14	7.17	6.68	5.42	350	輝石安山岩	"
690	"	"	-15	9.63	6.64	3.62	320	硬砂岩	"
691	"	"	-16	10.6	6.3	5.2	400	"	"
692	"	"	-17	12.7	6.3	4.55	460	"	"
693	粗製石皿	"	Ⅲ113-1	15.6	11	6	1460	"	"
694	"	北尾根	-2	8.2	5.9	7.1	590	兩輝石安山岩	昔手大山麓部
695	"	中央尾根	-3	12.5	10.6	2.6	400	流紋岩質黒細粒凝灰岩	北上山地
696	"	西谷	-4	11.72	13.34	3.63	680	凝灰質砂岩	"
697	"	中央尾根	-5	18	7.6	7.1	1200	硬砂岩	"
698	"	西谷	-6	14.13	11.28	4.82	1000	チャート	"
699	"	中央尾根	-7	10.9	7.8	3.4	400	硬砂岩	"
700	"	"	-8	13.94	11.02	3.84	560	"	"
701	"	"	-9	16.7	16.9	4	1540	"	"
702	"	"	-10	57.5	21	6.5	11200	"	"
703	"	"	Ⅲ114-1	24.4	13.3	5.9	2050	凝灰質砂岩	"
704	"	"	-2	22.7	16.7	8.3	4160	硬砂岩	"
705	"	"	-3	13.2	9.2	10.1	960	"	"
706	"	南斜面	-4	17.3	11.5	5.4	2050	角礫質硬砂岩	"
707	"	中央尾根	-5	10.1	7.7	3.3	280	硬砂岩	"
708	"	東尾根	-6	7.5	6.8	4.2	370	角閃黒雲母花崗岩	"
709	"	中央尾根	-7	47.1	25.8	8.1	14700	硬砂岩	"
710	"	南斜面	-8	13.74	8.52	3.04	600	輝石安山岩	"
711	"	"	Ⅲ115-1	27.4	13.5	6.8	2880	凝灰質粘板岩	"
712	"	"	-2	35.7	16.6	4.1	3060	"	"
713	"	"	-3	18.3	18.3	6.1	2020	硬砂岩	"
714	"	"	-4	18	11	5	480	"	"
715	"	"	-5	12.9	11.1	5.8	1000	"	"
716	"	"	-6	23	10.2	6.5	2380	チャート質粘板岩	"
717	"	"	-7	12.4	6.2	4.4	440	硬砂岩	"
718	"	"	-8	12.4	9	4.2	700	チャート	"
719	"	"	-9	19.5	22	8.2	5010	角礫質硬砂岩	"
720	"	"	Ⅲ116-1	19.8	15.3	4.2	1500	"	"
721	"	"	-2	17.8	14	4	1300	チャート	"
722	"	"	-3	5.3	12.8	3.3	930	硬砂岩	"
723	"	"	-4	11.3	6.7	3.1	400	長石珪岩	"
724	"	"	-5	18.9	16.8	5.5	2400	硬砂岩	"
725	"	"	-6	12.42	10.02	4.42	750	"	"
726	"	"	-7	6.12	5.82	5.84	310	チャート	"
727	"	"	-8	8.84	5.32	4.54	370	硬砂岩	"
728	"	"	Ⅲ117-1	14.62	11.74	5.04	1390	"	"
729	"	"	-2	12	11.2	7.1	1000	"	"
730	"	"	-3	17.5	10.9	6.4	2580	"	"
731	"	"	-4	13	7.7	6.7	700	"	"
732	"	"	-5	17.6	13.2	10.5	2680	"	"
733	"	"	-6	18.8	12.81	6.3	2060	"	"
734	"	"	Ⅲ118-1	9.4	11.4	8	1200	角礫質硬砂岩	"
735	"	"	-2	12.8	11.1	6.6	820	硬砂岩	"
736	"	"	-3	39.2	33	12.5	16100	凝灰質粘板岩	"
737	"	中央尾根	-4	47.9	31.5	6.5	16100	硬砂岩	"
738	"	南斜面	-5	40.5	32.4	12.3	19200	"	"

## II. ま と め

### (1) 土器

当遺跡から出土した縄文時代の土器については時期毎にⅠ～Ⅴ群に分類した。出土量は、縄文時代後期に位置づけられる第Ⅲ群土器が大多数を占め、本遺跡の主体となる土器である。晩期の第Ⅳ群土器がこれに次ぐが出土量は少ない。第Ⅰ群・Ⅱ群・Ⅴ群土器はさらに少ない。はじめに、各群について若干の説明をし、出土量の多い第Ⅲ群土器については、この後に詳しく述べたい。

**第Ⅰ群土器** 西谷地区出土の1点だけである。口縁部を欠くが、体部～底部の残存状態は良好である。胎土に多量の植物繊維を含む点や底部形態が緩い丸底を呈することから、青森県早稲田貝塚第6類土器に類似する。地文には複節で結束された羽状縄文を主体として施し、当類のうち、C類に相等するものと考えられる。

**第Ⅱ群土器** 東北地方南部で中期末葉期に位置づけられる土器群の大木10式の文様構成に類する土器である。周辺部の遺跡では、二戸市上村遺跡 Ce68 住居址出土の土器に類似する。当遺跡出土の土器は体部上端部を欠き、口縁部形態や文様構成の詳細は不明なもの、体部中央部に波頭状の沈線が文様帯を区画することや、この沈線の入組部分に「鱗状突起」をもつことなど、文様構成要素には類似点が多く同一時期のものとした。なお、これらの土器を中期とするか、後期に位置づけるかという事については問題を残す。当報告書では後述する第Ⅲ群土器との差をもって、これらの土器群を中期末葉期の範疇に入れた。

**第Ⅲ群土器** 前述のとおり、出土した土器群中最も多い。時期別にa～dの小群を設定し、a・b類についてはさらに1・2類に細分した。量的には初頭及び前葉期に位置づけられるa類とb類が卓越する。

(1) a<sub>1</sub>類 第Ⅱ群土器とした大木10式の影響を強く受けている土器群である。文様のモチーフは、前述の上村遺跡 Ce68 住居址出土の土器に類似し、文様帯の末端に「鱗状突起」をもつことも同様である。しかし、新しい要素として、隆帯による口縁部文様の構成と器面の4区画があげられる。Ce68 住居址出土の土器にも、口縁部を区画する隆帯が施されるが、口縁部に文様を構成しない点、隆帯が体部に及ばない点で異なる。隆帯による区画をもたないものについては、体部中央部に文様が施されることや下位に波頭状文の区画をもたない点、また胎土が類似することなどから同類とした。隆帯による器面の区画は後続する土器群にもみられ、系統的に1つの基点となるものと考え、この段階をもって後期初頭とした。

(2) a<sub>2</sub>類 a<sub>1</sub>類に後続し、所謂十腰内Ⅰ式土器の直前までの土器群である。時期的には、青森県沢沢遺跡第1～3群土器に近いものと考えられる。形態や文様・文様表出の方法はバラエ

ティーに富む。文様は渦巻文・区画文などが主体で、隆帯や沈線・磨消縄文などによって表出される。

(3)  $b_1$ 類 所謂十腰内I式の前段階のものである。文様的には $a_2$ 類の流れを汲むものが多い。文様の表出は沈線によるものが主体となるが、磨消縄文のものも多い。文様には区画文・渦巻文・横位に展開する曲線文、またこれらが複合するものがある。

(4)  $b_2$ 類 十腰内I式の後半期のもので、所謂大湯式に相等するものである。文様は沈線による横位の曲線文が主体となるが、大柄な磨消縄文や3～5本の沈線を伴う上下の縄文帯を同様な縄文帯によって斜位や縦位に繋ぐものや、多条痕文による曲線文が現われる。

(5) c類 後期中葉期に位置づけられる十腰内II式や加曾利B<sub>1</sub>式に相等するもので、量的には非常に少ない。このうち加曾利B<sub>1</sub>式に類する土器群は、西尾根地区から集中して出土している。

(6) d類 後期末葉期の宮戸III式、一部は晩期初頭の大洞B式の前段階に相等する土器群である。

**IV群土器** 出土量は第III群土器に次ぐものであるが、量的に多いとはいえない。時期別には初頭に位置づけられる大洞B式～後葉のA式に渡たる。このうち、中葉～後葉期のC<sub>2</sub>式とA式では、西谷地区の住居址から移行段階を思わせるセットが出土している。量的にもこの時期のものが多く出土した。

**第V群土器** 弥生時代中期の土器群であるが、出土量は極めて少ない。中央尾根南斜面から4個体分の破片が得られただけである。文様は連弧文を主体とする磨消縄文のもの、細い縄文区画帯による「工」字文状のもの、沈線による連続山形文のものがある。連弧文を主体とする点で所謂念仏間式に相等するものと考えられる。

#### 縄文時代中期末葉期から後期前葉期の土器について

ここでは、今回の調査で最も出土量が多く、駒板遺跡において主体をなす縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられる土器について、その変遷を考えてみたい。しかし、遺跡が斜面を多くもつ数本の枝尾根上に立地するため、住居址の検出状況は良好なものとは言えず、または遺物も明確に層位関係が把握できたものはない。ここでは文様の表出方法及び文様構成を分類・変遷過程の基準とした。また、近年の調査で得られた資料や、これに基づく研究を多く参考とした。<sup>(1)</sup>

東北地方南部の中期末葉期に位置づけられる大木10式は、岩手県北部や青森県においても広く分布することが近年の調査や研究で明らかにされている。駒板遺跡の周辺でも、君成田IV遺跡や叭屋敷Ia遺跡から良好な資料が出土し、当地域もこの分布圏に入るものである。当遺跡

出土の後期初頭の土器群には、かなりの割合で大木10式の影響がみられる。前述の如く中期と後期の位置づけをどこに求めるかという問題は残すが、明瞭な一線を描くことはできないまでも、土器群の変遷は迎れる資料として a<sub>1</sub>類があげられる。文様のモチーフは大木10式に類似するものの、隆帯による口縁部文様帯の構成や体部区画は前段階にはみられない特徴である。これらの土器の口縁部に施される「入組状渦巻文」や器面区画の発生については、今の所定かではない。岩手県南部で後期初頭の指標とされる門前式の文様の中に、連鎖状浮線文による渦巻文や、「S」字状文が「入組状渦巻文」風の文様を構成しており、これらと何らかの関わりをもっとも考えられるが、岩手県北部や青森県では、門前式に相当する土器は出土しておらず、やはり詳細は不明と言えよう。

a<sub>1</sub>類に後続する a<sub>2</sub>類では、文様の構成や表出方法は多岐に渡り、これらはお細分・統合されるものと考えられる。本間(1985)は、文様構成から「方形区画文系統」と「三角形区画文系統」の2つの系統に分類し、これら2つの系統が共存している可能性を指摘した。方形区画文系統の土器の発生は、a<sub>1</sub>類土器からのスムーズな移行として捕えられる。本間氏は三角形区画文系統の土器の発生を門前式土器に求めているが、筆者は前述の理由でなお検討を有するものであろうと考える。しかし、方形区画文系統と三角形区画文系統(横位展開する曲線文)の土器群が存在することは事実であり、共存関係も、青森県倉石村葉師前遺跡出土の甕棺のセット<sup>(2)</sup>などから推定して可能性は強いと思われる。さらに同氏の指摘どおり、この後の段階においても、2系統が独立し、あるいは融合しながら土器群を構成するものと考えられる。

当遺跡 a<sub>2</sub>類土器における、方形区画文系統のものでは、上面に縄文をもつ隆帯によって器面区画されるもの(第2図7)が先行すると考えられる。この後に続くものとしてはIII B91住居址出土の土器やIV I 65ピット出土の甕、さらにII F 87住居址床面出土の土器類があげられる。横位展開する曲線文系統には、上面に縄文をもつ隆帯によって渦巻文が構成される土器(第3図1)が先行するものとしてあげられ、これに半肉刻的隆帯によって文様構成がなされる土器群が後続すると考えられる。また半肉刻的文様が施される土器群には、次の段階の文様構成要素となる、連弧状の区画文が現われている。

以上 a 類についてみてきたが、a<sub>1</sub>類では、青森県牛ヶ沢(3)遺跡第III群土器が相当すると考えられる。a<sub>2</sub>類については岩手県岩手成田IV遺跡 F 47住居址出土土器・同県下村 B 遺跡 Da15-1 土壇・Da15-2 土壇出土土器・青森県垂塚遺跡出土の土器が相当すると考えられる。

b 類としたものは、所謂十腰内 I 式とされる土器群である。この土器群の細分が提唱されてから久しく、この間多くの研究発表がなされた。分類・変遷過程の詳細については意見が異なることも多いが、大筋では前半期と後半期が存在し、後半期には所謂大湯式の影響が大きくなる点では意見の一致をみている。また、分布的にみても、後半期には宮城・岩手県南部にも同

類の土器が広く出土している。

b<sub>1</sub>類としたものは、前半期に入るものである。文様形態は、方形区画文系統・三角形区画文系統の2系統に分かれるが、新たに前段階でみられた連弧状の区画文が主体となるものが現われる。これは三角形区画文の変化した形態と理解されるかも知れない。文様の表出方法は、沈線によるものが主体を占めるが、磨消縄文も用いられている。隆帯は口縁部や体部下端に施されるものがあるが、主文様を構成することはなくなる。

方形区画文系統の土器では、区画内に「X」字状の文様や、重複する方形文が施されるものが先行し、これに後続すると考えられるものは、区画をはみ出すような文様が描かれ、次段階への移行過程が窺われる。三角形区画文系統の土器では「渦巻文」を主な文様としている。これらは縦方向の渦巻文を配し、これを横位に繋ぐものが多いが、III E90住居址床面出土のセットにみられるように、大柄な渦巻文を横位に展開する土器類も現われる。大柄な渦巻文をもつ土器類も次段階への移行が窺える資料であろう。連弧状の区画文をもつものは、磨消縄文と沈線文によって表出される。前段階との関連で「連弧状」としたが、実際には隅丸方形や楕円・円形・不整三角形のものが多い。後には三角形区画文と隔合したようなものも多く、次段階では消滅する。

b<sub>2</sub>類では、横方向に大柄に展開する文様が主体となり、前段階までの2系統の差は減少する。文様の表出方法は多様化し、磨消縄文の他に、他条痕文や数本の沈線を伴う縄文帯による文様も出現する。文様は多くの場合体部上半部に施されるようである。このうち磨消縄文によるものは三角形区画文系統の流れを汲むものと考えられる。また多条痕によるものは、前段階の大柄な渦巻文や区画をはみ出して施文される方形区画文系統の土器が発展したものと考えられる。沈線を伴う縄文帯による文様の発生は、よくわからないが、モチーフ的には磨消縄文や多条痕文による文様と類似し、これらからの発展と考えられる。III C81-1住居址出土の土器は口縁部にこの簡略化した文様が施され、体部には磨消縄文が巡り、次段階の十腰内II式に移行する過渡期の資料といえよう。

以上、簡単に駒板遺跡出土の中期末葉から後期前葉期の土器について様相と変遷について、みてきたが、紙面の関係上かなり不十分なものとなった。今後、資料を加えるとともに、修正を行ない改めて稿を起すつもりである。

#### 〈註記〉

- (1) 当報告書を作成するにあたり、下記の方々に多くの御指導・御教示をいただいた。末筆ながら深謝する。(敬称略・五十音順)

秋元信夫・市川金丸・宇部則保・岡田康博・工藤竹久・工藤 大・熊谷常正・坂本洋一・



中村良幸・成田滋彦・島山 昇

- (2) 同一土壌内より、隆帯による横位に展開する文様をもつ深鉢と、方形区画文が施された  
壺、計3個が出土している。壺棺という特殊な機能をもつ土器ではあるが、同一ピットに  
埋葬されているという状況からは、大きな時間差は考えられない。

〈参考・引用文献〉

- (1) 葛西 勲 (1979) : 十腰内I式土器の編年的細分、北奥古代文化11  
(2) 成田滋彦 (1981) : 後期の土器—青森県の土器、縄文文化研究4  
(3) 今井富士雄・磯崎正彦 (1968) : 十腰内遺跡、岩木山  
(4) 葛西 勲他 (1979) : 釜沢遺跡、青森県教育委員会  
(5) 坂本洋一他 (1984) : 荏藤遺跡、青森県教育委員会  
(6) 工藤 大他 (1984) : 牛ヶ沢(3)遺跡、青森県教育委員会  
(7) 島山 昇他 (1984) : 一ノ波遺跡発掘調査報告書、青森県教育委員会  
(9) 山道紀郎他 (1976) : 近野遺跡発掘調査報告書 (II)、青森県教育委員会  
00 鈴木優子他 (1983) : 上村遺跡・下村A遺跡・下村B遺跡発掘調査報告書、岩手県埋文センター文化財調査報告  
書第56集  
01 遠藤勝博他 (1983) : 若成田IV遺跡発掘調査報告書、岩手県埋文センター文化財調査報告書第62集  
02 中村良幸 (1979) : 立石遺跡、大泊町教育委員会  
03 本堂寿一 (1979) : 八天遺跡、北上市教育委員会  
04 本間 宏 (1985) : 東北地方北部における縄文後期前葉土器群の突進、よねしろ考古1  
05 高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正 (1982) : 岩手の土器、岩手県立博物館  
06 上野 猛・桐生正一 (1977) : 荒谷B遺跡発掘調査報告書、岩手県教育委員会



※ II F 87住一拵出土

第123図 縄文時代中期末葉～後期前葉期土器集成図



第124図 縄文時代中期末葉～後期前葉期土器集成図

## (2) 土製品

### 土偶

出土破片数は13点である。中空の胴部片1点は縄文晩期、そのほかは縄文後期のものと考えられる。出土している後期の土偶は板状のものである。頭部は2点で、胴部と接合したものの1点、頭だけのもの1点である。ともに顔面はやや上向きで逆三角形を呈し、目や口を刺突孔で表現している。1点は眉から鼻にかけてを隆帯で表わし、頭部に2つの貫通孔をもつものである。カールやコブ状の頭髪の表現はみられない。胴部はへそを突出させ、腹背面に細沈線で弧状文や縦横の直線文が描かれている。腰裏を表現していると思われるものも1点出土している。同類のものは岩手県大迫町立石遺跡、秋田県能代市真壁地遺跡からも出土している。胴部に刺突文や縄文を施したもの、無文のものは出土していない。脚部はO脚のものが多い。足の先端に刻線を入れて指を表現しているものと、刻線を入れていないものがある。

13点のうち、12点は中央尾根南斜面から出土している。しかも、遺構内外を合わせると、III E 90グリッド4点、III F 90グリッド2点、III H 92グリッド3点と一部の地点からまとまって出土している。接合したものはIII H 92グリッドから出土の3点のうち2点だけである。破損部にアスファルトの付着が認められるものは2点で、いずれも脚部である。立石遺跡ではアスファルトで接合したまま出土したものが1例ある。

後期の土偶は伴出遺物から、後期前半に位置づけられるものである。

### 鐸形土製品

25点出土している。鐸形状のものや釣鐘状のもの、楯状のものなど様々な形態のものが出土している。当土製品の呼び方は「鐸形土製品」、「鐸状土製品」、「垂飾用土製品」、「風鈴形土製品」などそのほか多くあるが、ここでは現在、一般に多く使われている「鐸形土製品」の名を使用し、一括した。高橋潤氏によると(高橋;1976)、「鐸形土製品」の名称は、八幡一郎氏が「人類学雑誌」42巻12号「鐸形土製品について」の中で使われたのが最初であろうという。

当遺跡出土の25点を外面に施文されている文様別にみると、I類(沈線文・刺突文)のもの9点、II類(沈線文)のもの11点、III類(刺突文)のもの2点、IV類(無文)のもの3点である。II類が最も多く、次いでI類である。I類とII類で全体の8割を占めている。

I類・II類のうち、横断面形が円形のもの5点、扁円形のもの3点である。孔の穿つ方向が長軸方向のもの5点、長短軸の両方向のもの1点、短軸方向のもの2点である。

III類のうち、横断面形が扁円形のもの1点、隅丸方形のもの1点で、円形のものはいない。孔の穿つ方は2点とも短軸方向である。

以上のことから、I・II類のものには横断面形が円形と扁円形とがあり、孔の穿ち方が長軸方向のものが多い。I類で横断面形が円形のものはいずれも長軸方向に孔を穿っている。III類

表16 縄形土製品の主な出土遺跡名と文様別一覧表

外面の文様 遺跡名	I 類 (沈線・ 斜突文)	II 類 (沈線文)	III 類 (斜突文)	IV 類 無 文	その他 (V類) (縄文)	合 計	備 考	文 献 名
岩手県 軽米町駒板遺跡	9	11	2	3		25		岩手県縄文センター 文化財調査報告書 第60集 (1986)
〃 軽米町以羅敷I遺跡			1			1		〃 第61集 (1983)
〃 軽米町菅成田IV遺跡		1		1		2		〃 第62集 (1983)
〃 一戸町小井田IV遺跡			1			1		〃 第69集 (1983)
〃 二戸市長瀬B遺跡		1				1		〃 第36集 (1982)
〃 九戸村巖口遺跡	1				1	2		〃 第78集 (1984)
〃 玉山村日戸遺跡	1	1	2	7		11		岩手大学考古学部 研究年報 第10巻 (1956)
〃 盛岡市苜内遺跡	2	2	1	6		11		岩手県縄文センター 文化財調査報告書 第32集 (1982)
〃 大迫町立石遺跡	6	8		15		29		大迫町縄文文化財 報告書 第3集 (1979)
青森県 青森市月見野遺跡	(5)	(8)		(5)		08	*「うとう 82号」から	縄土誌「うとう」82号 (1976)
〃 青森市近野遺跡	4	2	1	17		24		青森県縄文文化財 調査報告書 第22 33集 (1977)
〃 金木町妻の神遺跡	2	3		6		11		〃 第30集 (1976)
〃 五戸町古街道長根遺跡	1					1		〃 第29集 (1976)
〃 福地村鴉平遺跡			1	1	1	3		〃 第72 73集 (1983)
〃 弘前市十軒内遺跡		2		3		5		岩木山麓古代遺跡発掘 調査報告書「岩木山」(1988)
〃 八戸市五塚遺跡				2		2		青森県縄文文化財 調査報告書 第84集 (1984)
秋田県 大湯町万塚集落遺跡				3		3		大湯環状列石 文化庁 (1963)
〃 小坂町適合I遺跡		1				1		秋田県文化財 調査報告書 第120集 (1984)
〃 大館市高ヶ丘遺跡	2					2		〃 第64集 (1981)
〃 鷹巣町藤枝遺跡		2				2		〃 第85集 (1981)
〃 能代市真壁地遺跡	4	11		4		19		〃 第102集 (1983)
〃 大湯町大湯環状列石遺跡		1				1		鹿角市文化財 調査資料 第6号 (1976)

(岩手県軽米町馬場野II遺跡、岩手県滝沢村湯舟沢遺跡、青森県八戸市丹後谷地遺跡からも出土している。)

のものは横断面形が扁円形と隅丸方形とがあり、孔の穿ちは短軸方向である。

鐸形土製品が出土している主な遺跡は次の通りである。

多数出土している遺跡は大迫町立石遺跡の29点、本遺跡の25点、青森市近野遺跡の24点、能代市真壁地遺跡の19点などである。表に掲げた22遺跡のうち、12遺跡が5点以下である。立石遺跡は半数以上、近野遺跡では7割以上がIV類（無文）のもので占められている。真壁地遺跡は当遺跡と同様にI類（沈線文・刺突文）・II類（沈線文）が8割以上を占めている。文様別にみると、多数出土する遺跡でも内容が異なっている。

真壁地遺跡では19点のうち14点、近野遺跡（49・50年度調査）では50年度出土13点のうち7点、立石遺跡では29点のうち10点、本遺跡では29点のうち6点の内壁にスス・炭化物が付着している。本遺跡では破片が多いため、実際にはもっと多いと推定される。青森市月見野遺跡でも18点（孔のないものを除く）のうち7点の内壁に炭化物の付着が確認されている。ススが使用によって付着したかどうかは不明である。使用時に付着したのであれば機能、役割を考える上で重要だ。

鐸形土製品の用途について、草間俊一氏（1956）は『小形であること釣下げる穴のあることから推定して、垂飾用の装身具としたい。……中略……一応首飾りと考えて置く方が適当かと思われる。』と述べている。また、高橋潤氏（1976）は『（一）非実用的遺物が多く見られること（二）遺跡自体祭祀的要素が強い（三）鐸形土製品の出土状態が特異であることなどから本土製品は祭り事に用いられたものとする。……中略……古来いわれてきた笛のように思われる。』と推測している。

時期については、立石遺跡が後期前葉、本遺跡が後期前葉、真壁地遺跡が後期前葉と多くが後期前葉の土器と伴出している。特に広義の十腰内I式に伴う例が多く、その分布域も東北地方北半部に集中している。縄文後期前葉に出現し、後期中葉には消滅していると推定される。

### 三角状土製品

「三角形土版」、「三角形板状土製品」、「三角形土製品」などといわれているもので、本稿では形態を最も適確に表現していると考えられる「三角形状土製品」という名称を使った。

岩手県では縄文中期中葉～末葉の時期のものが多く、後期のものは少ない。本遺跡から出土した2点は同じ層から出土する土器などから推定して、縄文中期末～後期前葉に属するものと考えられる。本遺跡から出土している平行沈線文が施文されている三角形状土製品は岩手県二戸市荒谷A遺跡、秋田県鷹巣町藤株遺跡から出土している。本遺跡と同型の無文のものは前述の荒谷A遺跡から10点出土している。

金子拓男氏（1983）によれば、三角形状土製品の性格については、「メダル状の服装品」説、「人体を表示した護符的意味で加味した服飾品」説、「土偶・土版に通ずる性格をもち、土版に

表17 きのご形土製品の出土遺跡名と形態別一覧表

からの形 遺跡名	凸状のもの (I類)	平状のもの (II類)	凹状のもの (III類)	備 考	文 献 名
岩手県 九戸村滝谷田遺跡	2			晩期と想定される住居址出土部	岩手県埋文センター 文化財調査報告書 第49集 (1983)
" 一戸町小井田遺跡	1			後期・晩期の遺跡	" 第60集 (1983)
" 都南村手代森遺跡		3		晩期の遺跡	" 刊行予定 (1986)
" 石鳥谷町安増原遺跡	1			晩期の遺跡	" 第74集 (1984)
" 大迫町立石遺跡		1		後期・晩期中心の遺跡	大迫町埋文文化財 報告書 第3集 (1979)
青森県 五戸町古街道長根遺跡	1			早期・後期前半が中心の遺跡	青森県埋文文化財 調査報告書 第29集 (1976)
" 金木町養の神遺跡	4	1	2	前期前半～後期前半の遺跡	" 第30集 (1976)
" 三内 澤 部 遺 跡			1	中期・後期前半の遺跡	" 第41集 (1978)
" 近 野 遺 跡 (I)	1			後期前半の遺跡	" 第22集 (1975)
" 近 野 遺 跡 (II)	2	4		後期前半中心の遺跡	" 第33集 (1977)
" 五 塚 遺 跡	1			中期末葉～後期中葉中心の遺跡	" 第84集 (1984)
秋田県 鹿角市中通遺跡	1			後期中心の遺跡	秋田県文化財 調査報告書 第 集
" 鷹巣町藤株遺跡	1	2		後期・晩期中心の遺跡	" 第85集 (1981)
" 大館市萩峠遺跡	4			早期・後期前半の遺跡	" 第84集 (1981)
" 大湯町万座集落遺跡	2 (写真図版から)			後期中心の遺跡	大湯町埋文列石 文化庁 (1953)

※ (青森県八戸市丹後谷地遺跡からもI類のもの出土している)  
(報告書の中で、スタンプ形土製品と誤われているものも一部含む)

より近似したもの」という説、「板状土偶から派生し、土偶とほぼ同一用途」という説などがある。現段階でまだ結論はだされていない。

#### きのこ形土製品

きのこに似せた土製品で、県内、近県から出土している土製品の形態は、かさの部分が凸状を呈するもの（Ⅰ類）、平状を呈するもの（Ⅱ類）、凹状を呈するもの（Ⅲ類）に分けられる。

本遺跡から出土しているものは2点とも形態がⅠ類のものである。後期、晩期の包含層から出土している。そのほかに、岩手・青森・秋田県内で、Ⅰ類のきのこ形土製品が出土している遺跡は10遺跡あり、総数は18個である。出土土器をみると、後期前葉の十腰内Ⅰ式のを伴う遺跡が圧倒的に多い。かさが凸状を呈するきのこ形土製品は十腰内Ⅰ式に伴う特徴的な土製品の1つといえよう。

#### 土版

2点出土している。1点は長軸径5cm前後、短軸径4.4cmの楕円を呈し、両面は沈線により中央に縦の平行文（2～3本）、両側に不連続な蛇行曲線文を描き、頂部に縦の孔をもつ（片端は欠損）。他の1点は右半分の四分の一しか残存していないが、長軸径15～16cmで、縦に沈線を入れ、左右、上下対称に三叉文、平行弧状沈線文（同心円波状沈線）が描かれていたものと推定される。前者に類似するものは岩手県石鳥谷町安堵屋敷遺跡、後者に類似するものは青森県八戸市是川遺跡、秋田県横手市半谷地遺跡、岩手県軽米町坂ノ橋遺跡、安堵屋敷遺跡などから出土している。安堵屋敷のものは縄文晩期大洞C<sub>2</sub>式の土器と伴って出土しているという。前者は大洞C<sub>2</sub>式末から大洞A式の土器と併行するものと思われる。

#### 参考引用文献

- 草間 俊一 1956：岩手大学芸学部研究年報 第10巻 1～8  
江坂 輝彌 1960：土偶 校倉書房 39～48・163～177  
高橋 潤 1976：うとう 第八十二号 青森郷土会 31～38  
金子 拓男 1983：縄文文化の研究9 三角形土版・三角形岩版 114～127 雄山閣  
米沢耕之助 1983：縄文文化の研究9 土版 95 雄山閣  
長瀬 福男 1983：真壁地遺跡・蟻ノ台遺跡発掘調査報告書 秋田県文化財調査報告書 第102集  
山道 紀郎 1975：青森県総合運動公園建設関係発掘調査報告書 近野遺跡（Ⅱ） 青森県埋蔵文化財調査報告書第22集 38・39・44・45  
市川 金丸 1976：一般国道4号線五戸バイパス関係発掘調査報告書 五戸町中ノ沢西張遺跡・古街道長根遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第29集 100・101  
藤田 亮一 1976：白山堂遺跡・妻の神遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第30集 80～84  
市川 金丸 1978：三内海部遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第41集 332・337  
中村 良幸 1979：大迫町埋蔵文化財報告第3集 立石遺跡 130～196 大迫町教育委員会



- 鈴木 優子 1983：荒谷A遺跡発掘調査報告書 岩手県埋文センター文化財調査報告書 第57集 202・204
- 佐々木清文 1983：東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書 滝谷田遺跡 岩手県埋文センター文化財調査報告書第49集 32・131
- 小平 忠孝 1983：東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書 小井田IV遺跡 岩手県埋文センター文化財調査報告書第69集 92・108
- 富樫 泰時 1981：藤株遺跡発掘調査報告書 秋田県文化財調査報告書第85集 173・177
- 小野美代子 1983：土偶の知識 東京美術 34～70・76

### (3) 石器・石製品

遺構内外から出土した石器・石製品類は738点である。礫石器で破損の著しいものは除いたが、この数字は出土・発見した石器の総数に近い。しかし、約80,000㎡に及ぶ調査面積や、検出された縄文時代の住居址数を考えると、これは決して多い数字とはいえない。また、剥片石器では成品として完成されたものや、一部に調整痕・使用痕をもつものは少なく、多くは剥片類である。この剥片類の中で注目されるのは、径10cm以下の主にチャート素材としたもので、これらは両極打法（パイポラー・テクニク）によって剥離されたものである。両端部に階段状の剥離痕を残すこの剥片は、製品として使用される率はきわめて低く、小形の搔器や石鏃・石鏃に利用される程度である。周辺の遺跡では、君成田IV遺跡・馬場野II遺跡でもみられる。君成田IV遺跡では、住居址内の小ピットに「貯蔵」された形で73点が出土している。

駒板遺跡も含めたこの地域では、石器製作に適する原石は採集されず、このチャートも原産地は明らかではない。石器素材の少ない遺跡に於けるこれらの剥片の在り方は、搬入経路の問題も含めて興味深い、今後の検討課題の1つであろう。

石製品の出土量も少ない。量的には用途不明の円盤があるが17点だけの出土である。石器類とともに、周辺に原石となる石材が得られないことによるものであろうか。

### (4) 遺跡全体について

当遺跡は、序論でも述べているが、東北縦貫自動車道八戸線折爪サービスエリア（仮称）予定地に発見されたもので、軽米町山内の山中にある。調査はこのサービスエリア及び本線部分のほぼ全域を対象に行った。この地は南北に延びる尾根の西側にあたり、遺跡はいくつかの沢によって開折された枝尾根に立地している。調査にあたって便宜上、北尾根・西尾根・中央尾根と呼称し、これらの尾根に介在する沢を北谷・西谷・南谷と呼称した。（第1分冊第6図遺構配置略図）

調査の結果、北尾根・西尾根・西谷・中央尾根にそれぞれ集中した遺構が発見された。これらの地区の一部に調査区域外として調査できなかった部分はあるものの、全体で80,000㎡に及

ぶ広い範囲の遺跡のようすを捉えることができたと思う。遺構は縄文時代、奈良時代、中・近世にわたるものであり、占地と時代の流れを見ることができる。

縄文時代の住居址についてみると、時期の詳細について不明なものもあるが、後期～晩期に位置づけられる65棟が検出された。時期別には、後期初頭から前半期の住居址が中央尾根南斜面から稜線部にかけて集中し、北尾根でも若干検出されている。この時期の住居址は多く、当遺跡でもっとも活発に生活が営まれた時期を考えさせる。後期中葉期の遺物は西谷・西尾根地区に集中して出土しているが、量は少なく集落も縮小したようである。中葉以後になると遺物はさらに少なくなるが、中央尾根南斜面地区から後期末葉期の遺物が若干出土している。

縄文時代晩期になると初頭期には北尾根地区・中央尾根南斜面地区、前葉期には中央尾根南斜面地区・同尾根基部（東谷頭）、中葉期には西谷右岸（西尾根南東斜面下部）、後葉期には中央尾根南斜面地区から住居址が検出されている。しかしこれらは数は少なく、集落として考えた場合も2棟ぐらいの小規模なものとなろう。

以上のように、当遺跡における縄文時代の住居址の立地には西尾根・西谷地区、北尾根地区、中央尾根地区の3地区にまとまる傾向がみられ、地区毎に3つのムラが形成されていたことも想定される。このうち、中央尾根南斜面部分ではほぼ継続して集落が営まれていたが、他の地区では比較的短かい時期に限定される様相を示している。

住居址の立地と同様に3つのブロックを形成して配置されているピットは、その主体はフラスコ形のピットである。ピット構築時期については、出土遺物などの時期推定資料が少なく確定し難いが検出状況が出土遺物等から、西尾根地区では縄文時代後期頃、西谷右岸では後期中葉以前、北尾根地区では後期の各時期及び晩期、中央尾根稜線部では後期前葉頃、中央尾根南斜面では後期の各時期及び晩期頃と考えられ、集落が形成された時期と一致している。

ピットの機能については種々考えられ、従来から研究者によって考察されてきたものであるが、その中の1つは貯蔵穴であり、当遺跡のピットの大部分もこれにあたると思われる。また集落構成のパターンについても研究者によって論じられている。当遺跡の場合、西尾根・西谷地区や中央尾根では沢に面した南斜面の中～下位に住居址が占地し、ピットはその背後の小高い日当りのよい場所に配置されている。北尾根では稜線部に住居址が占地し、ピットはその尾根の南面する緩傾斜地に配置されている。このように、3つの地区のいずれも住居址が立地する外側の日当たりや風通しのよい小高い場所を選んでピットが配置されている。

陥し穴状遺構もいくつか発見されている。溝状のものが殆んどで、長軸が等高線に平行なものが多く、中央尾根地区では2基が一對となっているものが検出されている。時期の詳細は不明であるが、検出状況から推定して縄文時代中期以後の遺構と考えられる。北尾根で検出された陥し穴と思われる円筒形のピットは、検出状況から中期以前のものと思われ、同様のタイプ

のものは、中央尾根地区の頂部にも発見されている。

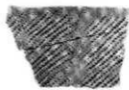
弥生時代の遺物は、中央尾根南斜面部から数点出土している。しかし、遺構は検出されなかった。また古墳時代の遺物・遺構は全く検出されなかった。奈良時代になって西尾根・西谷地区、埴込谷を狭んで北尾根南斜面下位に集落が構成される。西尾根地区の住居址には拡張を思わせる重複が1棟にみられるもの他は重複はなく、それぞれ一時期の集落として無理のない間隔での住居址の立地である。出土遺物や住居址の状況にも大きな時期差は認められず、検出された15棟全部が同時存在ではないにしても、これらはほぼ同時期の住居址であると考えられる。そしてこの集落の立地は、西谷をつくる良好な湧水をとり囲む形となっている。

中世の住居址と思われるものが、西谷左岸（中央尾根西側斜面下位）から2棟検出されているが、伴う遺物はなく詳細は不明である。

近代の遺構としては、中央尾根南斜面下位の沢縁に江戸時代末頃の鋳銭場跡が発見されている。また、この鋳銭場との関係は不明なものの各地区から計28基の「伏せ焼」の炭窯跡が検出された。

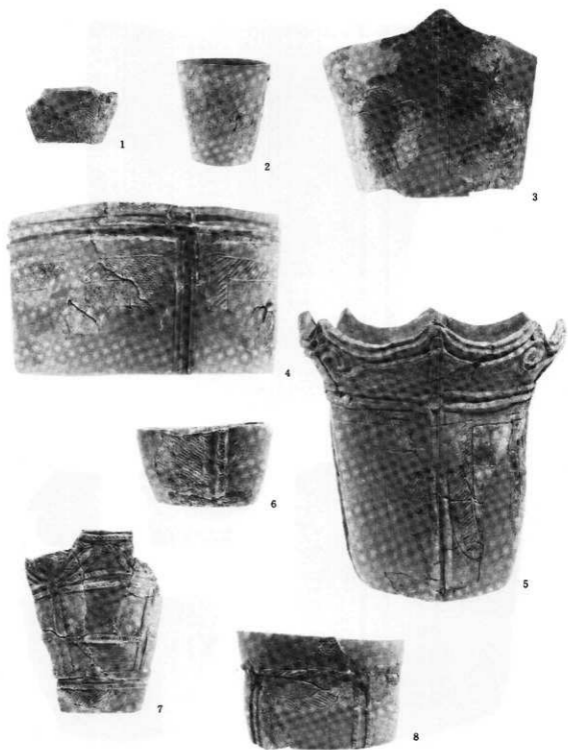
以上、簡単に遺跡の概要を述べたが、駒板遺跡は縄文時代の集落から始まって間に長短の中断をはさみながら、奈良時代、中世、そして江戸時代末期と人々が生活の場として利用してきたことがわかる。北上山地北端の山中であるこの地に、人々が常に働きかけてきた様子がうかがえて興味深い。近代に至っても馬の放牧地、森林資源の地として利用され、そして現代、開発の先端をゆく高速自動車道となろうとしている。

# 写真図版



写真図版 I

(1)



写真図版 2

(2)



1



2



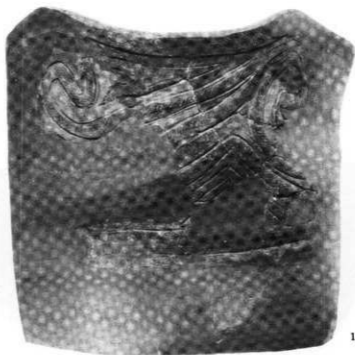
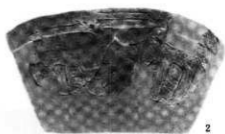
3



4

写真図版 3

(3)



写真図版 4

(4)

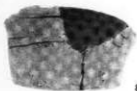




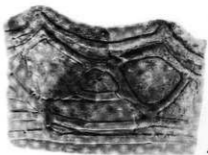
3



2



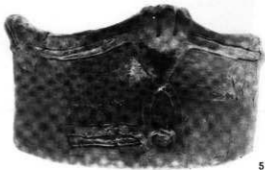
8



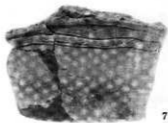
4



6



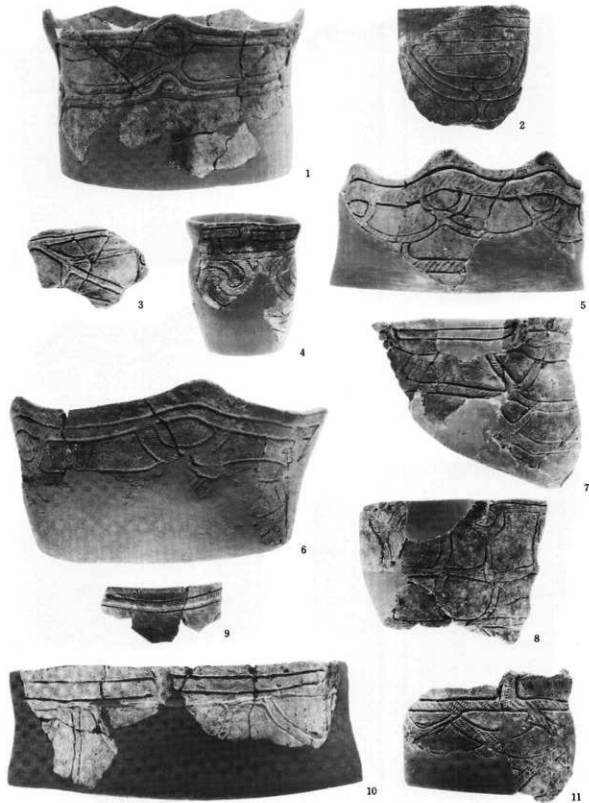
5



7

写真図版 5

(5)



写真図版 6

(6)



1



2



3



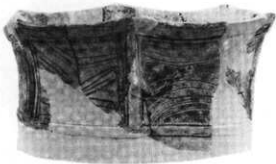
4



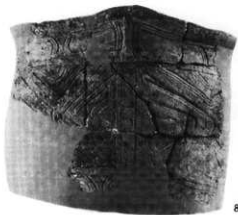
5



6



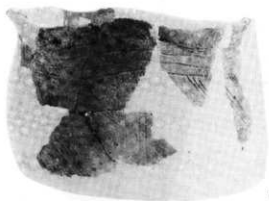
7



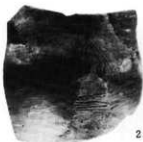
8

写真図版 7

(7)



1



2



3



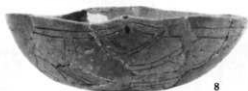
5



4



7



8



6



10



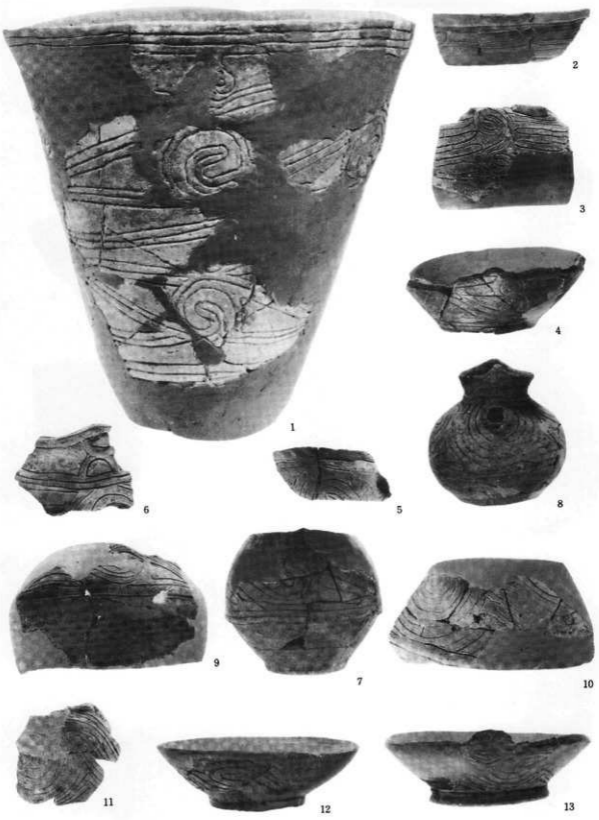
9



11

写真図版 8

(8)



写真図版 9

(9)



1



2



3



4



5



6



7



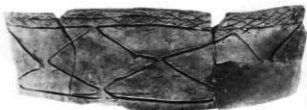
8



10



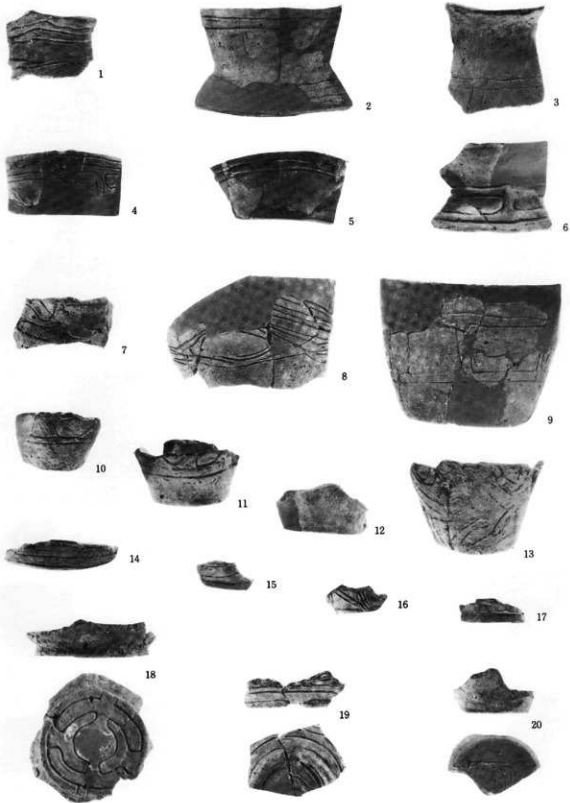
9



11

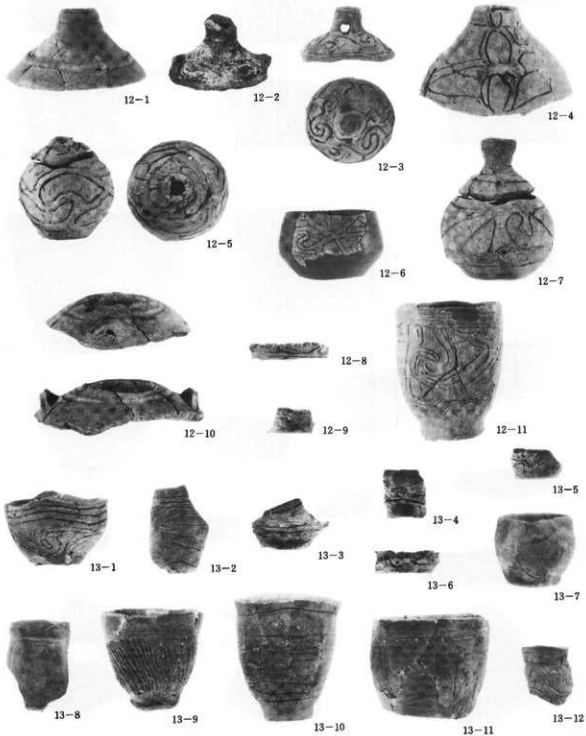
写真図版 10

(10)



写真図版 11

(11)



写真図版 12

(12, 13)





13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



1



2



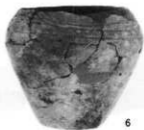
3



4



5



6



7

写真図版 14

(14)



1



2



3



4



5



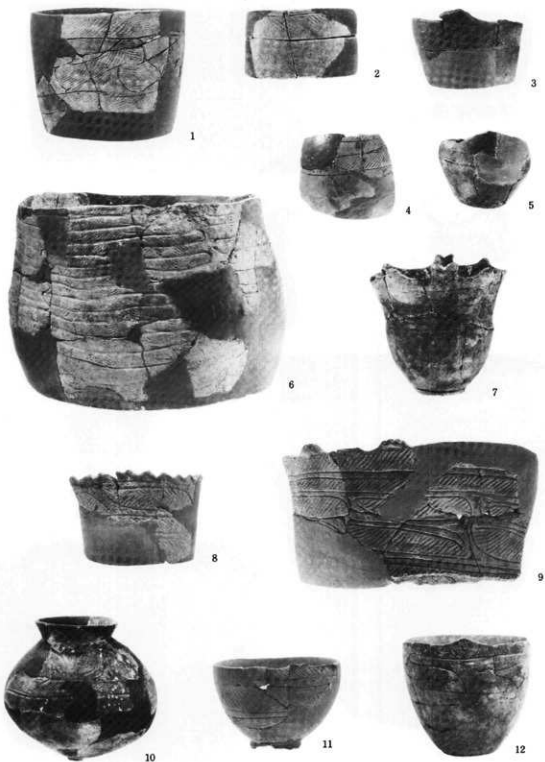
6



7

写真図版 15

(15)



写真図版 16

(16)



1



2



3



4



5



6



7



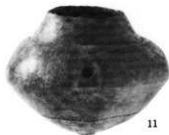
8



9



10



11

写真図版 17

(17)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



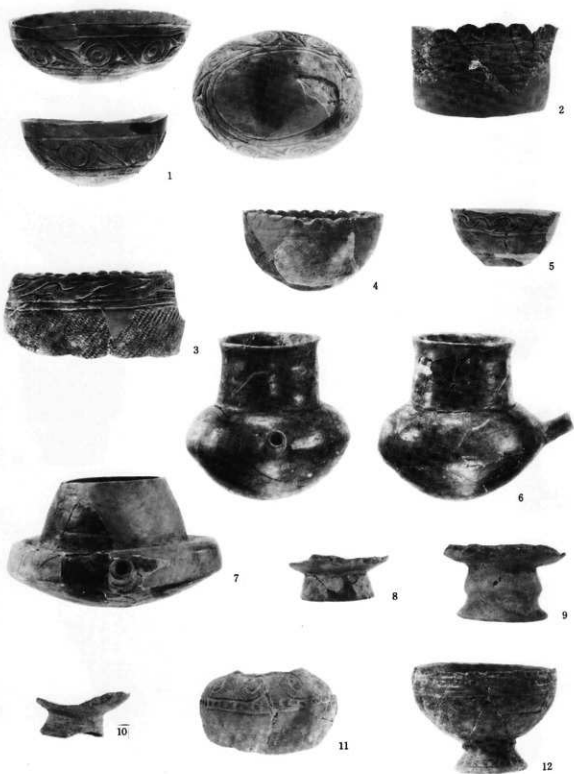
11



12

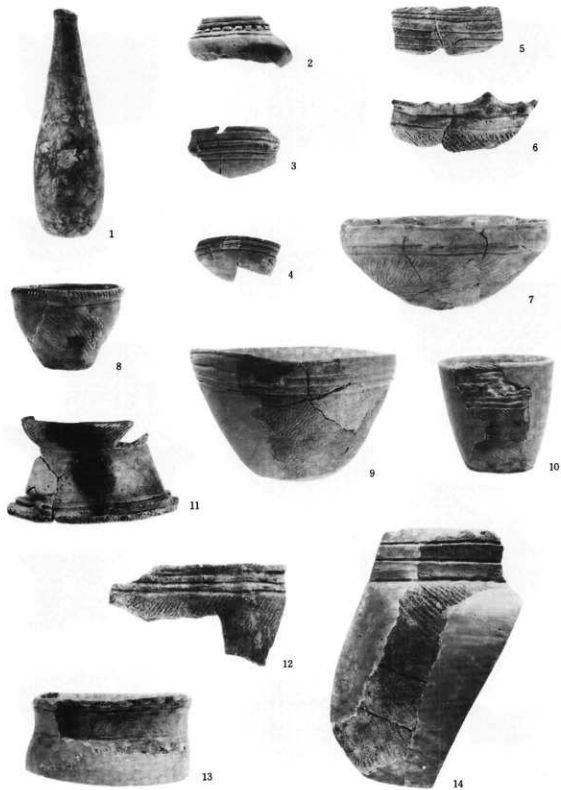


13



写真図版 19

(19)



写真図版 20

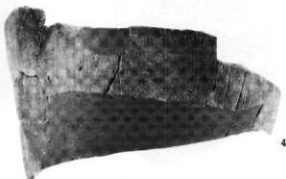
(20)





写真图版 21

(21)



写真図版 22

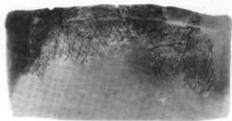
(22)



1



2



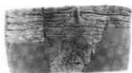
3



4



5



6



7

写真図版 23

(23)



1



2



3



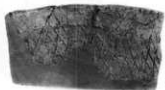
4



5



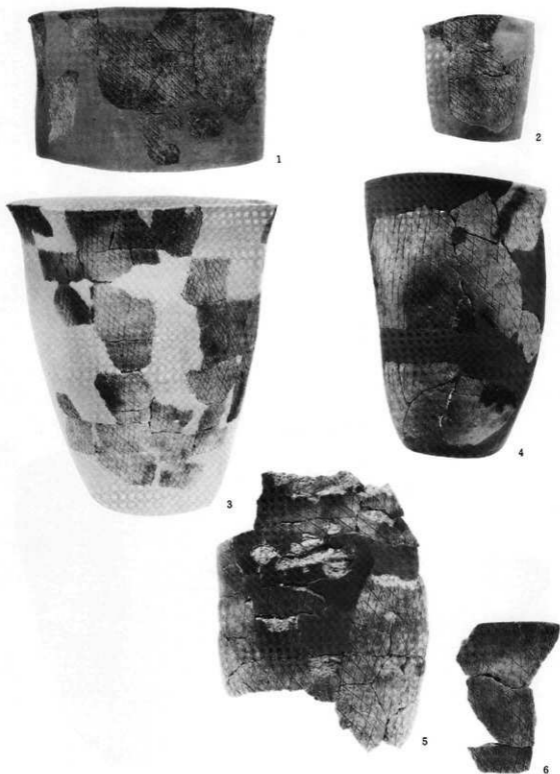
6



7

写真図版 24

(24)



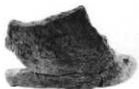
写真図版 25

(25)



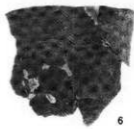
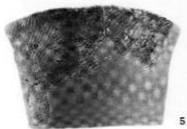
写真図版 26

(26)



写真図版 27

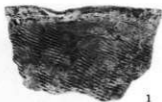
(27)



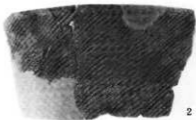
写真図版 28

(28)





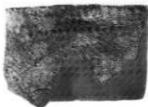
1



2



3



4



5



6



7



8

写真図版 29

(29)



1



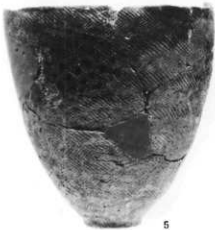
2



3



4



5



6

写真図版 30

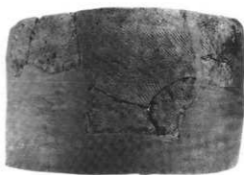
(30)



1



2



3



4



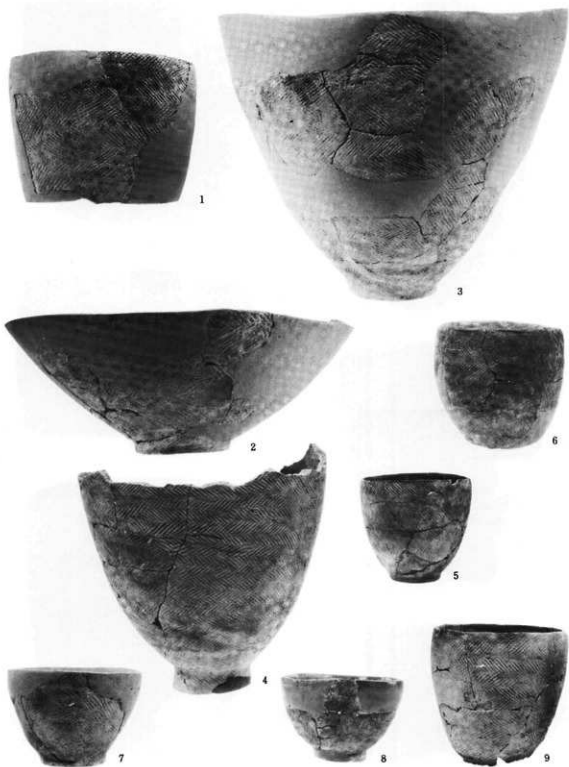
5



6

写真図版 31

(31)



写真図版 32

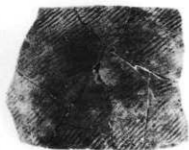
(32)



1



2



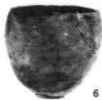
3



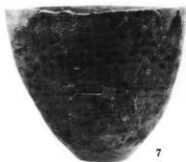
4



5



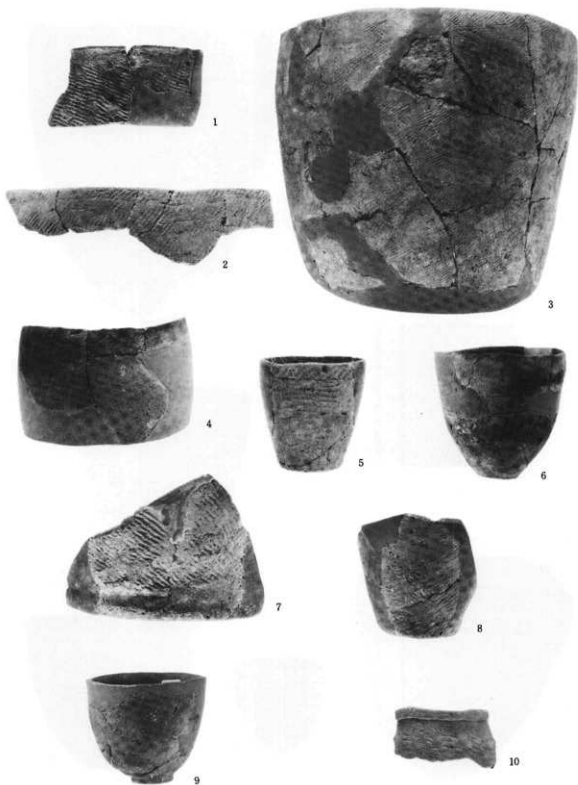
6



7

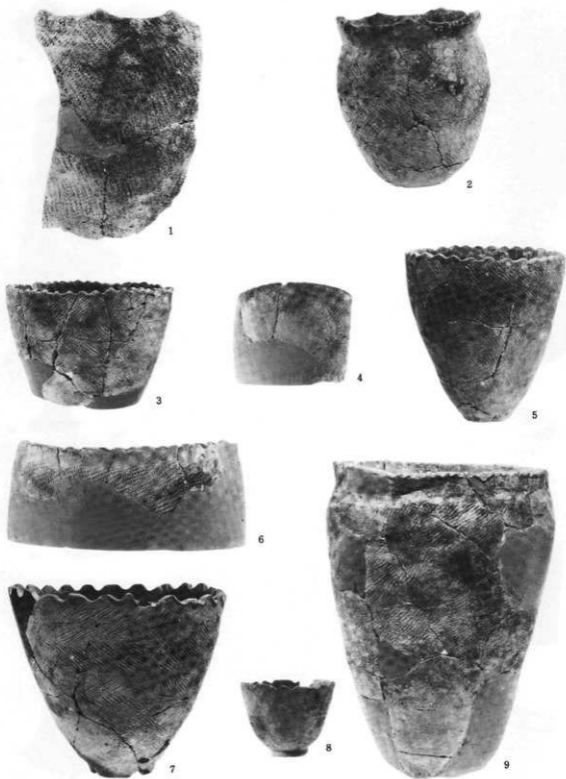
写真図版 33

(33)



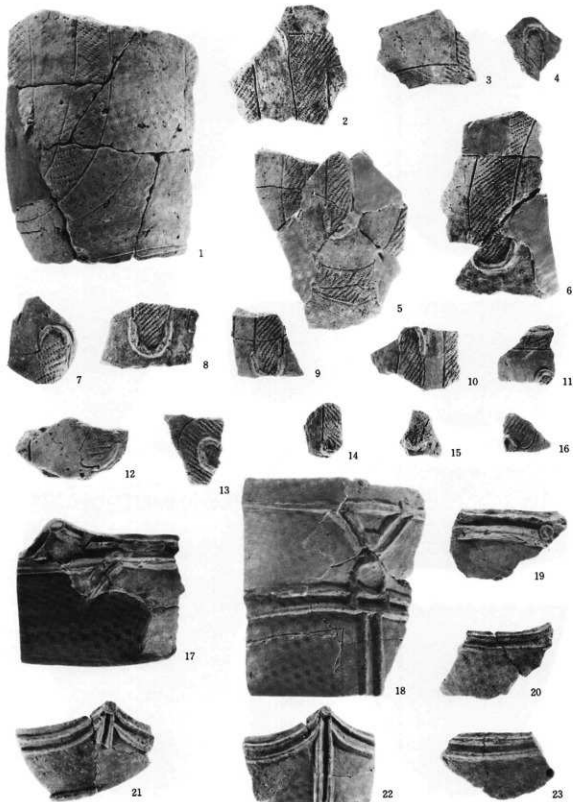
写真図版 34

(34)



写真図版 35

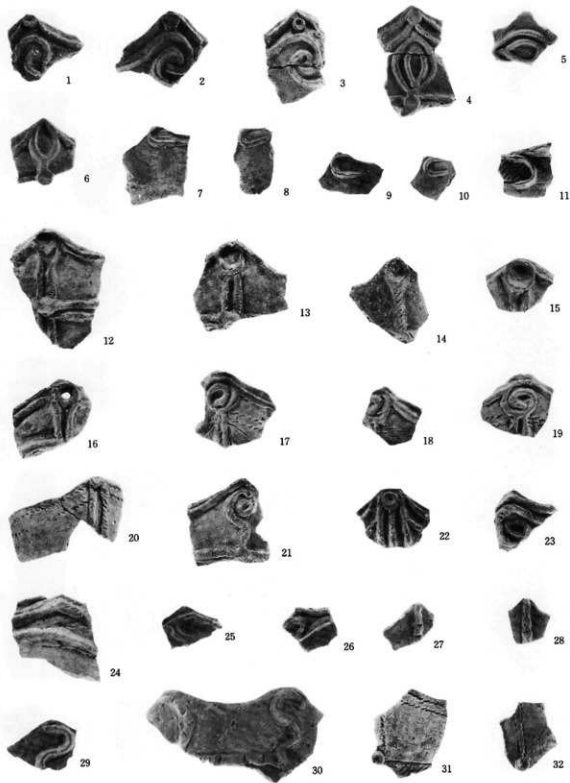
(35)



写真図版 36

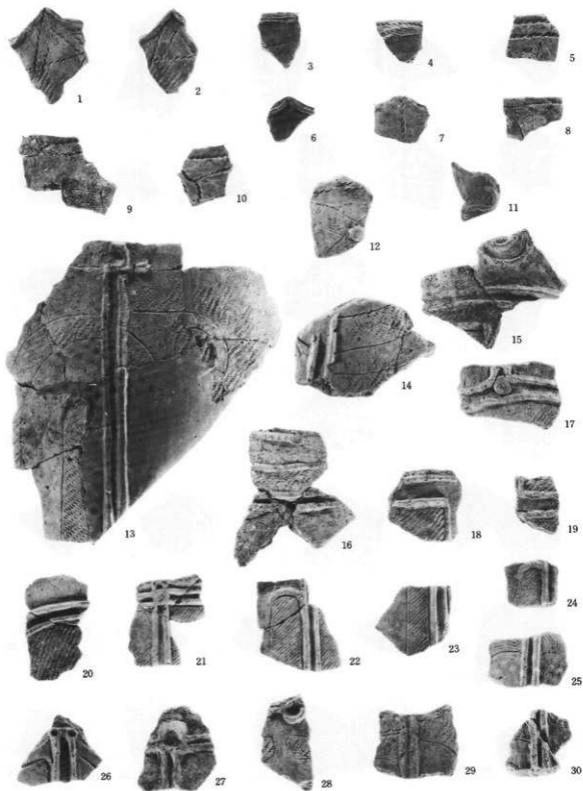
(36)





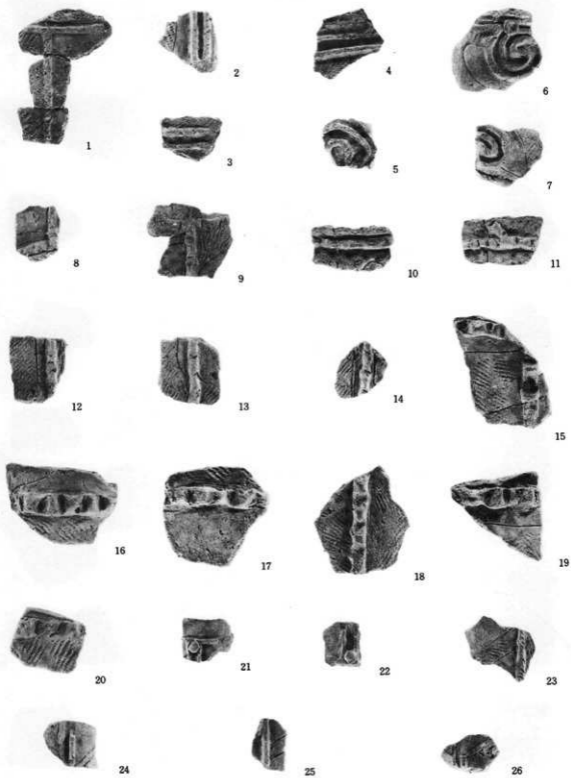
写真図版 37

(37)



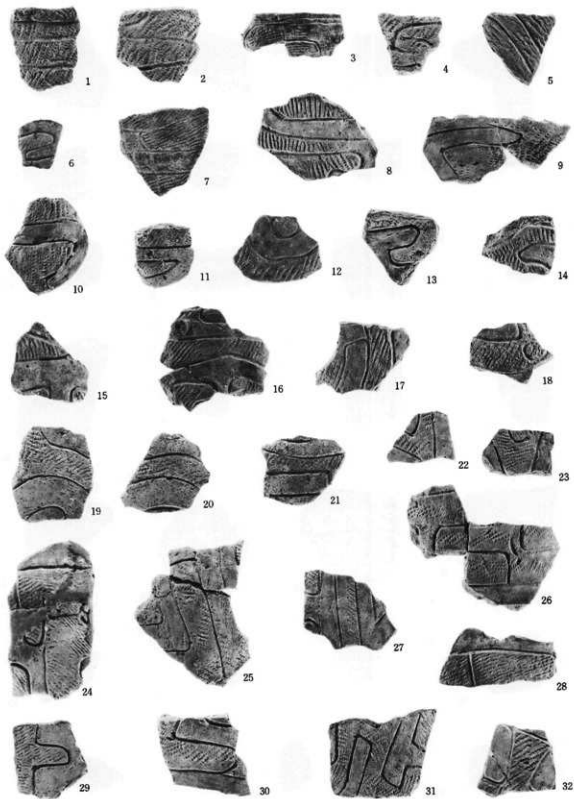
写真图版 38

(38)



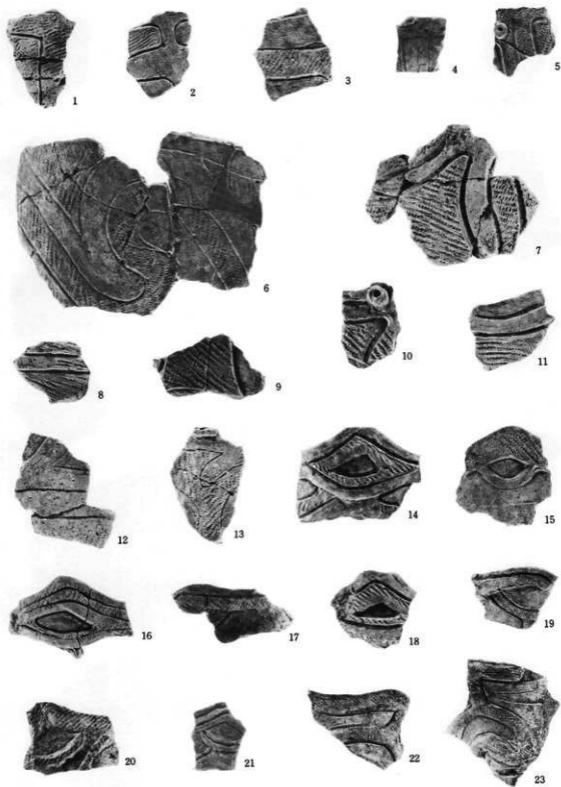
写真图版 39

(39)



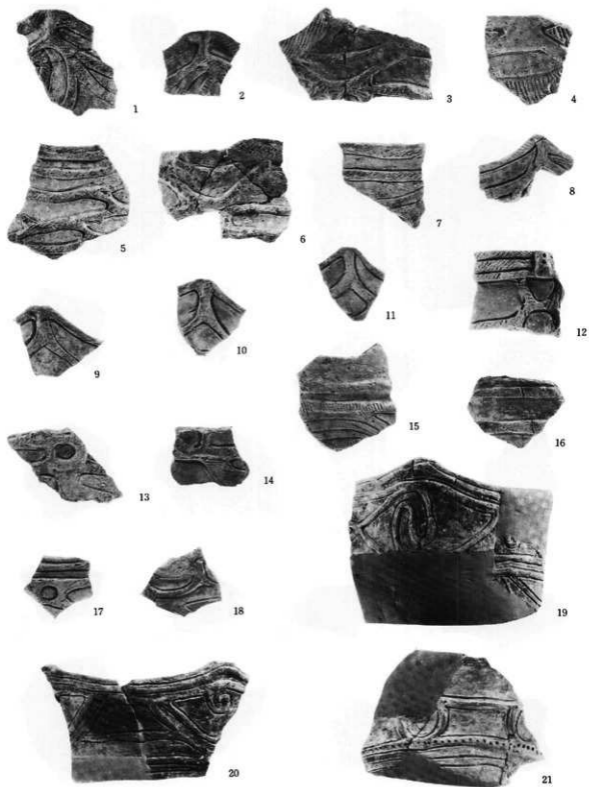
写真图版 40

(40)



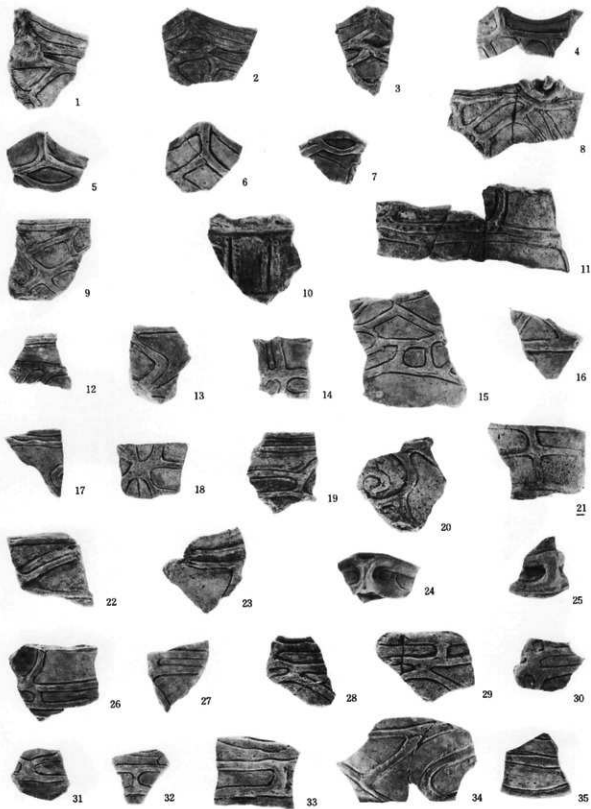
写真图版 41

(41)



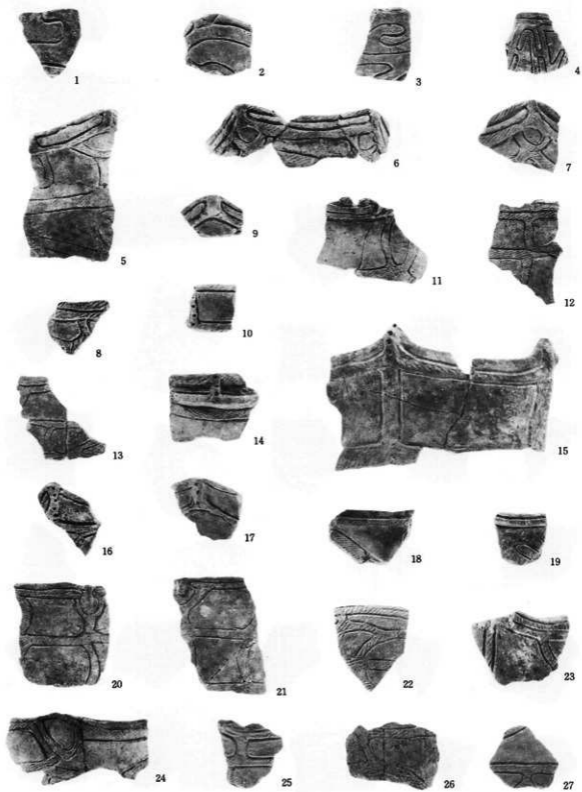
写真図版 42

(42)



写真図版 43

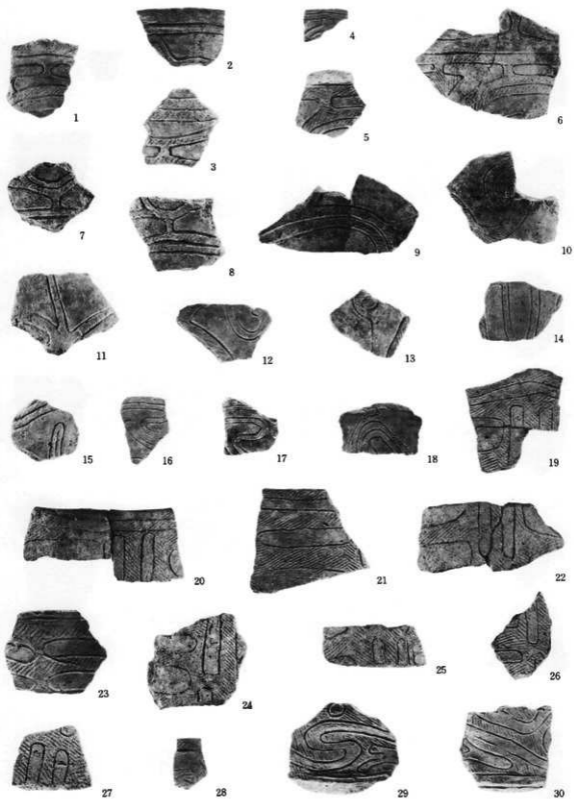
(43)



写真图版 44

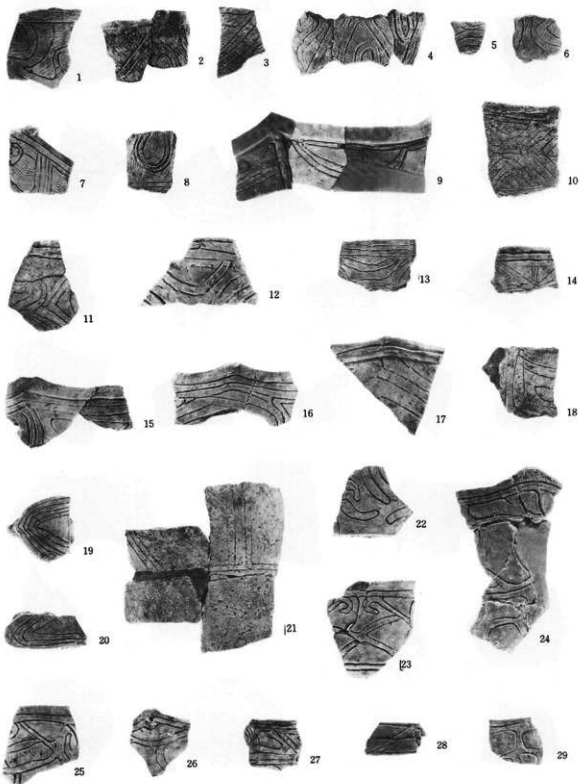
(44)





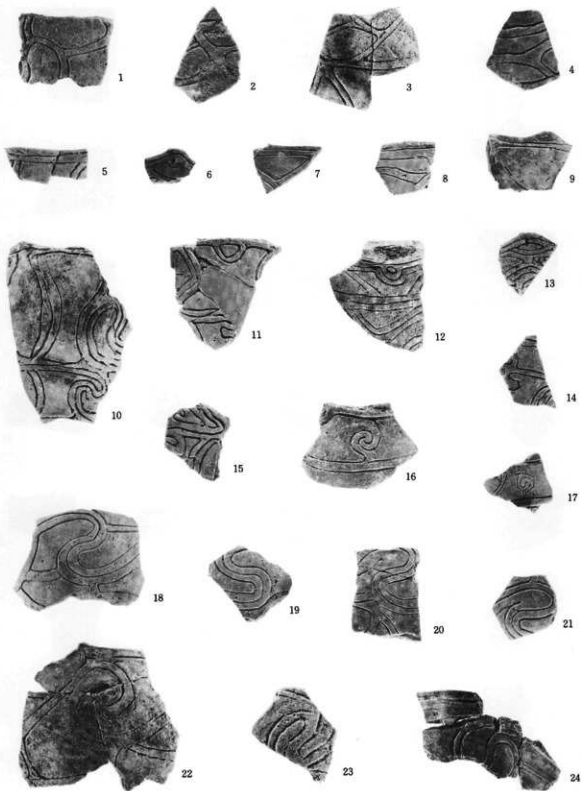
写真図版 45

(45)



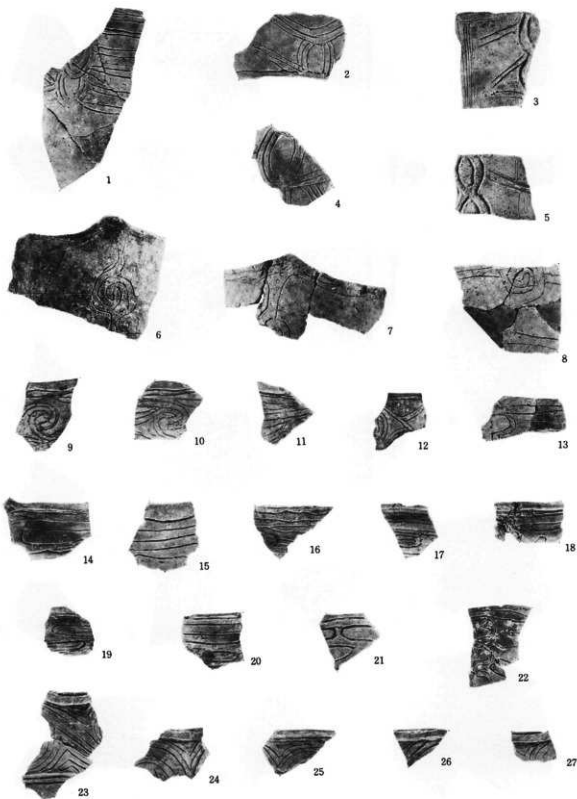
写真图版 46

(46)



写真図版 47

(47)



写真図版 48

(48)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



12



13



11



14



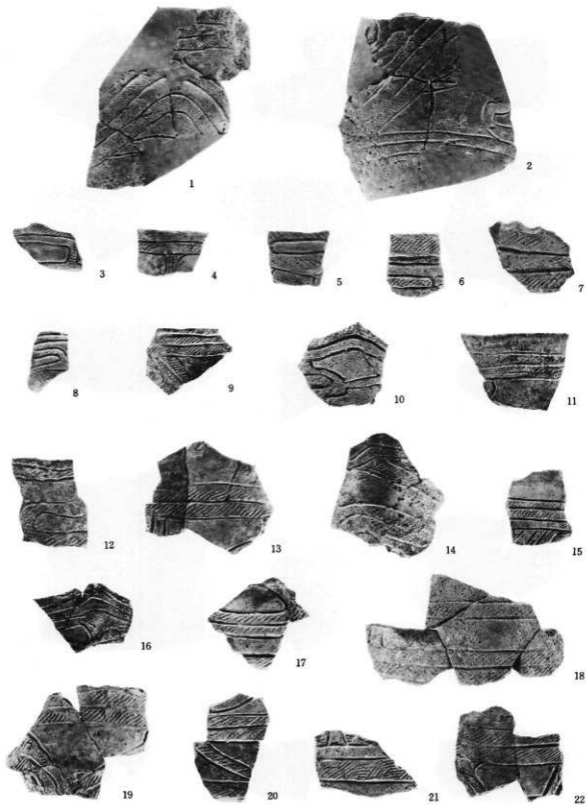
15



16

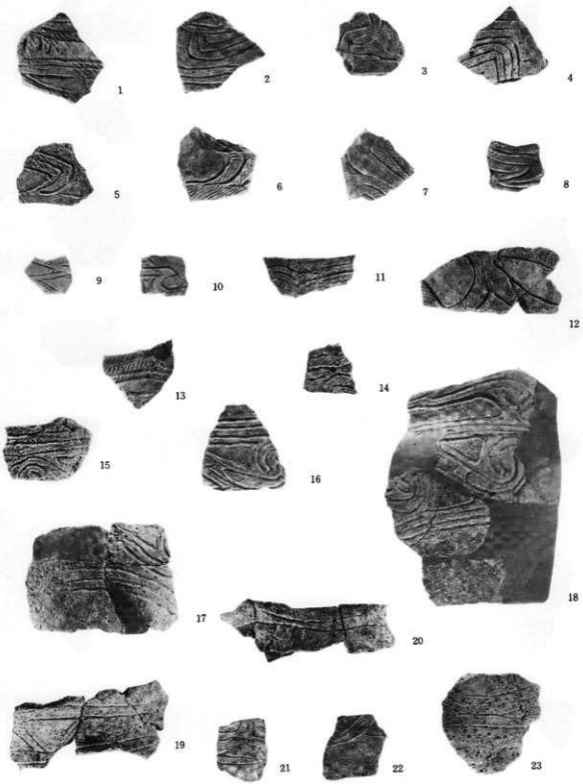
写真図版 49

(49)



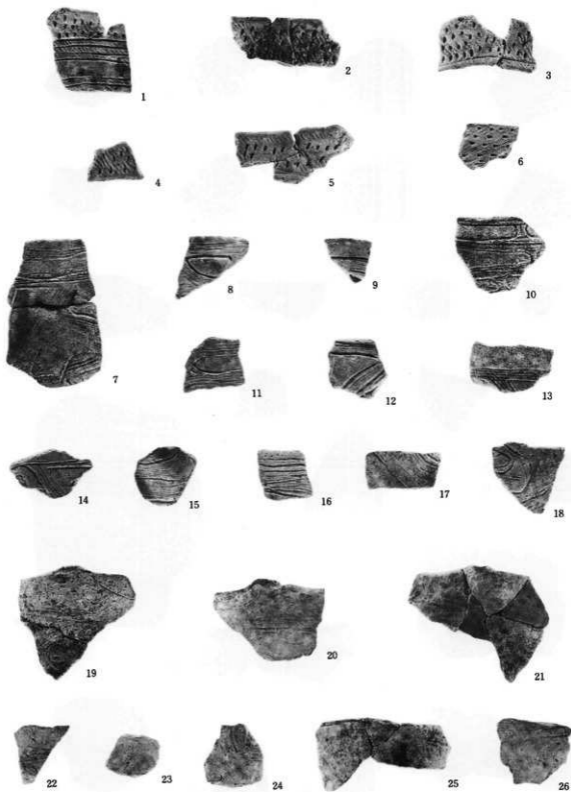
写真图版 50

(50)



写真图版 51

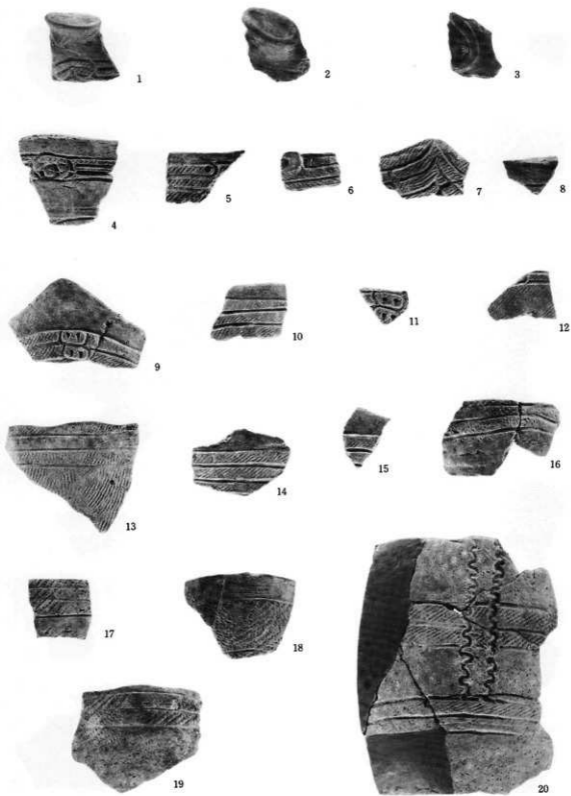
(51)



写真図版 52

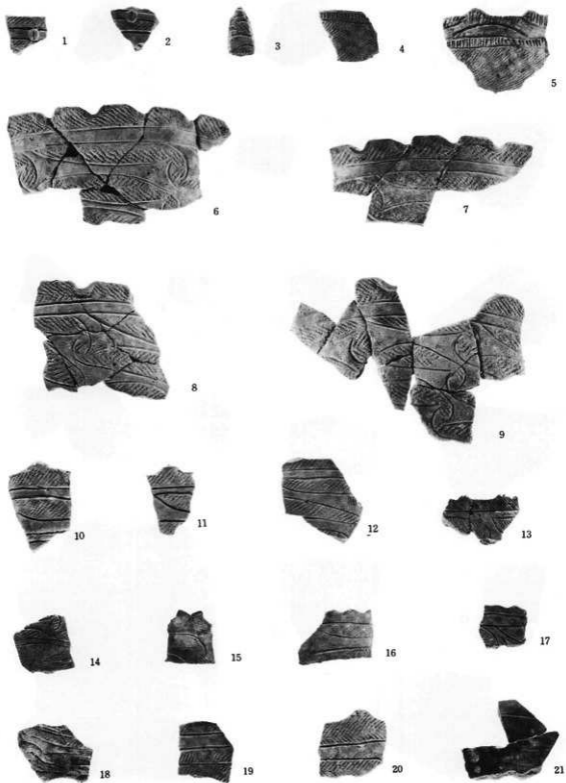
(52)





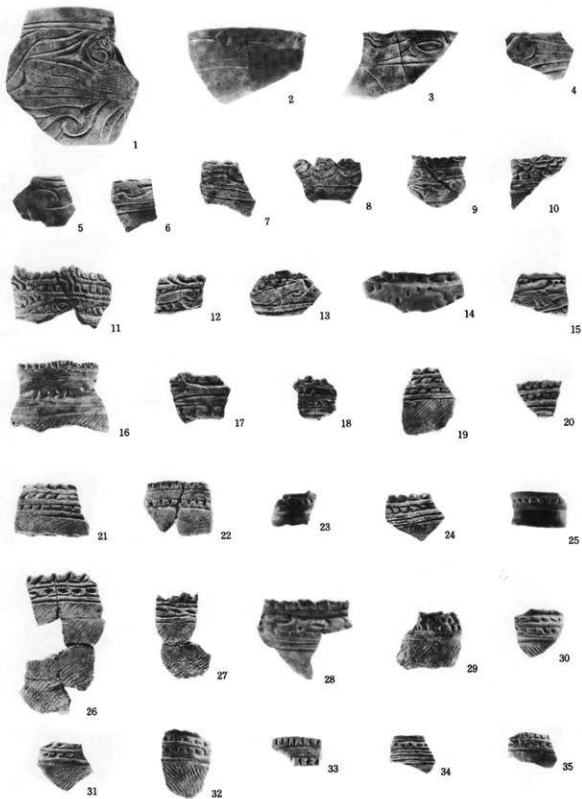
写真図版 53

(53)



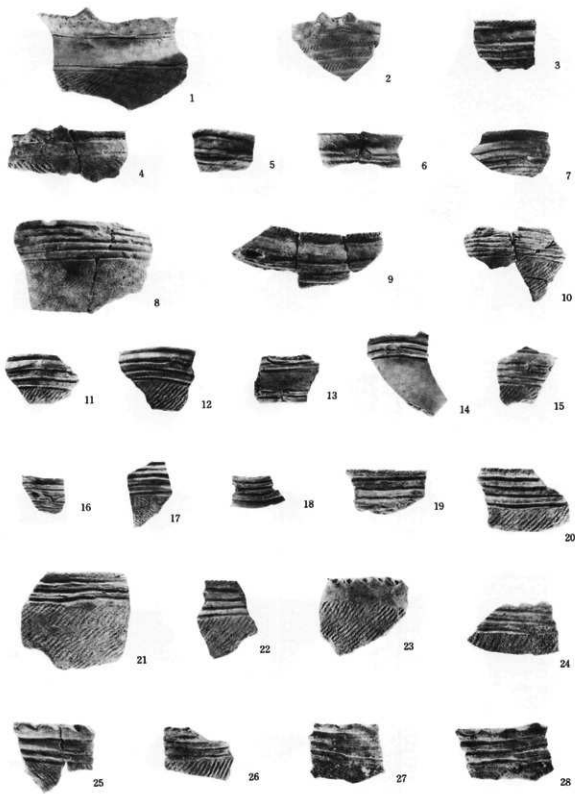
写真图版 54

(54)



写真图版 55

(55)



写真図版 56

(56)



1



2



4



3



5



6



7



8



9



10



11



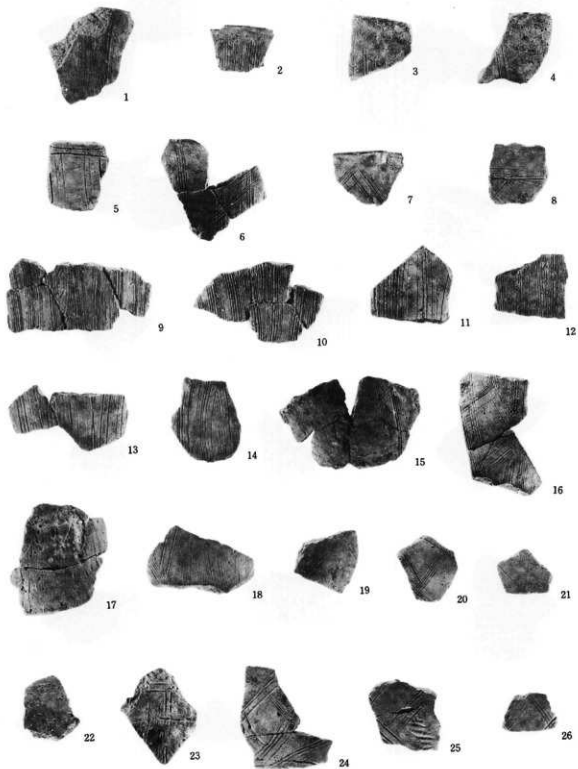
12



13

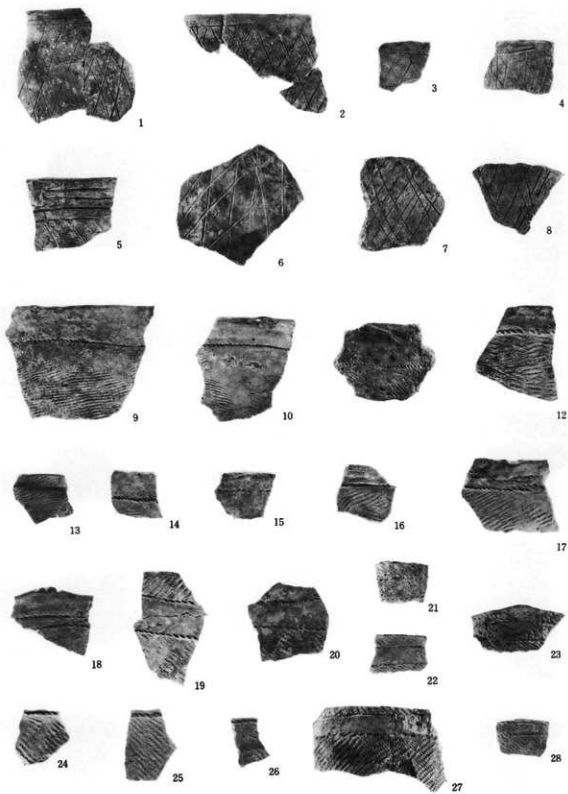


14



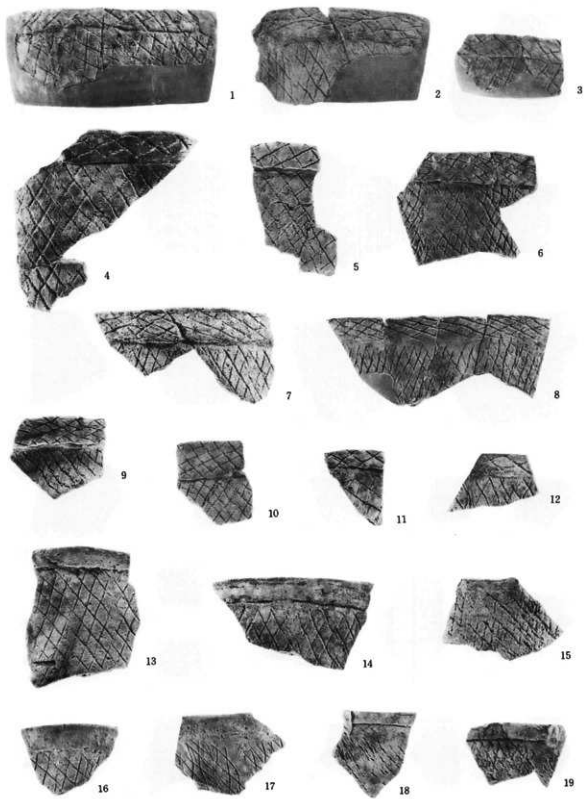
写真图版 58

(58)



写真图版 59

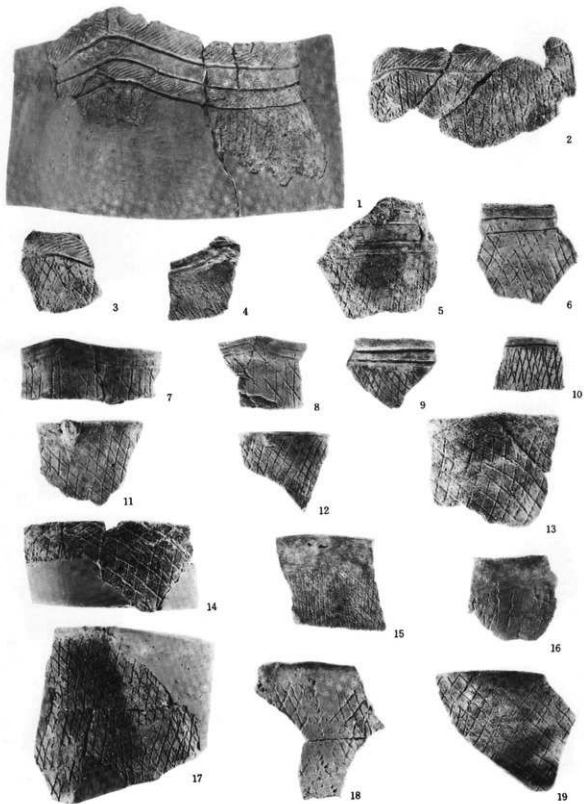
(59)



写真図版 60

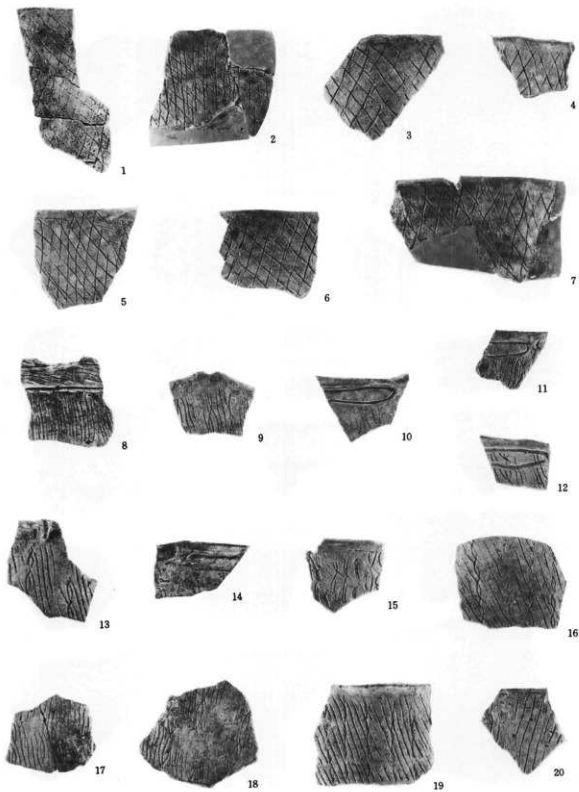
(60)





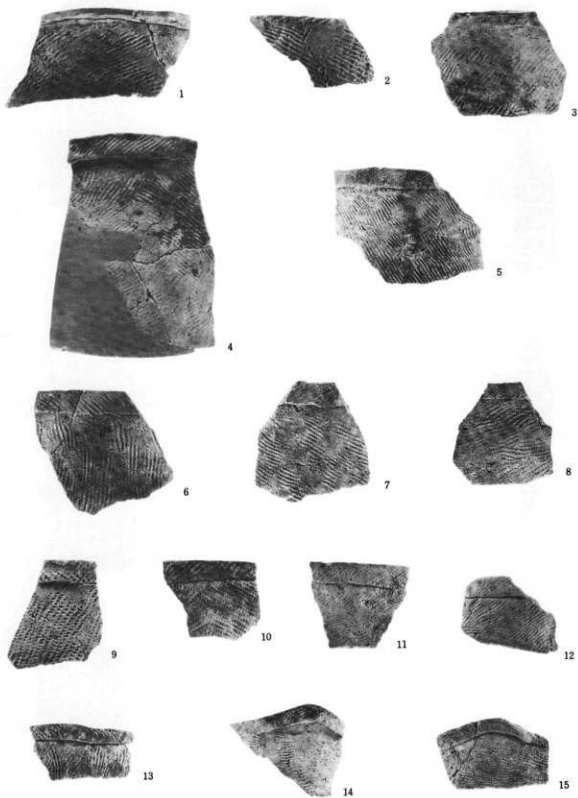
写真図版 61

(61)



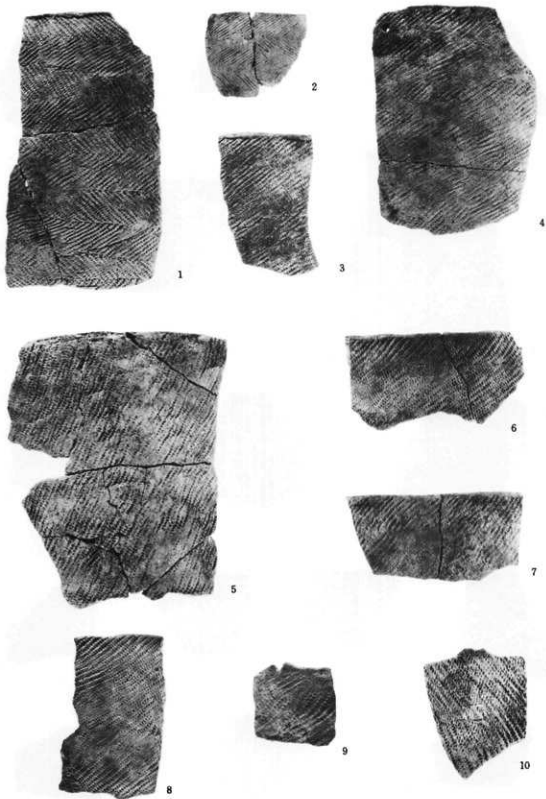
写真图版 62

(62)



写真図版 63

(63)



写真图版 64

(64)



65-1



65-2



65-3



65-4



65-5



65-6



65-7



65-8



69-1



69-2



69-3



69-4



69-7



69-5



70-18

写真图版 65

(65, 69, 70)



66-8



66-7



67-2



66-8



66-10



67-1



67-4



67-3



67-6



67-8



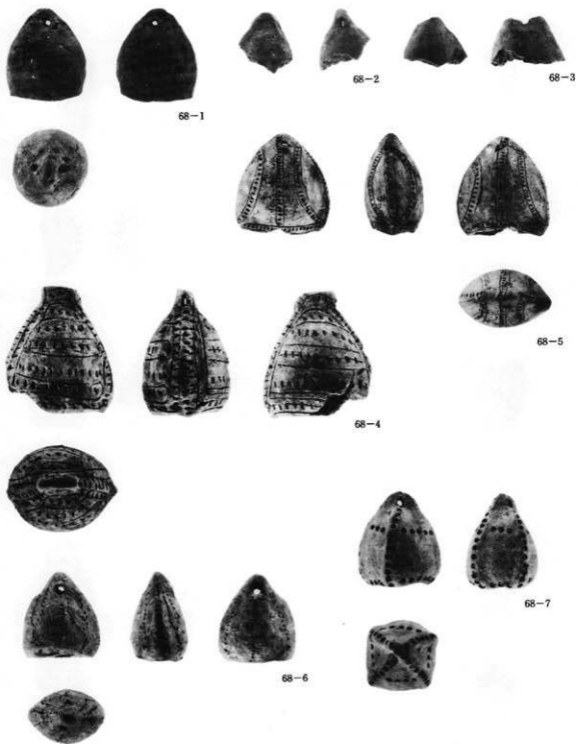
67-5



67-7

写真図版 66

(66, 67)



写真図版 67

(68)



69-10



69-6



69-8



69-9



70-11



70-12



70-15

70-16



70-17



66-1



70-13



66-4



66-2



66-6



66-5

写真图版 68

(66, 69, 70)





72-1



72-2



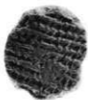
72-3



72-4



72-5



72-6



72-7



72-8



72-9



72-10



72-11



72-12



72-13



72-14



72-15



73-1



73-2



73-3



73-4



73-5

写真図版 69

(72, 73)



73-6



73-7



73-8



73-9



73-10



73-11



73-12



73-13



73-14



74-1



74-2



74-3



74-4



74-5



74-6



74-7



74-8



74-9



74-10



74-11

写真図版 70

(73, 74)



74-12



74-13



74-14



74-15



75-2



75-3



75-4



75-5



75-6



75-7



75-8



75-9



75-10



75-11



75-12



75-13



75-14



75-15



76-1

写真図版 71

(74, 75, 76)



76-2



76-3



76-4



76-5



76-6



76-7



76-8



76-9



76-10



76-11



76-12



76-13



76-14



76-15



76-16



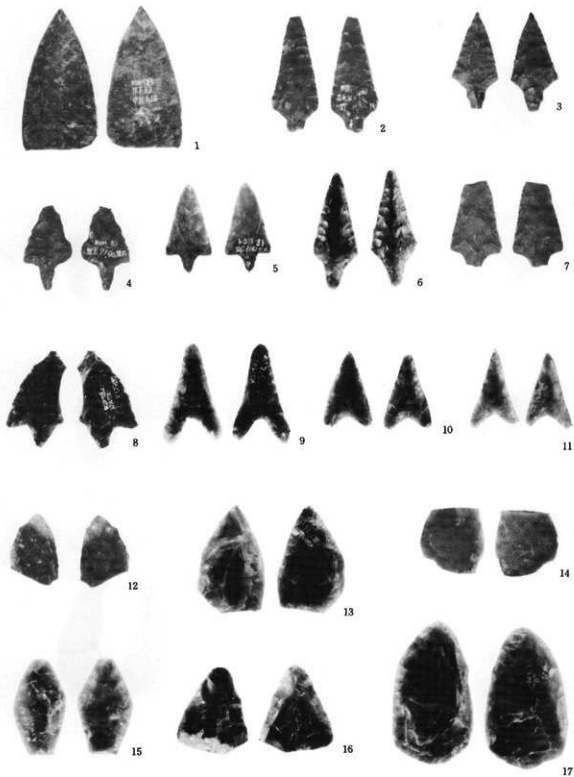
76-17



76-18

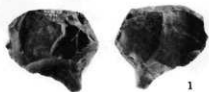
写真図版 72

(76)



写真図版 73

(77)



1



2



3



4



5



6



7



8



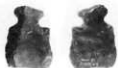
9



10



11



12



14



15



13



写真図版 75

(79)



写真図版 76

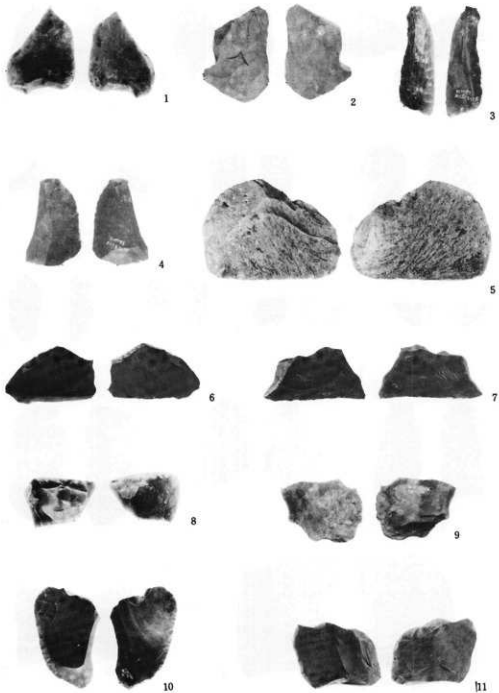
(80)





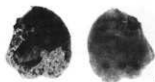
写真図版 77

(81)





1



2



3



4



5



6



7



8



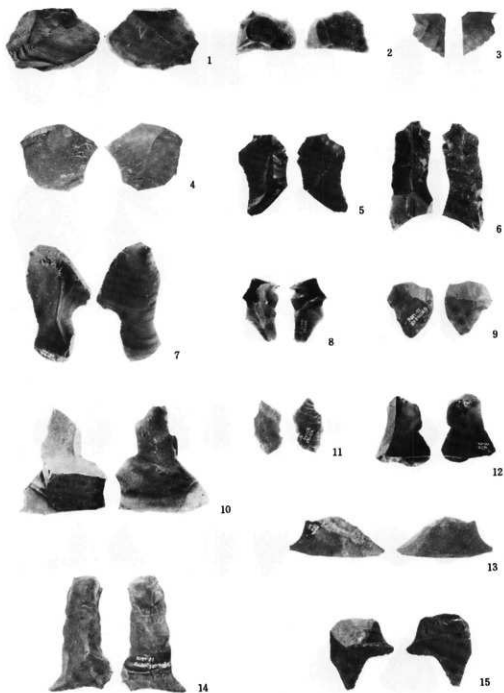
9



写真図版 80

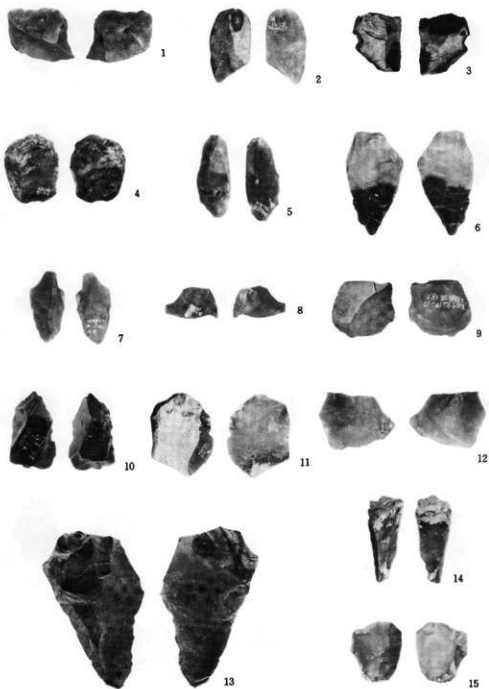
(84)





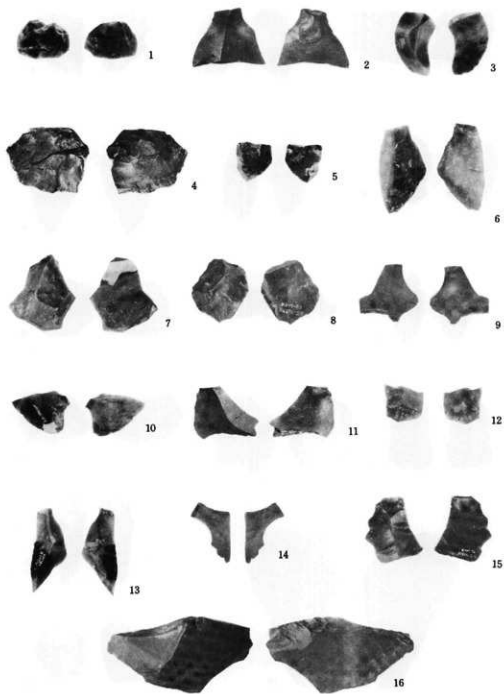
写真図版 82

(86)



写真図版 83

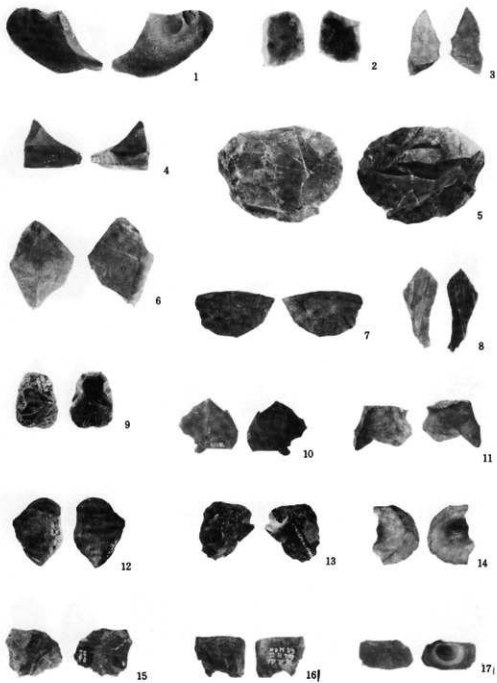
(87)



写真図版 84

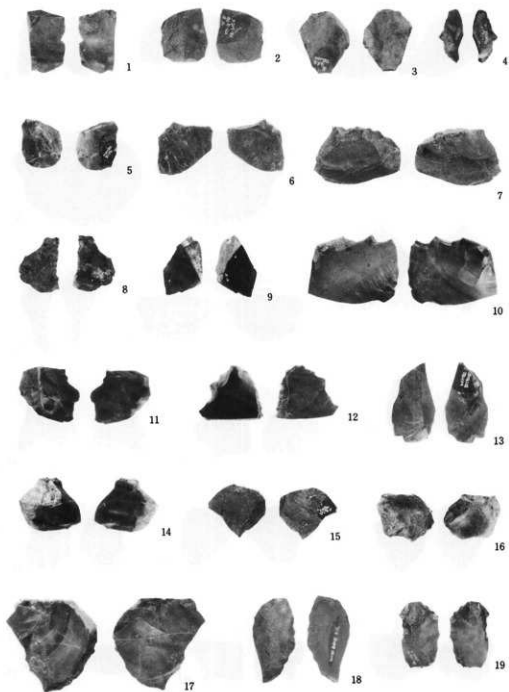
(88)

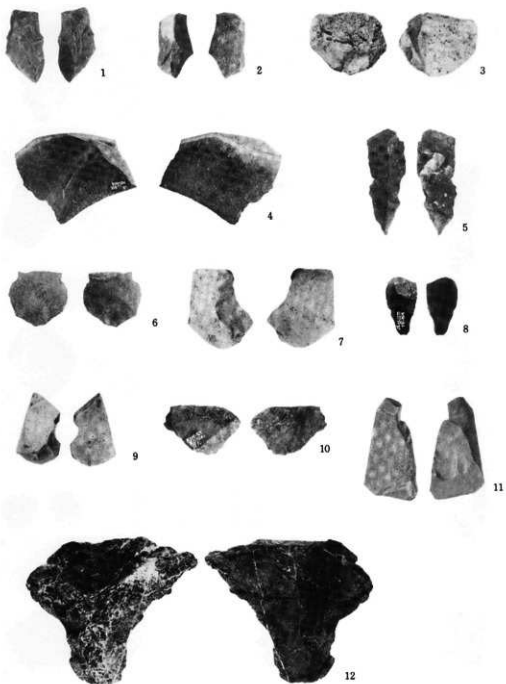




写真図版 85

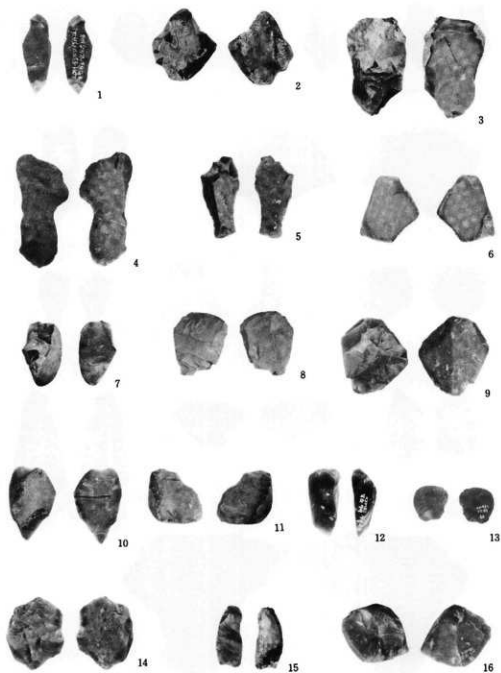
(89)

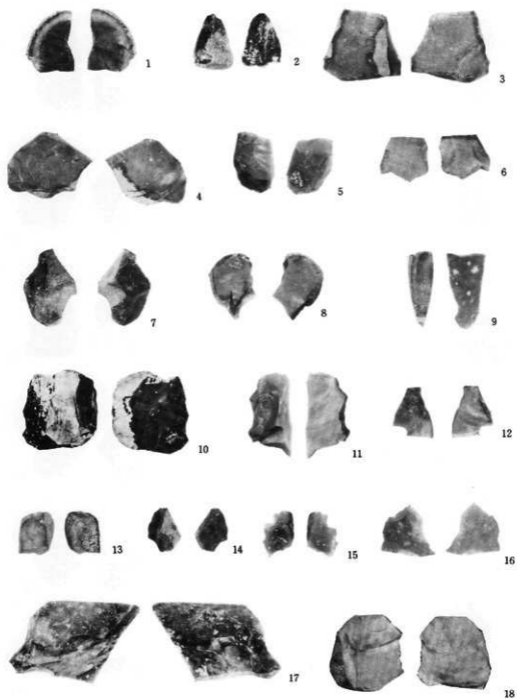


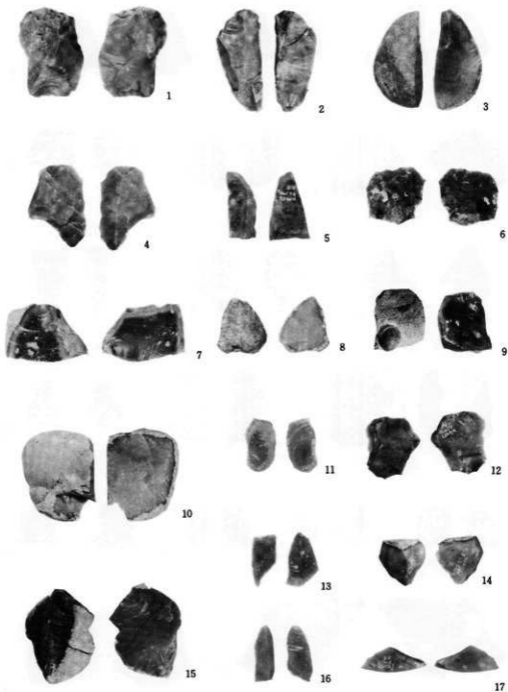


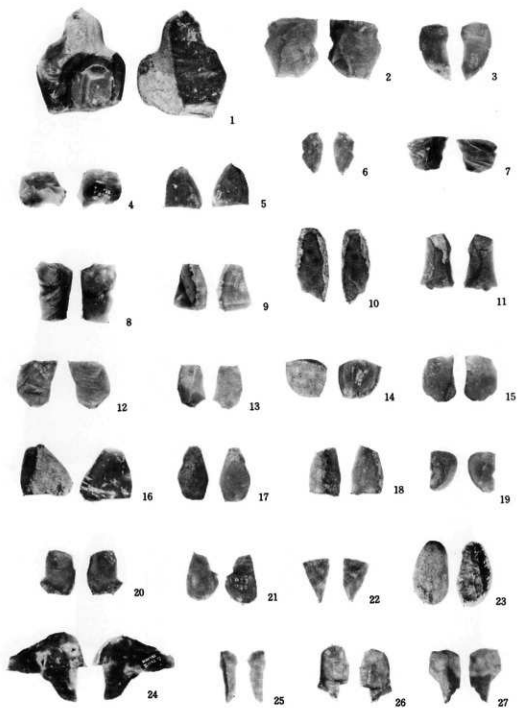
写真図版 87

(91)









写真図版 91

(95)



1



2



3



4

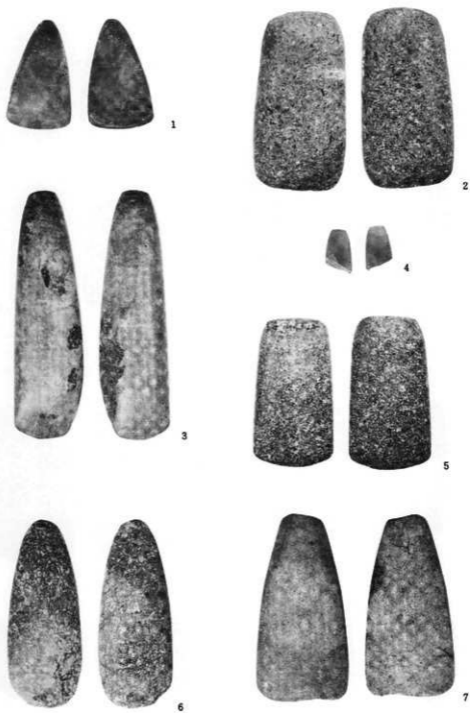


5



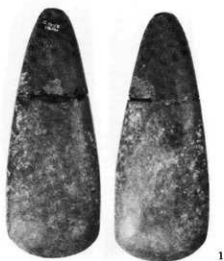
6





写真図版 93

(97)



1



2



4



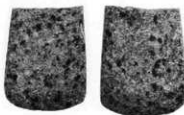
3



5



6



7

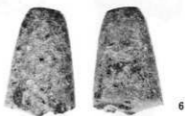
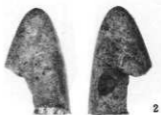


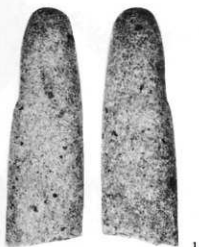
8



写真図版 95

(99)





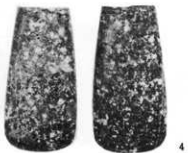
1



2



3



4



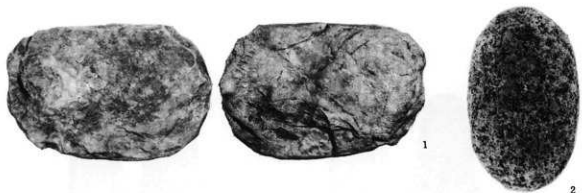
5



6

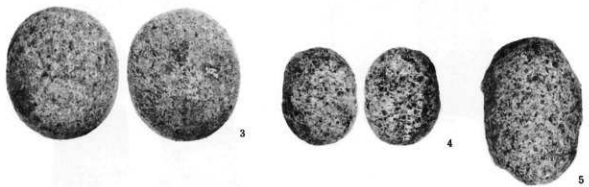


7



1

2



3

4

5



6

7

8



9

10

11

写真図版 98

(102)

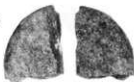


5

6

8

10



9

7

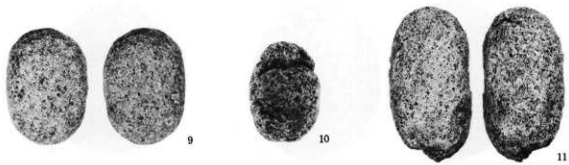


11

12

写真図版 99

(103)



写真図版 100

(104)





1



2



3



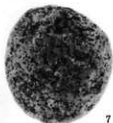
4



5



6



7



8



9



10

写真图版 101

(105)



1



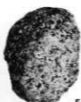
2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



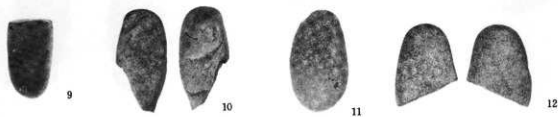
15



16

写真図版 102

(106)



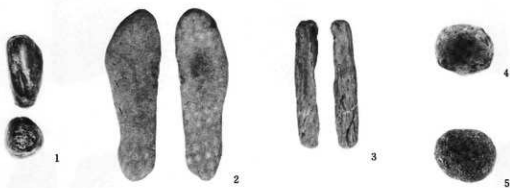
写真図版 103

(107)



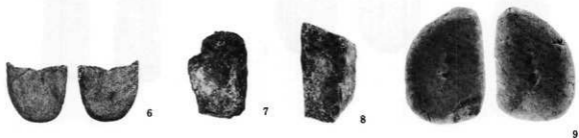
写真図版 104

(108)



写真図版 105

(109)



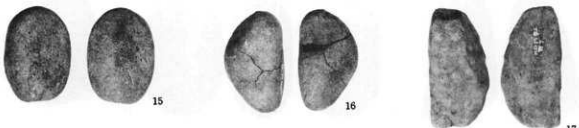
写真図版 106

(110)



写真図版 107

(111)



写真図版 108

(112)





1



2



3



4



5



6



7



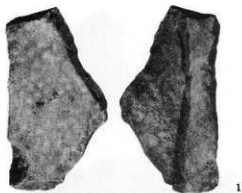
8



9



10



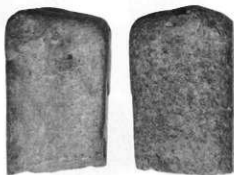
1



2



3



4



5



6



7



8

写真図版 110

(114)



写真図版 III

(115)



1



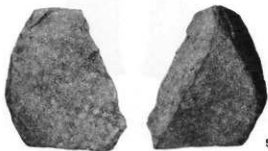
2



3



4



5



6



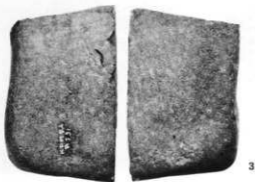
7



8

写真図版 112

(116)



写真図版 113

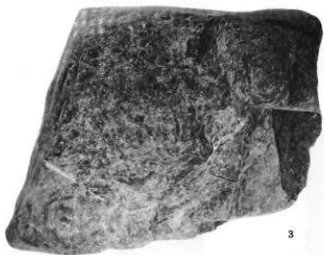
(117)



1



2



3



4



5

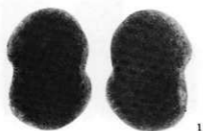
写真図版 114

(118)

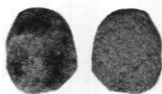


写真図版 115

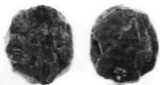
(119)



1



2



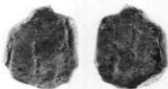
3



4



5



6



7



8

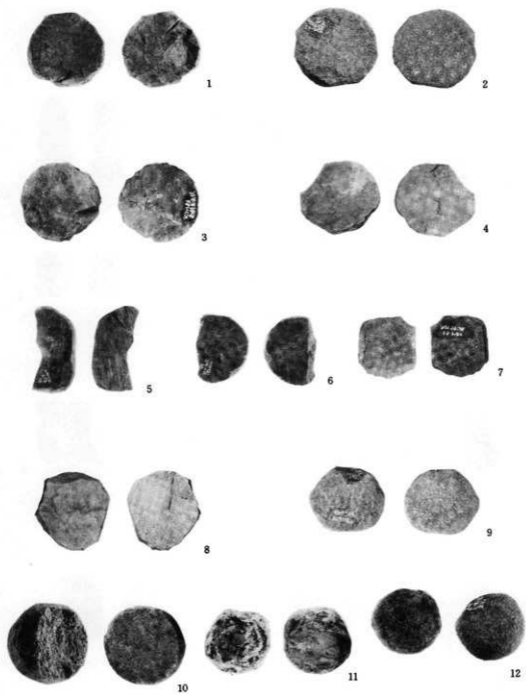


9



10





写真図版 117

(121)



写真図版 118

(122)

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第98集

**駒板遺跡発掘調査報告書**

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査  
(第3分冊 縄文時代遺構外出土遺物編)

印刷 昭和61年3月20日

発行 昭和61年3月25日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11の185

☎0196(38)9001-2

印刷 川口印刷工業株式会社

〒020 岩手県盛岡市本町通二丁目13番8号

T E L 0196(23)3351

---